松江市文化財調査報告書　第 197 集

神後田遺跡

発掘調査報告書

2021（令和３）年３月
松江市

松江市文化財調査報告書　第 197 集

神後田遺跡

発掘調査報告書

2021（令和３）年３月
松江市

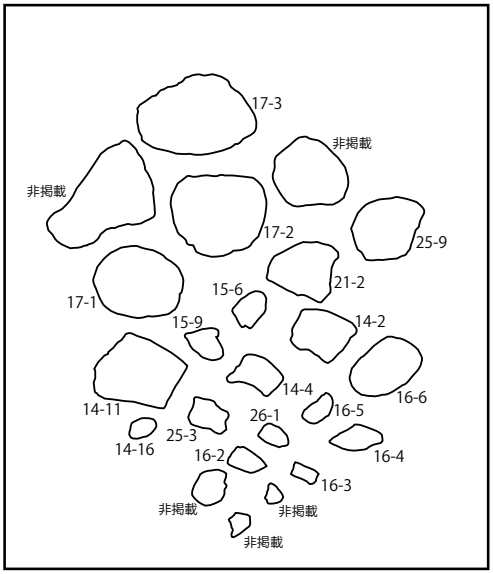
弥生時代前期環壕 SD01 全景（T15/ 北から）

巻頭図版２

神後田遺跡航空写真 (北から)
（手前の丘陵が神後田遺跡、奥の丘陵が田和山遺跡）

神後田遺跡上空から宍道湖を望む (南から)

弥生時代前期環壕出土遺物



巻頭図版 3 環壕出土遺物集合写真の挿図番号

序

松江市に所在する乃木地区は、近年の土地区画整理事業に伴い市街化が進み、市民の目に映る光景も大きく変貌を遂げてきています。平成９年に発見された田和山遺跡は、大規模な保存運動を経て国史跡に指定され、市民の心に郷土への愛着と誇りを育む松江の財産となりました。発見・保存から 20 余年経った現在でも市内外の多くの方に訪れていただける史跡公園です。

本報告の神後田遺跡は、この田和山遺跡の近隣にある弥生時代の環壕集落です。平成 29 年の宅地造成計画に伴い発見され、以降市民の関心を集めてまいりました。当市としてはその歴史的重要性から本遺跡を保存整備する方針を定めました。今回の報告によって、田和山遺跡、神後田遺跡の学術的評価が広く世に知られ、乃木地区の弥生時代の姿を明らかにするとともに、松江の文化力を生かしたまちづくりの新たな礎となることを切に願います。

最後になりましたが、本報告書の刊行にあたって、文化庁をはじめ神後田遺跡発掘調査指導委員会の諸先生方、地元住民のみなさま、島根県教育委員会並びに関係者のみなさまには多大なご支援とご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

令和３年３月

松江市

市長　松 浦　正 敬

例　言

1．本書は平成 29 年度から令和 2 年度にかけて松江市埋蔵文化財調査室で実施した神後田遺跡発掘調査 (国庫補助事業) の成果をとりまとめたものである。

2．遺跡の名称・所在地は以下のとおりである。

名称／所在地　　神後田遺跡 (県遺跡番号 D1172) ／松江市浜乃木五丁目 1190 － 1 外

3．本報告書の発掘調査事業年度、調査次数、調査期間、調査面積は下記のとおりである。

平成 29 年度　第 1 次調査　平成 29 年 11 月 15 日～ 17 日、53.64㎡
　　第 2 次調査　平成 30 年 3 月 16 日～ 20 日、25.95㎡
平成 30 年度　第 3 次調査　平成 30 年 6 月 4 日～ 13 日、29.25㎡
令和元年度　第 4 次調査　令和元年 8 月 26 日～令和元年 11 月 26 日、214.77㎡
令和 2 年度　第 5 次調査　令和 2 年 6 月 2 日～ 7 月 22 日、24.4㎡

4．調査組織（ ）内の数字は年度

調査主体

松江市教育委員会　　教育長　清水　伸夫（～平成 30）
松　　江　　市　　市　長　松浦　正敬 (令和元～)

事務局

歴史まちづくり部まちづくり文化財課

埋蔵文化財調査室　室　長　飯塚　康行（平成 29）
　　宮本　英樹（平成 30・令和元）
　　尾添　和人（令和 2 ～）
文化財総合コーディネーター　丹羽野　裕（令和 2 ～）
調査係長　赤澤　秀則（平成 29）
　　川上　昭一（平成 30 ～、担当者／第 1・2 次調査）
主　幹　川西　　学（平成 30 ～、担当者／第 3 次調査）
主　任　青山　　賢（平成 29・30）
主　任　落合　智之（平成 29 ～令和元）
主　任　徳永　　隆（平成 29 ～）
主　任　佐々木紀明（平成 30 ～令和元年 9 月 30 日）
主　任　原　　貴志（令和元年 10 月 1 日～）
副主任　野村　豪士（令和元～）
学芸員　三宅　和子（平成 29 ～、担当者／第 4・5 次調査）
主　事　灘　　友佳（令和 2 ～）
嘱　託　金森みのり（平成 29・30）
会計年度任用職員　小川真由美（平成 29 ～）
会計年度任用職員　高尾万里子（平成 29 ～）
会計年度任用職員　坪倉ひとみ（令和元～）

5．神後田遺跡発掘調査指導委員会（敬称略・令和元年度の所属）

令和元年 7 月 1 日から令和 3 年 6 月 30 日の任期で下記の方々に委嘱した。

委員長　松本　岩雄　島根県立八雲立つ風土記の丘所長
委　員　禰宜田佳男　大阪府立弥生文化博物館館長
委　員　會下　和宏　島根大学総合博物館教授
委　員　平郡　達哉　島根大学准教授

6．発掘調査にかかる測地系基準測量については、山陰開発コンサルタント株式会社に委託した。

7．炭化物年代測定、花粉分析、樹種同定は文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。

８．航空地形測量は株式会社ウエスコに委託した。
９．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベルは海抜標高を示す。ただし、T1 ～ T14 平面図の方位は磁北を示している。
10. 発掘調査、報告書作成に際して以下の方々、関係機関から御協力、御助言を頂いた（順不同、敬称略）。
松木武彦（国立歴史民俗博物館）、花谷浩・原俊二・坂本豊治・江角健・景山このみ・黒田祐介（出雲市立出雲弥生の森博物館）、大橋泰夫・岩本崇（島根大学）、田中義昭（元島根大学教授）、久住猛雄（福岡市教育委員会）、森岡秀人（関西大学講師）、別所秀高（同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター）、津村宏臣・岸田徹（同志社大学）、関あかり・松本尋弥（同志社大学大学院）、中村唯史（島根県立三瓶自然館）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）、椿真治・池淵俊一・勝部智明・仁木聡・稲田陽介（島根県教育庁文化財課）、原田敏照・岩本真実（島根県古代文化センター）、松山智弘（島根県埋蔵文化財調査センター）、澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館）、片岡詩子（出雲玉作資料館）、赤澤秀則・丹羽野輝子（鹿島歴史民俗資料館）、小山泰生・廣濱貴子・江川幸子・徳永桃代（公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団）、文化庁文化財部第二課、島根大学法文学部、島根県立古代出雲歴史博物館、島根県立埋蔵文化財調査センター、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団、鹿島歴史民俗資料館、松江歴史館
11. 本書で用いた弥生土器の分類・編年及び器種名については以下の文献に準拠した。
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
鹿島町教育委員会 1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』
12. 本書に掲載する土層名は『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に従って表記した。
13. 発掘調査に係る土壌水洗作業は、島根大学法文学部に依頼し、平郡准教授をはじめ島根大学法文学部学生に多大なご協力を賜った。
14. 鉄器の赤外線写真は島根県立古代出雲歴史博物館澤田正明学芸員に撮影頂いた。
15. 巻頭図版環壕出土遺物集合写真は松江歴史館西島太郎主幹が撮影した。
16. 調査に携わった発掘作業員は下記のとおりである（五十音順）。
安達明男、井川智、井川洋、五十川力、岩成博美、大津進、岡雄大、加藤恵治、門脇貴教、金坂昇、桑垣貴之、高田遼和、高野朋之、土江伸明、寺本壮、中村愼市、原英誉、深津靖博、福田紘治、福田里美、松尾達男、峯谷一雄、吉川はる美、渡部岳、渡部峻
17. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は川上、川西、徳永、三宅、灘が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成、浄書は、金森、小川、高尾、坪倉、灘、三宅が行った。
18. 本書の作成にあたり、中村唯史氏、別所秀高氏、平郡達哉氏、渡辺正巳氏、岸田徹氏に玉稿を賜った。
19. 本書の執筆は全体の編集を三宅が行い、第１章、第２章第１、３節、第３章、第４章第１、３節を三宅、第３章石器事実記載、第４章第２節を灘、第４章第４節を岸田、別所、丹羽野、同章第６節を平郡、第５章第１、２節を渡辺、第２章第２節、第５章第３節を中村、第４章第５節、第６章を三宅、丹羽野が担当した。
20. 註、参考文献は各節末にまとめ掲載した。
21. 掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを配した。遺物実測図の縮率は原則、土器・須恵器・陶器は 1/3、石器は 2/3、鉄器は 1/2 とした。環壕出土の礫石は 1/3 で掲載している。
22. 土器・陶器の断面は白ヌキ、須恵器の断面は黒塗り、石器、鉄器の断面は斜線で示した。
23. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、松江市埋蔵文化財調査室にて保管している。
24. 本書における遺構記号は以下のとおりである。
SI: 竪穴建物　SA: 柱穴列　SK: 土坑　SP: 柱穴・ピット　SD: 溝・壕　SX: 性格不明遺構
25. 遺構番号は全て連番とした。
26. 本書で記述する弥生時代前期環壕の表記について、本遺跡検出の環壕は空堀と想定されることから「壕」の字を使用することを基本とする。

目　次

巻頭図版
例言
第１章　序章 …… 1
第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 3
第３節　調査の検討・遺跡の啓発 …… 4
第２章　神後田遺跡の位置と環境…… 5
第１節　神後田遺跡の位置 …… 5
第２節　地理的環境 …… 7
第３節　歴史的環境 …… 11
第３章　発掘調査…… 14
第１節　調査の方法と調査区について …… 14
第２節　弥生時代の遺構 …… 18
1　環壕部の調査 …… 18
T1(SD01)、T2(SD02)、T5・T17(SD48)、T8(SD35)、T14(SD45)、
T20(SD115)
2　環壕内部の調査 …… 33
T16(SI49、柱穴群)、T5・T17(SI50、SK06、SP24～26)
3　環壕外部の調査 …… 41
T3(SP03)、T4(SD04、SX05)、T9(SD36、SP37、SP38)、
T10(SP39～41、SK42)、T12、T13
4　小結 …… 45
第３節　その他の時代の遺構 …… 46
1　古代の遺構 …… 46
T6・T18(SA114)
2　中近世の遺構 …… 47
T11(SD44)、T5・T17(SD71)、T19(SD51)
3　小結 …… 49
第４節　神後田遺跡の変遷 …… 50

第４章　考古学的分析 …… 52

第１節　神後田遺跡と周辺遺跡出土の弥生土器について …… 52
第２節　神後田遺跡出土の石器について …… 60
第３節　神後田遺跡の弥生時代前期環壕について …… 64
第４節　神後田遺跡周辺の古地形復元 …… 74
第５節　弥生時代における大橋川南部地域の評価 …… 86
第６節　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠の様相と神後田遺跡 …… 101

第５章　自然科学分析 …… 118

第１節　神後田遺跡発掘調査にかかる年代測定等自然科学分析 …… 118
第２節　神後田遺跡焼失竪穴建物 SI49 の樹種同定 …… 127
第３節　「つぶて石」の石材と採取地の推定 …… 130

第６章　総括 …… 131

遺物観察表
写 真 図 版
報告書抄録

挿図目次

図 1　松江市の位置 …… 5
図 2　神後田遺跡の位置 …… 5
図 3　神後田遺跡周辺の字名 …… 5
図 4　神後田遺跡の位置（昭和 45 年地形図）…… 6
図 5　神後田遺跡周辺の地形 …… 7
図 6　宍道湖中海周辺の古地理図 …… 9
図 7　忌部川低地の地下地質断面図 …… 10
図 8　周辺遺跡の位置 …… 12
図 9　神後田遺跡全体図 …… 15 ～ 16
図 10　神後田遺跡グリッド図 …… 17
図 11　トレンチ位置図 …… 18
図 12　T15 平面・土層図 …… 18
図 13　SD01 平面・土層断面図 …… 19
図 14　SD01 出土遺物実測図 (1) …… 20
図 15　SD01 出土遺物実測図 (2) …… 21
図 16　SD01 出土遺物実測図 (3) …… 22
図 17　SD01 出土遺物実測図 (4) …… 23
図 18　T2 平面・土層図 …… 24
図 19　T17 平面・土層図 …… 25
図 20　SD48 平面・土層断面図 …… 26
図 21　SD48 出土遺物実測図 …… 26
図 22　T8 平面・土層図 …… 27
図 23　T8 表土出土遺物実測図 …… 27
図 24　T14 平面・土層図 …… 28
図 25　SD45 出土遺物実測図 (1) …… 29
図 26　SD45 出土遺物実測図 (2) …… 29
図 27　SD45 出土遺物実測図 (3) …… 29
図 28　T20 平面・土層図 …… 30
図 29　SD115 平面・土層断面図 …… 30
図 30　SD115 出土遺物実測図 …… 32
図 31　トレンチ位置図 …… 33
図 32　T16 平面・土層図 …… 34
図 33　SI49 平面・土層断面図 …… 35
図 34　SI49 出土遺物実測図 (1) …… 36
図 35　SI49 出土遺物実測図 (2) …… 37
図 36　SI49 出土遺物実測図 (3) …… 38
図 37　SI50 平面・土層断面図 …… 39
図 38　SK06・SP24・SP25・SP26 平面・土層断面図 …… 39
図 39　SK06 出土遺物実測図 …… 40
図 40　表採資料実測図 …… 40
図 41　トレンチ位置図 …… 41
図 42　T3 平面・土層図 …… 41
図 43　T4 平面・土層図 …… 42
図 44　T9 平面・土層図 …… 42
図 45　SD36 出土遺物実測図 …… 42
図 46　T10 平面・土層図 …… 43
図 47　T12 東壁土層図 …… 44
図 48　T12 出土遺物実測図 …… 44
図 49　T13 東壁土層図 …… 44
図 50　T6・T18 位置図 …… 46
図 51　T18 平面・土層図 …… 46
図 52　SA114 平面・土層断面図 …… 46
図 53　SP07 出土遺物実測図 …… 46
図 54　トレンチ位置図 …… 47
図 55　T11 平面・土層図 …… 47
図 56　SD44 出土遺物実測図 …… 47
図 57　T5、T17 位置図 …… 48
図 58　T19 平面・土層図 …… 48
図 59　SD51 出土遺物実測図 …… 49
図 60　弥生前期末～中期初頭 …… 50
図 61　弥生後期前半 …… 51
図 62　中世・近世 …… 51
図 63　遺跡位置図 …… 52
図 64　神後田遺跡環壕出土土器 …… 52
図 65　神後田遺跡 SI49 出土土器 …… 53
図 66　田和山遺跡全体図 …… 53
図 67　田和山遺跡環壕出土土器 …… 54
図 68　友田遺跡平面図 …… 54

図 69　友田遺跡出土土器 …… 55
図 70　欠田遺跡出土土器 …… 56
図 71　欠田遺跡出土遺物計数表 …… 56
図 72　雲垣遺跡出土土器 …… 57
図 73　二ッ縄手遺跡出土土器 …… 57
図 74　門田遺跡出土土器 …… 58
図 75　遺構覆土出土石器類の石材構成と重量割合（つぶて石・礫除く）…… 61
図 76　神後田遺跡の環壕 …… 64
図 77　神後田遺跡環壕の断面形と標高 …… 65
図 78　田和山遺跡の環壕の変遷 …… 65
図 79　弥生時代前期環濠（壕）の分布（北部九州～近畿）…… 68
図 80　環濠（壕）の規模 …… 69
図 81　環濠（壕）分類模式図 …… 70
図 82　丹後地域における環壕の分布 …… 71
図 83　西伯耆地域における環壕の分布 …… 71
図 84　乃木地域の字名 …… 76
図 85　探査実施地点 …… 77
図 86　松江農林高校野球場における探査測線位置 …… 77
図 87　松江農林高校における電気比抵抗および地中レーダ探査結果 …… 78
図 88　浜乃木一丁目民有地における電気比抵抗探査結果 …… 78
図 89　松江農林高校水田および田和山東広場公園における探査測線位置 …… 79
図 90　松江農林高校水田における電気比抵抗探査結果 …… 79
図 91　田和山東広場公園における電気比抵抗探査結果 …… 80
図 92　神後田遺跡周辺の標高段彩図 …… 81
図 93　ボーリングデータベースにもとづく山陰自動車道松江 IC・松江西 IC 間の地質柱状断面図 …… 83
図 94　善光寺東側畑地の地質柱状図 …… 84
図 95　忌部川および山居川後背低地の地表縦断形 …… 84
図 96　弥生時代神後田遺跡周辺の古地形想像復元図 …… 85
図 97　乃木地域と意宇地域の主要な遺跡と古代の道路想定図 …… 86
図 98　乃木地域における弥生時代の遺跡の消長 …… 87
図 99　神後田遺跡と田和山遺跡の変遷 …… 88
図 100　大橋川南部地域における弥生時代の遺跡変遷 (乃木 1 ～ 3 期) …… 91
図 101　大橋川南部地域における弥生時代の遺跡変遷 (乃木 4 ～ 6 期) …… 92
図 102　布田遺跡出土遺物重量表 …… 93
図 103　弥生前期前葉～中葉の土器群出土遺跡 …… 94
図 104　弥生後期後半の四隅突出型墳丘墓の分布 …… 98
図 105　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡分布図 …… 113
図 106　華城・鳥山地域の環濠の分布と遺跡間距離 …… 113
図 107　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡① …… 113
図 108　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡② …… 114
図 109　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡③ …… 115
図 110　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡④ …… 116
図 111　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡⑤ …… 117
図 112　トレンチの配置 …… 118
図 113　T16(SI49) 平面図 (試料採取地点) …… 119
図 114　T17 平面図 (試料採取地点) …… 119
図 115　試料採取地点断面図 (T17 SD48) …… 119
図 116　試料採取地点断面図 (T17 SK06) …… 119
図 117　T20 平面図 (試料採取地点) …… 120
図 118　試料採取地点断面図 (T20 SD115) …… 120
図 119　暦年較正結果一覧 (1) …… 121
図 120　暦年較正結果一覧 (2) …… 122
図 121　花粉ダイアグラム …… 123
図 122　暦年較正結果の分布 (T16 SI49) …… 124
図 123　暦年較正結果の分布 (T17 SD48) …… 124
図 124　暦年較正結果の分布 (T17 SK06) …… 124
図 125　暦年較正結果の分布 (T20 SD115) …… 125
図 126　トレンチの配置 …… 127
図 127　T16(SI49) 平面図 (試料採取地点) …… 127
図 128　走査型電子顕微鏡写真 …… 129

表目次

表 1　神後田遺跡に関わる経過 …… 2
表 2　会議・報告会・展示等 …… 4
表 3　調査区説明項目 …… 14
表 4　友田遺跡配石墓出土遺物計数表 …… 55
表 5　黒曜石集石土坑（SK06）出土石器組成 …… 60
表 6　遺構覆土出土石器の石材別器種組成 …… 61
表 7　弥生時代前期環濠（壕）集成（北部九州～近畿） …… 66
表 8　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡一覧 …… 109
表 9　年代測定結果一覧 …… 120
表 10　微化石概査結果表 …… 123
表 11　花粉組成表 …… 123

写真図版目次

写真 1　指導委員会会議風景 …… 3
写真 2　調査風景 (SI49 掘削中) …… 4
写真 3　現地指導風景（第 4 次調査） …… 4
写真 4　現地説明会 …… 4
写真 5　展示風景 …… 4
写真 6　神後田遺跡の位置（昭和 22 年航空写真） …… 6
写真 7　SI49 出土鉄片 …… 34
写真 8　SI49 出土炭化米 …… 34
写真 9　SI50 検出面出土土器 …… 39
写真 10　友田遺跡と田和山遺跡 …… 54
写真 11　田和山遺跡、神後田遺跡の位置関係 …… 86
写真 12　忌部川の河床礫 …… 130
写真 13　乃木段丘礫層 …… 130

図版 1　SI49（北から　写真奥の丘陵が田和山遺跡）
図版 2　上　SI49 調査後 (東から)
　中左　SI49 炭化木材検出状況（北西から）
　中右　焼土・炭化材検出状況
　下左　炭化物層土層状況
　下右　炉 72 半截状況
図版 3　上　神後田遺跡航空写真（写真下が北）
　下　調査地近景（T17 付近 / 北東から）
図版 4　上　T15 全景（北から）
　下　T20 全景（北から）
図版 5　上　T16 全景
　下　T17 全景
図版 6　上　T1 SD01 検出状況 (南から)
　中　T2 完掘状況（南から）
　下　T2 SD02 検出状況
図版 7　上　T3 完掘状況
　中　T3 SP03 半截状況
　下　T4 完掘状況（南から）
図版 8　上　T5 遺構検出状況（南西から）
　中　T5 柱穴群検出状況
　下　T6 遺構検出状況（南から）
図版 9　上　T7 遺構検出状況（北から）
　中　T8 遺構検出状況（北から）
　下　T8 SD35 掘削状況
図版 10　上　T9 遺構検出状況（北から)
　中　T9 SD36 検出状況
　下　T10 遺構検出状況（南東から）
図版 11　上　T11 遺構半截状況（北から）
　中　T11 SD44 土層状況
　下　T12 完掘状況（南から）
図版 12　上　T13 完掘状況（北から）
　下　T14 遺構検出状況（東から）
図版 13　上　T14 SD45 土層状況
　中　T15 SD01 掘削状況（南東から)
　下　SD01 土層状況
図版 14　上　SD01 土器・礫出土状況
　中　T16 SI49 検出状況（南から）
　下　SI49 SP31、SP32 検出状況
図版 15　上　SP31 土層状況
　中　SI49 焼土堆積状況
　下　SP76 土層状況
図版 16　上　SI49 甕出土状況（図 34 － 9）
　中　SI49 器台出土状況（図 34 － 12）
　下　SI49 板状石製品出土状況（図 35 － 2）
図版 17　上　T17 SD48 検出状況（北から)
　下　SD48 土層状況（南から）
図版 18　上　SD48 遺物出土状況（右側土器：図 21 － 2）
　中　T17 SK06・SP24・SP25・SP26 半截状況（西から）
　下　SK06 土層状況
図版 19　上　SP24 半截状況
　中　SP25 半截状況
　下　SP26 半截状況
図版 20　上　SI50 検出状況（西から）
　中　SD71 土層状況
　下　T18 SA114 半截状況（南から）
図版 21　上　T19 掘削状況（北から）
　下　T19 SD51 掘削状況（西から）
図版 22　上　SD51 土層状況
　中　T19 北側段状遺構検出状況
　下　T20 SD115 検出状況（北西から）
図版 23　上　T20 SD115 調査後（南から）
　中　SD115 石器出土状況
　下　SD115 土層状況
図版 24　出土遺物
図版 25　出土遺物
図版 26　出土遺物
図版 27　出土遺物
図版 28　出土遺物

第 1 章　序　章

第 1 節　調査に至る経緯

神後田（じごで）遺跡は松江市浜乃木五丁目に所在する（図 2）。平成 29 年度、当遺跡が所在する独立丘陵地において、民間宅地造成開発（開発面積：4905.65㎡）の計画が発生した。開発計画当初は、当地は未調査地（周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外）であったが、丘陵が著しく削平される計画内容であったため、事業者から平成 29 年 9 月 28 日付けで松江市埋蔵文化財調査室に分布・試掘・確認調査の依頼書が提出され、10 月 13 日に分布調査を実施するに至った。踏査を行ったところ、当該地の丘陵頂部からは田和山遺跡（国史跡 / 弥生環壕集落）や、友田遺跡（現在消滅 / 弥生前期末～後期前半の墳墓群）が一望でき、非常に眺望に優れた立地であることがわかった。このことから、遺跡の有無を確認するため 11 月に試掘調査を実施した（第 1 次調査）。調査の結果、弥生時代前期末頃の土器を含む壕（SD01）や、竪穴建物（SI49）、黒曜石片の集石遺構（SK06）等多数の遺構が検出され、当地に弥生時代前期末の環壕集落の存在が示唆された。また、この調査により新たに遺跡が発見されたことから、12 月 13 日付で文化財保護法第 97 条の通知を松江市教育委員会教育長から島根県へ提出し、土地の字名から「神後田遺跡」と命名されるに至った。12 月 26 日に島根県文化財課と遺跡の性格、取り扱いについての協議を行い、更に詳細に遺跡の性格を明らかにするため追加調査を実施する結論に達し、平成 30 年 3 月 12 日付で文化財保護法第 99 条の届出を県に提出し、追加調査を実施した（第 2 次調査）。調査中の 4 月 25 日には、文化庁技官の現地視察があり、重要な遺跡であるという認識がなされ開発予定地外での環壕の有無、複数環壕の可能性を確認する調査の実施を行うよう指導を受けた。これを受け、6 月 1 日付で再度文化財保護法第 99 条の届出を県に提出し、3 度目の発掘調査を実施した（第 3 次調査）。

これら 3 回の発掘調査の結果、当遺跡は独立丘陵の南端に環壕が巡る遺跡であることが確定的となった。これを受け、文化庁から「保存に向けて取り組むべき遺跡」である見解が示された。

その後、当市は事業者との協議を行い、当遺跡が弥生時代の集落遺跡を考えるうえで非常に重要な要素を含むものであり、その有する歴史的意義は非常に高く現地保存に値する遺跡であるという市の見解を伝え、開発事業者は撤退するに至った。その後、市は 8 月 30 日に土地所有者への説明会を開催し、遺跡の持つ重要性について説明を行った。これに対し、開発事業者は撤退したものの、土地所有者の土地開発の意向は強く、地権者の総意として民間開発に向かう旨が市に示された。これを受け、当市埋蔵文化財調査室は、神後田遺跡が保護すべき遺跡であるという認識を市長まで共有し、1 月 29 日に第 2 回目の地権者説明会を開催し、当遺跡を史跡として保護、将来へ継承することを市の方針とする旨を伝え遺跡の現地保存が図られるに至った。以上の経緯から、令和元年度、市は専門組織である神後田遺跡発掘調査指導委員会を立ち上げ史跡指定に向け遺跡の詳細な性格を把握するため、令和元年 8 月 26 日より第 4 次調査、令和 2 年 6 月 1 日より第 5 次調査を実施した。神後田遺跡に係る一連の発掘調査は国庫補助事業で実施している。

表１　　神後田遺跡に関わる経過

平成 29 年（2017）	9 月 28 日	遺跡の分布・試掘・確認調査依頼書が松江市に提出される。
	10 月 13 日	現地踏査実施
	11 月 15 ～ 17 日	**第 1 次調査**実施　弥生前期の土器を含む壕、柱穴列、竪穴建物、黒曜石集石遺構を検出。
	12 月 13 日	遺跡の発見通知（文化財保護法第 97 条）を島根県教育委員会へ提出。 神後田遺跡と命名
	12 月 26 日	遺跡の取り扱いについて、島根県、松江市で協議。追加調査実施の指導を受ける。
平成 30 年（2018）	3 月 16 ～ 20 日	**第 2 次調査**実施
	4 月 25 日	文化庁川畑技官現地視察。重要な遺跡との認識を受ける。田和山と有機的な関係にあれば、一連のものとして評価が可能と指導を受ける。複数環壕の有無を確認するための追加調査実施の指導を受ける。
	6 月 5 ～ 13 日	**第 3 次調査**実施 環壕の延長部を検出。
	6 月 12 日	島根県文化財課現地指導
	6 月 26 日	島根県文化財課より文化庁の見解報告がある。文化庁意見「保存に向けて取り組むべき遺跡。学識経験者の評価も含め協力していく。」
	7 月 6 日	開発事業者、松江市協議。保護しなければいけない遺跡であれば、事業撤退の意向を示す。
	8 月 30 日	土地所有者説明会 所有者意見として、「開発の方向で進めたい。難しいなら買い上げをお願いしたい。」旨の意見が市に示される。
平成 31 年（2019）	1 月 8 日	松江市長協議。市として、遺跡を保存し、国の史跡指定を目指す方針とする。
	1 月 17 日	文化庁禰宜田主任調査官（当時）現地視察。 弥生前期の環壕集落は類例が少ない。山陰で位置づけが可能であれば非常に歴史的価値は高い。
	1 月 29 日	土地所有者説明会 市の方針として、国史跡指定の方針で取り組む旨を伝達。了解を得た。
令和元年（2019）	7 月 1 日	神後田遺跡発掘調査指導委員会発足
	7 月 23 日	土地所有者説明会
	8 月 7 日	第 1 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催 これまでの経緯、今後の方針を共有。追加調査地の選定
	8 月 26 日 ～ 11 月 26 日	**第 4 次調査**実施 2 か所で弥生時代前期環壕を検出。竪穴建物 2 棟を確認した。
	9 月 21 日	文化庁近江俊秀主任調査官現地視察
	10 月 3 日	第 2 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催
	10 月 10 日	国立歴史民俗博物館松木武彦教授現地視察
	10 月 26 日	一般市民向け現地説明会開催　80 名参加
令和 2 年（2020）	6 月 2 日 ～ 7 月 22 日	**第 5 次調査**実施　北側の環壕を検出。
	6 月 22 日	三瓶自然館サヒメル中村唯史氏現地指導
	6 月 26 日	第 3 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催
	9 月 29 日	三瓶自然館サヒメル中村唯史氏周辺地質調査指導

第２節　調査の経過

今回報告する調査は平成 29 年度から令和２年度に実施した発掘調査である。以下年度毎に調査主体者、指導者、調査担当者を記載する。

【平成 29（2017）年度】1 次、2 次調査

指導者　文化庁文化財部記念物課　川畑純（技官）、島根県教育庁文化財課　椿真治（調整監）、勝部智明（主幹）

主体者　松江市教育委員会　教育長　清水伸夫、永島真吾（まちづくり文化財課長）、飯塚康行（埋蔵文化財調査室長）、赤澤秀則（調査係長）、川上昭一（主幹：担当者）

【平成 30（2018）年度】3 次調査

指導者　文化庁文化財部記念物課　川畑純（技官）、島根県教育庁文化財課　池淵俊一（調整監）、勝部智明（主幹）

主体者　松江市教育委員会　教育長　清水伸夫、飯塚康行（まちづくり文化財課長）、宮本英樹（埋蔵文化財調査室長）、川上昭一（調査係長）、川西学（主幹：担当者）

【令和元（2019）年度】4 次調査

指導者　文化庁文化財第二課　川畑純（技官）、島根県教育庁文化財課　池淵俊一（調整監）、仁木聡（企画員）、神後田遺跡発掘調査指導委員会　松本岩雄　委員長、禰冝田佳男　委員、會下和宏　委員、平郡達哉　委員

主体者　松江市長　松浦正敬、飯塚康行（まちづくり文化財課長）、宮本英樹（埋蔵文化財調査室長）、川上昭一（調査係長）、三宅和子（学芸員：担当者）

【令和２（2020）年度】5 次調査、報告書作成

指導者　文化庁文化財第二課　藤井幸司（調査官）、川畑純（調査官）、島根県教育庁文化財課　池淵俊一（調整監）、稲田陽介（主任）、神後田遺跡発掘調査指導委員会　松本岩雄　委員長、禰冝田佳男　委員、會下和宏　委員、平郡達哉　委員

主体者　松江市長　松浦正敬、飯塚康行（まちづくり文化財課長）、尾添和人（埋蔵文化財調査室長）、川上昭一（調査係長）、三宅和子（担当者）

また、4 次、5 次発掘調査にあたっては、神後田遺跡発掘調査指導委員会、島根県教育庁文化財課、松江市で調査内容、調査方針について審議し実施した。指導委員は以下の方々に委嘱し、御指導賜った。

神後田遺跡発掘調査指導委員会

（所属・職名は令和元年度の委嘱当時）

委員長	島根県立八雲立つ風土記の丘	所長	松本　岩雄
委　員	大阪府立弥生文化博物館	館長	禰冝田佳男
〃	島根大学総合博物館	教授	會下　和宏
〃	島根大学法文学部	准教授	平郡　達哉

写真１　指導委員会会議風景

写真 2　調査風景 (SI49 掘削中)

写真 3　現地指導風景（第 4 次調査）

写真 4　現地説明会 (2019 年 10 月 26 日開催)

写真 5　展示風景
令和元年度風土記の丘地内　発掘調査速報展
（八雲立つ風土記の丘提供）

第 3 節　調査の検討・遺跡の啓発

第 4 次調査、第 5 次調査については、発掘調査指導委員会を開催し現地での遺跡の検討および調査方法の検討を行った。また第 4 次調査については、一般市民向けの現地説明会を開催し、市内外から 80 名程の参加があった。また、出土した資料は島根県立八雲立つ風土記の丘開催の令和元年度風土記の丘速報展、鹿島歴史民俗資料館企画展に出品され、一般公開された。

表 2　　会議・報告会・展示等

令和元年（2019）	8 月 7 日	第 1 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催
	10 月 3 日	第 2 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催
	10 月 26 日	一般市民向け現地説明会開催　80 名参加
	11 月 7 日	郷土の歴史教室「神後田遺跡発掘調査でわかったこと」
	11 月 17 日～ R2.2 月 2 日	鹿島歴史民俗資料館企画展「古墳時代の田和山遺跡と周辺地域」速報展示として出品
	11 月 17 日	乃木地区自治会連合会研修会講演「弥生時代の乃木地区 － 神後田遺跡発掘調査からわかったこと －」
令和 2 年（2020）	3 月 28 日～ 5 月 11 日	島根県立八雲立つ風土記の丘 「令和元年度風土記の丘地内　発掘調査速報展」出品
	6 月 26 日	第 3 回神後田遺跡発掘調査指導委員会開催
	12 月 5 日	田和山学講座「田和山周辺の弥生遺跡と神後田遺跡」

第 2 章　神後田遺跡の位置と環境

第 1 節　神後田遺跡の位置

神後田遺跡は松江市浜乃木五丁目に所在する（図 1、2）。西に宍道湖を望む独立丘陵の南端部に位置し、南の独立丘陵には国史跡田和山遺跡が存在する。

神後田遺跡が存在する丘陵は南端部の標高が最も高く、東西に伸び北東に向かい傾斜する舌状の地形を呈する。丘陵の頂上部は平坦面が広がっており現在は耕作が営まれているが、丘陵周囲の低地部は宅地開発により既に削平が及んでいる様子が確認できる。南には現在山陰自動車道が通っており、周辺の開発も著しいことから旧来の地形を現地で確認することは難しい。丘陵の字名は「神後田」であり、周辺住民によれば「じごで」と呼称されている。周辺低地部の字名をみると「穴田（あなだ）」「分ヶ田（ふけだ）」等がみられ、ぬかるんだ地盤の悪い水田があったことが窺える（図 3）。なお、遺跡は「神護田自治会」の範囲に含まれており、じごでの「ご」には「護」の字が使われているが、明治 22 年の切図には「後」が使用されている。このことから、少なくとも明治以前までは「後」の字が使われていたと考えられる。よって遺跡の名称は「後」の字を使用し「神後田遺跡」とした。

昭和 22 年 (1947) の航空写真によれば、遺跡は宍道湖東岸よりやや東に入った独立丘陵の南端部

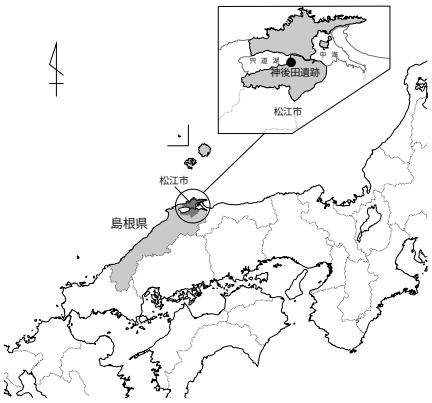


図 1　　松江市の位置

図 2　　神後田遺跡の位置

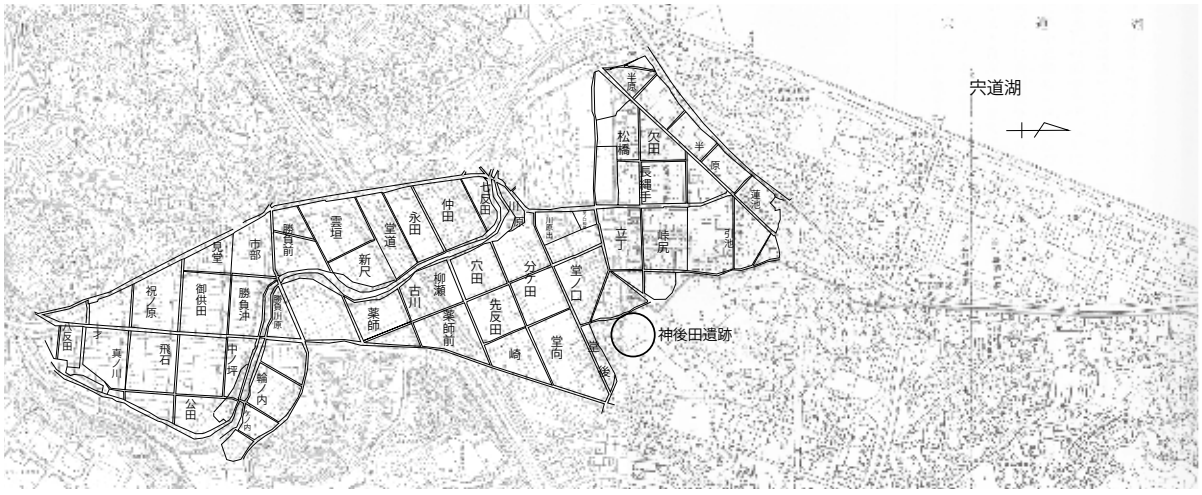


図 3　　神後田遺跡周辺の字名（乃木地区ふるさとづくり推進委員会 1995 より一部改変）

に位置することがわかり、丘陵周辺の低地は水田が営まれていたことが確認できる (写真 6)。比較的旧地形の様子が良好に記録されている昭和 45 年 (1970) の地形図 (図 4) をみると、周辺低地部と丘陵の位置関係を確認することができる。図 4 に示すように神後田遺跡の東側に位置する丘陵上には友田遺跡が存在し、弥生前期末～後期前半の配石墓、墳丘墓、四隅突出墓が検出されている。

国土地理院　昭和 22 年空中写真（https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1184998&isDetail=true）

写真 6　神後田遺跡の位置（昭和 22 年航空写真）

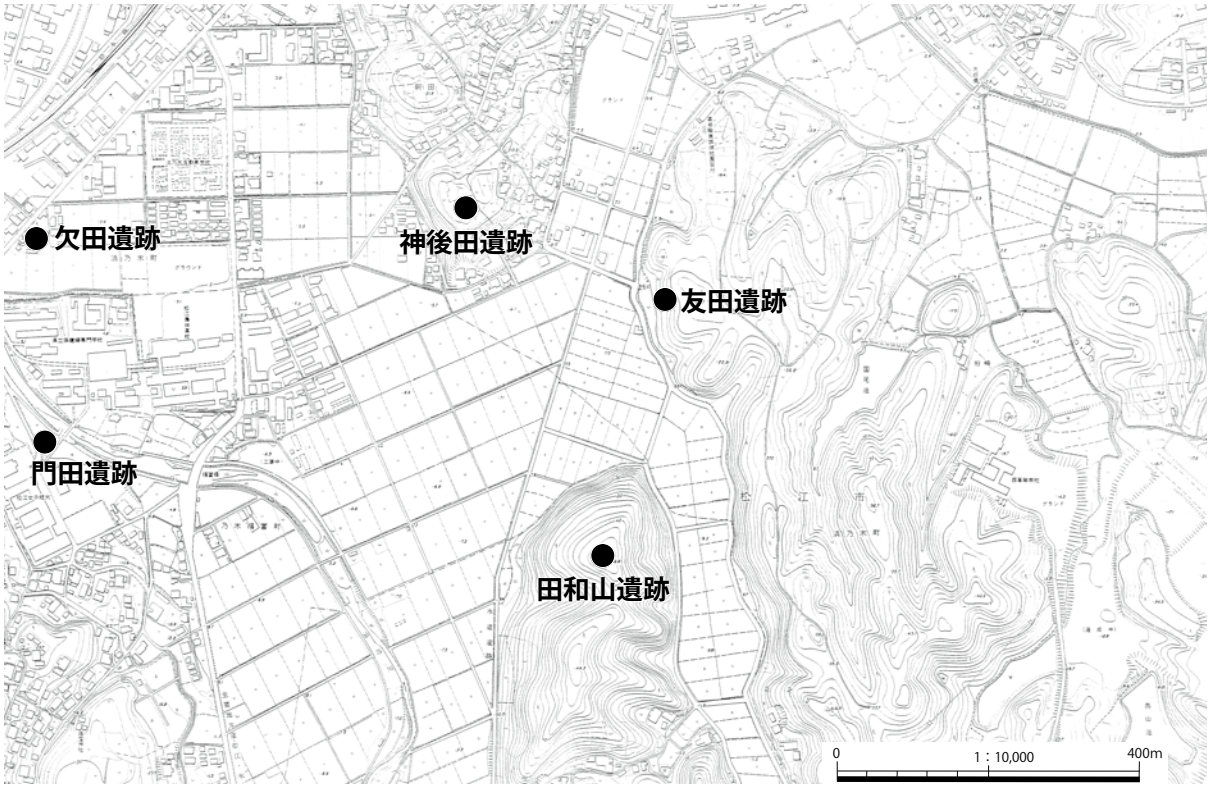


図 4　　神後田遺跡の位置（昭和 45 年地形図）

第２節　地理的環境

神後田遺跡は宍道湖に面した低地に孤立する丘陵上に位置する（図 5）。この丘陵は、大きく見ると田和山丘陵を含む尾根の北西延長上にあたり、北側の野代神社付近まで断続的に続く。丘陵は 1100 万年前頃（新第三紀中新世）の布志名層の堆積岩類からなり、部分的に数十万年前（第四紀更新世）の乃木段丘礫層の堆積岩類が重なっている。低地では、丘陵の西を忌部川、東を山居川が流れ、それぞれ小規模な沖積平野を形成している。ここでは、便宜上西側を忌部川低地、東側を山居川低地と仮称する。忌部川低地は、神後田遺跡周辺では標高 5m 以下で、南方約 500m の田和山丘陵付近では標高 7m 前後、扇状地頂部に辺りでは標高 17m 前後となっている。山居川低地は古志原の低丘

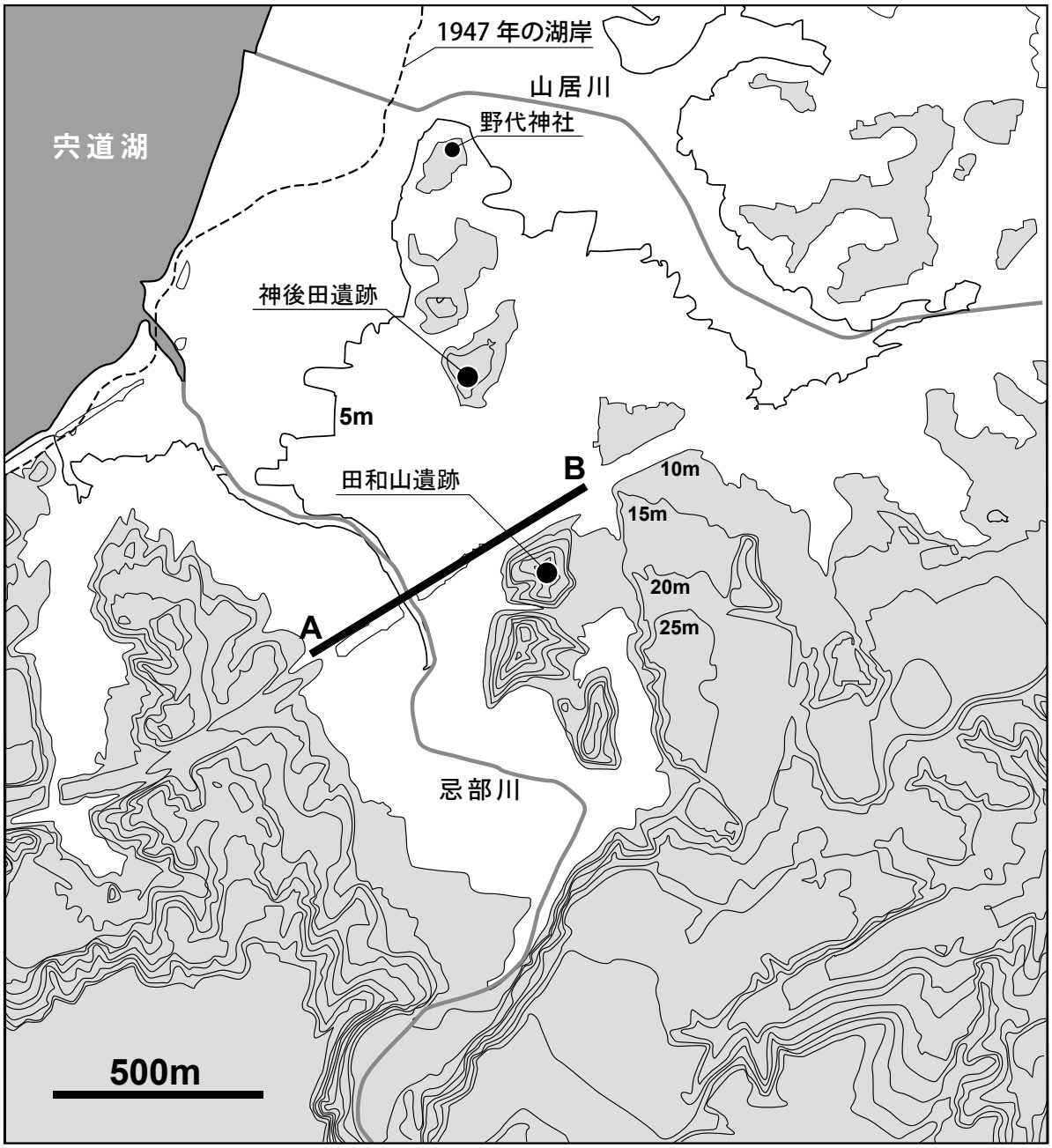


図 5　　神後田遺跡周辺の地形
（A － B は図 7 の断面位置を示している。）
現地形を 5m コンターで示している（標高 60m 以上は省略）。また、1947 年米軍撮影の空中写真に基づく当時の湖岸線を破線で示している。
現地形は「地理院地図」を基に作成。

陵地帯から流れ出る山居川に沿うごく小規模な低地で、標高 5m 未満の低い土地になっている。

神後田遺跡や田和山遺跡に建物や環壕が作られた弥生時代と現代の地形を比較すると、低地部分の変化が大きいと推定される。宍道湖は入江が堆積物によって閉塞されることで形成された潟湖で、忌部川低地はそこへ流れ込む忌部川の扇状地および三角州からなる沖積平野である。このような地形は、最終氷期以降の気候変化と海面変化に応じて発達したもので、現在も変化を続けている「若い」地形である。ここでは、宍道湖周辺の地形環境が大きく変化する中で、神後田遺跡を取り巻く環境はどのように変化してきたかについて考察する。

縄文時代以降の宍道湖周辺の地形

沖積平野、潟湖など海岸低地の地形は、縄文時代以降に大きく変化してきた。縄文時代の始まりは、1 万数千年前に位置づけられている。最終氷期の最寒冷期が概ね 2 万年前から 1 万 6000 年前とされ、縄文時代の始まりは地球の気候が温暖化に向かい始めた頃と言える。最寒冷期には地球の平均気温が現在よりも 5℃～ 7℃程度低かったとされ、この気温低下に伴って海面の低下が生じていた。日本列島周辺における最寒冷期の海面は、現在より 100m 前後低かったとされる。その後、温暖化とともに海面も上昇し、7000 年前頃には概ね現在と同程度の海面高度になった。この海面変化により海岸低地の地形環境が変化し、地形変化は縄文時代の以降の低地部における人類の営みに大きく影響した。

宍道湖周辺の地形変化を図 6 に示す。宍道湖周辺の地形は、最寒冷期の約 2 万～ 1 万 6000 年前には松江平野北部を流れる朝酌川や大橋川の塩楯島付近から発した川が西に流れ、浅く広い谷を形成していた。その谷底の高度は、宍道湖の湖心付近で標高 -20 ～ -30m だったことが確認されている（三梨・徳岡 1988）。この川は西側で斐伊川、神戸川と合流して日本海へ至っていた。

気候が温暖化して海面が上昇すると谷は海没して西に開いた湾になった。宍道湖に海水が進入した時期は 1 万年前頃で、約 8000 年前にはアサリなど内湾型の貝類が生息する環境であった。この頃には、海面高度は現在より若干低い程度（-1 ～ -2m か）まで上昇しており、その後、約 7000 年前には +0.5m 程度の最高海面に達した（中村 2006）。海面上昇によって海域は陸側へ拡大し、沖積平野の大部分は水域になっていた。縄文時代の前半に生じた海域の拡大（海岸線の内陸側への移動）は「縄文海進」と呼ばれる。この時の宍道湖の水環境は、約 8000 年前に比べて閉鎖的になっていた。これは、大社湾に面した湾口部の砂州が発達して海水の流入量が減ったことが原因とみられる。斐伊川三角州が島根半島に向かって前進し、この部分の地形も水の交換を悪化させたことも想定される。

約 7000 年前以降は、基本的には温暖な時代が続き、海面高度は若干の変動はあったと考えられるものの、地形を大きく変えるほどの変動量ではなかったと推定される。海面高度がほぼ一定になると、河川や海流による堆積作用によって沖積平野が発達を続けた。約 4000 年前には宍道湖の水環境はさらに閉鎖的になる。この時までに斐伊川と神戸川の三角州が島根半島まで達し、宍道湖は海との直接の連絡を絶たれた潟湖に変化したとみられる。海との連絡は絶たれたが、宍道湖には大橋川を通じて中海からの海水流入が続き、汽水環境は維持された。その後、2000 年前頃には、松江平野北部の西川津遺跡（西川津町）で小規模なヤマトシジミの貝塚が形成されており、宍道湖水域でのシジミ漁が

行われたことがわかる。同時代の宍道湖の湖底堆積層でも、ヤマトシジミの貝殻密集層が確認されている（中村・徳岡 1997）。

近世以降は埋め立てや干拓などの開発による地形変化量が自然の作用による変化量を上回るようになる。忌部川河口付近から大橋川にかけての湖岸線も、1948 年以降の埋め立てによりかなり変化している。

忌部川低地の古地理

宍道湖周辺の地形は海面変化などに応じて大きく変化した。小規模な沖積平野である忌部川低地の地形や環境も、時代ごとに変化したと推定される。

神後田遺跡と田和山遺跡の間を東西に山陰自動車道が通っており、その平野部分のボーリングに基づく地下断面図を図 7 に示す。これによると、平野を構成する堆積層の下位に新第三紀の基盤岩が分布している。堆積層は、砂、泥および礫からなっている。山陰自動車道の位置では基盤岩の高度は概ね標高 0m より高いことから、縄文海進が最大に達した約 7000 年間の段階も、この位置より上流側まで海域が広がることはなかったと推定される。つまり、この断面図に示した堆積層は基本的に氾濫原の堆積物と考えられ、大まかに区分すると、比較的粗粒（礫～砂）な堆積物が河道に伴うもの、細粒（砂～泥）な堆積物が後背低地のものとみなすことができる。

図 5 には、1947 年米軍撮影の空中写真から読み取った湖岸線を破線で示している。山陰自動車道より下流側では、野代神社が立地する丘陵の裾部まで当時の湖岸線が迫っている。縄文時代から弥生

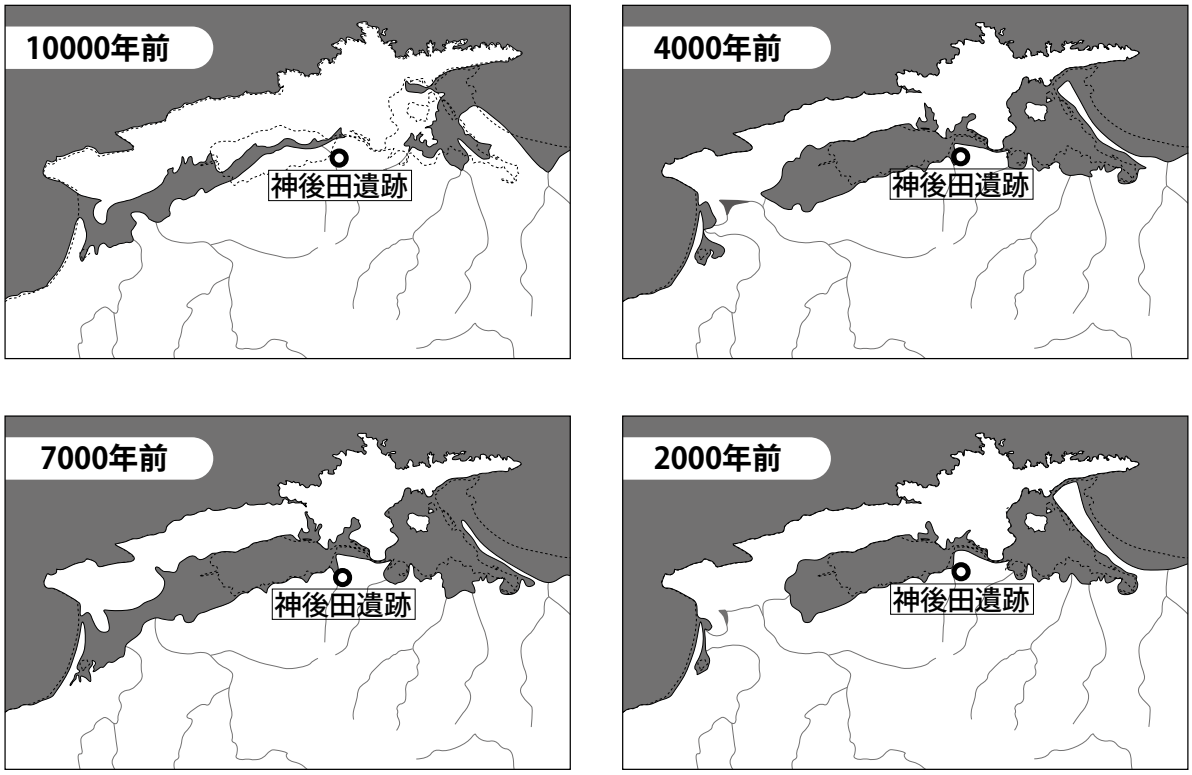


図 6　　宍道湖中海周辺の古地理図 (中村 2006)

氷期には広く浅い谷だった宍道湖部分では、1 万数千年から海が入り始めた。

約 8000 ～ 7000 年前には水域が最大に広がり、その後は出雲平野の発達により宍道湖は閉塞された。

時代の頃には、この時期の湖岸線よりさらに上流側まで水域が広がっていたであろう。一概には言えないが、沖積平野の標高 5m 未満の低地は、縄文時代には水域だった可能性が高い。この高度を概ね縄文時代の水域と仮定すると、忌部川低地では神後田遺跡付近まで、標高が低い低地部が深く入り込んでいる山居川低地では南東へ向かって細長く湾入していたと推定できる。

時代ごとの湖岸線の変化を推定する根拠はないが、弥生時代には縄文時代と比較すると陸地は沖側へ広がったはずである。ただし、その変化量は小さい。忌部川低地では湖岸線が若干沖側へ移動（最大で 300m 程度か）、山居川低地では、縄文時代には湾入部だった範囲が沼沢地化した程度の変化であろう。つまり、弥生時代には神後田遺跡の北西では直線距離で 500m 未満の範囲に宍道湖が迫り、東の山居川沿いには沼沢地が存在したと想定できる。

忌部川低地では、縄文時代から弥生時代までの地形の平面的な変化量はそれほど大きくないと思われるが、水田面を中心に行われた過去の試掘調査では、遺物が出土した場所は限定的だったということで、低地の広い範囲に集落が広がっていたのではないかも知れない。水田などの耕作地に利用された可能性はあり、その場合は縄文時代と弥生時代では低地の植生が大きく異なっていたと思われる。農耕が本格化する前の縄文時代には、平地の多くは「手つかず」の森林に覆われていた可能性が高いが、水稲稲作が普及し、低湿地が水田として利用され始めるとそこから森林が消えて、近現代にも通じる景観が成立した。現在、日本列島の平地は市街地や耕作地などに利用されている場合が多く、森林に覆われた平野は想像しにくい。しかし、日本列島の気候では安定した土地は森林に覆われることが普通で、各地にある埋没林の存在もそのことを示している。丘陵上も縄文時代には広い範囲が森林に覆われていたと推定されるが、神後田遺跡、田和山遺跡に代表されるように、弥生時代には丘陵上の開発が進み、この時期に低地、丘陵とも環境が大きく変化したと考えられる。

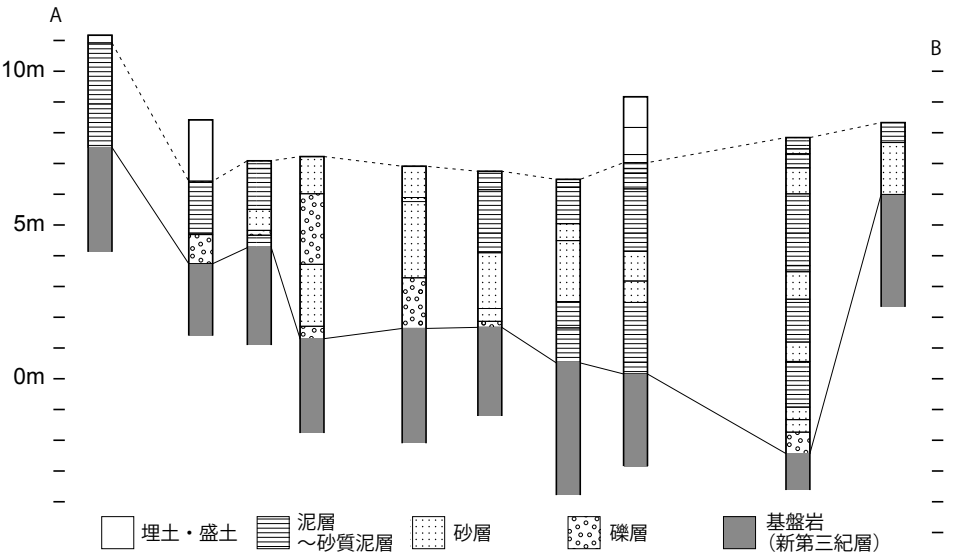


図７　　忌部川低地の地下地質断面図
断面位置は図５に示している。柱状図のデータは国土交通省の国土地盤情報検索サイト「kunijiban」から引用。

（中村唯史　島根県立三瓶自然館）

参考文献
中村唯史・徳岡隆夫 1997「宍道湖堆積層中のシジミ貝殻層の発見とその意義」『LUGNA（汽水域研究）』4　P77 – 89
中村唯史 2006「山陰中部地域における完新世の海面変化と古地理変遷」『第四紀研究』45　p 407 – 420
三梨昂・徳岡隆夫編 1988『中海・宍道湖 : 地形・底質・自然史アトラス』島根大学山陰地域研究総合センター

第３節　歴史的環境

【旧石器時代】 周辺での旧石器時代の遺跡は少し確認される。廻田遺跡（24）から玉髄製ナイフ形石器、田和山遺跡（14）から玉髄製ナイフ形石器、台形様石器、楔形石器、碧玉製縦長剥片が出土している。

【縄文時代】 周辺の縄文時代の遺跡として、福富Ⅰ遺跡（39）、福富湖岸遺跡 (22) から草創期の有舌尖頭器が出土しており、福富Ⅰ遺跡では落とし穴 18 基が検出されている。長廻遺跡（88）で落とし穴 4 基、二ツ縄手遺跡（3）から縄文晩期の土器が出土している。また、大角山遺跡（49）で後晩期の土器が、下沢遺跡（9）で石器が出土している。

【弥生時代】 周辺の弥生時代の遺跡としては田和山遺跡、友田遺跡（5）、南友田遺跡（6）、欠田遺跡（19）、二ツ縄手遺跡、雲垣遺跡（28）、福富Ⅰ遺跡、門田遺跡（20）がある。田和山遺跡は神後田遺跡（1）の南約 500 mの地点に存在し、弥生前期末～中期後葉までの集落跡である。三重の環壕を有するが、環壕内に居住空間が認められないことから、一般的に環壕集落として位置付けられるものとは特異な特徴を有する。また前期末に一重で途切れる環壕をもち、中期に三重環壕に規模を拡大させることが調査で判明している。友田遺跡は神後田遺跡の南東部に所在する弥生前期末～後期前半の遺跡である。配石墓 24 基、墳丘墓 6 基、四隅突出墓 1 基が検出されており、配石墓から前期末の土器のほか、ヒスイ製勾玉、管玉、黒曜石製石鏃、サヌカイト製石鏃といった副葬品が出土している。南友田遺跡（4）は友田遺跡と同一丘陵上、友田遺跡の南隣に位置する。主だった遺構は検出されていないが､弥生前期末の土器が出土している。欠田遺跡は神後田遺跡の西約 600m の地点に位置する。発掘調査により弥生前期末～古墳前期までの土器が出土しており、主だった遺構は検出されていないが当地一帯に集落が存在した可能性が指摘される。田和山遺跡、友田遺跡、欠田遺跡は弥生前期末からの活動が認められる遺跡であり、神後田遺跡と遺跡の開始年代はほぼ同時期と考えられる。

弥生中期中葉にはいると田和山遺跡で三重環壕が形成され、遺跡の最盛期を迎える。また、田和山遺跡から南西約 500m の水田部に位置する雲垣遺跡では中期後半の土器が包含層からまとまって出土している。また、欠田遺跡の忌部川対岸に門田遺跡が出現する。弥生後期前半になると、田和山遺跡は遺跡の終焉を迎えるが、神後田遺跡東部の丘陵上に位置する福富Ⅰ遺跡で集落が形成される。弥生後期後半は周辺での主だった遺跡はみられないが、乃木西廻遺跡（87）では弥生後期の竪穴建物が検出されている（令和 2 年度発掘調査）。

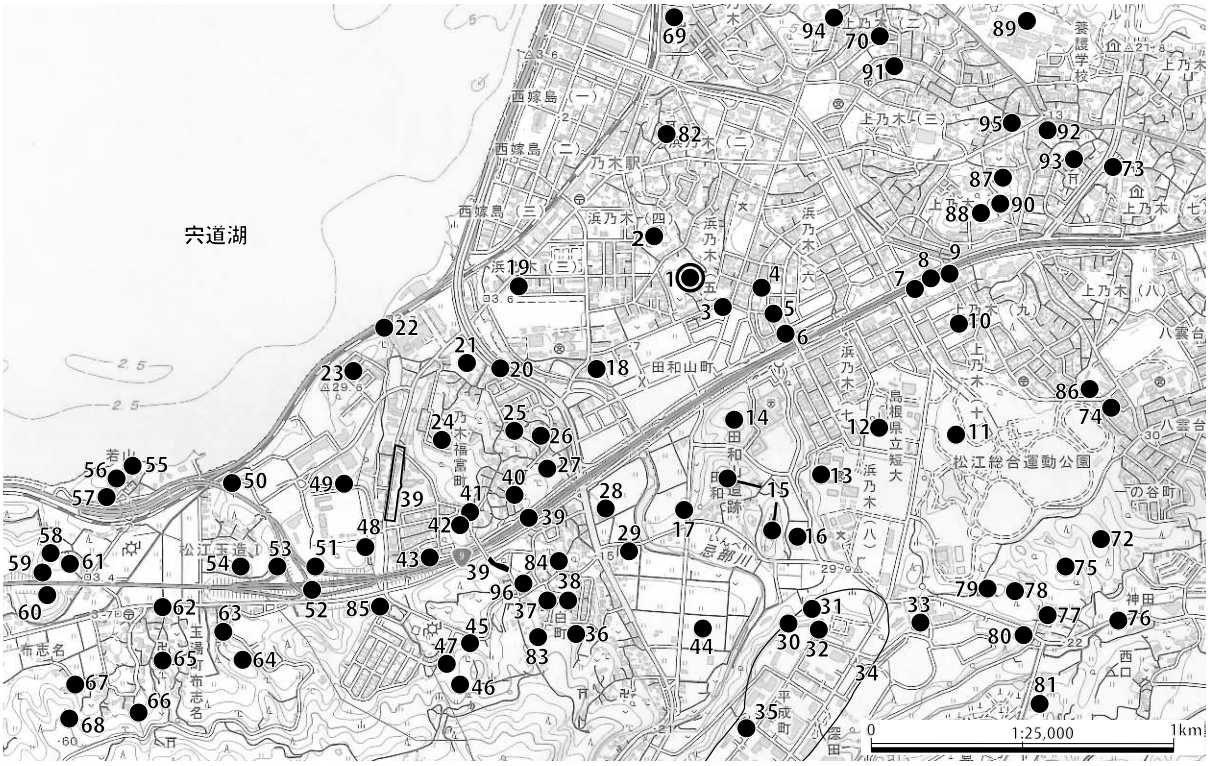
【古墳時代】 周辺に古墳時代前期の遺跡は少ないが、茶山遺跡（2）、袋尻遺跡群（34）、田和山 2 号墳があげられる。茶山遺跡は神後田遺跡の北西の丘陵上に位置する。前期後半の古墳 3 基が存在し、試掘調査によって 3 号墳主体部底面に水銀朱が敷かれた状態が検出され現地保存されている。袋尻遺跡群は田和山遺跡の南約 1㎞に位置する。墳頂と墳裾に土器棺が埋納されており、墳頂の土器棺から鉄剣が 1 点出土している。田和山 2 号墳は田和山遺跡の発掘調査に伴い調査が実施されており、弥生中期環壕の埋没後、同丘陵頂上に築造される。

古墳中期にはいると、弥生後期後半から古墳前期にかけて建物遺構がみられなかった田和山遺跡で再度集落が形成され、玉作工房跡が検出されている。また、神後田遺跡から南西約 2㎞の丘陵に

ある渋ケ谷窯跡（77）は、発掘調査から古墳中期中～末葉の操業であることが明らかになっている。中期古墳としては、大角山１号墳（48）、二名留古墳群（23）、長砂古墳群（10）、向原古墳群（4）、奥山古墳群（11）、後友田古墳（13）があげられ、長砂古墳群では１号墳主体部から鉄刀、４号墳主体部から矛が出土し、墳裾や溝から初期須恵器が出土している。この頃の出雲の大型古墳は大橋川沿岸地域に築造されており、この乃木地区では先述のような中小規模の古墳群が築造されるようである。大角山遺跡（49）では中期の竪穴建物（玉作工房跡）が検出されている。

古墳後期になると、田和山遺跡と同丘陵南部に田和山１号墳（15）が築造される。全長約 20m の前方後円墳である。このほか、乃木二子塚古墳（8）、屋形１号墳（42）が周辺の後期古墳としてあげられる。また古墳後期にはいると、乃木地区西方の花仙山周辺での玉製作が最盛期を迎える。乃木地区においても玉作工房跡が検出されており、福富Ⅰ遺跡では、玉作関連遺構が多数検出されている。また、乃木西廻遺跡では古墳時代前期の集落跡が見つかっている。

【奈良・平安時代】『出雲国風土記』には神後田遺跡丘陵の南を流れる忌部川（乃白川）は「野代川」と記されており、「源は郡家の西南一十八里なる須我山より出で、北に流れて入海に入る。」とある。また、現在の嫁ケ島と考えられる「蚊島」は「野代の海中に蚊島あり」と記されており、現在の乃木地区の周辺が「野代」と称されていたことが推察される。更に、松本古墳群（43）、揩松遺跡（79）



1	神後田遺跡	12	奥山遺跡	23	二名留古墳群	34	袋尻遺跡	45	弥陀原横穴群	56	永原窯跡	67	宮田古墳群	78	勝負谷遺跡	89	王子坂遺跡
2	茶山遺跡	13	後友田古墳	24	廻田遺跡	35	菅沢谷横穴群	46	岩屋口古墳	57	空福島窯跡	68	後迫古墳	79	揩松遺跡	90	長廻Ⅱ遺跡
3	二ッ縄手遺跡	14	田和山遺跡	25	屋形遺跡	36	乃白権現遺跡	47	松本横穴群	58	二斗垣古墳群	69	伝佐々木高綱墓	80	深田遺跡	91	後廻遺跡
4	向原古墳群	15	田和山古墳群	26	蓮華垣遺跡	37	勝負廻横穴群	48	大角山古墳群	59	鍛冶山窯跡	70	宇賀Ⅰ遺跡	81	勝負谷古墳群	92	乃木西廻Ⅱ遺跡
5	友田遺跡	16	友田Ⅱ遺跡	27	松本遺跡	38	勝負廻古墳群	49	大角山遺跡	60	鍛冶畑遺跡	71	槍山古墓群	82	山居空遺跡	93	当貫遺跡
6	南友田遺跡	17	薬師前遺跡	28	雲垣遺跡	39	福富Ⅰ遺跡	50	布志名大谷Ⅱ遺跡	61	舟木藤平窯跡	72	小沢横穴群	83	勝負奥遺跡	94	宇賀遺跡
7	二子塚古墳	18	福富Ⅱ遺跡	29	乃白遺跡	40	乃白玉作跡	51	布志名大谷Ⅰ遺跡	62	永保窯跡	73	向荒神古墳	84	穴廻奥遺跡	95	経塚古墳
8	乃木二子塚古墳	19	欠田遺跡	30	野向古墳	41	森木谷古墳	52	昇雲窯跡	63	判官山古墳群	74	矢の原遺跡	85	すべりざこ古墳群	96	松本修法壇跡
9	下沢遺跡	20	門田遺跡	31	菅沢遺跡	42	屋形古墳群	53	布志名大谷Ⅲ遺跡	64	伝富士名判官義綱古墓	75	神田遺跡	86	矢の原Ⅱ遺跡		
10	長砂古墳群	21	神立遺跡	32	大久保古墳群	43	松本古墳群	54	茂芳目遺跡	65	立平窯跡	76	B62 遺跡	87	乃木西廻遺跡		
11	奥山古墳群	22	福富湖岸遺跡	33	大久保谷遺跡	44	真ノ川遺跡	55	後福島窯跡	66	小川古墳群	77	渋ヶ谷遺跡	88	長廻遺跡		

図８　　周辺遺跡の位置

にて古代道と思われる遺構が検出されており、風土記記載の正西道と推定される。福富Ⅰ遺跡では古代の建物跡が検出されており、唐三彩が採集されている。また、刻書須恵器や円面硯、緑釉陶器が出土している。

【中世・近世】　中世になると 12 世紀後半には佐々木高綱が出雲の守護として下向したという伝えがあり、その子孫である乃木氏が 13 世紀後半に乃木保、乃木郷の地頭となっていたことが知られる（西田 2016）。『乃木郷土誌』によれば乃木福富町の丘陵に土居（どい）、屋形（やかた）、門田（かどた）、舟附（ふなつき）などの地名が残っており、乃木氏がこの周辺に居館を構えていたとされる。福富Ⅰ遺跡では 12 ～ 15 世紀の掘立柱建物跡から中国産青磁や白磁が出土しており、居館と推定される。また、中世の尼子（あまご）氏・毛利氏両軍の攻防戦のなかで、乃木地区では二つの合戦があったことが伝えられている。『乃木郷土誌』によれば永禄 5 年に吉田郡山城を進発し出雲侵攻を開始した毛利氏と、富田城に籠城した尼子氏との雲州争奪戦のなかで「本城・本田合戦（乃木合戦）」「乃白合戦」が乃木地区で勃発したことが記されている。このうち乃木合戦の古戦場が神後田遺跡周辺に比定されている (註 1)。

（三宅）

註釈

(1)『忌部総社神宮寺根元録』『意宇郡誌乃木村』に本合戦についての記載がある。『意宇郡誌乃木村』には「古戦場　村の西方字浜にあり。永禄年中毛利･尼子の兵相攻撃する所、今の宍道湖より乃白･福富二村の界に至りし所。」とあり、これから『乃木郷土誌』では、字「岡ノ山」「神護田」「向原」一帯に陣を構えていたと推察がされている。しかし引用元である『忌部総社神宮寺根元録』は『松江市史　史料編４　中世Ⅱ』に収録されているが「正確な歴史的事実とは認め難い」と留意事項が記載されており、当史料の使用には注意が必要と考える。ここでは参考として記載した。文献史料の評価については史料調査課小山祥子氏に御教示頂いた。

参考文献

島根大学考古学研究会 1971「欠田遺跡試掘調査概要」『菅田考古』12 号
島根県教育委員会 1989『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書 5：西川津遺跡 3』
島根県教育委員会 1997『福富Ⅰ遺跡屋形 1 号墳』
島根県古代文化センター編 2016『解説　出雲国風土記』島根県教育委員会
西田友広 2016「中世社会の成立」『松江市史　通史編２　中世』松江市
丹羽野裕・丹羽野輝子 2020「松江市田和山Ａ遺跡における古墳時代中期の祭祀遺構・遺物について」『遺跡学研究の地平―吉留秀敏氏追悼論文集―』吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
乃木郷土誌編集委員会 1991『乃木郷土誌』松江市乃木公民館
乃木ふるさと推進委員会 1995『ふるさと史談　乃木』
松江市教育委員会 1982『乃木二子塚古墳他詳細分布調査報告』
松江市教育委員会 1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
松江市教育委員会 1988『廻田遺跡　廻田古墳』
松江市教育委員会 1991『田和山古墳群発掘調査概報』
松江市教育委員会 1992『二名留古墳群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 1995『二名留遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 1995『袋尻遺跡群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 1998『門田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2001『二ッ縄手遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2001『奥山古墳群発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2001『雲垣遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告 1・2』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2006『渋ヶ谷遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2006『勝負奥遺跡』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2011『（仮称）上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事予定地内発掘調査報告書　後廻遺跡』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2012『王子坂遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団 2014『浜乃木四丁目宅地造成に伴う発掘調査報告書　茶山遺跡』
松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団 2015『長廻遺跡』
松江市史編集委員会編 2013『松江市史　資料編２　考古資料』松江市
松江市史編集委員会編 2014『松江市史　史料編４　中世Ⅱ』松江市
松江市史編集委員会編 2015『松江市史通史編１　自然環境・原始・古代』松江市
松江市史編集委員会編 2016『松江市史通史編２　中世』松江市
松江市史編集委員会編 2019『松江市史通史編３　近世』松江市
松江市立鹿島歴史民俗資料館 2020『古墳時代の田和山遺跡と周辺地域　松江市立鹿島歴史民俗資料館 2019 年度特別展図録』

第３章　発掘調査

第１節　調査の方法と調査区について

第１次～第５次調査で 20 か所の調査区を設定し調査を実施している。調査グリッドは X=-61380、Y=80310 を基準点とし 10m × 10 mの大グリッド、2m × 2 mの小グリッドを設定した（図 10）。検出した遺構は完掘せず最小限の掘削にとどめた。このうち T15 ～ T20 については記録を作成した後、遺構面から５～ 10㎝程度真砂土を敷き発生土で埋戻しを行い遺構面の保護を図った。なお、調査中は島根県文化財課、神後田遺跡発掘調査指導委員会の現地指導を受けた。遺跡の総面積 12,522.62㎡のうち、これまで調査を実施した面積は 348.01㎡である。

本章では各トレンチの概要を「第２節　弥生時代の遺構」「第３節　その他の時代の遺構」に分類し述べている。弥生時代の前期末に掘られた丘陵平坦面の南西側を廻る壕を「環壕」と呼び、第２節については「1　環壕部の調査」「2　環壕内部の調査」「3　環壕外部の調査」「4　小結」、第３節については「1　古代の遺構」「2　中近世の遺構」「3　小結」に分けて記載している。このため調査区によっては複数の項目にまたぎ同トレンチ内の遺構の説明を記載しているものがある。各調査区の遺構の説明項目の対照は表３を参照されたい。

表３　　調査区説明項目

調査区	面積	調査次数	主な検出遺構	記述する節 - 項	備考
T1	6.84㎡	第１次調査	SD01（環壕）	第２節 - １項	
T2	9㎡	〃	SD02(環壕)	第２節 - １項	
T3	9㎡	〃	SP03	第２節 - ３項	
T4	7.5㎡	〃	SD04、SX05	第２節 - ３項	
T5	9㎡	〃	SP24 ～ 26、SK06	第２節 - ２項	
T6	9㎡	〃	SP7 ～ 19	第３節 - １項	
T7	3.3㎡	〃	SI49	第３節 - ２項	
T8	8.55㎡	第２次調査	SD35(環壕)	第２節 - １項	
T9	6㎡	〃	SD36、SP37、SP38	第２節 - ３項	
T10	5.4㎡	〃	SP39 ～ 41、SK42	第２節 - ３項	
T11	6㎡	〃	SD44	第３節 - ２項	
T12	9.75㎡	第３次調査	-	第２節 - ３項	
T13	10.5㎡	〃	-	第２節 - ３項	
T14	9㎡	〃	SD45（環壕）	第２節 - １項	
T15	25.08㎡	第４次調査	SD01（環壕）	第２節 - １項	T1 の再調査
T16	81㎡	〃	SI49	第２節 - ２項	T7 の再調査
			柱穴群	第２節 - ２項	
T17	76.7㎡	〃	SI50	第２節 - ２項	T5 の再調査
			SD48（環壕）	第２節 - １項	
			SD71	第３節 - ２項	
T18	7.99㎡	〃	SP52 ～ 55、SX56	第３節 - １項	T6 の再調査
T19	24㎡	〃	SD51	第３節 - ２項	
T20	24.4㎡	第５次調査	SD115（環壕）	第２節 - １項	

S=1:1000
0 5 10 15 20m
N
T14
T20
T1・15
T12
T8
T7・16
T19
T2
T5・17
T10
T11
T3
T6・18
T9
T13
T4
幼 保 園　の ぎ
…神後田遺跡の範囲

図 9　神後田遺跡全体図

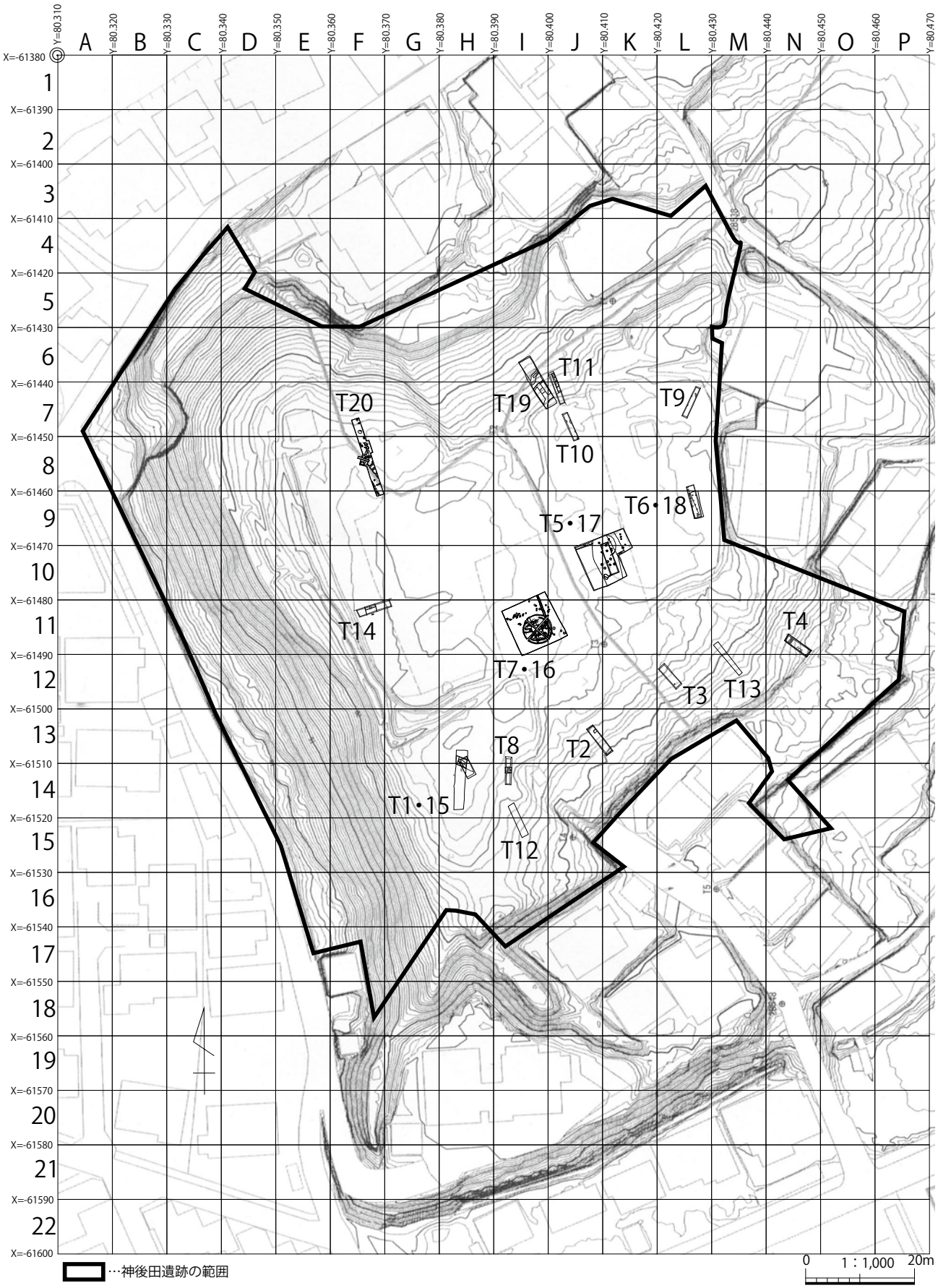


図 10　神後田遺跡グリッド図

第 2 節　弥生時代の遺構

1．環壕部の調査 (図 11)

弥生前期の環壕を検出したトレンチ（T1、T2、T5、T8、T14、T15、T17、T20）について記述する。このうち T15 は T1 の再調査、T17 は T5 の再調査であるため、まとめて詳述する。

(1)T1、T15（SD01）（図 12）

遺跡南西部の平坦面に設定したトレンチである。第 1 次調査 T1 にて、弥生前期の土器を含む壕（SD01）を検出し、第 4 次調査にて同地点に T15 を設定し再調査を実施した。T1 の規模は東西 1.8m ×南北 3.8m で面積は 6.84㎡である。T15 の規模は東西 2.2m × 南北 11.4m で面積は 25.08㎡である。いずれも表土を除去すると L=22.5 ～ 22.7m でにぶい黄橙色の地山を確認し、地山に掘りこまれた壕 (SD01) を検出した。

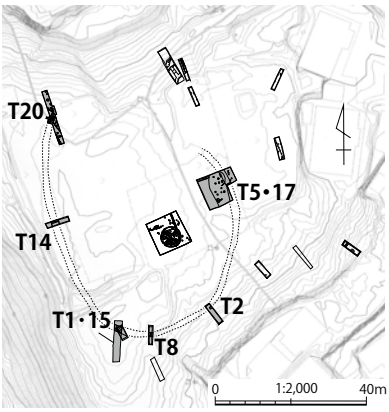


図 11　　トレンチ位置図

SD01

①遺構の概要（図 13）

T15 の北半を東西に伸びる壕である。弥生前期の環壕と思われる。壕の上幅は 1.45m、深さ 0.9m、東西の長さ 4.5m を測る。断面形は底面に平坦部をもち逆台形を呈する。底面の標高は 21.65m である。北にやや内湾する。埋土土層断面の観察から 2 時期に分けられ、掘り直しと考えられる。新しい段階を SD01-A、古い段階を SD01-B とする。

SD01-A は黒褐色の土層で埋められており、炭化物を多く含む。弥生前期の土器、拳大の礫が出土する（図 12 - ③④層、図 13 - ①～③、⑤層）。この黒褐色土層が弥生時代環壕の埋土に共通してみられる土層である。SD01-B は、黄褐色の地山ブロックを多く含む褐色系土層（図 12 - ⑥⑦層、図 13 - ④⑥層）が上層に堆積し、下層（壕最下層）に粘土質の黒褐色土（図 12 - ⑤層、図 13 - ⑦層）が堆積する。上層から弥生前期の土器が出土する。SD01-A 出土土器との時期差はみられない。下層（壕最下層）から土器の出土はなく、礫が数点出土する。壕は深さ 90cm と環壕としてはやや浅いことから上面は既に削平されているものと

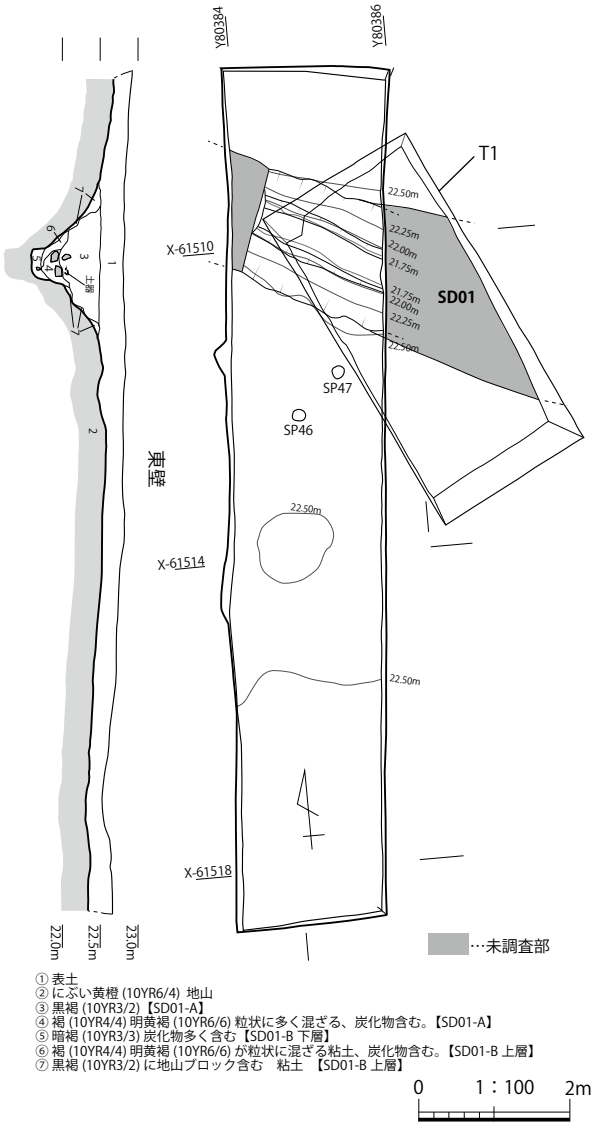


図 12　　T15 平面・土層図

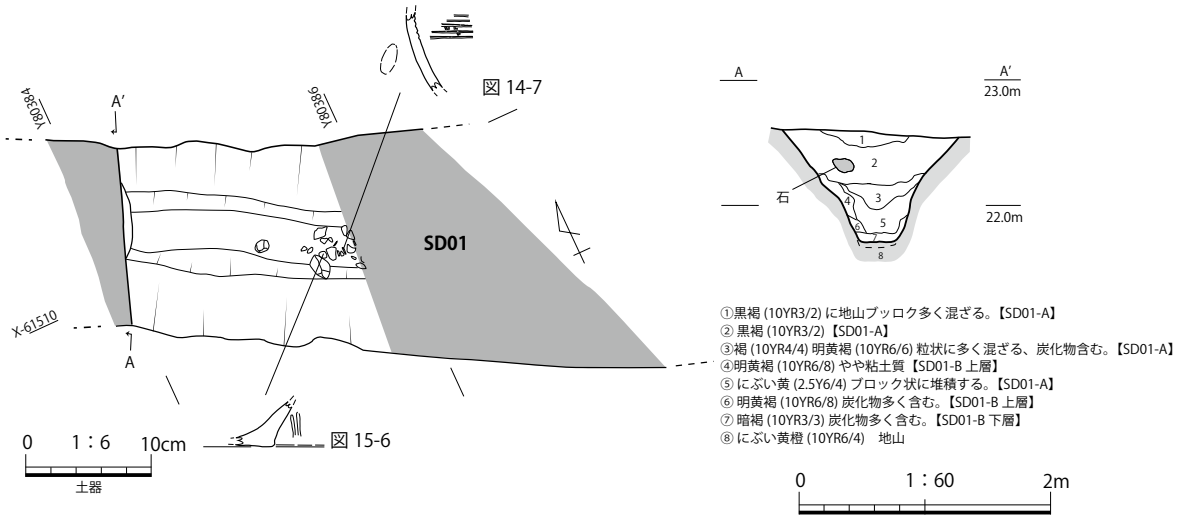


図 13　　SD01 平面・土層断面図

想定される。土盛の痕跡はみられなかった。

②出土遺物（図 14 ～ 17）

土器　図 14 － 1 ～ 4 は弥生土器壺の口縁部である。1 は口径 20㎝を測る。端部に向かい直線的に伸びる。色調は赤褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。2 は口径 26.1㎝を測り、大型の壺の口縁部と思われる。色調は赤褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。端部に面を持ち、沈線 1 条を施した後、上下端に刻目を施す。口縁部に穿孔が 1 か所あく。3 は口径 14㎝を測る。黄褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。口縁部は外反し、端部を丸く収める。4 は口径 14㎝を測る。口縁部は大きく外反し、頸部に沈線 4 条を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土に長石･石英を多く含む。5 は弥生土器壺の口縁部と思われる。色調は黄褐色を呈し、胎土は粗く長石・石英を多く含む。内面に渦巻状の突帯を貼り付ける。渦巻状の内面突帯は瀬戸内海燧灘（ひうちなだ）沿岸部に多くみられるという（川部 2004）。6 ～ 9 は弥生土器壺頸部である。6 は頸部から胴部にかけて残存する。頸部に沈線を 3 条以上施し、内外面にミガキ調整、指頭圧痕が見られる。7 は頸部にヘラ描沈線を 5 条以上施す。内面に指頭圧痕を残す。8 は頸部に沈線 4 条を施す。色調は黄褐色を呈し､胎土に長石･石英を多く含む。9 は頸部から口縁部にかけての残存する。頸部に沈線 3 条以上を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。10 は壺または甕の胴部と思われる。沈線を 6 条施す多条のもので、色調は黄褐色を呈す。11 ～ 17 は弥生土器甕である。11 は口径 19.9㎝を測る。口縁端部がくの字状に曲がり、端部を短く収める。外面は無文である。色調は黄褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。外面に黒斑が見られる。12 ～ 14 は甕の口縁部である。12 は口縁端部を外側に屈曲させる「逆 L 字状」口縁である。色調は黄褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。13、14 は端部をやや外反させるもので、13 は摩耗し不明瞭であるが、頸部にわずかにハケ目調整が残存する。14 は外面にハケ目調整が施される。15 は甕の胴部である。外面にハケ目調整が施される。色調は黄褐色を呈す。16 は甕の胴部と思われる。残存部外面の上部から沈線 3 条以上、円形刺突 4 箇所、沈線 3 条、円形刺突 4 箇所、沈線 1 条以上が施される。円形刺突は上部が「逆 C」状で下部が「C 状」の形状をしている (註 1)。17 は胴部と思われる。外面に櫛描文と思われる施文が 14 条確認される。ただし、器壁の摩耗が著しく

ハケ目調整との区別が難しい。内面はハケ目調整がみられる。18 ～ 21 は壺または甕の破片と思われる。18 は沈線を 2 条以上施す。19 は沈線を 5 条以上施し、沈線の施文後、刻目を付す。20、21 は外面に貼付突帯が施される。

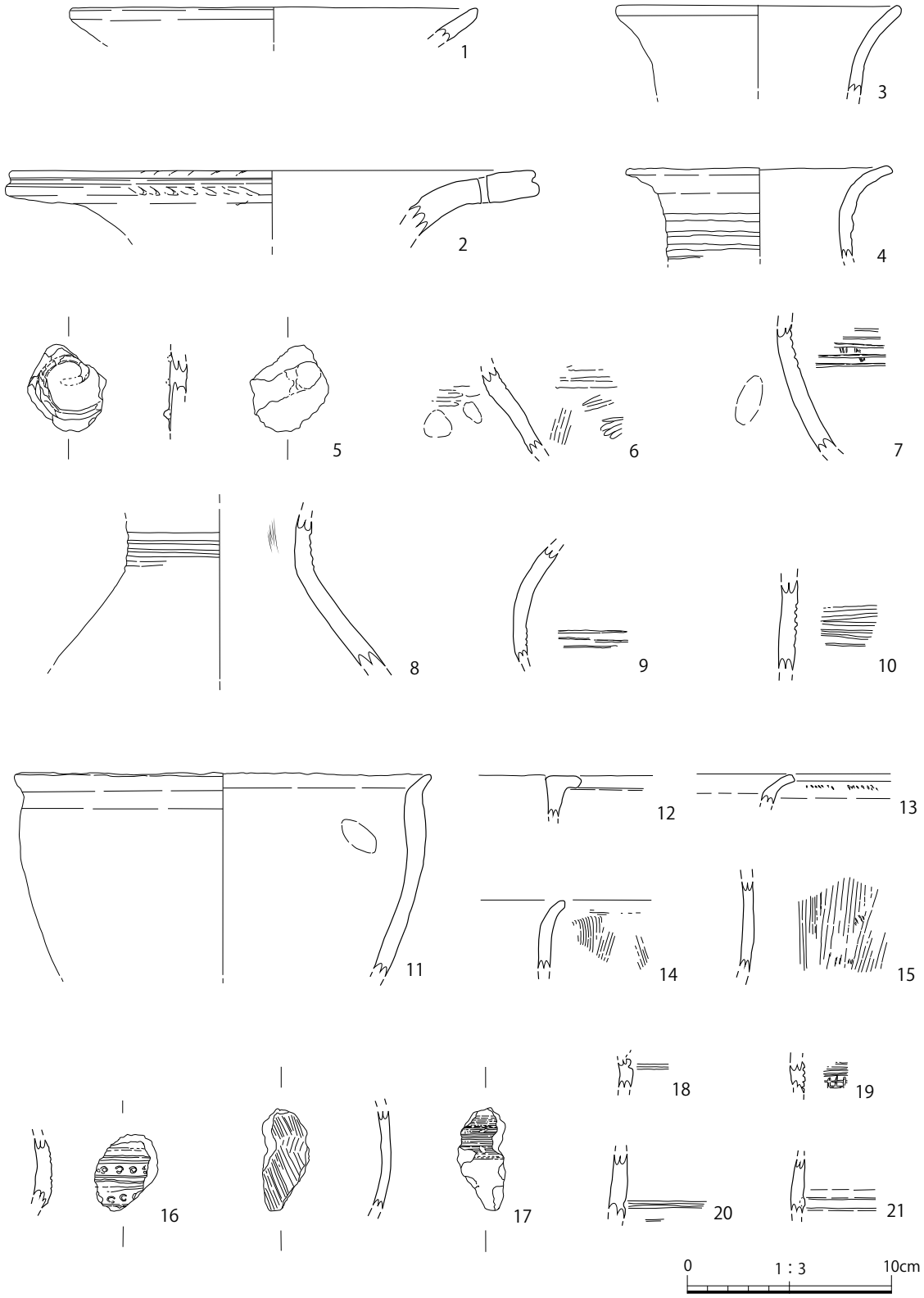


図 14　　SD01 出土遺物実測図 (1)

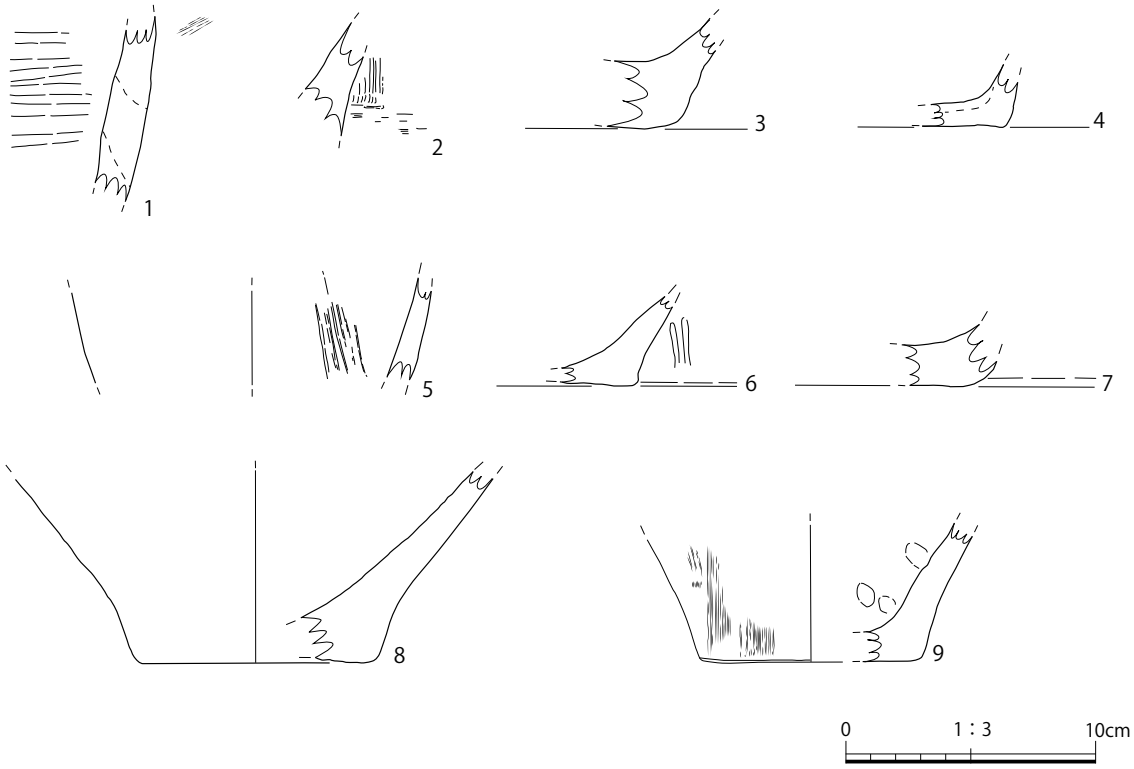


図 15　SD01 出土遺物実測図 (2)

図 15 － 1 は弥生土器壺または甕の胴部である。器厚が 1.6㎝と厚手の作りをしており、底部に近い部位と考えられる。内面に横ミガキ調整を施す。胎土に長石･石英を多く含む。2 は甕の底部である。外面にハケ目調整を施した後､底部付近を強くヨコナデする。3､4､6 ～ 9 は甕または壺の底部である。いずれも色調は赤褐色または黄褐色を呈し、胎土に長石・石英を多く含む。5 は胴部である。内面にハケ目調整を施す。8 は底径 9㎝を測る。内外面摩耗が著しく調整不明である。9 は底径 8.8㎝を測り、外面にタテハケ目調整を施す。内面に指頭圧痕を残す。

石器　図 16 － 1 は黒曜石製の石鏃未完成品である。凸基式と考えられる。表面上方向からの剥離がステップ状となっているため、下部は最大 0.8cm 程度の厚みがあり、左下の側面には自然面を残している。両面とも比較的粗い押圧剥離を施し成形しており、表面の加工が新しい。裏面上部には素材剥片の主要剥離面を残す。表面右下部分が折損。2 は二次加工剥片である。不純物の混ざりが少なく、黄土色の良質な玉髄を使用する。やや厚手で大きめな剥片の末端と上端を表面側から折り取り、台形状を呈する。表裏面の上部に二次加工が認められる。3 は黒曜石製の剥片である。表面は左半分に自然面を残し、これを打面とした剥離が行われた後、上下方向からの剥離が認められる。残核の打面再生剥片と考えられる。主要剥離面はバルブが発達せず、リングも不規則で密集しており、両極剥離のように分割された剥片である。4 は石包丁である。節理に沿うように分割された板状の頁岩を使用する。表裏面には研磨による擦痕が残る。表面上部から右半分と左下が折損。5 は磨製石斧の破片である。塩基性片岩製で､表面の一部のみに摩耗痕が残る。6 は敲石と考えられる。淡黄色の流紋岩製で、上部は折損もしくは切断されている。

図 17 － 1 ～ 3 はつぶて石と考えられる。1 は細粒花崗岩、2 は流紋岩、3 は安山岩である。

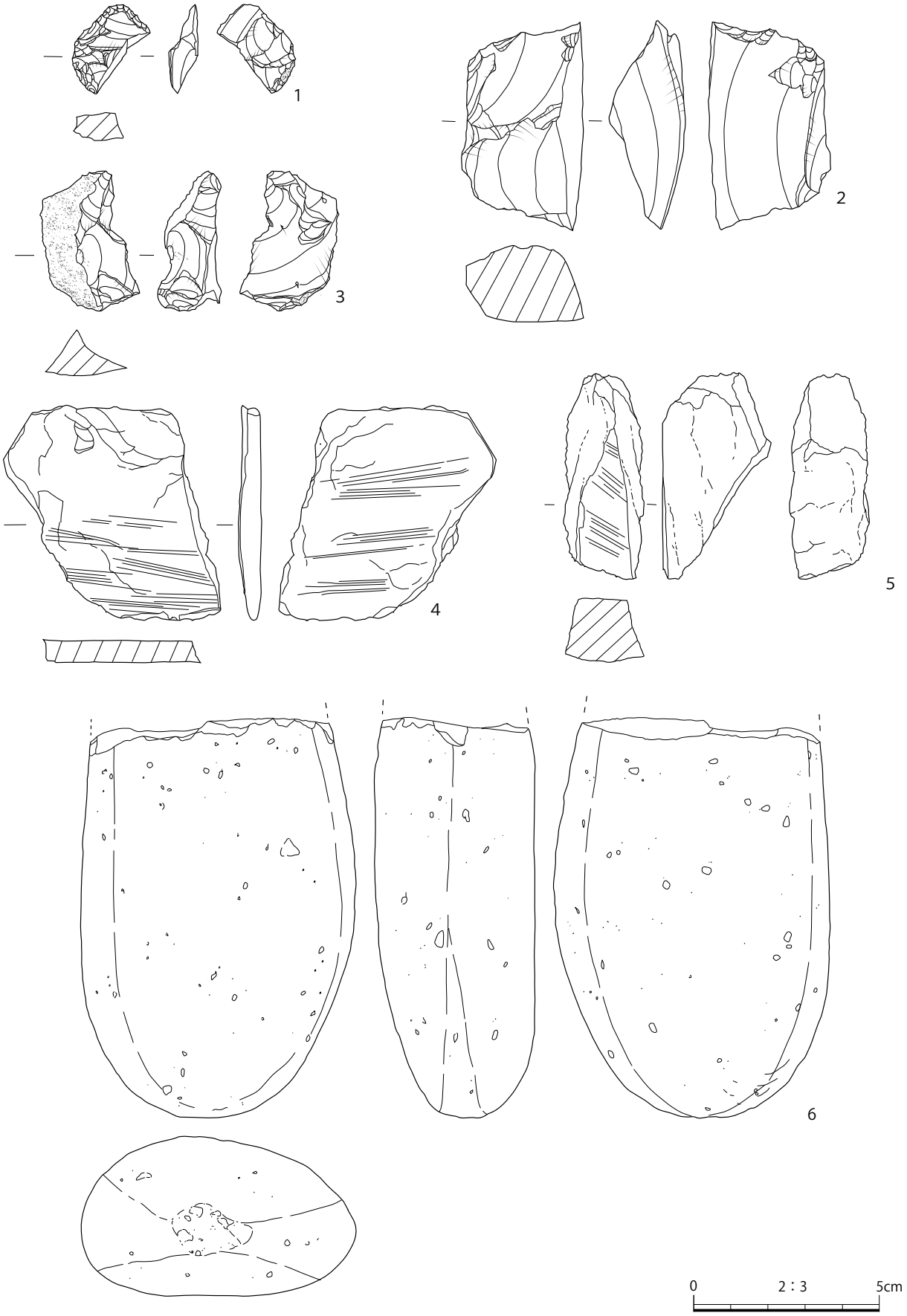


図 16　　SD01 出土遺物実測図 (3)

以上、SD01 の出土遺物を概観すると、土器の器種は壺と甕があり、壺には頸部に沈線を３条～６条施すものが多くみられ、このほか貼付突帯のものもみられる。総じて松本編年Ⅰ－４様式に収まるものと考えられるが、１点櫛描文の可能性があるもの（図 14 － 17）が見られることから、松本編年Ⅱ様式の要素も含むものと思われる。石器は石包丁や磨製石斧といった製品が出土するほか、石鏃の未完成品が出土する。

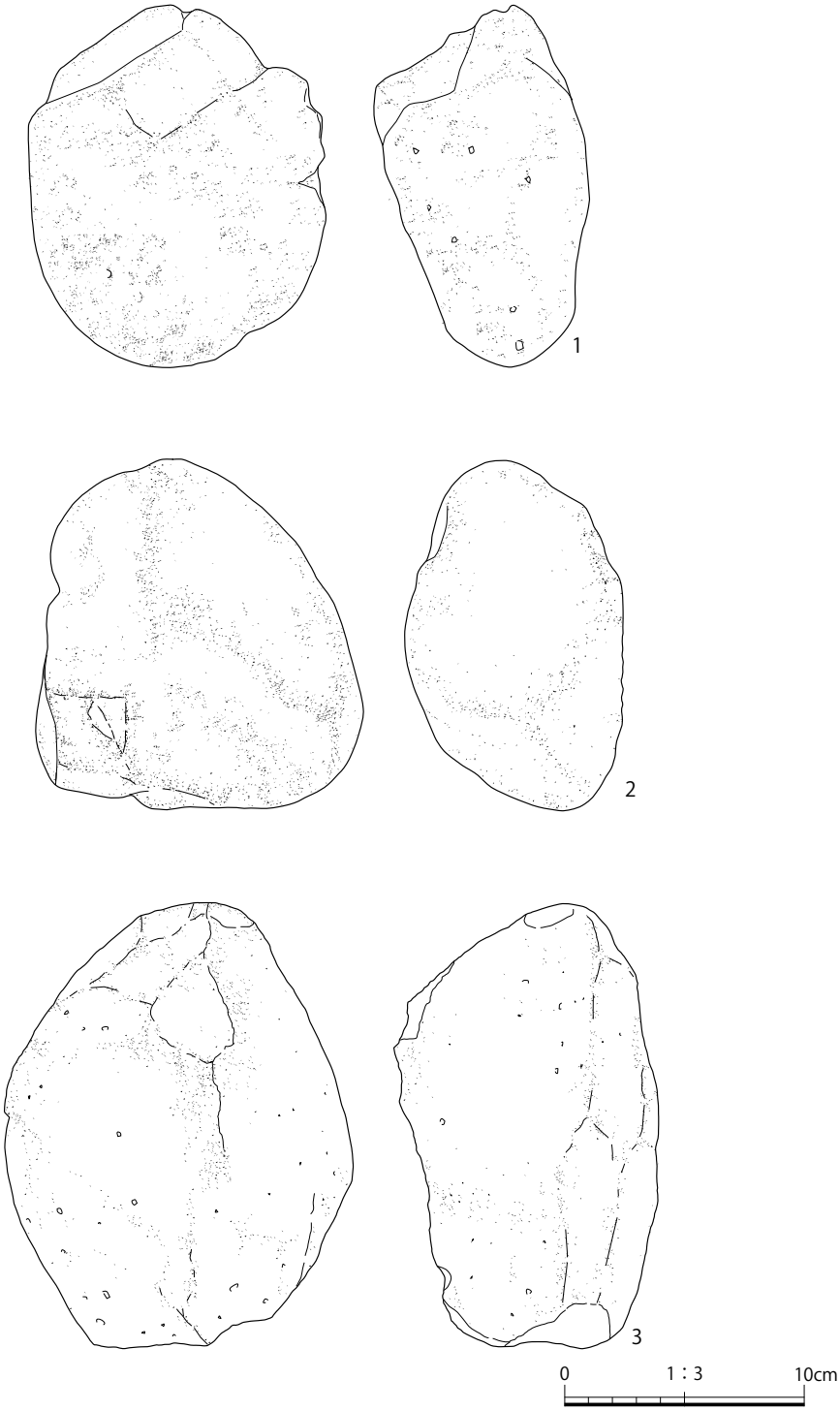


図 17　SD01 出土遺物実測図 (4)

(2)T2（SD02）(図 18)

遺跡の南斜面に設定した調査区である。調査区の南側は北より一段下がっており耕作地となっている。後世の削平を受けている。L=20.8m ～ 19.7 mで地山を検出し、調査区北側で SD02 を検出した。調査区の規模は東西 1.5m ×南北 6m で、面積は 9㎡である。

SD02

①遺構の概要

トレンチ北側にて検出した遺構である。当初は加工段と想定し調査を実施したが、埋土 (②層) が他調査区検出の環壕埋土（SD01、SD45、SD48 ）と近似することから、丘陵南側の環壕の底面を捉えたものと考えられる。

②出土遺物

埋土より弥生土器が 1 点出土する。小片のため図化はできないが、胎土が粗く、長石、石英を多く含むことから弥生前期に相当するものと考えられる。

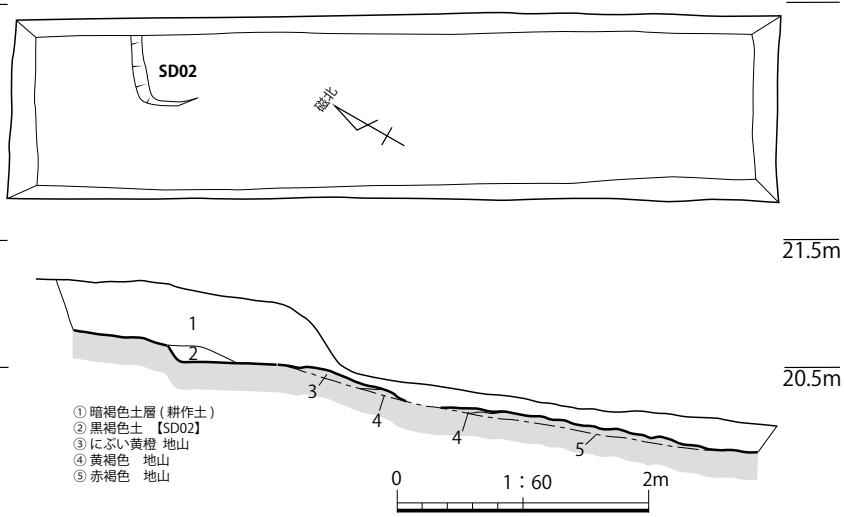


図 18　　T2 平面・土層図

(3)T5、T17（SD48）(図 19)

丘陵頂部東側の調査区である。第 1 次調査 T5 にて、柱穴 5 基、土坑 1 基を検出した。土坑より黒曜石チップが多量に出土したことから、当遺構は黒曜石片の集石遺構と判断し、周辺の遺構の分布を詳細に把握することを目的として第 4 次調査 T17 にて再調査を実施した。調査区の規模は T5 が東西 1.5m ×南北 6m で面積 9㎡、T17 が東西 9.9m ×南北 8.8m で面積 76.7㎡である。

T17 では表層の耕作土を除去すると直下に地山を検出した。T5 検出遺構を再検出し、その他南北溝 SD48、SD71、竪穴建物 SI50 を検出した。このうち SD48 は弥生前期の環壕と思われる。ここでは SD48 について述べる。SI50、SK06、SP24 ～ 26 については同節第 2 項、SD71 については第 3 節第 2 項にて詳述する。

SD48

①遺構の概要（図 20）

T17 調査区東側で検出した南北に伸びる壕である。弥生前期の環壕と思われる。西へやや内湾する。検出範囲で全長 8.4m、上幅 1.2m を測る。断面形は V 字形で、遺構の深さは 0.72m、底面の標高は 21.74m である。北半で SI50 と切り合っており、切り合い関係から SD48 が古い。壕の埋土は 5 層

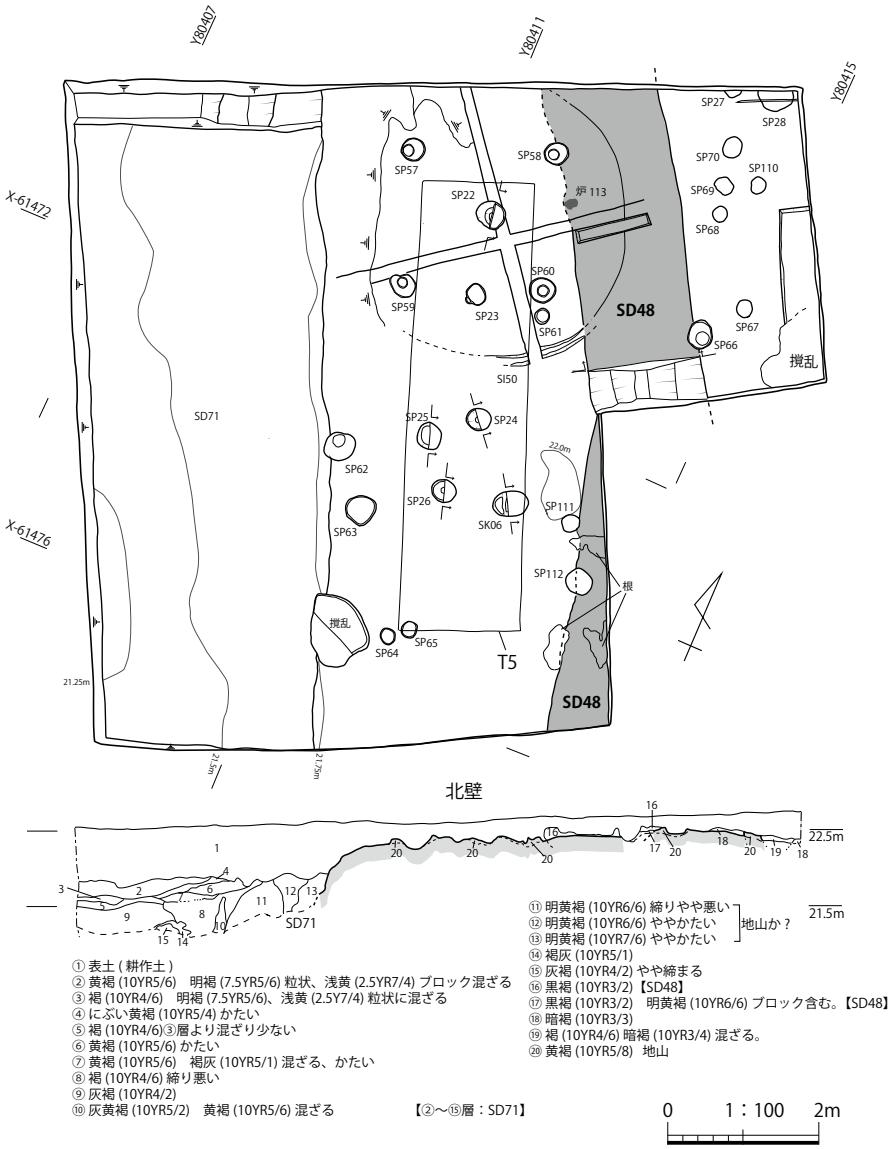


図 19　T17 平面・土層図

に分けられ、層位の状況から掘り直しは認められない。図 20 － ②～⑤層から弥生前期末の土器が出土しており、最下層の⑥層からは出土していない。また、④層は黒褐色の色調を呈し、焼土を含むものであった。堆積の起因については不明であるが、弥生前期末の土器が出土しているためその頃のものと考えられる。SD48 の検出地点は西側調査区 T14 の SD45 検出地点（後述）より東へ 47m の地点である。このことから、環壕の東西規模は 47m と判断される。埋土の水洗を行ったところ、黒曜石チップ、炭化米が出土した。SD48 の土層断面から採取した炭片と、炭化米の年代測定分析を実施したところ②層で較正年代 776 － 544calBC(2 σ)（炭片）、④層で較正年代 360 － 173calBC(2 σ)（炭片）、⑤層で較正年代 513 － 391calBC(2 σ)（炭片）、374 － 198calBC(2 σ)（炭化米）の数値が得られている（第 5 章第 1 節詳述）。なお、図 20 の A － A' 断面は土層剥ぎ取りを実施し保管している (註 2)。

②出土遺物（図 21）

1 は弥生土器壺の口縁部である。口縁端部に面をもち、内外面に横ミガキ調整を施す。2、3 は甕又は壺の底部である。2 は底径 8㎝（復元）、3 は底径 11.7cm（復元）を測る。いずれも摩耗が著し

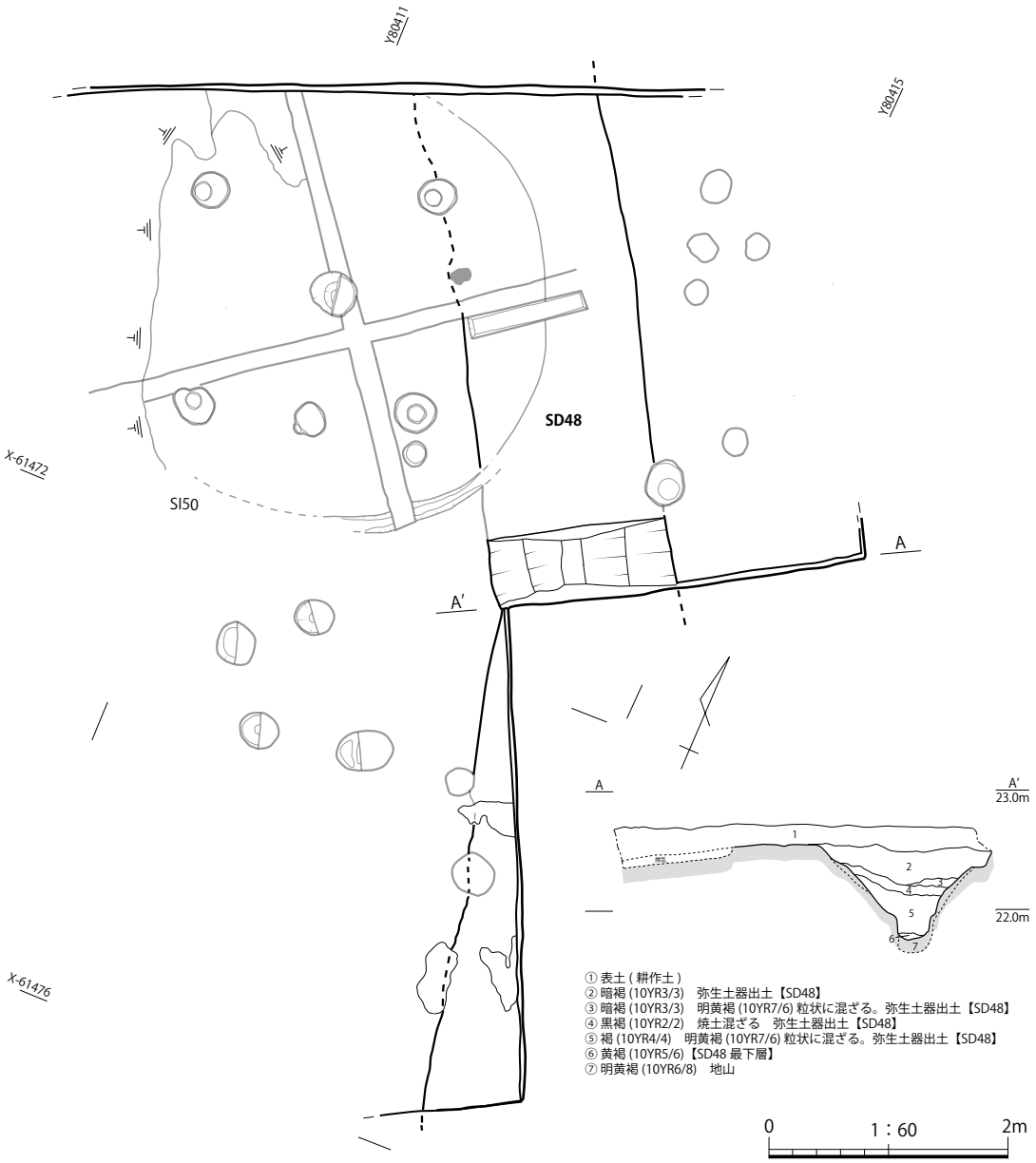


図 20　SD48 平面・土層断面図

く調整は不明である。胎土は粗く長石・石英を多く含む。いずれも弥生前期と思われる。

その他弥生土器の細片が多く出土しており、いずれも胎土が粗く、弥生時代前期の土器の特徴を有するものであった。埋土や環壕の形状が他の環壕と似ており、当遺構も弥生時代前期末頃の壕と判断される。

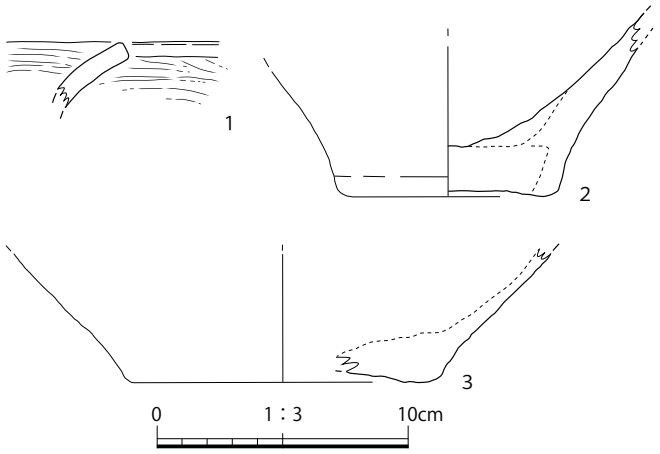


図 21　SD48 出土遺物実測図

(4)T8（SD35）(図 22)

T1 の東隣に設定した調査区である。環壕 (SD01) の延長部を検出することを目的とし調査を実施した。調査区の規模は東西 1.5m ×南北 5.7m で、面積は 8.55 ㎡である。L=21.8m ～ 21.6m で地山を検出し、地山に掘りこまれた壕（SD35）を検出した。

SD35

①遺構の概要

トレンチの中央で東西にのびる壕である。上幅は 1.6 m、深さ 60㎝を測る。SD01 の延長部と思われる。SD01 と比較すると 0.2 m幅広である。底面の標高は 21.2m である。埋土は暗褐色の色調を呈するものであり、上層に掘り直しと思われる土層 (④⑤層) がみられるが、壕の掘り直しか判然としない。断面形は U 字形であり、底面にやや平坦な面をもつ。表土層から弥生時代後期の土器が出土しており、SD35 埋土から遺物は出土していない。壕に伴う遺物がみられないが、SD01 の延長部としておよそ齟齬のない地点で検出しており、環壕の一端を捉えたものと考えたい。

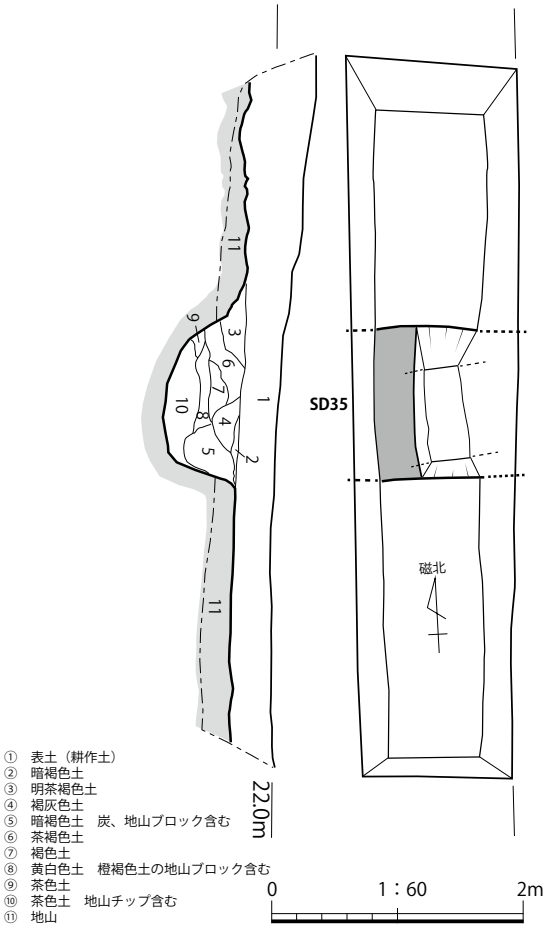


図 22　T8 平面・土層図

②出土遺物（図 23）

図 23 － 1 は弥生土器甕の口縁部である。表土 (図 22 － ①層) より出土する。口径 16.9 ㎝（復元）を測る。外面にわずかに擬凹線文が確認できる。松本編年Ⅴ － 2 様式、草田 2 期に相当するものか。

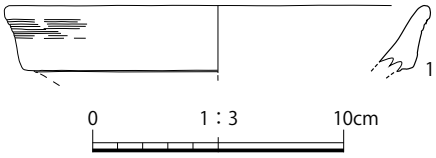


図 23　T8 表土出土遺物実測図

(5)T14（SD45）(図 24)

T1 より北西へ約 30 mの地点に設定した調査区である。丘陵頂部西端の平坦部に設定しており、L=22.6m ～ 22.2m の地点で西へ緩やかに傾斜する地山面を検出した。地山面に掘りこまれた壕 SD45 を検出した。調査区の規模は東西 6m ×南北 1.5m で、面積は 9㎡である。

SD45

①遺構の概要

西に向けて緩やかに傾斜する地山を基盤とし、調査区を南北に伸びる壕 SD45 を検出した。断面形はＶ字形を呈し、規模は上幅 2.0 m、深さ 0.75 m、検出範囲での全長は 1.1 mである。底面の標高は 21.7 mを測る。埋土は黒色土を基本とし炭化物を多く含むものであった。上層（③～⑦層）では

土器の細片が出土しており、下層（⑧～⑩層）では比較的残存状態の良い土器が出土している。この他石器、礫石も出土した。土層断面の観察から掘り直しの痕跡は見られず、土盛の痕跡も壕の上面が削平されていることから確認することはできなかった。先述の SD01 から北に伸びた環壕の一端を捉えたものと考えられ、T17 検出の SD48 を環壕の東端の壕、本遺構を西端の壕と考えると、壕で囲繞された東西の規模は 47m を測る。

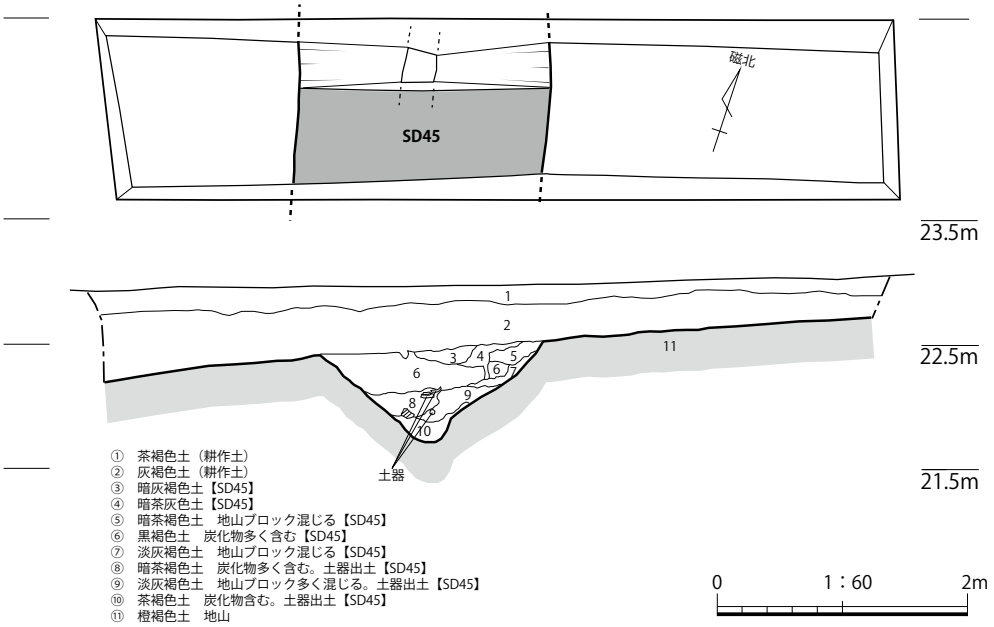


図 24　　T14 平面・土層図

②出土遺物（図 25 ～ 27）

土器　図 25 － 1 ～ 3 は弥生土器壺の頸部である。1、2 は頸部外面に貼付突帯を巡らせるもので、突帯を貼り付けた後、突帯上に 2 条の沈線を施し 3 分割の突帯とする。3 は頸部に沈線を 4 条施す。4 ～ 6 は壺の胴部である。4、5 は貼付突帯を巡らせる。4 は突帯上に沈線 3 条を施す。5 は突帯を 1 条貼り付ける。6 は胴部外面に沈線を 4 条以上施す。7 は弥生土器甕の口縁部である。口縁を強く外反させ端部を丸く収める。8 は壺又は甕の口縁端部である。端部は面をもち刻目を施す。9 ～ 11 は弥生土器底部である。9 は外面に横方向ヘラミガキ調整を施す。壺の底部と思われる。底径 6.25cm を測る。底部から胴部にかけて黒斑がみられる。10、11 は摩耗が著しく調整が不明瞭である。胎土から弥生前期のものと思われる。以上、施文は貼付突帯を施文するものと、ヘラ描沈線を施文するものがみられる。一様に胎土が粗く、松本編年Ｉ － 4 様式に相当すると考えられる。

石器　図 26 － 1 はメノウ製の残核である。素材となった剥片の主要剥離面が裏面上部で、これを打面として小形不定形な剥片を数枚剥離している。剥片剥離作業面は表面と右側面である。左側面の一部に自然面が残る。

図 27 － 1、2 はつぶて石と考えられる。1 は安山岩、2 は玄武岩である。

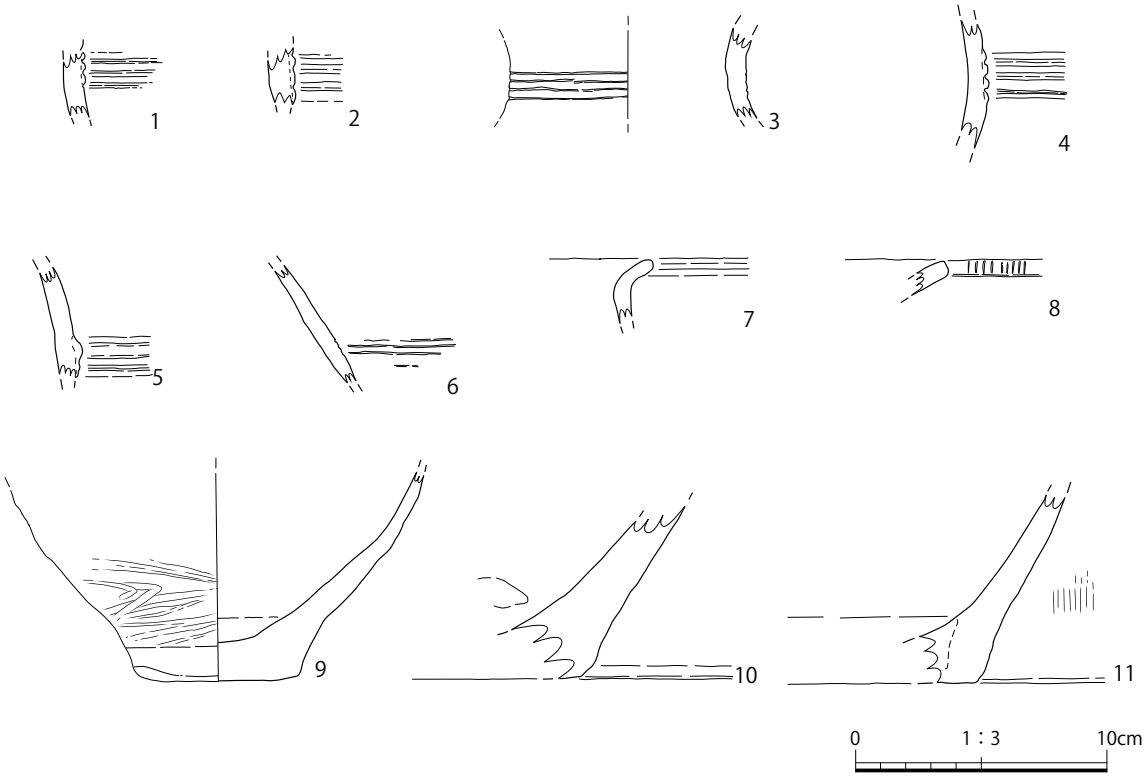


図 25　SD45 出土遺物実測図 (1)

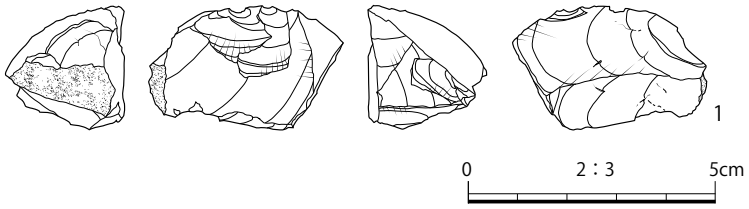


図 26　SD45 出土遺物実測図 (2)

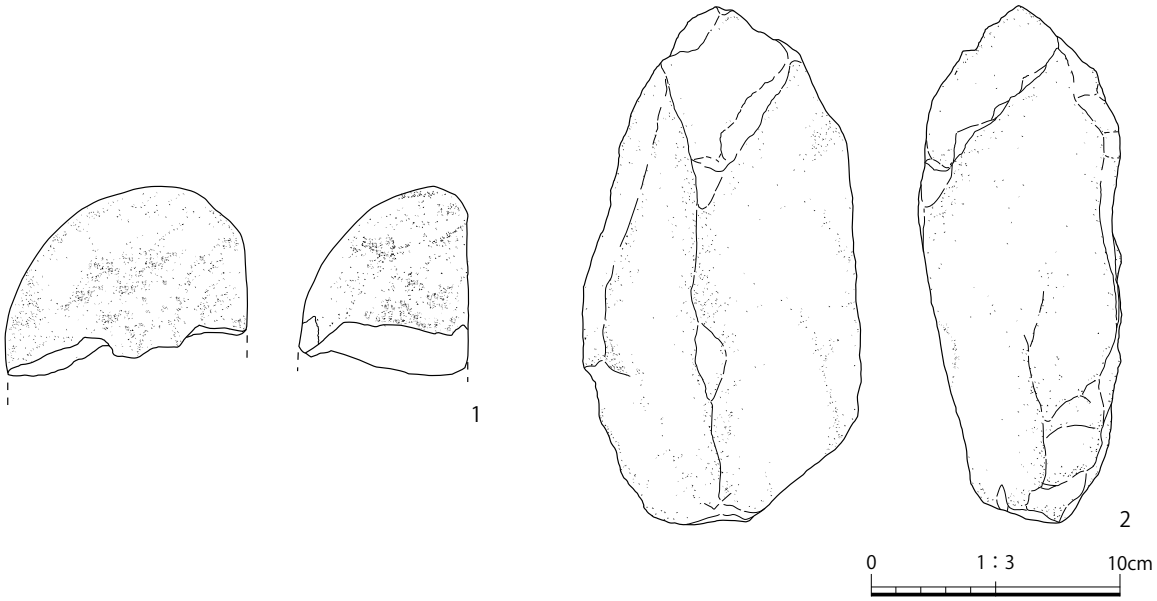


図 27　SD45 出土遺物実測図 (3)

(6)T20（SD115）（図 28）

丘陵北西部の平坦面に設定した調査区である。北側の環壕の有無を明らかにするために調査を実施した。調査の結果、L=22.6 ～ 21.6m で北にむかい緩やかに傾斜する地山を確認し、地山に掘りこまれた壕 SD115 を検出した。調査区の面積は 24.4㎡である。

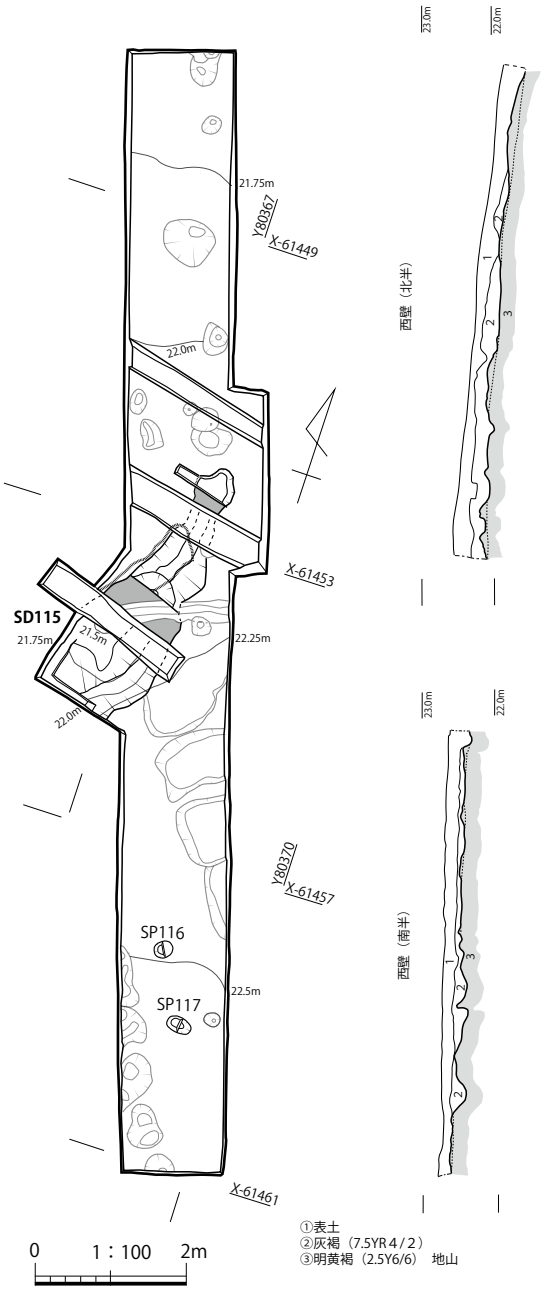


図 28　T20 平面・土層図

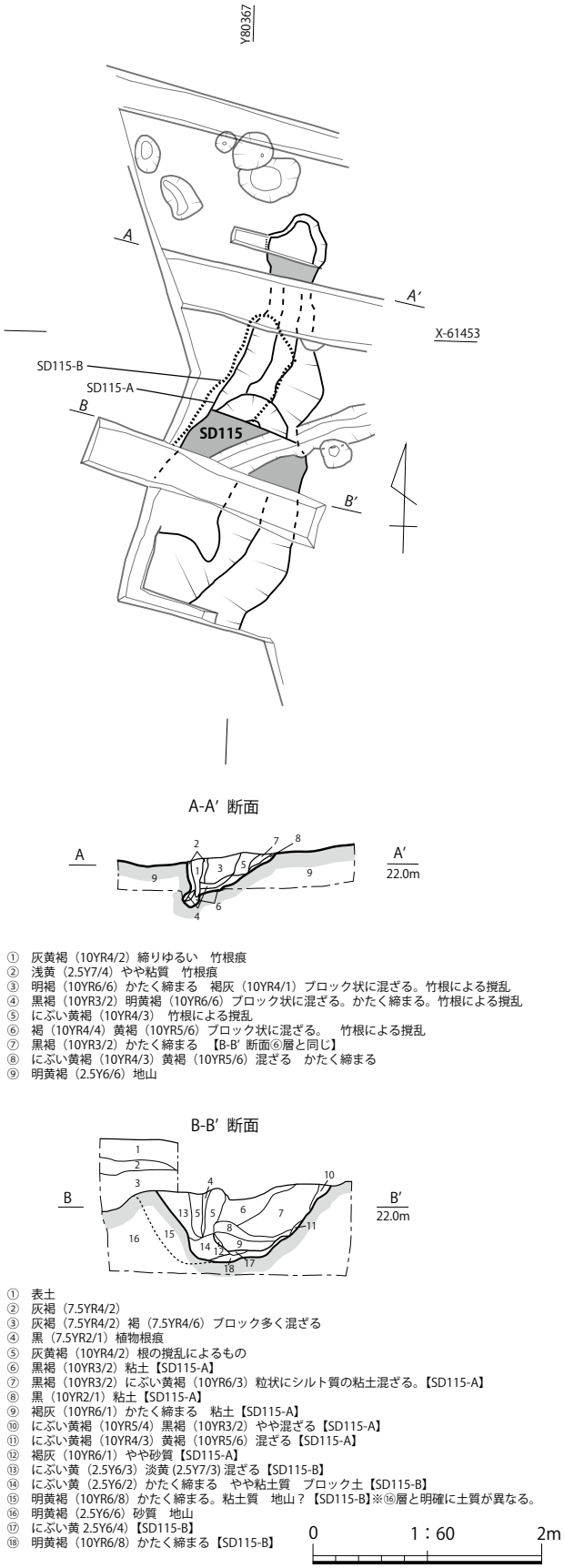


図 29　SD115 平面・土層断面図

SD115

①遺構の概要（図 29）

調査区の中央にて検出した南北に伸びる壕である。上幅 1.4 m、全長 3.5 mを測る。北端にて調査区東壁より 40㎝の地点で壕が途切れる。遺構内を掘削したところ、断面形はＵ字形であり、底面が凹凸しながら北に向かって高くなる。土層の観察から２時期の壕が存在すると考えられ、新しい壕を SD115-A、古い壕を SD115-B とする。

SD115-A の堆積土は図 29 － ⑥～⑫層である（B-B' 断面）。最上層に黒褐色土の堆積を確認し（⑥層）、にぶい黄褐色土が混入する層が下層に堆積する（⑦層）。⑥⑦層から石器剥片が出土する。⑦層の下に黒色土 (⑧層) が薄く堆積し、最下層に褐灰色土 (⑨層) が堆積する。⑨層の下面には鉄分の薄い堆積が検出されており、水の浸食作用によるものと考えられる。

SD115-B の堆積土は図 29 － ⑬～⑮、⑰⑱層である (B-B' 断面)。⑬層は淡黄色の色調を呈し、やや白い。SD115-A 埋土を掘削した後、平面にて⑬層が堆積するプランを確認しており、SD115-B の平面検出面と捉えられる。⑭⑮⑰層はいずれも黄色土系の色調を呈し非常に硬く締まる堆積土である。やや粘土を含む。⑯層はやや砂混じりの土であり地山と考えられる。本丘陵の地山は三瓶木次火山灰由来のものであり、SD115-B の堆積土は地山と類似する色調を呈するものであるが、砂粒が少なく、やや粘土質の土質であることから地山とは異なる性格のものと考えられる。掘削された後比較的早い段階で埋没したものと想定される。

本遺構は環壕の北側の途切れ部を捉えており、環壕の内部と外部をつなげる出入り口が存在した可能性が考えられる。環壕の南端を捉えている T2 の SD02 の地点から計測すると環壕の南北の規模は 67m である。

出土遺物は SD115-A ⑥⑦層より出土した石器剥片・残核があり、土器は出土していない。石器は玉髄が多くみられ、碧玉の剥片も出土している。

また、本遺構については B-B' 断面周辺で深い落ち込みを検出しており、渡辺正巳氏の見解によれば風倒木痕とされる (第 5 章第 1 節詳述)。SD115-A ⑦⑧層にて炭片を採取し、炭化物年代測定及び花粉分析を実施したところ、⑦層で較正年代 3326 － 2931calBC(2 σ)、⑧層で較正年代 4228 － 3985calBC(2 σ) の数値が得られている。この数値は縄文前期～中期の年代を示す。この結果や石器の特徴から古い風倒木痕に重なって環壕が掘られた可能性もある。その場合は図 29 － ⑥層 (B-B' 断面) が環壕埋土となる。

②出土遺物（図 30）

図 30 － 1 は二次加工のある剥片である。良質な碧玉を使用している。主要剥離面はバルブが発達せず不規則な割れ方をしている。打面は単剥離面でパンチ痕が残る。表裏面の一部に二次加工を施す。２～４は剥片である。２は玉髄製でやや厚手の剥片である。表面と右側面に先行する剥片剥離が認められる。表面の中央部分は自然面が残る。打面には細かな剥離があり、調整打面である。３も玉髄製でやや厚手の剥片である。表面は対方向からの剥片剥離が認められる。主要剥離面はリップ、バルブともに発達する。打面は単剥離面でパンチ痕が残る。4 はメノウ製である。表面は垂直方向の剥片剥

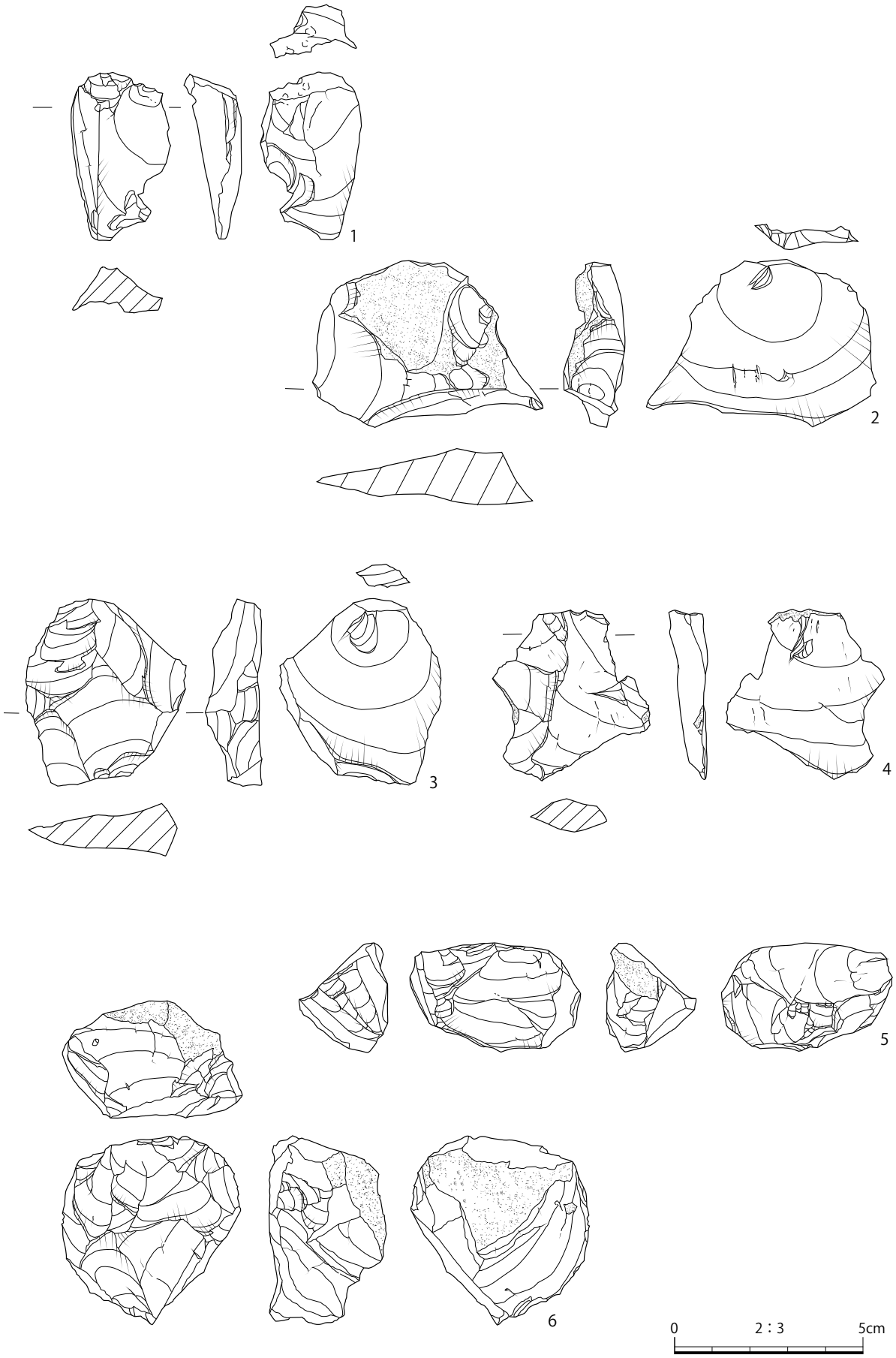


図 30　　SD115 出土遺物実測図

離がみとめられる。自然面を打面としており、側面の一部にも自然面が残る。5、6 は玉髄製の残核である。5 は厚手の剥片を素材としており、裏面上部が素材の主要剥離面である。比較的小形の剥片を連続的に剥離している。右側面の一部に自然面を残す。6 は剥離方向に定まったものはなく、不定形な剥片を数枚剥離している。裏面に残る自然面は一部が結晶化している。

SD115 出土の石器については、玉髄やメノウ、碧玉といった石材が集中している。石器に使用されたこれらの石材は、不純物の混じりが少なく良質なものであり、選択的な石器石材の獲得が行われていたことが伺える。さらに剥片類の打面をみると平坦な剥離面を持つものが多く、調整打面を持つものも一部認められ（図 30 － 2)、主要剥離面にはバルブやバルバスカーがよく発達している点で特徴的である。一見すると玉類製作の可能性を想起させるような石材構成だが、玉類製作工程上で原石を分割し整形していく荒割段階や形割段階というよりは、先に述べた技術的な特徴や明確な打撃痕跡を有することから、連続的に剥片を量産していき石器製作に利用するような、旧石器～弥生時代の石器という印象である。定形的な製作石器が出土していないため、明確な時代や時期を議論することは難しいが、玉作遺跡である可能性は低いことを指摘しておく。

2．環壕内部の調査（図 31）

(1)T7、T16（SI49、柱穴群）(図 32)

丘陵頂上部中央の平坦部に設定した調査区である。T7 にて竪穴建物の南東部を検出しており、遺構の全体検出を目的とし T16 を再設定し調査を実施した。調査区の規模は T7 が東西 1.5 m×南北 2.2m で 3.3㎡、T16 が東西 9m ×南北 9m で 81㎡である。調査区中央で竪穴建物 SI49 を検出し、周辺に小規模な柱穴、ピットを 27 基検出した。

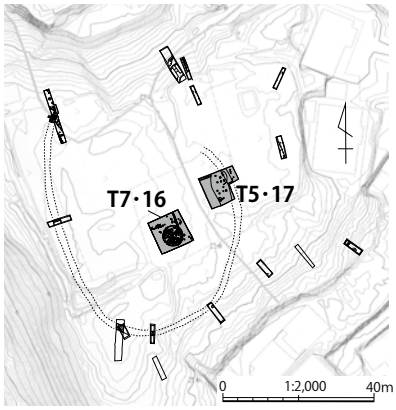


図 31　　トレンチ位置図

SI49

①遺構の概要 (図 32・33)

T16 調査区中央で検出された竪穴建物である。遺構は地山面に掘りこまれており、形状は円形を呈する。最大径は 5.6 m、床面までの深さは 15㎝を測り後世の削平を著しく受けている。遺構検出面において埋土に炭化物や焼土が多く含む様子が確認でき、遺構内を掘り下げたところ北から南にかけて多量の焼土塊が堆積していた。これらの焼土塊は赤褐色～黄橙色の色調を呈し非常に硬く締まった土質であった。また、この焼土塊が上に堆積した状態で、建物の垂木材と思われる炭化材が中心から放射状に横倒しになった状態が検出された。さらに、垂木材・焼土塊直下に炭化物が薄く堆積する範囲が建物の西側、南東側でみられた（図 33 - ③層)。これらの焼土塊・炭化した垂木材・炭化物層の広がりから、当遺構は焼失により廃絶されたものと判断される。加えて、垂木材の上に多量の焼土塊が覆い被さるように堆積していた点から、本建物の屋根は土屋根であった可能性が考えられ、焼失により崩落したものと想定される。

畔を残し建物床面を検出したところ、50㎝程度の間隔をあけ、幅約 10㎝の壁際溝が 2 本全周す

る様子が確認できた。壁際溝が２重に廻っていることから本遺構は建物の拡張が１度行われているものと想定される。また、中央ピット（SP31）、主柱穴４基（SP29・SP32・SP75・SP76）を検出した。中央ピットは最大径 1.3 m で床面からの深さは 0.3 m である。最下層に焼土が堆積しており（図 33 ⁻⑲層）、本層は建物が焼失したことにより堆積した層と考えられる。主柱穴４基はいずれも検出面にて埋土に焼土が多量に混入しており、中央ピットと同様に焼失により埋没したものと想定される。主柱穴のうち SP76 を断ち割ったところ、柱穴の深さは 55㎝で柱痕跡埋土に焼土が多量に混入していた（図 33 ⁻⑤層）。建物が１度拡張されている点を踏まえると、本遺構の中央ピット、主柱穴は２時期に対応するほどの遺構が検出されていない。このことから拡張前後の中央ピットと主柱穴が各々重複し切り合っていると考えられる。しかしいずれの遺構も畦内の一部が入り込んでおり、遺構の保護・将来の検証を考慮して、今回の調査での畔・焼土塊の除去、中央ピット・主柱穴の全プランを把握することは行わなかった。

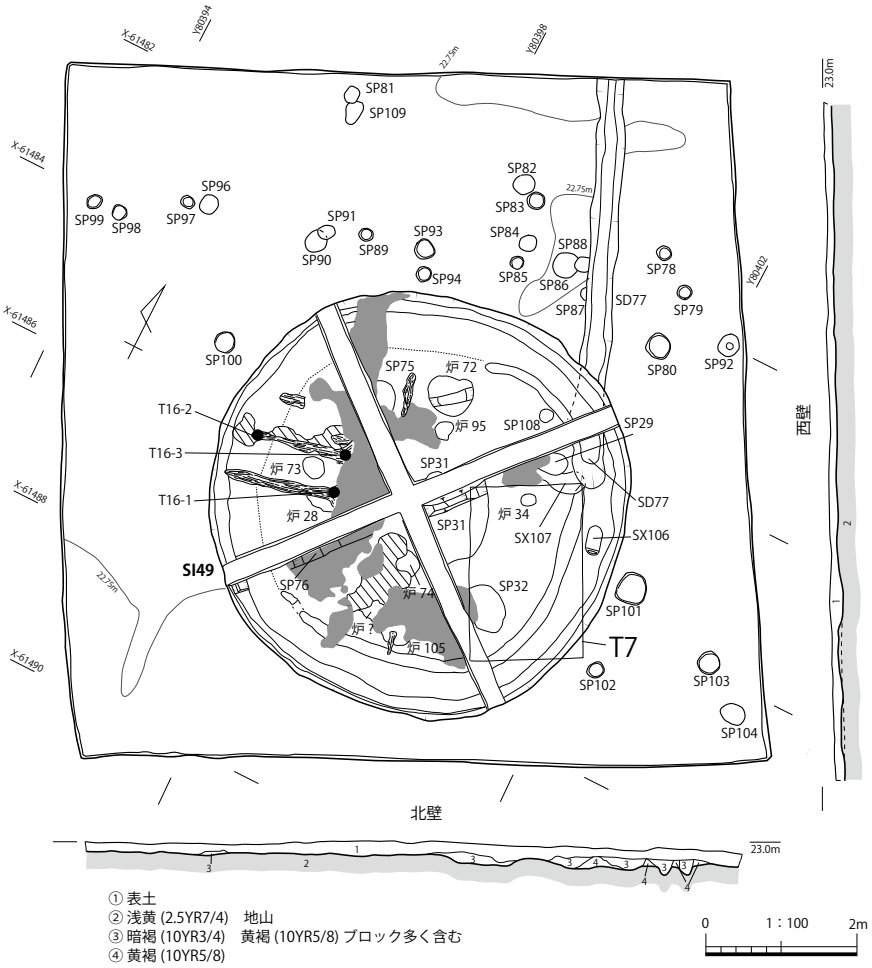


図 32　T16 平面・土層図

本遺構では、炉跡を複数箇所で検出している（炉 28、34、72 ～ 74、95、105）。このうち、炉 28、炉 34、炉 73、炉 95、炉 105 は赤橙色を呈し直径 20 ～ 40㎝程度であったのに対し、炉 72、炉 74 は最大径 60㎝程度で赤褐色の色調を呈し、非常に硬質な土質であった。このように、１棟の建物跡で多数の炉跡が検出される場合、通常の煮炊による炉の他に、鍛冶炉としての性格が想定される。全プランを検出している炉 72 は最大径 60㎝の不整円形の形状を呈し、一部断ち割りを行ったところ床面から 5㎝程度の範囲が赤褐色系の色調で熱を受けていることがわかった。炉の底面に炭化物層の堆積はみられなかった。鍛冶製作遺構を多数検出している五斗長垣内遺跡（兵庫県淡路市）の事例を見ると、鍛冶炉は非常に高温で被熱されたことにより炉の中心が白～黄色に変色し、縁辺部にむかって同心円状に赤色の色調を呈するようである（淡路市教育委

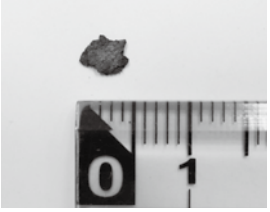


写真７　SI49 出土鉄片

写真８　SI49 出土炭化米

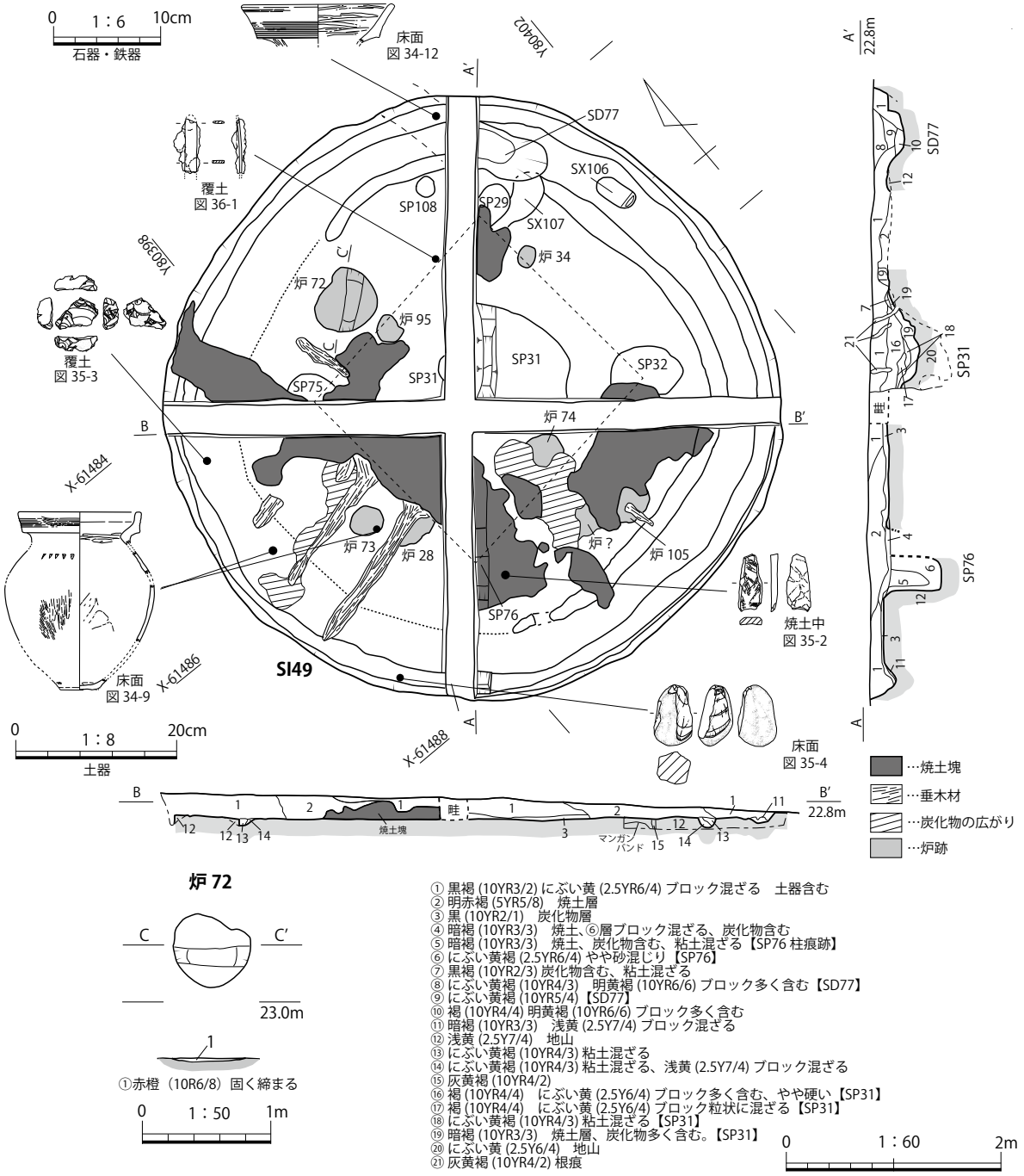


図 33　SI49 平面・土層断面図

員会 2011）。更に、1 つの鍛冶炉で複数回の操業を行うと、燃焼部の重複が生じることから不整円形の平面形となるようである。今回検出した炉 72 は、不整円形であるという特徴は五斗長垣内遺跡の事例と共通するが、白～黄色部を核とする色調の変化を確認することはできなかった。これらのような鍛冶炉については村上恭通氏により分類がされており、炉 72 を鍛冶炉と想定するのであれば村上分類Ⅳ類に該当すると考えられる（村上 1998、2000）。Ⅳ類鍛冶炉は「床面に直接炭を盛り上げ、火床を作った簡単な鍛冶炉」とされており簡略化された炉とされる（村上 2000）。島根県内で鍛冶製作遺構が検出された遺跡としては、上野Ⅱ遺跡（松江市所在、弥生後期後葉）、柳遺跡（安来市所在、弥生後期後葉）、平田遺跡（雲南市所在、古墳初頭）などがあげられ、このうちⅣ類鍛冶炉は上野Ⅱ遺跡、平田遺跡で検出されている（島根県 1998・2001、木次町 2000）。いずれも鉄片、台石など

の鍛冶具、鉄器類が出土している。神後田遺跡の本遺構では、ヤリガンナと思われる鉄器が１点出土し、炉 72 周辺の床面直上の土壌を水洗したところ磁石に反応する鉄片と思われる破片が検出されている（写真 7）。しかし台石等の鍛冶具は見つかっておらず、先述の県内の類例と比較すると鍛冶製作遺構として結論づけるにはやや根拠資料が不足している(註 3)。しかし、当遺構の覆土は約 15cm 程度と非常に浅く、台石等が存在していたとしても、すでに後世の削平で失われている可能性も考えられる。現段階では積極的に鍛冶製作遺構とするには根拠資料が少ないが、強く被熱された炉が複数検出されている事例や、鉄片が見つかっていることを勘案すると鍛冶製作遺構の可能性も十分想定されることを述べておきたい。

出土遺物は建物覆土から弥生前期末～後期前半の土器、ヤリガンナ、黒曜石の残核が出土しており、床面直上で松本編年Ｖ‐２様式、草田編年の草田２期に相当する甕、器台、水晶残核が出土している。このことから本遺構は弥生後期前半に相当する建物と考えられる。また、検出した炭化材３点の試料を採取し (図 32 T16 － １～３)、炭化物年代測定の分析を実施したところ 86 － 203calAD(2 σ)、33 － 124calAD(2 σ)、62 － 122calAD(2 σ) の数値が得られている。樹種は散孔材、広葉樹、ニッケイ（クスノキ）属であった（第５章第１節詳述）。また、床面直上埋土の水洗で炭化米が１点出土している (写真 8)。

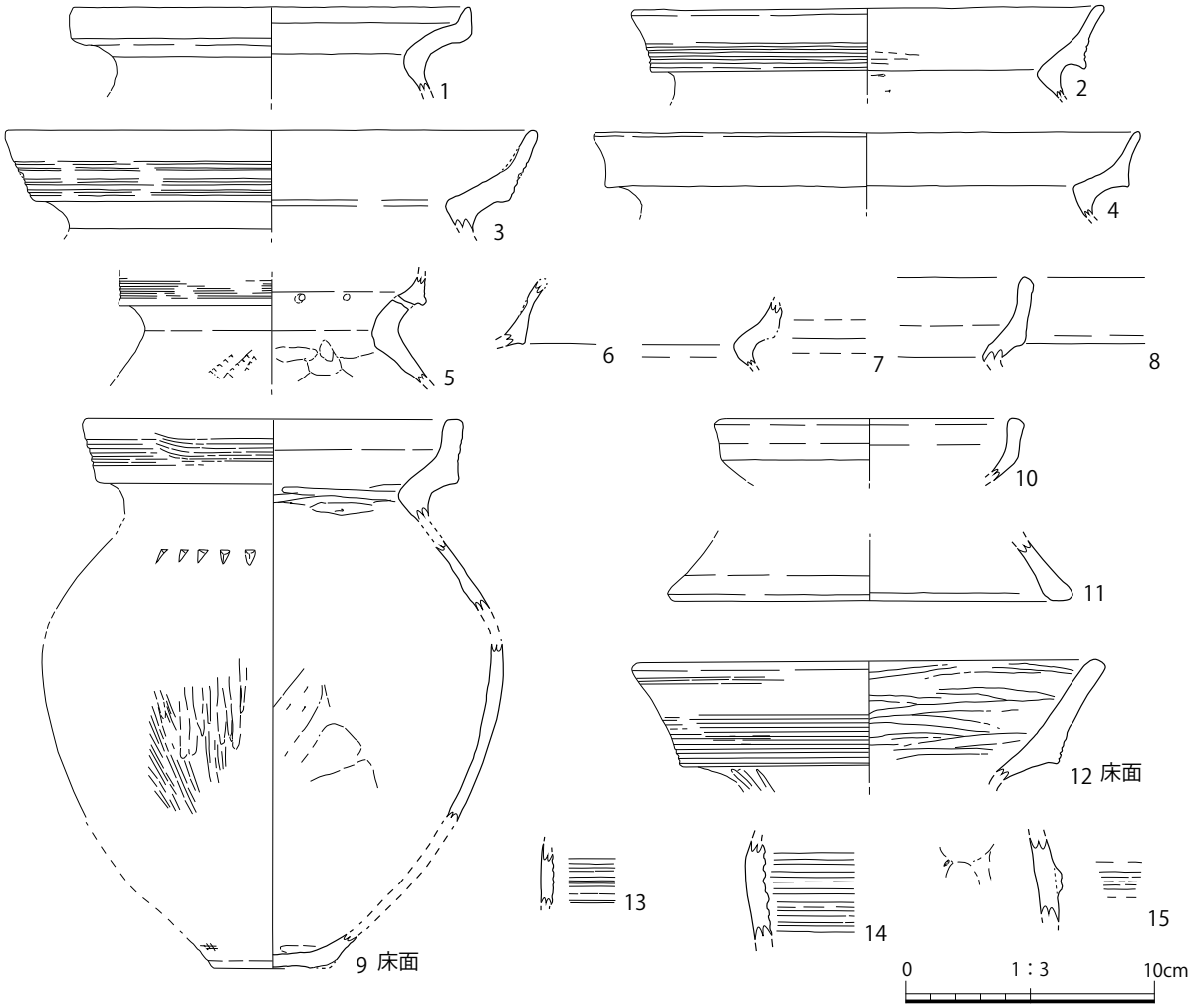


図 34　SI49 出土遺物実測図 (1)

②出土遺物（図 34 ～ 36）

土器　図 34 － 1 ～ 9 は弥生土器甕である。1 は口径 16㎝で色調は橙色を呈する。端部がくの字に屈曲し直立する。2 は口径 18.7㎝を測り、口縁部を薄く延ばし大きく外反させる。頸部外面をヨコナデし、口縁下端をやや下方に下げる。外面に擬凹線文を施す。内面にケズリ調整を施す。3 は口径 21.1㎝を測る。口縁がやや外反し、外面に擬凹線文がみられるが、摩耗し不明瞭である。4 は口径 22㎝を測り、口縁が外反する。口縁下端はやや横に伸びる。5 は甕の頸部である。色調は黄橙色を呈し、頸部から口縁部界に穿孔が 2 つ確認できる。外面に貝殻による刺突文を施し、口縁部は拡張し外面に擬凹線文を施す。頸部内面にケズリ調整を施す。6 ～ 8 はいずれも小片であるが口縁を外反させるタイプのものである。摩耗しており調整不明瞭。9 は床面直上で検出された甕である。天地逆さになった状態で検出されており、口縁から胴部にかけての破片が同地点で出土した。底部は口縁部より東へ 1m 程離れた地点で出土している。胎土から同一個体と思われる。口径は 15.1㎝を測り、器高は 22.05㎝（図上復元）である。頸部から口縁にかけて屈曲し口縁部は直立する。端部は丸く収めるが一部やや面をもつ箇所もみられる。口縁部の器厚は 8mm と厚手で、外面に擬凹線文を施し、胴部上半に三角刺突文を施す。頸部内面を横ミガキし、胴部にかけてはケズリ調整が施される。九重式と

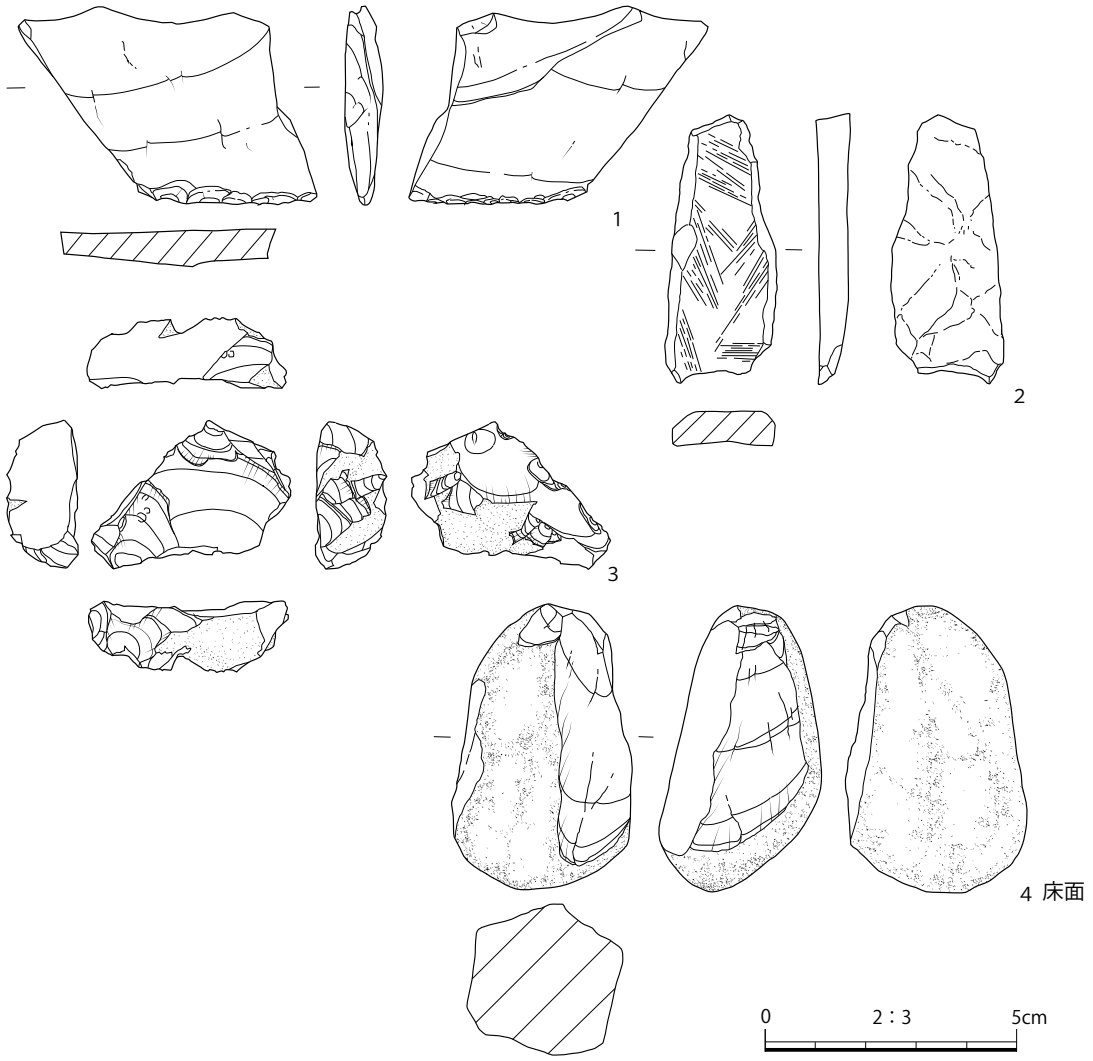


図 35　SI49 出土遺物実測図 (2)

思われ、松本編年Ⅴ－２様式、草田編年２期に相当する（赤澤 1992）。10 は高杯の口縁部である。口径は 12㎝を測り、口縁部を直立させ端部を丸く収める。11 は高杯の脚端部と思われる。全体が摩耗し調整が不明瞭であるが、端部にやや面をもつ。器台の端部の可能性も考えられる。12 は鼓形器台の受け部である。口径 19㎝を測り、口縁部の器厚は 1㎝である。口縁部外面下半から端部付近にかけて擬凹線文を施す。内面に横ミガキ調整を施す。頸部にわずかであるがタテミガキ調整がみられる。九重式と思われ、松本編年Ⅴ－２様式、草田編年２期に相当する。13 ～ 15 は弥生前期末の土器である。13、14 は壺または甕の胴部と思われ、13 はヘラ描沈線が７条以上、14 は７条以上施される。15 は外面に貼付突帯が１条施される。いずれも混入品である。

石器　図 35 －１は安山岩製のスクレイパーである。厚さ 0.7cm 程の板状剥片を素材とし、下側縁部に表裏面から二次加工を施す。左右の側面はともに表面から折り取られ、台形を呈する。２は板状石製品である。表面に摩耗痕が残る。石材は暗灰色の砂岩で、白雲母を多く含む。周縁部および裏面は折損しており原形は不明である（註 4）。3、4 は残核である。３は黒曜石製で、素材となった剥片の主要剥離面が裏面である。剥片剥離作業面は表面と下面で、小形で不定形な剥片を剥離している。表面と主要剥離面の打面（上面）にパンチ痕が残る。4 は亜角礫の水晶原石を使用し、自然面から縦長剥片を２枚、連続的に剥離している。床面より出土していることから建物に伴う遺物であると言え、弥生時代後期前半に属するとして良いだろう。なお、神後田遺跡より出土した石器で水晶はこの１点のみである。拳大ほどの亜角礫の先端部から縦長の剥片を剥離しており、この剥離面以外は全て原礫面が残っている状態である。採取場所は不明だが、周辺の河川で獲得し持ち込まれたものであろう。他の石材と異なり、ほぼ原石段階での水晶が１点だけ出土しているという特殊性から、何か特別な意味を持つものであったかもしれない。玉類製作の痕跡である可能性も想定する必要があると考える。

鉄器　図 36 －１はヤリガンナである。基部、刃部を一部欠損しており残存長が 4.8㎝を測る。刃部と基部の幅は差がなく、刃部が僅かに反る。

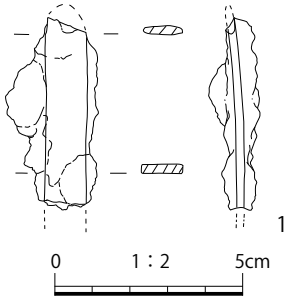


図 36　SI49 出土遺物実測図 (3)

柱穴群

①遺構の概要

SI49 の周辺で検出した柱穴群である。直径 10 ～ 20㎝程度のものが大半で、一部柱痕跡が確認できるものもある。柱の並びは復元できない。出土遺物はない。時期が不明であるため詳細なことは言えないが、先述の SI49 が大きく後世の削平を受けている点を踏まえると、建物跡であっても大部分が削平を受け柱穴のみが残存している状況を示している可能性もある。

(2)T5、T17（SI50、SK06、SP24、SP25、SP26）

調査区の詳細は「1．環壕部の調査 -（3)」に記述している。ここでは竪穴建物 SI50、土坑 SK06、柱穴 SP24 ～ 26 について詳述する。

SI50(図 37)

①遺構の概要

T17 北半で検出された竪穴建物である。平面形は円形で、遺構上部は既に削平されており、西端は床面も残存していない。推定規模は直径 3.6 mである。壁際溝の南半と中央ピット（SP22)、柱穴 5 基（SP23、SP57、SP58、SP59、SP60、SP61)、炉跡（炉 113）を検出した。また、遺構の東 3 分の 1 程度が SD48 と切り合っており、切り合い関係から SI50 が新しい。重複する範囲にて黄褐色土ブロックを多く含む黒褐色土の堆積がみられ、この範囲で貼床が残存しているものと考えられる。中央ピット（SP22）は上幅 40㎝、深さ 38㎝である。土器片が 1 点出土しており、細片のため図化ができなかったが内面にケズリ調整が確認できることから弥生時代後半期のものと思われる。

出土遺物は SP22 出土の土器片のほか、検出面の SD48 切り合い地点で土器が出土している。胎土から弥生前期のものと思われる。外面に種子圧痕を残す（写真 9)。

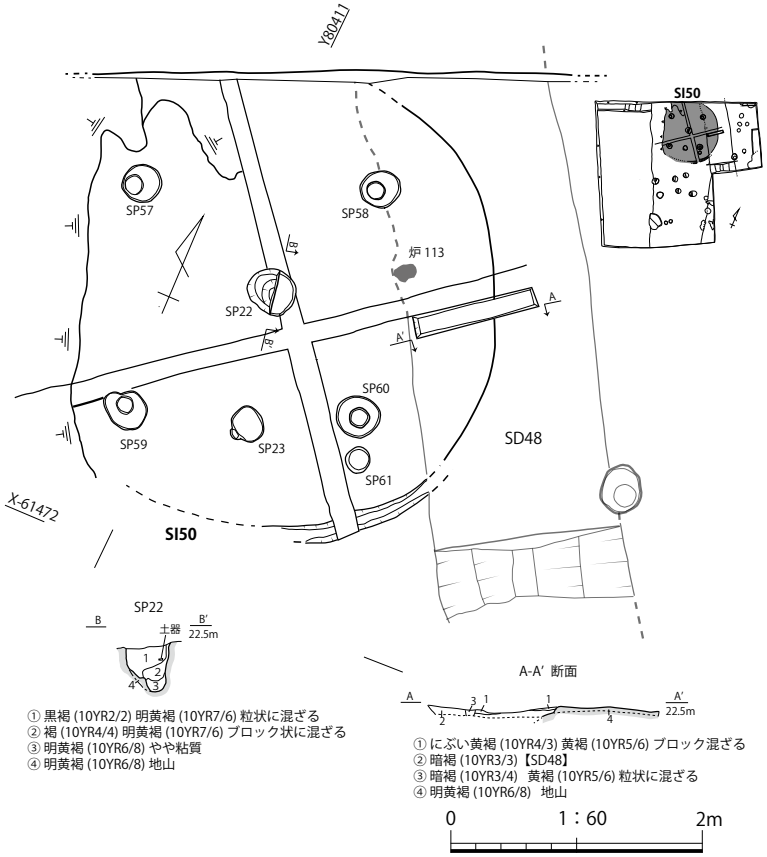


図 37　SI50 平面・土層断面図

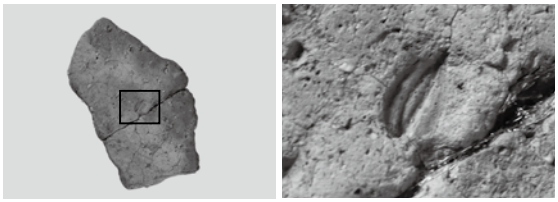


写真 9　SI50 検出面出土土器

SK06

①遺構の概要 (図 38)

SI50 の南約 1.8 mの地点で検出した土坑である。径 40㎝、深さ 20

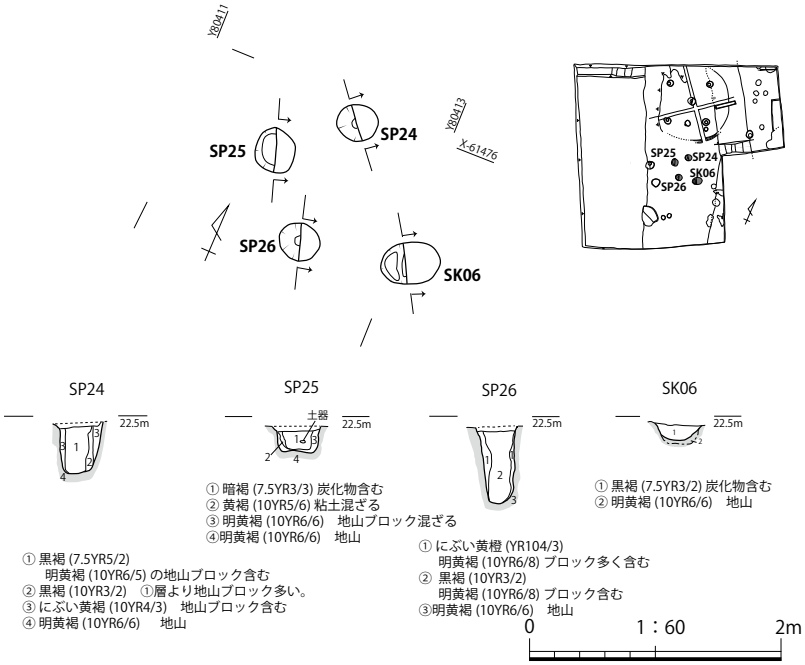


図 38　SK06・SP24・SP25・SP26 平面・土層断面図

㎝を測る。埋土は黒色の締まりのある土質で炭化物を含む。半裁したところ地山上面で黒曜石のチップが層状に堆積している様子が確認された。半截した土を水洗したところ、1016 点の黒曜石チップ、石鏃の未完成品 1 点、二次加工のある剥片 1 点、剥片 2 点が見つかった。土器は出土していない。炭化物を採取し年代測定分析を実施したところ 339 ‐ 53calBC(2 σ) の数値が得られ、土壌洗浄により検出した種子（コナラ属）の年代測定分析では 380 ‐ 203calBC(2 σ) の数値が得られた（第 5 章第 1 節詳述)。このことから本土坑は弥生時代前期の遺構で、黒曜石の製石器製作に伴い廃棄に用いられた遺構と考えられる。

②出土遺物 (図 39)

1 は黒曜石製の石鏃未完成品である。凹基もしくは平基無茎式と考えられる。裏面右下に自然面を残す。右半分～下部にかけて折損。

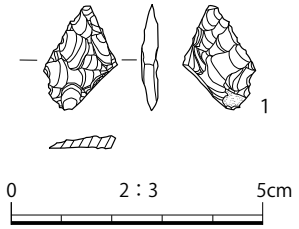


図 39　SK06 出土遺物実測図

SP24

①遺構の概要 (図 38)

SK06 の北隣で検出した柱穴である。径は 40㎝、深さ 40㎝を測る。埋土は黒褐色の色調を呈し締まりが強い。地山ブロックを僅かに含む黒褐色土の堆積（①層）があり、柱痕跡と考えられる。

②出土遺物

埋土から黒曜石チップが 17 点出土する。土器は細片が 1 点出土している。時期は不明である。

SP25

①遺構の概要 (図 38)

SP24 の西隣で検出した柱穴である。径 40㎝、深さ 20㎝を測る。埋土は暗褐色土の色調を呈し、締まりが強い。また炭化物を含む。

②出土遺物

土器片が 1 点、黒曜石チップが 3 点出土する。土器片は細片のため図化はできないが胎土が粗く弥生前期のものと考えられる。

SP26

①遺構の概要 (図 38)

SP25 の南隣で検出した柱穴である。径 32㎝、深さ 60㎝を測る。SK06、SP24、SP25 と比較すると最も深い。②層は①層より黒色土の含みが多く、柱痕跡と考えられる。

②出土遺物

土中から黒曜石剥片 1 点､チップ 2 点が出土する。土器は出土していない。

表採資料 (図 40)

1 は表採資料で、T17 の南西角付近で表採した。黒曜石製の石錐である。表面の中央に稜をもち、断面は三角形を呈する。素材剥片の上部、つまり打点方向に錐状の二次加工が施される。下部は折損もしくは切断されている。

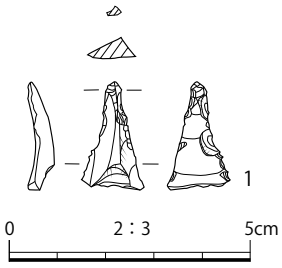


図 40　表採資料実測図

3. 環壕外部の調査 (図 41)

前期環壕の外側にて設定したトレンチ（T3、T4、T9、T10、T12、T13）について詳述する。いずれも環壕の延長部や複数環壕の有無を判別することを目的とし実施した。調査の結果、これらの調査区から環壕と判断される壕は検出しなかった。また、遺跡の南側斜面部の調査（T3,、T4、T12、T13) では、密度の高い遺構の分布はみられず、希薄な範囲であるか、若しくは後世の土地の改変により既に著しく削平を受けている可能性が考えられる。以下各調査区の概要を述べる。

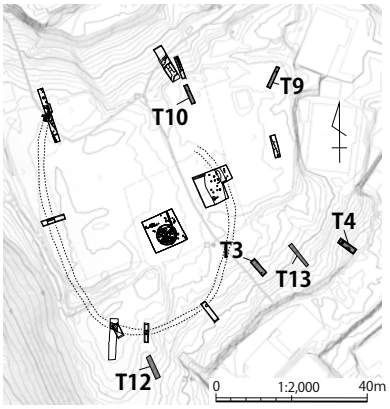


図 41　トレンチ位置図

(1)T3(図 42)

T2 の北東側に設定した調査区である。調査区の規模は東西 1.5m ×南北 6m で面積 9㎡を測る。表土を剥ぐと L=21.2 m ～ 20.3m で南に緩やかに傾斜する地山を検出し、地山に掘りこまれたピット（SP03）を検出した。

SP03

①遺構の概要

トレンチの南付近で検出したピットである。径は 10 ㎝、深さ 12.5㎝を測る。柱痕跡が確認できる。

②出土遺物

遺物は出土していない。

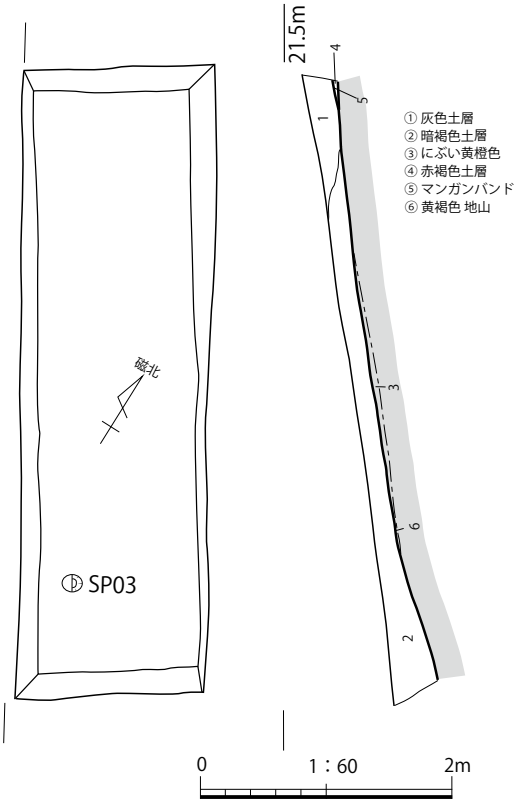


図 42　T3 平面・土層図

(2)T4(図 43)

T3 の南東部に設定した調査区である。現況地表面下 0.2 mで地山を検出し、溝（SD04)、性格不明遺構（SX05）を検出した。検出した遺構はいずれも埋土の締りが緩い。

SD04

①遺構の概要

トレンチの北端で検出した東西に伸びる溝である。検出範囲で長さは 1.1m を測る。深さは 20㎝である。

②出土遺物

出土遺物はなく、時期は不明である。

SX05

①遺構の概要

トレンチ西壁沿いに検出した遺構である。削平が著しく遺構の一部のみ確認している。最大径は 1.1m を測る。深さは 15㎝である。埋土は暗褐色の色調を呈し締りは緩い（④層）。

②出土遺物

遺物は出土していない。

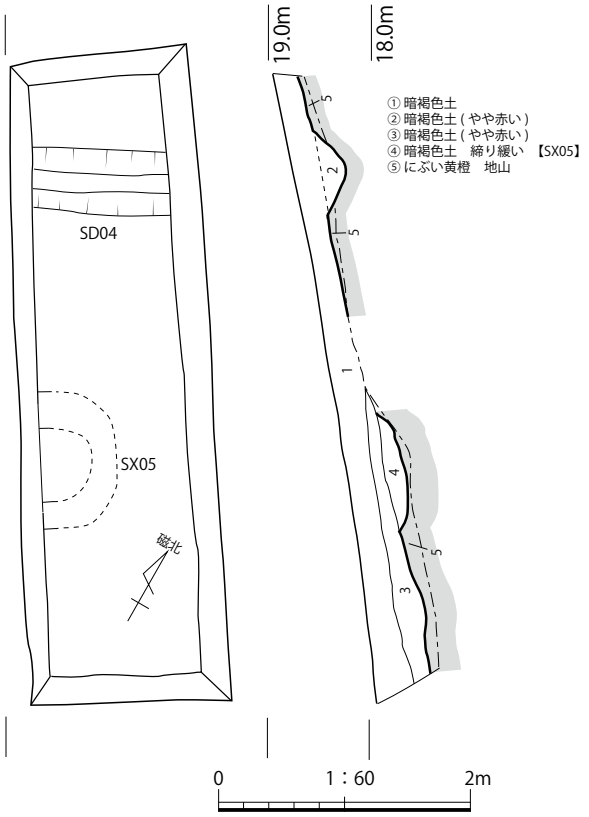


図 43　T4 平面・土層図

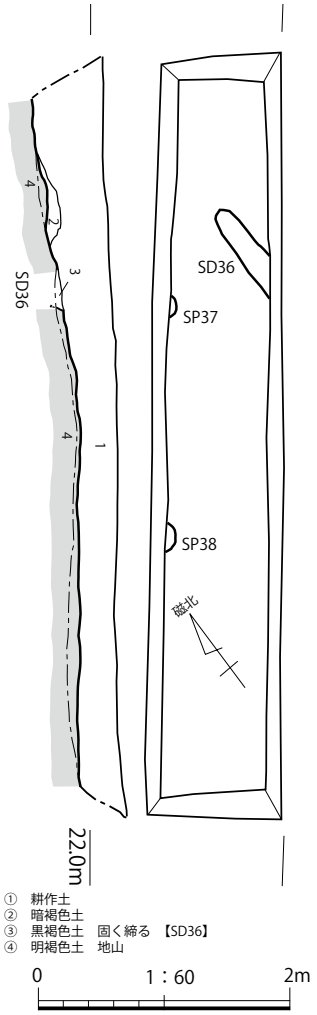


図 44　T9 平面・土層図

(3)T9(図 44)

環壕の有無を判断することを目的とし遺跡の北西側平坦地に設定した調査区である。環壕と思われる溝は検出されなかったが、小規模な溝（SD36）とピット 2 基（SP37、SP38）を検出した。SD36、SP37 は黒色の硬くしまった土で埋まっており、SP38 埋土は柔らかく、前者と異なる土質である。

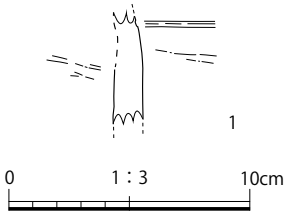


図 45　SD36 出土遺物実測図

SD36

①遺構の概要

トレンチ東壁沿いで検出した溝である。長さ約 60㎝、幅 20㎝を測る。埋土は黒褐色の硬く締まった土であり上面より土器が 1 点出土しており、弥生前期のものと思われる。環壕の外側で検出した遺構のなかで、弥生前期と判断できるものは現段階ではこれが唯一である。本遺構がどのような性格のものか不明であるが、本範囲に環壕と同時期の何らかの施設がある可能性がある。

②出土遺物（図 45）

弥生土器の壷の肩部と思われる。胎土は粗く、外面に沈線が１条確認できる。松本編年Ⅰ－４様式に相当するものと考えられる。

SP37

①遺構の概要

トレンチの西壁沿いで検出したピットである。大半が調査区外であり遺構の全容は不明であるが、埋土は黒色の良く締った土質であった。

②出土遺物

遺物は出土していない。

SP38

①遺構の概要

SP37 と同じくトレンチ西壁沿いで検出したピットである。遺構のほとんどが調査区外に及んでおり全容は不明である。埋土は SP36、SP37 と比較すると締りが緩く、異なる土質であった。

②出土遺物

遺物は出土していない。

(4)T10(図 46)

環壕の北側延長部の有無を判断することを目的とし設定した調査区である。表土を掘削すると、茶色系の土層 (②～④層) の堆積を確認し、L=22.4m でおよそ水平に堆積する地山を検出した。地山に掘りこまれたピット（SP39、SP40、SP41）、土坑（SK42）を検出した。遺構は平面検出にとどめ、遺物は出土していない。環壕と思われる遺構は検出しなかった。

SP39

①遺構の概要

トレンチの南東角で検出したピットである。直径 50㎝程の規模と推定する。埋土は黒色で固く締まるものであった。

②出土遺物

遺物は出土していない。

SP40

①遺構の概要

トレンチ東壁沿いで検出したピットである。遺構の西半のみ検出しており、東半は調査区外に及んでいる。直径は 35㎝程と推定する。埋土は SP39 と同じく黒色で固く締まる土質を呈していた。

②出土遺物

遺物は出土していない。

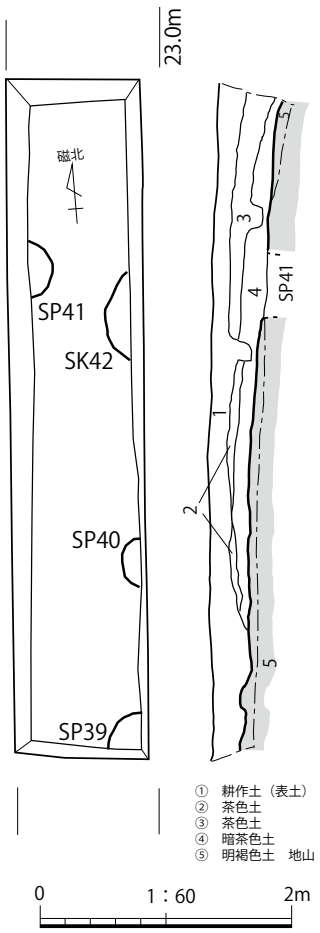


図 46　T10 平面・土層図

SP41

①遺構の概要

トレンチ西壁沿いで検出したピットである。遺構の東半のみ検出している。直径は 40cm 程か。SP39、SP40 と同じく黒色で締りの強い埋土であった。

②出土遺物

遺物は出土していない。

SK42

①遺構の概要

トレンチ東壁沿いで検出した土坑である。最大径 65㎝を測り、他のピットと比べ大型であることから土坑として報告する。遺講の西橋のみを検出しており全容は不明である。埋土は上述のピット（SP39 ～ SP41）と同じく黒色の固く締まった土質であった。

②出土遺物

遺物は出土していない。

(5)T12(図 47)

T8 の南に位置する。複数環壕の有無を判断するために設定した調査区である。

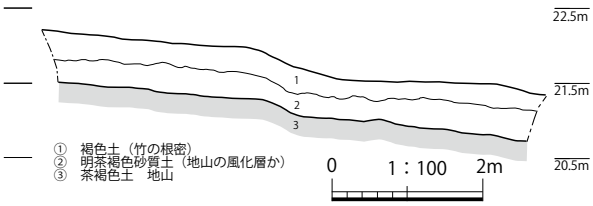


図 47　T12 東壁土層図

①遺構の概要

L=21.5m ～ 20.7m で南に緩やかに傾斜する地山を検出したが、遺構は検出しなかった。

②出土遺物 (図 48)

表土より須恵器蓋が 1 点出土する。1 は口縁端部を直立させるもので、国府編年 3 ～ 4 型式（8 世紀後半～ 9 世紀初頭）に該当するものと考えられる。

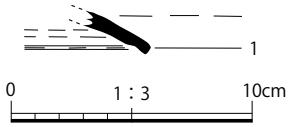


図 48　T12 出土遺物実測図

(6)T13(図 49)

丘陵東側で、環壕の有無を判断するために設定した調査区である。

①遺構の概要

L=20.7m ～ 19.3m で南へ緩やかに傾斜する地山を検出したが、遺構は検出しなかった。

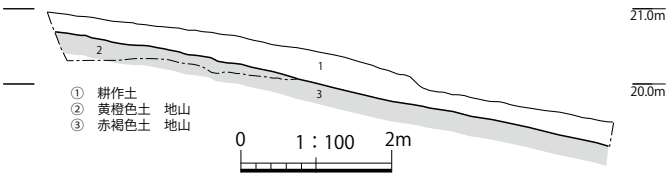


図 49　T13 東壁土層図

②出土遺物

遺物は出土していない。

4．小結

以上、弥生時代の遺構について環壕部、環壕内部、環壕外部の調査に分類し概要を述べた。環壕は弥生前期末～中期初頭の土器を伴うもので、丘陵南頂部の縁辺部を巡る単独環壕と思われる。規模は南北 67m、東西 47m の楕円形を呈する。SD01、SD115 にて掘り直しが見られる。いずれの環壕も深さは 1m を越えないもので、後世の削平を受け遺構の上部は既に消失しているものと考えられる。環壕で囲繞された空間において、弥生前期と思われる遺構は T17 検出の SP25、SK06 が存在する。SK06 は炭素年代測定の数値から弥生前期の遺構と考えられる。この数値からおよそ弥生前期～中期にかけての遺構と推定される。環壕が機能していた時期と併存したと考えられる。また、環壕内からは同時期の建物跡は検出していないが、当丘陵は遺構の残存状況から既に著しく削平が及んでいると考えられる。そのため、弥生時代前期の建物跡が存在していたとしても既に削平され消滅している可能性も加味しておく必要がある。

また環壕内部では､弥生後期前半(松本編年Ｖ‐２様式､草田２期)の竪穴建物 SI49 を検出しており、前期環壕埋没後に機能したものである。環壕 SD48 と切り合った状態で検出した竪穴建物 SI50 も遺構の新旧関係から環壕埋没後に機能した建物と考えられる。

環壕外部に設置した調査区は当初複数環壕の有無を明らかにするために設定したものである。結果、環壕と思われる遺構は検出していない。遺跡の北西部に設置した T9 にて弥生前期の土器を含む溝 SD36 を検出しており、さらに T10 検出のピットや土坑（SP39 ～ SP41、SK42）はいずれも環壕や T9SD36 と似た黒色の締りの強い埋土であったことから、環壕外北東部にも弥生前期の遺構が存在する可能性が考えられる。遺跡南部の調査区 T3、T4、T12、T13 の結果から、丘陵の南側は後世の削平が著しく目立った遺構は検出されなかった。

以上の結果から、本遺跡の弥生時代の遺構として、弥生前期末～中期初頭の環壕が機能した時期と弥生後期前半の竪穴建物 SI49、SI50 が機能した時期に大きく分類することができる。

（三宅・灘）

註釈

(1) 岩本真実氏（島根県古代文化センター）によれば巻貝を使用した施文の可能性があるという。
(2) 赤澤秀則氏（鹿島歴史民俗資料館）、澤田正明氏（島根県立古代出雲歴史博物館）のご指導により作業を実施した。
(3) 村上恭通氏は鉄片が少数しか出土しない鍛冶製作遺構について、作業後に竪穴建物内が清掃されていた可能性を想定している（村上 1994）。さらに禰宜田佳男氏は、五斗長垣内遺跡において、鍛冶製作遺構とされる 12 棟の竪穴建物のうち 7 棟では鉄片が出土していない点に注目しており、鉄片が出土しない場合においても鍛冶製作遺構と評価される可能性が起こりうる点を指摘している（禰宜田 2020）。SI49 についても、こういった事例の類に含まれる可能性がある点を留保しておきたい。
(4) 久住猛雄氏（福岡市教育委員会）によれば板石硯の可能性が高いとする。

参考文献

淡路市教育委員会 2011『五斗長垣内遺跡発掘調査報告』
池淵俊一 2000「島根県下における弥生時代鉄器の様相」『考古学ジャーナル』№ 467 ニューサイエンス社
川部浩司 2004「内面突帯の出現と展開―前期弥生土器にみる貼付突帯要素の淵源と地域性―」『弥生土器研究フォーラム 2014　弥生土器研究の可能性を探る 2』石黒立人
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1998『塩津丘陵遺跡群』
島根県木次土木建築事務所・木次町教育委員会 2000『平田遺跡第Ⅲ調査区』
島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡―9　総括編―』
日本道路公団中国支社・島根県教育委員会 2001『上野Ⅱ遺跡―弥生後期集落及び鍛冶関連遺跡の調査―』
村上恭通 1994「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第 41 巻第 3 号考古学研究会
村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
村上恭通 2000「弥生時代の鍛冶遺構研究における平田遺跡の意義」『平田遺跡第Ⅲ調査区』島根県木次土木建築事務所・木次町教育委員会
禰宜田佳男 2020「「弥生時代畿内地域の鉄器化、防御集落、武器所有」を考える」『古代武器研究』vol.16 古代武器研究会・山口大学考古学研究室

第 3 節　その他の時代の遺構

ここではその他の時代の遺構について記述する。神後田遺跡では弥生時代の遺構の他に、古代、中近世の遺構を検出している。「1．古代の遺構」「2．中近世の遺構」に分け概要を述べる。

1．古代の遺構 (図 50)

(1)T6、T18（SA114）(図 51)

遺跡の東側平坦部に設定した調査区である。T6 の調査時に柱穴列 SA114 を検出しており、当初は遺構の検出のみで調査を終了していたため、再度柱穴列の深さ、遺構の形状、規模を詳細に把握することを目的とし T18 にて再調査を実施した。調査の結果、標高 22.2m でおよそ水平に堆積する地山を確認し、地山に掘りこまれた柱穴列 SA114 や小規模なピット（SP08・10・12・15、17・18・52 ～ 55）、土坑状の性格不明遺構（SX56）を検出した。調査区の規模は T6 が東西 1.5m ×南北 6m で 9㎡、T18 が東西 1.7m ×南北 4.7m で 7.99㎡である。SA114 について概要を述べる。

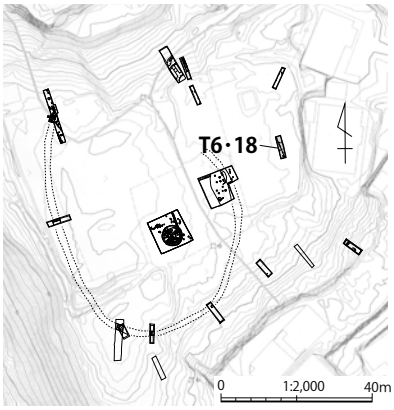


図 50　T6・T18 位置図

SA114（図 52）

①遺構の概要

ピット（SP07 ～ SP19）で構成される。南北に伸びる柱穴列である。方位は N ‐ 20° ‐ W。ピット間の距離は SP09、SP11、SP13 間が 50 ～ 70cm と狭く、SP07 － SP09 間、SP13 － SP14 － SP16 － SP19 間 が 80cm ～ 1m と広い。深さは 10㎝程度と浅く、後世の削平を受けていると考えられる。埋土は黒褐色の色調を呈し、弥生時代の遺構埋土と比較すると締りは緩い。SP07 より須恵器が出土している。

②出土遺物（図 53）

SP07 より須恵器が 1 点出土した。1 は杯または皿の底部と考えられる。底面に糸切痕を残す。

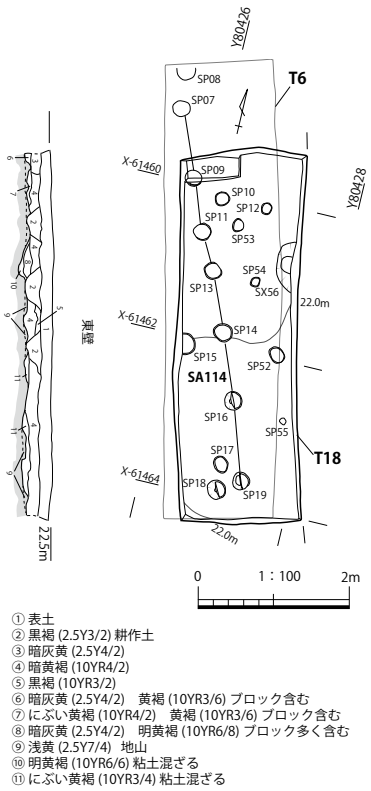


図 51　T18 平面・土層図

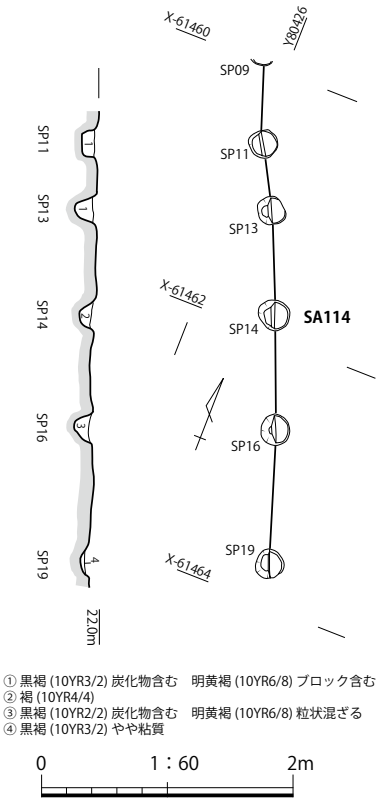


図 52　SA114 平面・土層断面図

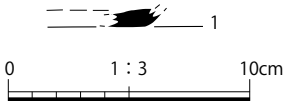


図 53　SP07 出土遺物実測図

2．中近世の遺構 (図 54)

(1)T11（SD44）

T10 の北隣に設定した調査区である。現況地表面下 0.3 mで地山が北に向かい落ちこむ状況がみられ、掘削すると上幅 3.7 m、底幅 0.8 mの溝（SD44）であることがわかった。

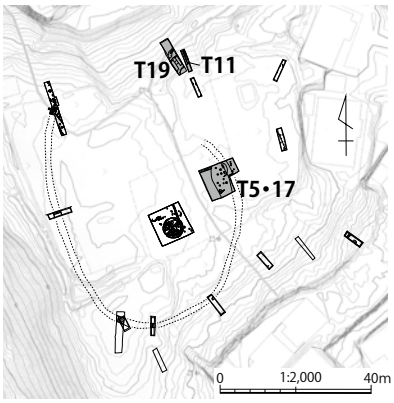


図 54　トレンチ位置図

SD44（図 55）

①遺構の概要

調査区北側で検出した大溝である。南の上端から北側調査区下端まで 3.75m を測ることから、溝の上幅はそれ以上である、深さは 1.8m を測り、底面にやや平坦面をもつ逆台形の断面を呈する。

土層の堆積状況は、最下層に赤褐色系の固く締まった土が堆積しており、これらの土層で埋没した後、再度掘削が行われたものと思われ、②③層が堆積していると考えられる。このうち③層は直下の層に黒色の炭化物を多く含む④層が薄く堆積しており、土坑状の遺構が存在するもの判断した（SK43）。SK43 埋没後②層が堆積し、完全に埋没したようである。②層からは燻桟瓦が出土しており、近代以降に現地形に近い状態になったと考えられる。

また、本調査区の西隣に設定した T19 の調査においても SD44 に接続すると思われる大溝（SD51）を検出している。これらの大溝は旧来の道である里道（赤道）にそって南へ屈曲しつくられており、神後田遺跡丘陵の東側を方形に区画する溝である可能性が高い。

②出土遺物（図 56）

須恵器の甕の破片である。外面に擬格子状のタタキ目を施し、内面に同心円状の当て具痕が残る。

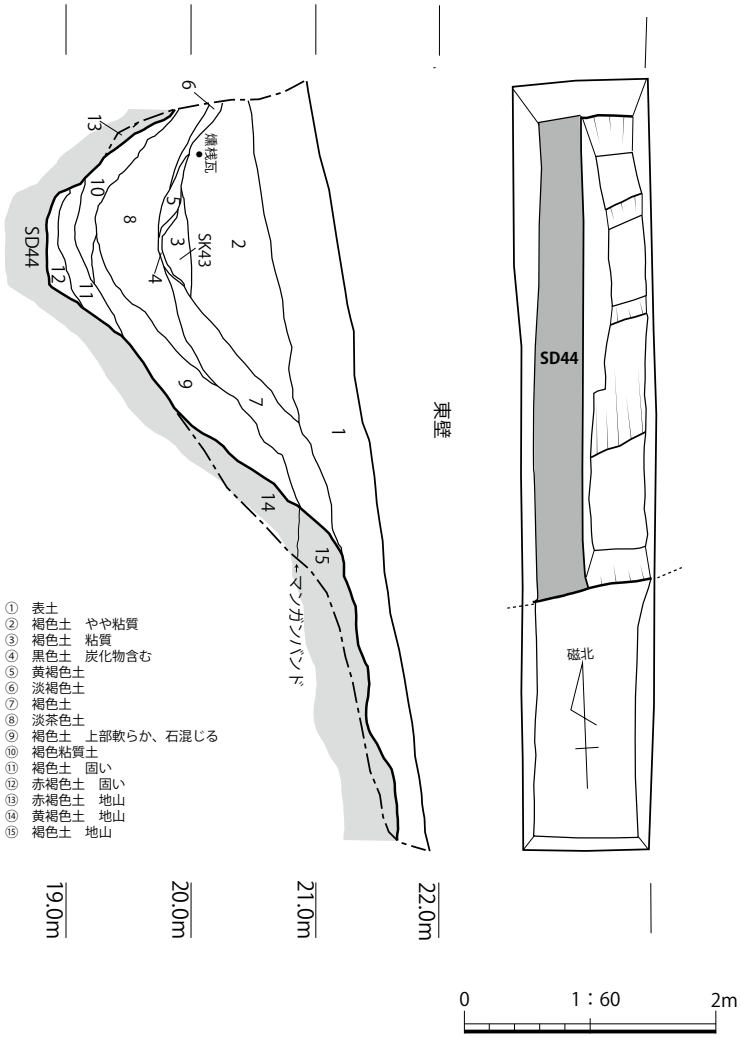


図 55　T11 平面・土層図

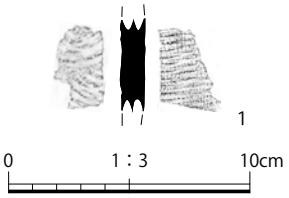


図 56　SD44 出土遺物実測図

(2)T5、T17（SD71）(図 57)

SD71

①遺構の概要

調査区西側にて検出した大溝である（平面・土層は図 19 参照）。南北に調査区外まで及んでおり、東の肩は検出しているが、西肩は未検出である。調査区内で確認できる範囲で幅は約 3.1 mを測る。北壁沿いにサブトレンチを設定し掘り下げたところ、近世の陶磁器や須恵器片が出土した。後述する T11 、T19 でもおよそ同規模の大溝（SD44、SD51）を検出しており、検出地点から一連のものと考えられる。遺物の年代から近世まで下るものと考えられるが、溝の規模から中世までさかのぼる可能性もある。大溝は T19 にて東へ屈曲していることから、T17 調査区の東の空間を方形に囲っているものと考えられる。

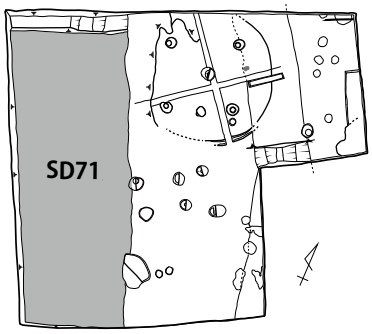


図 57　T5、T17 位置図

(3)T19（SD51）

T11 調査区の西隣に設定した調査区である。標高 20.4m ～ 18.2m で北にむかい傾斜する地山を検出し、SD44 と一連と思われる溝 SD51 を検出した。調査区の規模は東西 2.4m ×南北 10m で、面積は 24㎡である。

SD51（図 58）

①遺構の概要

幅 4m、深さ 1.3m を測る。調査区南西角で南に向かい溝が屈曲する様子が確認でき、T17 検出の SD71 に接続するものと考えられる。溝の北端には土塁状の高まりがあり、北に向かい地山が下がる様子が確認できた。地山の傾斜は自然の丘陵地形に由来すると思われるが、土塁状の高まりについては、現代の里道（赤道）とおよそ一致する。土塁の北裾東側には地山が 1 段の平坦面を呈しながら北に傾斜する様子が検出されており、ステップ状になっている。埋土より須佐焼摺鉢底部が 1 点が出土した。

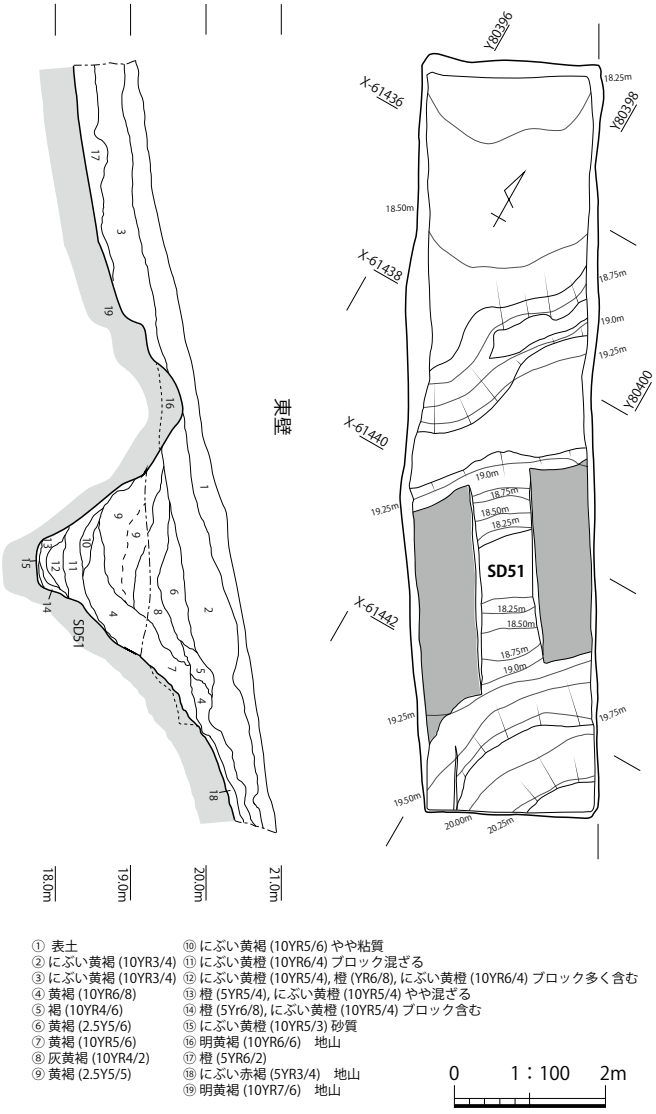


図 58　T19 平面・土層図

②出土遺物（図 59）

１は須佐焼擂鉢の底部である。高台をもち内面に６条 / 単位の擂目を施す。高台外面の際を面取りし、胴部外面にケズリ痕を残す。口縁部を欠損しているため判断が難しいが、佐伯分類Ⅰ群ＢまたはＣ類（18 世紀前半）に相当するものか（佐伯 2010）。

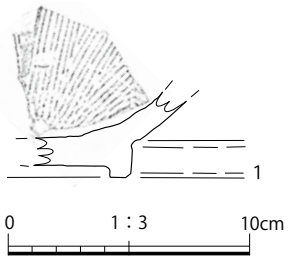


図 59　SD51 出土遺物実測図

３．小結

以上、その他の時代の遺構について述べた。古代の遺構 SA114 は削平が著しく遺構の残存状況は良好とはいえないものであった。調査範囲が狭小のため柱穴列として報告を行ったが、今後周辺の調査によっては掘立柱建物跡に伴う柱跡の可能性もあると考えられる。この他、表土や中近世の遺構の埋土に混入して須恵器が数点出土している。このことから、本時代の遺構で検出出来たのは SA114 のみであったが、更に同時期の遺構も周辺に存在する可能性がある。

大溝は規模が大きく、形状から丘陵東側を方形に囲繞するものと考えられる。周辺には大溝の延長部で地表面の落ち込みが現地で目視できる。この頃に丘陵頂部で大規模な削平が行われたと考えられ、弥生時代の遺構が著しく削平されている点はこれに起因する可能性がある。

これらの大溝は周辺では類例が少ないが、中世の居館跡等で事例がある（持田 2019）。出土遺物が近世の年代を示すものであるため断言は難しいが、当遺構も類似する性格のものであるかもしれない。当該地は中世に尼子氏の合戦場であったという言い伝えがあり、確定的な根拠は少ないがこれに関連する遺構の可能性も考えられることを指摘しておきたい。

（三宅）

参考文献

佐伯昌俊 2010「近世須佐焼に関する一考察」『山口考古』30 号山口考古学会
持田直人 2019「出雲市域における中世の屋敷跡」『第２回山陰中世考古学研究会　山陰の中世を考える　資料集』山陰中世考古学研究会

第４節　神後田遺跡の変遷

以上の結果から、神後田遺跡検出遺構の変遷は下記のようにまとめられる。

弥生前期末～中期初頭（松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式）（図 60）

東西に伸びる尾根の西端に南北に細長い楕円形の環壕が形成される段階である。環壕といいながら T20 の調査成果で北側は壕が途切れている。環壕の規模は南北 67m、東西 47m であり、溝の断面形は V･U･逆台形を呈する。上幅は 1.2 ～ 1.8m、深さは 0.72 ～ 0.9m である。1 条の溝が巡る単独環壕と思われる。丘陵は北東に向かい舌状に伸びる丘陵であり、環壕で囲繞される空間が最も標高が高い地点にあたる。環壕から出土する土器は松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式のものであり、石器は黒曜石残核やチップの他、磨製石斧、石包丁や拳大～人頭大の礫が出土する。礫は田和山遺跡の環壕から出土した礫と同様のものである。

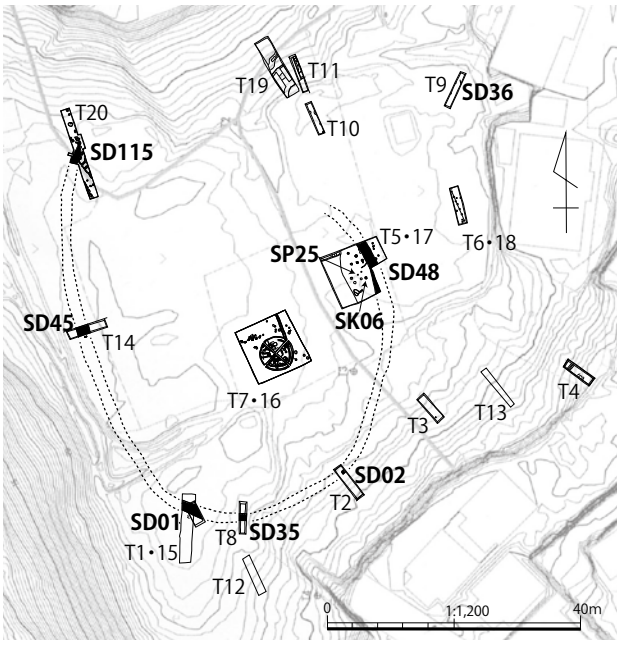


図 60　弥生前期末～中期初頭

環壕内の遺構としては SK06、SP25 がある。環壕内での当段階の建物跡は検出されていない。当該地が後世に大きく削平されている点を踏まえれば、T16 の柱穴群が弥生前期の建物の柱穴に相当する可能性もある。一部の調査で未確定ではあるが、黒曜石集石土坑等を囲繞する環壕に現段階では分類される。SP25 からは、弥生前期と思われる土器片、黒曜石チップが出土している。

環壕外では T9 検出 SD36 にて前期土器が 1 点出土している。また、T10 検出の SP39 ～ 41、SK42 は平面検出のみであるが埋土の土質が環壕や先の弥生前期の遺構と似ており、当段階の遺構の可能性がある。T9 及び T10 は環壕の北から北西部に位置し、環壕外の平坦部に前期のなんらかの遺構が存在する可能性がある。また、神後田遺跡丘陵の南麓部に位置する二ツ縄手遺跡では、同じく弥生前期末の遺物が出土しており、丘陵の南裾部に居住域が展開されていた可能性が想定される。

弥生後期前半（松本編年Ⅴ－２様式）（図 61）

前段階の環壕が埋没後、竪穴建物 2 棟が建てられる段階である。竪穴建物 SI49 の建物規模は直径 5.6m の円形であり、遺構の残存状況から後世の削平をかなり受けているものと考えられる。壁際溝が 2 条巡る様子から一度建物の拡張が行われており、また、焼土や炭化材の検出状況から拡張後、火災により焼失し廃絶したと想定される。柱穴 4 基と、中央ピットを建物の中心よりやや東寄りで検出している。炉の痕跡が複数箇所で見つかっている。周辺の土壌洗浄を行ったところ鉄片と思われる微細片が見つかっている。炉のうち炉 72 は不整円形の形状で、焼土は非常に硬い土質であった。遺構の一部を掘削したところ焼土が約 5㎝堆積している様子が確認された。本遺構を鍛冶炉と想

定するには、現段階では関連遺物が少なく、積極的に肯定するにはやや資料が不足しているが、可能性を上げるのであれば、村上分類Ⅳ類の鍛冶炉と思われる。また、水晶の残核が床面直上より出土しており、玉作に関わる可能性もある。出土土器は草田編年 2 期の甕、器台が床面直上より出土している。

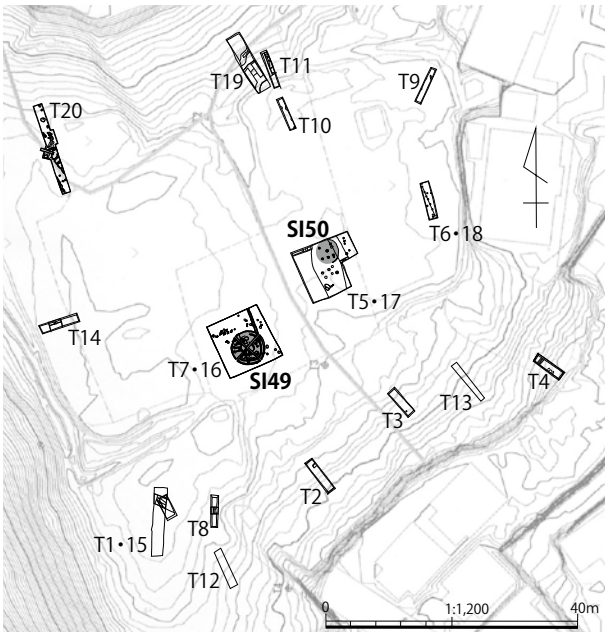


図 61　弥生後期前半

竪穴建物 SI50 は前期環壕 SD48 と切り合っている。規模は直径 3.6m を測る円形である。上部の大半が削平されており、柱穴 4 基、中央ピット 1 基と環壕との重複部で床面、壁際溝が確認できた。中央ピット SP22 より土器の細片が出土しており、内面にケズリ調整がみられることから弥生中期後半～後期の土器と思われる。神後田遺跡の調査では弥生中期中葉～後葉の土器がこの他に 1 点も出土していない点から、後期の住居跡の可能性が高いと考える。

中世・近世（図 62）

弥生時代の遺構が廃絶し、丘陵南頂部北端から南にかけて L 字状に大溝が掘削される段階である。SD44、SD51、SD71 はこの大溝一連の遺構と考えられ、検出している範囲で総延長は東西 7m、南北 40m である。幅は SD51 で 3.6m を測るが、SD71 ではさらにそれ以上の規模と考えられる。出土遺物は埋土から須恵器や須佐焼擂鉢が出土しており、須佐焼擂鉢の年代観は 18 世紀前半頃と考えられる。また、明治の切図を参照すると、里道（赤道）に沿うように溝が展開している様子が窺える。本遺構に類似する例は、出雲地域では中世の館・屋敷跡で多く見られる。例としては築山遺跡、蔵小路西遺跡、寿昌寺遺跡、高浜 I 遺跡（出雲市）等があげられる。いずれも館・屋敷の区画溝とされており、大型のもので蔵小路西遺跡の 3.2 ～ 4.6m の規模がある。神後田遺跡検出の大溝をその規模から検討すると、これら中世の館または屋敷跡にみられる区画溝と類似しており、機能時期がその頃まで遡る可能性が考えられる。中世においては、地頭としての乃木氏の存在や戦国期の合戦場となった伝承もあり注目される。出土遺物が 18 世紀前半頃のものしかみられないことから明確に結論付けることは難しいため、当段階を中世・近世と想定しておきたい（三宅）。

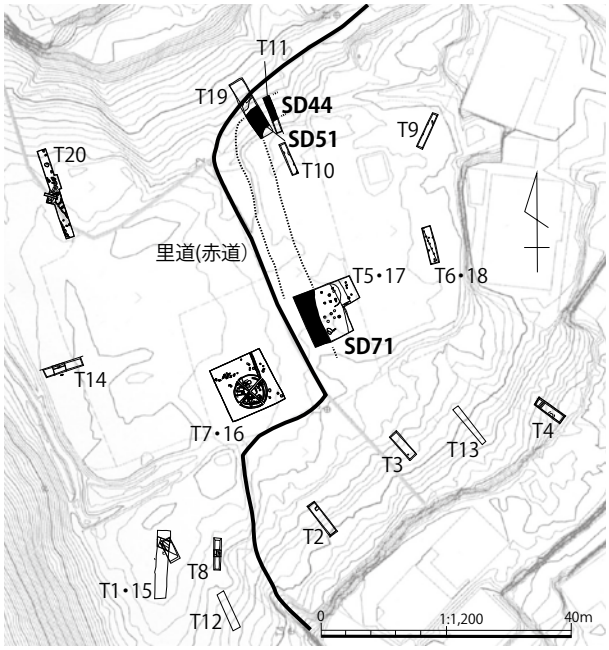


図 62　中世・近世

第 4 章　考古学的分析

第 1 節　神後田遺跡と周辺遺跡出土の弥生土器について

1．はじめに

神後田遺跡出土の弥生土器は環壕出土の前期末～中期初頭の土器と、竪穴建物出土の後期前半の土器がある。いずれも残存状況は良好とは言えず、小片が多数を占め風化が著しいものが多い。本節では忌部川下流地域における弥生時代の集落の展開とその社会背景について明らかにすることを目的とし、その基礎的作業として神後田遺跡及び周辺遺跡出土土器の併行関係について整理を行う (註 1)。

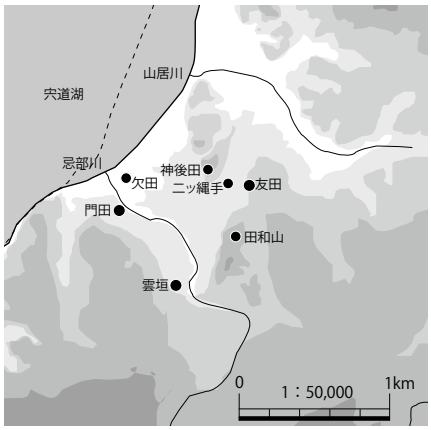


図 63　遺跡位置図

本節で扱う遺跡は図 63 のとおりである。出雲地域における弥生土器研究は原山遺跡（出雲市）の調査に始まりその数は多く、紙幅上研究史の詳細については割愛するが現在松本岩雄氏による編年が出雲地域では一般的に使用されている（松本 1992）。神後田遺跡出土土器は弥生前期末～中期初頭、後期前半の特徴を示すものであることから、松本編年と、一部後期の土器に関しては草田編年（赤澤 1992）を併用して使用したい。また、周辺遺跡出土土器を検討する際一部古墳前期後半の土器を扱うため、当該期については松山智弘氏の編年を草田編年と併せて引用する（松山 2000）。

2．神後田遺跡出土弥生土器概観

(1) 環壕出土土器（SD01、SD45、SD48）（図 64）

検出した環壕のうち SD01、SD45、SD48 でまとまった土器の出土がみられることから、これらの遺構出土土器を扱う。甕、壺が出土しており、壺は頸部に沈線を施すものが最も多くみられ一つの個体に 3 ～ 6 条程のヘラ描沈線が施される。器形は底部から胴部にかけてやや張るものと、長胴的な形態を示すものがみられる。特徴的なものとして、口縁内面に突帯を巡らせるものが 1 点出土している (3)。甕は端部がやや外反するもの (4) が大半であるが、口縁端部が「逆 L 字」を呈するものも見られる (5)。いずれも松本編年Ⅰ－ 4 様式に相当する。また、残存状態が良くなく不明瞭であるが櫛描文の可能性があるものが 1 点出土する (7)。松本編年にあてはめるとⅡ様式にあたる。

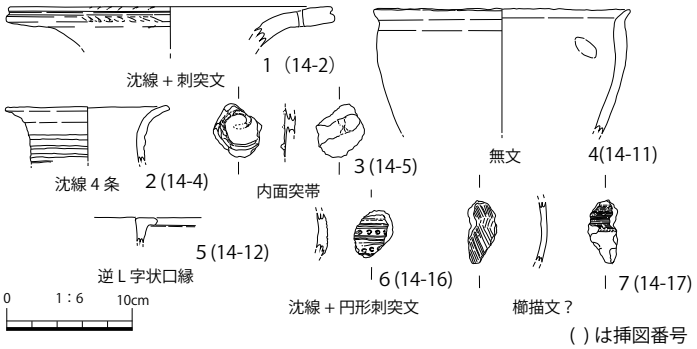


図 64　神後田遺跡環壕出土土器

(2) 竪穴建物（SI49）出土土器（図 65）

床面直上から甕 1 点、鼓形器台 1 点が出土している。いずれも口縁部に貝殻腹縁による擬凹線文が施される。甕の口縁はやや外に開きながら直立し器壁は厚い。端部はやや面をもつ。肩部がやや張り、外面に逆三角形刺突文を施す (1)。鼓形器台は内面にミガキ調整が施される。器壁は厚い (2)。松本編年Ⅴ－２様式、草田編年の草田２期に相当する。以上のように、神後田遺跡では環壕出土の弥生前期末～中期初頭の土器と、竪穴建物出土の弥生後期前半の土器がみられる。一方、弥生中期中葉～後葉（松本編年Ⅲ－１～Ⅳ－２様式）の土器が現段階では 1 点も出土していない点が特徴としてあげられる。

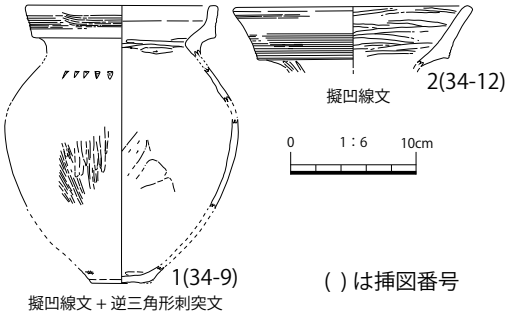


図 65　神後田遺跡 SI49 出土土器

3. 周辺遺跡出土弥生土器概観

(1) 田和山遺跡環壕出土土器

田和山遺跡の環壕は掘り直し、拡張が認められ、最初期がⅠ－a 環壕、次段階がⅠ－b 環壕、最終段階がⅠ－c・第２・３環壕の三重環壕である (図 66)。

出土土器について概観する（図 67）。Ⅰ－a・b 環壕出土土器は壺、甕がみられる。壺は肩部に貝殻腹縁による羽状文を施すものが少数出土する（1）。文様は沈線が主体で６～８条の多条のものが多い（2、3）。無頸壷もみられる（4）。甕は口縁端部が外反するもので、無文のもの (8)、沈線が５～８条施されるもの（5、6、7）があり、口縁端部が逆 L 字状を呈するものも出土する (9)。いずれも松本編年Ⅰ－４様式に相当する。報告数は少ないが櫛描文と思われる個体が出土する (11)。松本編年Ⅱ様式に相当する。

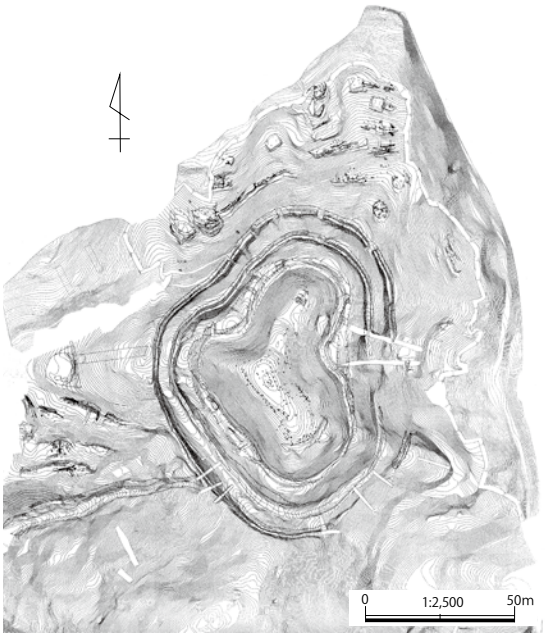


図 66　田和山遺跡全体図

Ⅰ－c・第２・３環壕出土土器は壺、甕、高杯がみられる。壺は装飾性の強い広口壺 (12) や、頸部に凹線文を施すものがみられる (13、14)。甕は口縁部を外反させ、端部を上に突出させるもの (15) や、上下に拡張させるものがある (16、17)。16、17 は頸部に指頭圧痕文帯を施す貼付突帯をめぐらす。高杯は杯部を内湾させ端部を丸くおさめ外面に凹線文を施す (18)。松本編年Ⅲ－１～Ⅳ－２様式に収まる。

以上のように、Ⅰ－a・Ⅰ－b 環壕出土土器は沈線多条のものが主体で櫛描文が僅かに含まれる。このことから松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式の範疇に収まる土器群と判断される。神後田遺跡の環壕とおよそ同時期と考えてよいだろう。Ⅰ－c・2・3 環壕出土土器は装飾性に富むものから、凹線文主体のものが出土しているが、報告書掲載のものをみると凹線文主体段階の土器が多数を占めるようであ

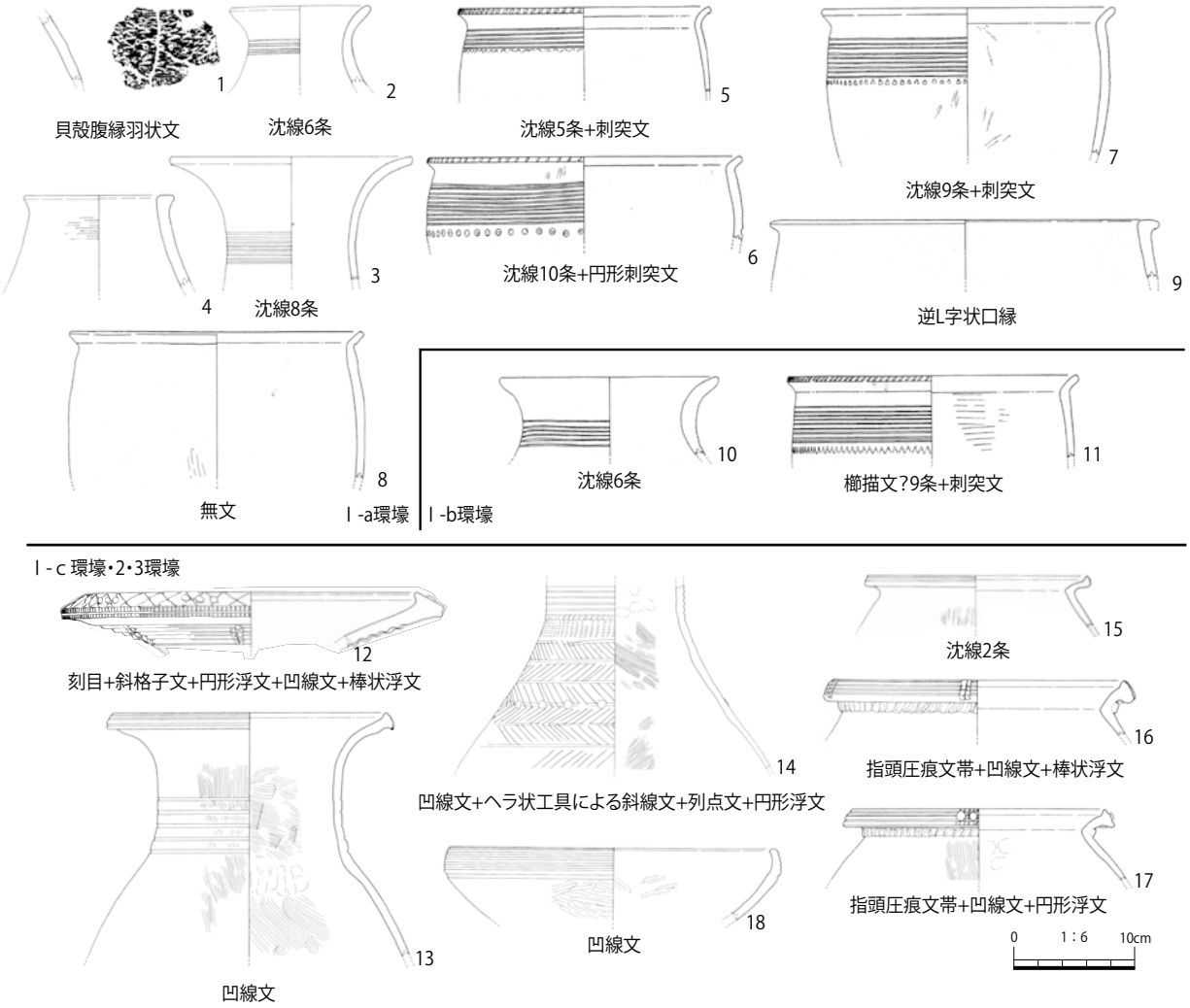


図 67　田和山遺跡環壕出土土器

る。Ⅲ様式～Ⅳ様式のなかで、後者が主体的段階であると考えられる。

(2) 友田遺跡出土土器

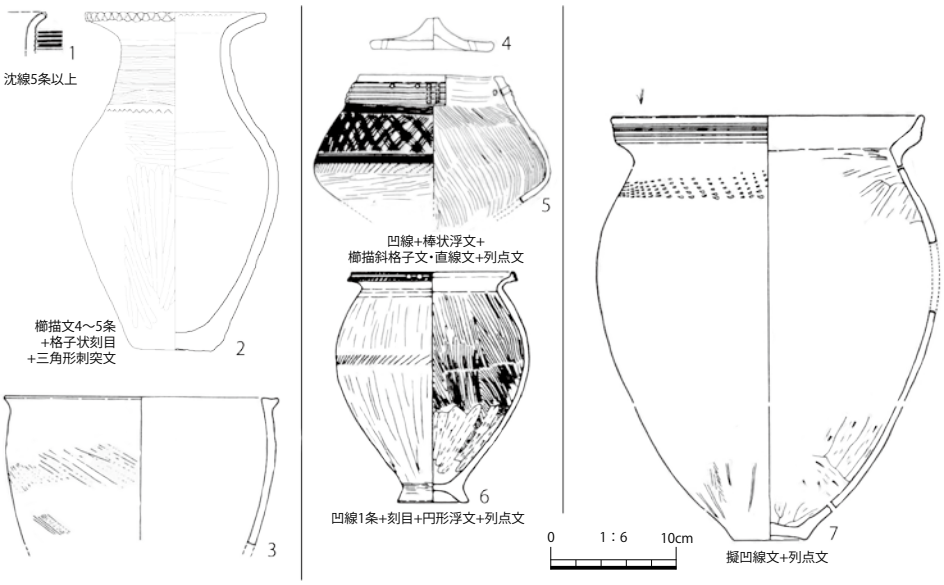
友田遺跡は神後田遺跡南東部の低丘陵上に位置する。配石墓 24 基、方形墳丘墓 6 基、四隅突出墓 1 基 (註 2)、土坑 4 基が検出されている (図 68)。配石墓は、墓壙内から黒曜石製、サヌカイト製石鏃や勾玉、管玉といった多彩な副葬品が出土しており、墓の形態から堀部第 1 遺跡配石墓群に後続するものと考えられている (池淵 2007)。方形墳丘墓は計 6 基築造されており、周溝から土器が多く出土している。また、最終段階の墓である四隅突出墓は 1 辺約 15m を測るもので、松江市域最古の四隅突出墓である。遺跡は宅地開発により既に消滅しているが、神後田遺跡や田和山遺跡が見渡せる位置にあり、

図 68　友田遺跡平面図

写真 10 友田遺跡と田和山遺跡
手前が友田遺跡四隅突出墓貼石部。奥の丘陵が田和山遺跡
（松本岩雄氏により 1981 年 11 月 7 日撮影）

発掘調査時の写真には田和山遺跡の丘陵が確認できる (写真 10)。

出土土器について概観する（図 69)。土器は配石墓 SK13 より甕の口縁部が出土しており、外面に沈線を 5 条以上施すことから松本編年Ⅰ－ 4 様式にあてはまる (1)。また、調査区北西部で検出された土坑 SK17 より壺、甕が出土している。壺はやや長胴的なプロポーションであり、頸部に櫛描文・三角形刺突文、口縁内外面に三角形刺突文、格子状刺突文を施す (2)。甕は口縁端部が逆 L 字状を呈する (3)。松本編年Ⅱ様式に相当する。4 ～ 6 は墳丘墓から出土した土器である。4 は蓋である。5 は無頸壺で装飾性に富む。松本編年Ⅲ － 2 様式。6 は甕であり松本編年Ⅳ － 1 様式に相当する。



1:SK13、2・3:SK17、4・5:2 号墳丘墓斜面、6:1 号墳丘墓周溝、7: 四隅突出墓

図 69　友田遺跡出土土器（2：再実測）

四隅突出墓は先の配石墓に重なって築造されている。前期の土器が多く混在しているが、西側の貼石突出部付近で甕が出土しており、口縁部がやや外に開き外面に擬凹線文を施す特徴から松本編年Ⅴ－ 2 様式と考えられる (7)。

以上のように、出土土器は弥生前期末～後期前半の土器がみられる。弥生前期の土器は細片が多数を占め胎土の観察から「前期」と考えられるものが殆どである。今回改めて、配石墓出土土器を整理したところ、表 4 に示す遺物の組成であった。いずれも松本編年Ⅰ－ 4 様式が最古段階であり、これは先述の堀部第 1 遺跡出土土器（松本編年Ⅰ － 2・3 様式）より新しい段階であることから池淵氏が指摘する配石墓の変遷とも合致する。配石墓出土のほか、墳丘墓の盛土、旧表土からも前期と思われる土器が出土する。中期の土器は墳丘墓の周溝から出土するものが中心である。墳丘墓はこの頃の所産と考えてよいだろう。後期前半の土器は四隅突出墓の西側貼石部周辺で出土しており、前期、中期の土器と比較すればその数は少ない。

表 4　友田遺跡配石墓出土遺物計数表

	遺構名	弥生土器			石器				備考
		前期	後期	松本編年	管玉	勾玉	石鏃		
						ヒスイ	黒曜石	サヌカイト	
配石墓	SK01								
	SK02	△8		Ⅰ－4			1		
	SK03								
	SK04				1				
	SK05	3			13				胎土より前期
	SK06	1	1	Ⅴ	3				後期土器は遺構外
	SK07	3			13～				土坑内に赤色顔料
	SK08	△1			200～	11	5	2	胎土より前期
	SK09	1							胎土より前期
	SK10							1	
	SK11								
	SK12								
	SK13	3		Ⅰ－4	13	1		1	
	SK14				115				
	SK15								土坑内に赤色顔料
	SK18	1		Ⅰ－4			5	9	Ⅰ－3に近い
	SK19				25				
	SK20				38				
	SK21	9			44				胎土より前期
	SK22	5					18	16	胎土より前期
	SK23								
	SK24				61				
	SK25								
	SK26								
合計		35	1		526～	12	29	29	

△…遺構に伴うか不明のもの又は表採のもの。数字は破片点数。

(3) 欠田遺跡出土土器（図 70）

欠田遺跡は忌部川河口部に位置する遺跡である。コンテナ 5 箱分の土器が出土しており、出土土器は弥生土器と土師器に大きく分けられる。弥生土器は前期～後期まで存在する。前期土器の器種は甕、壺、鉢があり、文様は沈線を 3 ～ 6 条施すもの（1､4）と、無文のものがある（2）。松本編年Ⅰ－4 様式に相当する。櫛描文を施す個体も存在する（3）。松本編年Ⅱ様式。中期の土器は甕、壺、高杯がみられる（5、6）。壺は口縁端部を拡張し、内面に斜線文、円形浮文を施す。松本編年Ⅲ様式に該当する。7 ～ 18 は古墳前期後半の土師器である。破片点数としては最も多く、当遺跡出土土器の主体を占める。甕が多く、他に壺、高杯、器台、低脚杯が出土する。松山編年小谷 3 ～ 4 式に相当するものである。破片数は古墳前期土器に次いで弥生前期末～中期初頭の土器が多い。Ⅲ～Ⅴ様式の土器は先のものと比較すれば少量である (図 71)。最も古い時期を示すのはⅠ－4 様式の土器であり、Ⅱ様式が僅かにみられる点は田和山遺跡Ⅰ－a・b 環壕や神後田遺跡の環壕の組成と一致する。これらと同時期に本遺跡が出現したと考えられる。

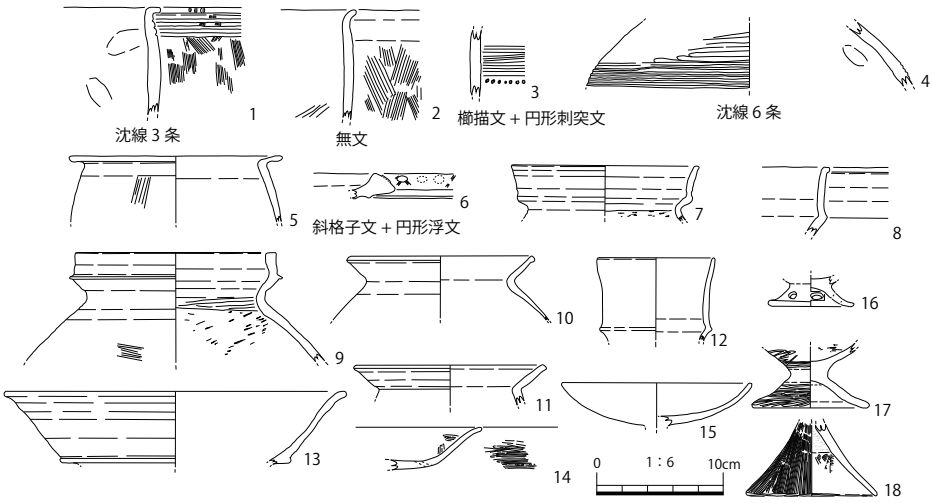


図 70　欠田遺跡出土土器

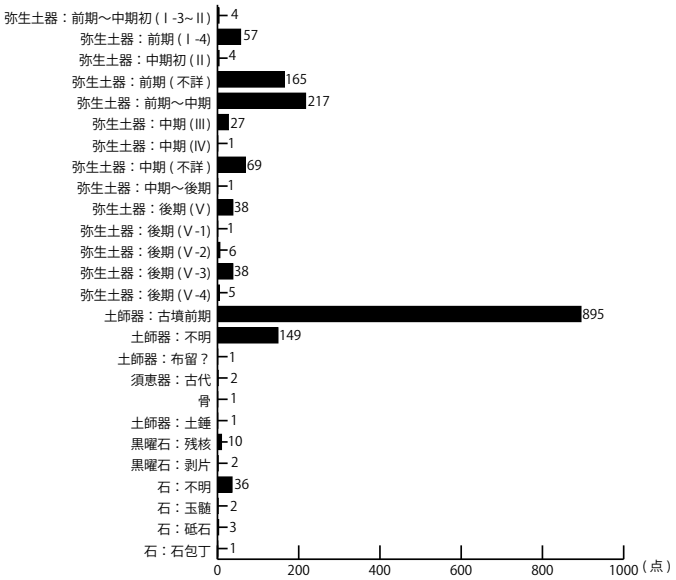


図 71　欠田遺跡出土遺物計数表

(4) 雲垣遺跡出土土器（図 72）

雲垣遺跡は田和山遺跡の西方水田部に存在する。包含層から弥生土器、木製品がまとまって出土している。土器は中期後葉の土器がまとまって報告されているが、前期の甕が 2 点報告される (1、2)。中期の土器は壺、甕、高杯がみられる。壺は口縁を大きく外反させる広口壺が多く、無頸壺も出土する (7)。広口壺はいずれも口縁部を拡張し、端部を上部に突出させる (8)。文様は凹線文、ヘラ状工具による斜線文、列点文、クシ状工具による斜線文、直線文を組み合わせたもので、各個体毎に微妙に

文様の配列は異なる (9)。甕は口縁部を拡張し外面に凹線文又は沈線と斜線文を施すものがみられる。頸部に指頭圧痕文帯を貼り付けるものが多く出土する (3、4)。高杯は口縁部を湾曲させ口縁端部に面をもたせる。文様は、口縁部外面に凹線文、刻目を施すものや (5)、頸部に沈線を施すもの (6) がある。いずれも胎土が緻密で残存状況は良好である。松本編年Ⅳ－１～Ⅳ－２様式に相当する。他の遺跡出土土器の様相と比較すれば本遺跡の土器はⅣ様式の土器が殆どを占め、比較的まとまった様相を示す。遺跡は西側から張り出す丘陵の山麓部に位置し、遺構が検出されていないことから、遺跡の中心地は西側の丘陵上にあるものと推測される。雲垣遺跡が存続した段階は田和山遺跡Ⅰ－c・2・3 環壕が機能した段階と併行する。

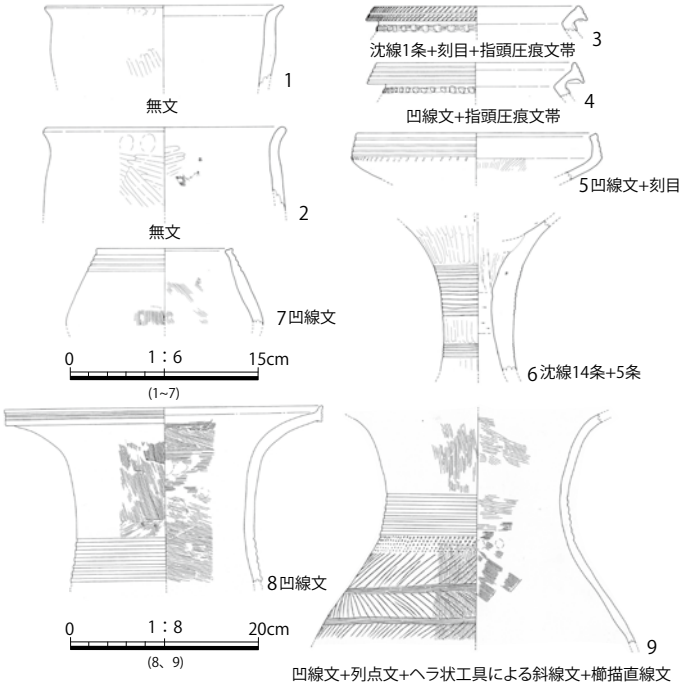


図 72　雲垣遺跡出土土器

(5) 二ツ縄手遺跡出土土器（図 73）

神後田遺跡が所在する低丘陵の南東山裾の低地部に位置し、包含層が検出されている。縄文晩期の土器が 2 点報告されている (1)。弥生土器は羽状文を施す壺 (2) や、沈線を 6 条施す甕 (3) が出土しており、松本編年Ⅰ－4 様式に相当する。また後期前半の土器が 1 点報告されている (4)。他に松本編年Ⅴ－4 様式とみられるものもある（5）。6 ～ 10 は古墳前期の土器である。甕、高杯、低脚杯、鼓形器台がある。概ね草田 7 期以降にあたる。報告ではこの段階の土器が最も多い。

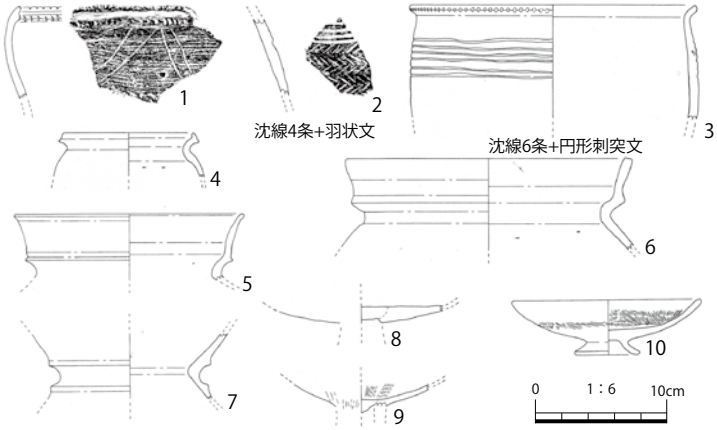


図 73　二ッ縄手遺跡出土土器

本遺跡より西から南西にかけての低地部は試掘調査の結果から忌部川の氾濫による礫層の堆積が確認されている。周辺は人が生活するには非常に不安定な土地であったと考えられ、本遺跡においても遺構が検出されていないことから本遺跡出土の遺物は周辺の丘陵上からの流れ込みによる土器群であると考えられる。弥生前期末～中期初頭の土器は、神後田遺跡の環壕や田和山遺跡のⅠ－a・b 環壕と同時期であり、古墳前期の土器は欠田遺跡出土土器と同型式である。

(6) 門田遺跡出土土器（図 74）

欠田遺跡より忌部川を挟んで南河岸沿いに位置する。溝状遺構 SD01 ～ SD04 が報告されており、遺物の年代、遺構の切り合いから（古）SD01 → SD02・SD04 → SD03（新）の新旧がある。土器は甕・壺・高杯・鼓形器台がある。甕は口縁部を大きく外反させ、端部を丸く収めるもの (3)、わずかに突出させるもの (1) がある。また、端部をさらに拡張させる個体もあり、前者が松本編年Ⅲ - 1・2 様式、後者がⅣ - 2 様式に相当するものと考えられる。壷は斜格子文や円形浮文を施すような装飾性に富むものが出土しており、Ⅲ - 1 様式と思われる (2)。SD03 出土土器は先述の土器より新しい様相を示しており、甕は口縁部を外に開き外反させるものがある (10)。松本編年Ⅴ - 2 様式と思われる。また鼓形器台が出土する (13)。

以上の点から、門田遺跡の存続期間は松本編年Ⅲ - 1 ～Ⅴ - 2 様式の段階と思われる。いずれも不整形な溝から出土しており、流路若しくは区画溝の可能性が考えられる。先述の欠田遺跡と対岸に位置しており、門田遺跡出土土器の型式のものが欠田遺跡では出土量が少ない点から、この頃当該地の集落が欠田遺跡から忌部川を挟み対岸の門田遺跡に移った可能性が考えられる。

4. 神後田遺跡と周辺遺跡の併行関係

神後田遺跡及び周辺遺跡出土土器について概観した。神後田遺跡の環壕出土土器の特徴は田和山

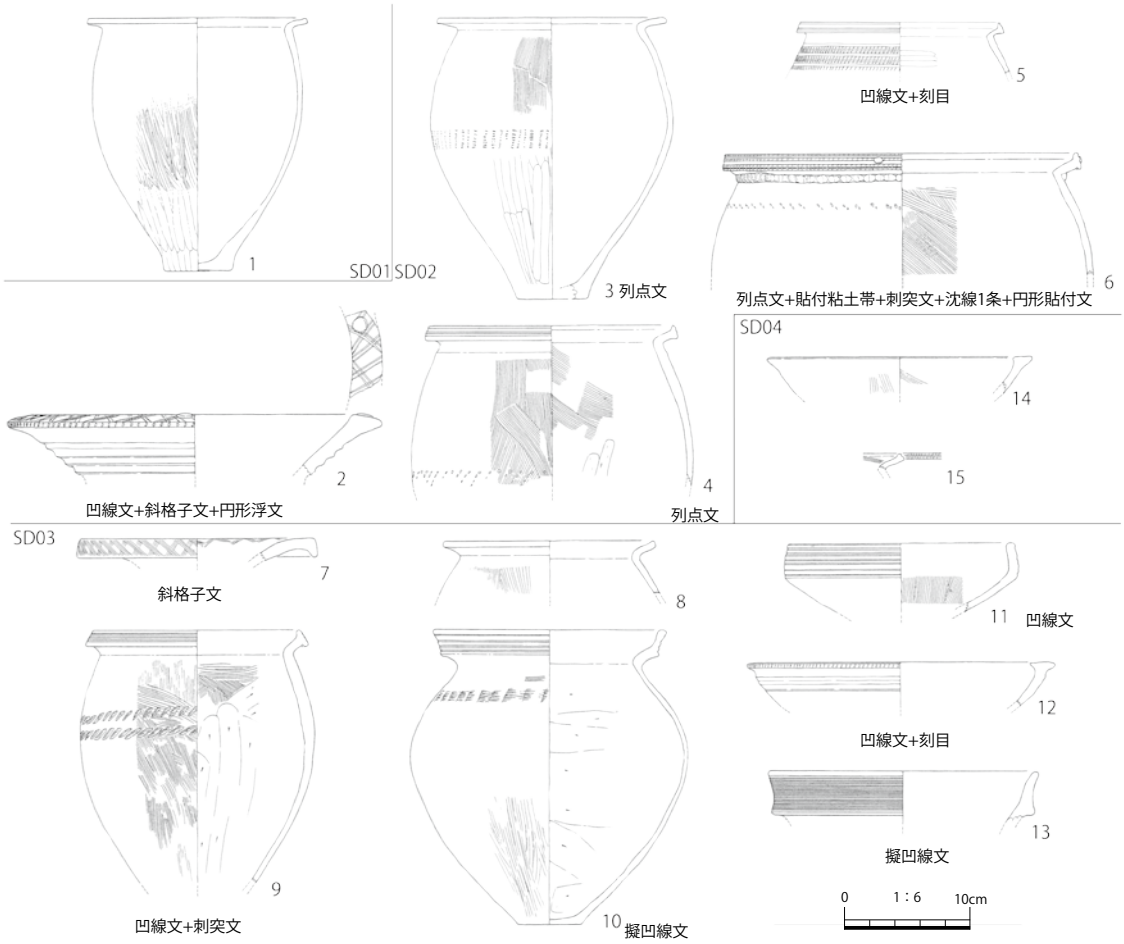


図 74　門田遺跡出土土器

遺跡Ⅰ－ａ・ｂ環壕・友田遺跡配石墓、欠田遺跡、二ッ縄手遺跡の資料にみられるものと類似し松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式に相当する。竪穴建物 SI49 出土土器は友田遺跡四隅突出墓、欠田遺跡、門田遺跡で同型式と考えられる個体がみられ、いずれも松本編年Ⅴ－２様式に相当するものである。

今回の整理の中で当地域では一様に、松本編年Ⅰ－４様式（弥生前期末）から遺物の出土が増加する傾向があることが指摘できる。この段階で神後田遺跡、田和山遺跡２つの環壕が築かれており、当地域の集落展開における大きな画期といえよう。また、神後田遺跡の土器様相の特徴として、弥生中期中葉～後葉（松本編年Ⅲ－１～Ⅳ－２様式）の土器が全く認められない点があげられる。この間の資料としては、田和山遺跡Ⅰ－ｃ・２・３環壕、雲垣遺跡、門田遺跡、欠田遺跡があり、特に田和山遺跡ではこの段階の土器が主体を占め、雲垣遺跡は出土土器が当時期の資料にほぼ限定されることが注目される。神後田遺跡の遺物の密度が一旦希薄になるのに対して、田和山遺跡の最盛期がこの頃にあるようである。Ⅴ様式段階に入ると田和山遺跡の環壕が廃絶し、同遺跡で集落が一旦終わりをみせる。友田遺跡では四隅突出墓が築かれる。神後田遺跡で当段階の竪穴建物が検出されていることから当段階では周辺の丘陵上に集落が展開したと考えられ、実際周辺の丘陵上に所在する福富Ⅰ遺跡（島根県 1997）や廻田遺跡（松江市 1988）では同時期の竪穴建物跡が検出されている。その後、弥生後期後半（Ⅴ－３～４様式）に相当する土器は今回扱った資料ではほぼみられない。欠田遺跡で少数存在する程度である。この頃に忌部川下流地域での遺跡の密度が希薄になるようである。土器様相のなかで最も新しい時期を示すのは古墳前期後半である。この頃神後田遺跡の北西の小丘陵上に茶山古墳（松江市 2014）が、田和山遺跡の山頂部に田和山２号墳が築かれており、低地の欠田遺跡で集落が展開するようである。

以上のことから、神後田遺跡と周辺遺跡出土土器の併行関係について整理を試みた。いずれもまとまった出土が見られ始めるのは弥生前期末～中期初頭（松本Ⅰ－４～Ⅱ様式）の段階であることが言え、当地域における集落遺跡の変遷を辿るうえで大きな画期となる段階と位置づけられる。その後の各遺跡の消長にはばらつきがみられ、弥生後期後半に一旦遺跡の密度が希薄になる。周辺遺跡の消長関係については第５節にて更に整理し詳述する。

（三宅）

註釈

(1) 今回の整理にあたり、松本岩雄氏（八雲立つ風土記の丘）、赤澤秀則氏（鹿島歴史民俗資料館）、池淵俊一氏（島根県文化財課）、岩本真実氏（古代文化センター）にご指導を頂いた。また、神後田遺跡、友田遺跡、雲垣遺跡、欠田遺跡出土土器の資料調査は松本岩雄氏、三宅が共同で行った。欠田遺跡出土資料については、所蔵元である島根大学法文学部より長期借用、分析、製図、本報告での掲載のご承諾を頂いた。

(2) 研究史上多くの呼称があるが、松本 2015 にならって「四隅突出墓」と称する。

参考文献

赤澤秀則 1992「Ⅳ．小結　1．出土遺物・時期」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
池淵俊一 2007「第１節　山陰における方形区画墓の埋葬理論と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター、島根県埋蔵文化財調査センター
川部浩司 2014「内面突帯の出現と展開―前期弥生土器にみる貼付突帯要素の淵源と地域性―」『弥生土器研究フォーラム 2014　弥生土器研究　の可能性を探る 2』
島根大学考古学研究会 1971「欠田遺跡試掘調査概要」『菅田考古』12 号
島根県教育委員会 1997『福富Ⅰ遺跡　屋形１号墳』
花谷めぐむ 1987「山陰古式土師器の型式学的研究―島根県内の資料を中心にして―」『島根考古学会誌』第４号　島根考古学会
松江市教育委員会 1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
松江市教育委員会 1988『廻田遺跡・廻田古墳』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 2000『門田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2001『二ツ縄手遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2001『雲垣遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告１・２』
松江市教育委員会・（公財）松江市スポーツ振興財団 2014『浜乃木四丁目宅地造成に伴う発掘調査報告書　茶山遺跡』
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』木耳社
松本岩雄 2015「弥生時代の松江―農耕社会の成立と展開―」『松江市史　通史編Ⅰ　自然環境・原始・古代』松江市
松本岩雄 2021『松江市ふるさと文庫 27　田和山遺跡が語る出雲の弥生社会』松江市歴史まちづくり部史料調査課
松山智弘 2000「小谷式再検討―出雲平野における新資料から―」『島根考古学会誌』第 17 集　島根考古学会

第２節　神後田遺跡出土の石器について

１．はじめに

ここでは、まず弥生前期末に比定される特殊な遺構として黒曜石の集石土坑（SK06）出土石器の性格のほか、環壕や住居跡の覆土より出土した石器について石材別の器種組成表を提示し、石器石材と製作技術の特徴を述べる。なお、環壕 SD115 から出土した石器群については、炭化物年代測定の数値から環壕が機能した時期より古相の石器である可能性が考えられる。このことから、当遺構出土の資料については先述の資料とは分けて言及することとし、神後田遺跡出土石器群の様相について概観したい。

２．黒曜石集石土坑の性格

神後田遺跡の中央部から検出された SK06 は、土坑内より多量の残滓類が出土し、それらが全て黒曜石で占められているという点で特殊性をもつ遺構である。当遺構は炭化物年代測定により弥生時代前期末に比定される。

表５　　黒曜石集石土坑（SK06）出土石器組成

器種 / 石材	上段：重量（g） 下段：点数（点）				
	石鏃未成品	RF	剥片	チップ	合計
黒曜石	0.63	1.75	1.41	18.03	21.82
	1	1	2	1016	1020

RF：二次加工のある剥片

石器の内訳は表５に示したとおり、石鏃の未完成品１点、二次加工のある剥片１点、剥片２点、チップ 1,016 点の合計 1,020 点となり、残滓類が主体をなす。これらは第４次調査において遺構を半截した埋土からの出土のため、土坑内全体ではさらに多量の点数になると予想される。出土したチップは非常に薄く、背面には大半に浅い押圧剥離痕が認められることから、石鏃の製作時に発生した調整剥片に伴うものであることが分かる。

土坑内全体の器種・石材組成は不明だが、現時点で黒曜石の残滓類で占められる状況から、これらの廃棄を目的に掘られた土坑である可能性がある。さらに、この周辺で石鏃が製作され、その際に発生したゴミをかき集めて土坑に捨てた掃除的な行為も想定されよう。島根県内における同時期の遺跡において、このような石器の残滓類が一括して土坑内から出土した例は報告されておらず、当地域の弥生時代における石器製作の様相が分かる遺構として、重要な成果であると言える。

３．遺構覆土から出土した石器

神後田遺跡の石器は、環壕や建物跡などの遺構から出土しているものが多い。おおむね弥生時代前期末～後期の遺構とされるが、これらの遺構との同時性や、時期を限定できる石器は僅かである。そのため、遺構出土の一括資料としてではなく、遺構覆土から出土した弥生時代の石器として取り扱うこととし、器種組成や石器石材の傾向などについて述べたい。なお、ここで扱う図表に関して、帰属時期が判明している黒曜石集石土坑(SK06)及び住居跡(SI49)床面出土の水晶はカウントしていない。

石器組成

石材別の器種組成表を表６に示した。このうち、製作石器の器種組成としては石鏃未完成品、楔形石器、スクレイパー、石錐、二次加工剥片、使用痕を有する剥片、石包丁、磨製石斧片、敲石があり、加えて石器を製作した痕跡を示す残核や剥片、チップも出土している。組成としては狩猟具や加

工具、残滓類などの生活痕跡を示す道具等が一通り揃っているが、製作石器の点数はそれぞれ１～２点ほどで、極めて希薄である。また、石鏃は完成品が出土しておらず、石包丁や磨製石斧などを見ても大きく欠損しているものが目立つ。当遺跡については丘陵上部が削平を受けており、環壕の底部付近のみ残存している状況も石器の残存状況に大きく影響していると思われるが、基本的には小規模な生活の単位が反映されているとみられる。

石器石材

礫を除く製作石器の石材について、大きく分けると黒曜石、玉髄系の石材、安山岩、流紋岩、頁岩、凝灰岩、砂岩、珪質岩、塩基性片岩がある(註1)。剥片石器は黒曜石と玉髄系にやや偏り、残滓類もここに集中する。安山岩は剥片とチップのみで定形的な石器はなく、目的物は不明である。頁岩は石包

表６　　遺構覆土出土石器の石材別器種組成

	上段：重量（g） 下段：点数（点）															
	石鏃未成品	楔形石器	SC	石錐	板状石製品	RF	UF	石包丁	磨斧片	敲石	残核	剥片	チップ	つぶて石	礫	合計
黒曜石	1.94	3.67		0.69							46.81	6.74	5.12			64.97
	1	2		1							4	8	129			145
玉髄						3.68	0.56				247.82	204.27	4.61			460.94
						1	1				4	23	29			58
メノウ											37.41	17.62	3.94			58.97
											2	4	6			12
石英													4.96		8.45	13.41
													4		1	5
碧玉												14.49	1.16			15.65
						1						1	5			7
安山岩			17.64									13.17	1.17	10873	644.07	11549.05
			1									3	27	10	8	49
頁岩								27.15				6.16				33.31
								1				2				3
流紋岩										474.88				5457	39.75	5971.63
										1				4	6	11
玄武岩														1875		1875.0
														1		1
凝灰岩											73.79	3.62		348	135.76	561.17
											1	1		3	7	12
花崗岩														10956	210.33	11166.33
														15	4	19
アプライト														1700		1700.0
														1		1
長石															7.0	7.0
															1	1
砂岩					11.93											11.93
					1											1
珪質岩											67.66			2655	37.45	2760.11
											1			1	2	4
塩基性片岩									37.59							37.59
									1							1
不明													1.82			1.82
													20			20
重量	1.94	3.67	17.64	0.69	11.93	3.68	0.56	27.15	37.59	474.88	473.49	266.07	22.78	33864	1082.81	36288.9
合計	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	12	43	220	35	29	350

SC：スクレイパー　RF：二次加工のある剥片　UF：使用痕（微細剥離痕）のある剥片

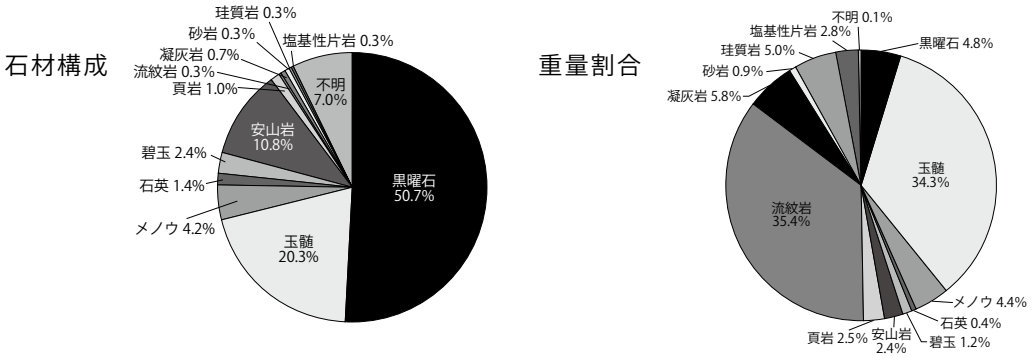


図 75　　遺構覆土出土石器類の石材構成と重量割合（つぶて石、礫除く）

丁が 1 点出土しているが、他は剥片 2 点のみで製作痕跡までは認められない。敲石や磨製石斧片についてはいずれも硬質な石材を用いている。以上のことから、目的物が不明な石材も存在するが、用途や目的の石器に応じて石材を選択していたことが分かる。

製作技術

以上の石材の内、残滓類が集中する黒曜石と玉髄・メノウについて、点数は乏しいが製作技術について述べたい。まず、黒曜石は剥離面または平坦な自然面から剥片剥離を行うものと、両極打法により剥片剥離を行うものの 2 種類がある。剥片の長辺は平均して 2cm 程であり、これに対応して残核も平均 3cm 大と比較的小さなものである。次に、玉髄・メノウについては両極打法による剥離は見られず、1 枚ずつ剥片剥離を行っているものとみられる。剥片の大きさは両者とも平均 3cm 程で変わりないが、残核の大きさは玉髄が約 4.5cm、メノウが約 2cm となっている。これは、玉髄の残核 4 点のうち、3 点がいわゆる「カド石」と呼ばれる赤色の玉髄を用いており、不定形かつ不規則な剥離がなされているためである。必要な剥片を獲得した後は使い切ることなく捨てている傾向にある。

4．SD115 出土の石器について

SD115 は「環壕」であるが、石器が出土したのは主に壕中央の落ち込みの埋土からである。渡邉正巳氏によればこの落ち込みは倒木痕の可能性があるとしており、炭化物年代測定では縄文前期～中期の数値が得られている（第 5 章第 1 節詳述）。本遺構出土の石器石材をみると玉髄やメノウ、碧玉が主体をなしており、どれも良質なものである。器種組成としてはほぼ剥片類が占めている。これらの剥片剥離作業の特徴として、打面は調整面を持つものや平坦面を持つものが多く認められ、打面の作り出しが行われてる点があげられ、打面および先行する剥離面（背面）にはパンチ痕が残るものもある。また、主要剥離面にはバルブやバルバスカーが発達し、やや厚手の剥片剥離が行われている。

本遺構においては時期区分の標式となるような石器の出土が皆無であり、時代や時期の特定は困難であるものの、先述した特徴から、玉類の製作に起因する石器というよりも古く遡る様相を示すものと考える。

5．まとめ

以上、神後田遺跡出土の石器群について、器種組成と石器石材、製作技術の面から概観してきた。当遺跡の一連の調査はトレンチ調査によるものであり、限られた資料をもとにしたものである。あくまでも一面的な様相に過ぎないが、全体を通してみても石器群の規模としては非常に小さいものであり、主に剥片石器の製作については自家消費を目的に行っていたものと思われる (註 2)。なお、磨製石斧や石包丁等の道具類は製作痕跡が認められておらず、周辺の遺跡から搬入された可能性も考えられる。

また、黒曜石の残滓類が多量に出土した特徴的な遺構として SK06 を取り上げた。これとおおよそ同時期とされる遺構として、田和山遺跡山頂部の三日月状加工段がある。加工段の埋土層からは黒曜石製の石鏃未成品や原石が集中的に出土している。黒曜石が集中的に出土しているという点で、神後

田遺跡との共通性を持つ遺構である。同時期の両遺跡において、他の石材と区別され遺された黒曜石は、その利用のされ方に特別な意味を有していたのかもしれない。これについては今後も検討の余地がある。神後田遺跡の近隣においては、剥片石器だけで 1,498 点出土している田和山遺跡や、9,506 点出土した西川津遺跡（鶴羽地区）など、大規模で拠点的な遺跡が存在している（伊藤 2018）。神後田遺跡を含め、弥生時代における当地域の遺跡間関係を解明するためにも、石器製作技術や石材消費過程を定量的な分析データをもとに検討していくことが今後の課題と言える。

（灘）

註釈

(1) 中村唯史氏（島根県立三瓶自然館）のご教示による。
(2) 稲田陽介氏（島根県文化財課）のご教示による。

参考文献

伊藤徳広 2018「弥生時代の隠岐産黒曜石の利用―島根県を中心として―」『島根県古代文化センター研究論集 第 19 集 隠岐産黒曜石の獲得と利用の研究』島根県古代文化センター pp.143-152

第 3 節　神後田遺跡の弥生時代前期環壕について

1．はじめに

神後田遺跡の弥生時代前期環壕は本遺跡の最も重要な特徴を示す遺構である。山陰地域での当時代の環壕の事例は他地域と比べ比較的少数であるが、その分布や類型については濱田竜彦氏によって整理がされている（濱田 2015）。濱田氏によれば、山陰地域の環壕はいずれも山塊・丘陵上に位置し、内部空間が空閑地（居住域を囲繞しない）の事例が一般であるという (註 1)。この特徴は本報告の神後田遺跡にも共通して言え、特に、神後田遺跡の環壕を考察するうえで、当該期における出雲地域最大規模の環壕を有する田和山遺跡と約 500m という近距離に立地し、両者の成立時期が土器の年代観からおよそ同時期であるという点が重要と考える。本節では、神後田遺跡と田和山遺跡の環壕が持つ特徴について改めて整理し、周辺地域の事例と比較しながらその性格について述べたい (註 2)。

2．神後田遺跡の環壕 (図 76)

遺跡は丘陵上に位置する。環壕が廻る地点の標高は 22m で低地部との比高差は 16m を測る。丘陵の西側は宍道湖岸が迫っており、古地形の分析から丘陵の眼下には宍道湖に注ぐ忌部川河口部や沼状の安定しない湿地帯が広がっていたと考えられる（第 2 章第 2 節、第 4 章第 4 節詳述）。本遺跡の環壕は計 6 か所のトレンチで検出している（第 3 章第 2 節詳述）。規模は東西 47m、南北 67m を測る楕円形であり、完全に囲繞せず北で途切れる（T20 検出 SD115）。このことから、遺跡の北側が出入口であった可能性が想定される。囲繞面積は約 2000 ㎡である (註 3)。壕の断面形は V・U・逆台形がみられる (図 77)。溝底面の標高は 20.5 ～ 21.75m を測る。SD01、SD115 は土層状況から掘り直しが認められる。各壕から出土した土器は松本編年Ⅰ－ 4 ～Ⅱ様式に収まるもので、弥生前期末～中期初頭の年代を示す。

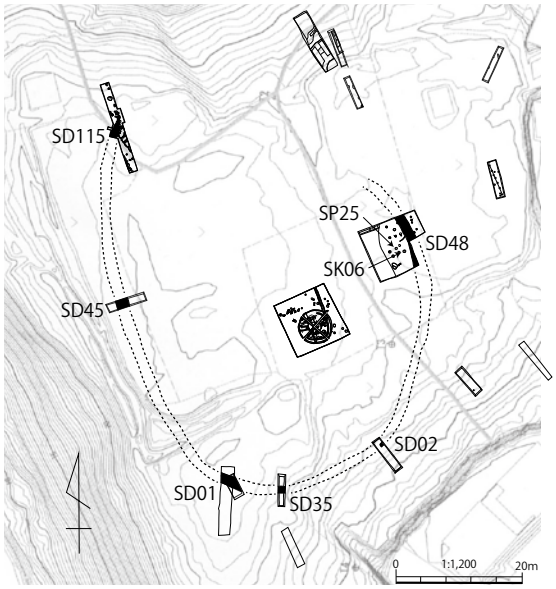
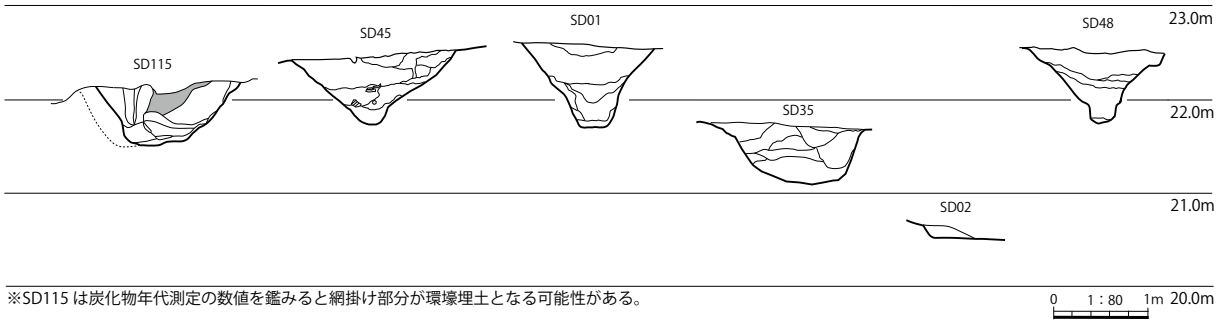


図 76　神後田遺跡の環壕

層位毎の時期差はみられない。環壕の内部空間は判然としないが、SP25 から弥生前期と思われる土器が出土しており、また、SK06 の炭化物年代測定の数値からこれら 2 つの遺構は環壕とおよそ同時期に機能していた遺構と考えられる。このことから、確実に居住域といえる遺構は見つかっていないが、石器製作に伴う遺構（SK06）等を環壕が囲っていたものと判断される。

3．田和山遺跡の環壕 (図 78)

田和山遺跡は標高 45m の丘陵頂部を環壕が囲繞する。低地部との比高差は 38m である。丘陵は独立丘陵であり、神後田遺跡と比べると宍道湖から東へやや内陸に位置する。西側の低地部を忌部川が蛇行しながら流れる。環壕は丘陵の尾根筋に沿って緩やかに湾曲しながら掘られており、3 時期の

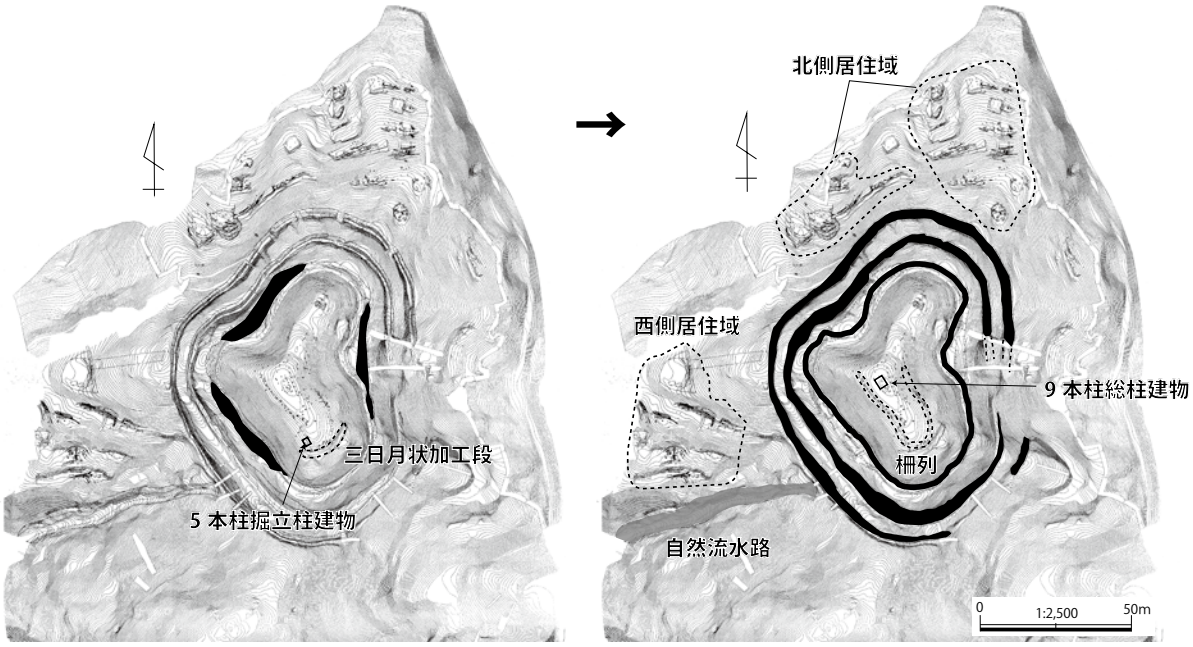


※SD115 は炭化物年代測定の数値を鑑みると網掛け部分が環壕埋土となる可能性がある。

図 77　神後田遺跡環壕の断面形と標高

壕が存在する。最古段階の環壕はⅠ－ａ環壕であり、山頂部に最も近い壕である。尾根の谷筋を踏襲するように掘削されており、3か所で途切れている。断面形はＵ字形で、上幅は推定5m、深さは1.6mとされる。次にⅠ－ａ環壕とおよそ同地点にⅠ－ｂ環壕が掘削される。Ⅰ－ａ環壕の再掘削と思われる。断面形はV･U･逆台形と地点によって様々で、深さ 0.3 ～ 1.2m、上幅は推定３～５ｍとされる。環壕で囲繞された空間は長軸73m、短軸45mを測る。両遺構の出土土器は松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式（弥生前期末～中期初頭）に収まるものである。環壕内部には、５本柱建物、黒曜石片が集中して出土した遺構（三日月状加工段と報告される。）があり、居住域はみられない。

弥生中期中葉になるとⅠ－ａ・ｂ環壕とほぼ同地点にⅠ－ｃ環壕が掘削され、外へ第２環壕、第３環壕が新たに出現し三重環壕が成立する。また、この頃に壕の北・西側の丘陵斜面に居住域が展開する。この段階の環壕は断面形がＶ字形で、上幅が 0.4 ～ 2m（Ⅰ－ｃ環壕）、1 ～ 6m（第２環壕）、1.6 ～ 4.3m（第３環壕）、深さは 1.5m（Ⅰ－ｃ環壕）、1.5m 以上（第２環壕）、約 2m（第３環壕）である。規模は第３環壕で囲繞された空間で長軸 107m、短軸 80m で、出雲地域では最大規模である。内部には宍道湖に近い山頂部に９本柱の総柱建物が築かれ、山頂部縁辺に柵列がめぐる。



弥生前期末～中期初頭（Ⅰ-a・ｂ環壕）　　弥生中期中葉～後葉（Ⅰ-c・2・3 環壕）

図 78　田和山遺跡の環壕の変遷

前段階より環壕の規模を拡大し、環壕の外側に居住域が展開することから、三重環壕段階が田和山遺跡の最盛期といえる。環壕内部に居住空間がみられないことから「環濠空閑地」に分類され、環濠内部に居住域もしくは、貯蔵穴を配置する環濠集落とは特異な様相を示す。

4. 各地域の弥生時代前期環濠

日本海沿岸地域、北部九州地域、瀬戸内地域、近畿地域に分け各地域の様相について概観する。集成した環濠の一覧は表 7 に示し、位置は図 79 に示した。また、長軸・短軸が分かるものを抽出し、規模を図 80 に示した。

日本海沿岸地域

当該期の環壕は出雲、西伯耆、但馬、丹後地域にみられる。出雲・西伯耆地域は濱田氏の指摘のように山塊・丘陵上に立地する環壕の事例が主体である。出雲地域では前述の神後田遺跡、田和山遺跡のほか、要害遺跡、経塚鼻遺跡がある。田和山遺跡を除けば、壕の時期は弥生前期末～中期初頭と比較的まとまった年代をどの遺跡も示しており、短期間の環壕といえる。

西伯耆地域の遺跡としては清水谷遺跡、天王原遺跡、宮尾遺跡、大塚岩田遺跡、今津岸の上遺跡がある。集落規模は最大のもので今津岸の上遺跡の長軸 130m、短軸 80m があるが、他は概ね 40m 前後の小規模なものであり、出雲地域の環壕の集落規模と似た様相を示す。

伯耆地域から因幡、但馬地域を越え丹後地域に入ると扇谷遺跡、途中ヶ丘遺跡、温江遺跡が存在する。山陰地域と同じく丘陵上に立地する遺跡であり、扇谷遺跡、途中ヶ丘遺跡は標高 50m 以上の高所にあり、温江遺跡は標高 18m の低丘陵に位置する。いずれも長軸が 100 ～ 200m と出雲・伯耆地域の事例と比較すれば規模が大きい様相を示す。存続期間は扇谷遺跡、温江遺跡が前期末～中期初頭、途中ヶ丘遺跡が前期～後期となっており、短期で廃絶するものと長期的に遺跡が存続するものが存在するようである。扇谷遺跡、途中ヶ丘遺跡では陶塤が出土している。禰宜田佳男氏は陶塤の出土や環壕の断面形・規模の検討から、扇谷遺跡の環壕の系譜が近畿ではなく日本海ルートの中で伝わった可能性を指摘している（禰宜田 1990）。但馬地域は山間部に東家の上遺跡が存在する。長軸 80m、短軸 30m を測り、丹後地域の事例と比較すると小規模である。

このように日本海沿岸地域では、当該期の環壕は丘陵上に位置し、その規模は出雲・伯耆、但馬地域では長軸 40m 前後と小規模で、丹後地域では長軸 100m 以上と大規模であることがわかる。存続期間は前期末～中期初頭と短時期のものと、前期末に出現し、中期または後期まで存続する遺跡が存在する。総じて出現時期は前期末葉であり、当地域における環壕の出現はこの頃とみてよいと考える。後述の北部九州、瀬戸内、近畿地域と比較すると環濠の出現はやや遅れる。

北部九州地域

北部九州地域は旧国でいう長門、筑前、築後、肥前、豊前の範囲を示す（註 4）。当地域における弥生時代の環濠集落の研究は数多くあり（吉留 1994a･1994b、武末 1998、久住 2008、山崎 2010 など）、日本列島のなかで最も早く環濠集落の存在が認められる地域である。那珂遺跡、江辻遺跡を初現とし、早良平野、福岡平野、筑紫平野北部の三国丘陵一帯に集中して環濠集落が展開する。早良、福岡平

表７　　弥生時代前期環濠（壕）集成（北部九州～近畿）

No.	地名		遺跡名	地形※	標高(m)	比高差(m)	環濠（壕）の時期	環濠（壕）				環濠（壕）の規模(m)		内部構造	分類			備考
								拡張	再掘削	本数	断面形	長軸	短軸		川部	藤原	濱田	
1	近江		川崎遺跡	平	95		前期	○	－	1→3	U	200	160	－	Ⅱ	-		
2	畿内	山城	雲宮遺跡	平	11		前期中葉	－	－	2～3	逆台・U	120	100	炉跡 2	Ⅱa	Ⅰ - a1		
3		摂津	大開遺跡	平	3		前期前葉～中葉	○	×	1→1	V・逆台	40/70	40	竪穴 5、貯蔵穴 11	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1	Ⅰb	
4			安満遺跡	平	7～10		前期中頃～後半	○	×	2	逆台	100/160	90/150	－	Ⅱ	Ⅰ - b1		
5			東奈良遺跡	平	10		前期中葉～中後葉	－	－	3	U	120	80	－	Ⅱ	Ⅰ - a1		
6		河内	田井中遺跡	平	10～12		前期中葉～後葉	×	－	2	?	130	110 ?	竪穴 3	Ⅱa	Ⅰ - a1		
7			池内遺跡	平	8		前期中頃	－	－	2	?	100 ?	75	竪穴 1 ? 掘立柱 2 ?	Ⅱa	Ⅰ - a1		
8		和泉	池上・曽根遺跡	平	8～13		前期後半～中期末	○	○	2	V	270/320	160/320	大型建物 (中期)		Ⅰ - c1		
9		大和	唐古・鍵遺跡	平	47		前期後半～後期中葉	○	○	2→多重	U・逆台	500	－		Ⅱ	Ⅰ - c1		
10			平等坊・岩室遺跡	平	52		前期～後期	○	○	3→多重	U・逆台	250	－		Ⅱ	Ⅰ - b1		
11			多遺跡	平	51～53		前期後半～中期前半	×	－	2～3	U	350	300	－		Ⅰ - c1		
12			鴨都波遺跡	台	100	10	前期後葉～後期	○	×	1→1	V	350	250	竪穴 1	Ⅰ (ⅱ)c - 1	Ⅰ - c1		
13			四条シナノ遺跡	平	63		前期中葉～中期前葉	－	－	1→1	逆台	150	100	土坑	Ⅱ	Ⅱ ? - a1		
14			川西根成柿遺跡	平	68～69		前期中葉	○	×	2→3	V・逆台	130/160	100 ?	竪穴 1 以上・掘立柱 3 以上	Ⅱ	-		
15	紀伊		竪田遺跡	平	2		前期中葉～中期前葉	－	－	2～3	逆台・V	150	120	竪穴 23、掘立柱 3	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1		
16			太田黒田遺跡	平	4～5		前期後葉～中期前葉	×	×	2	逆台・V	200 ?	－	竪穴 1	Ⅱ	Ⅰ - b1		
17	丹波		太田遺跡	平	100		前期末～中期初頭	×	－	2	V・逆台	160	－	土坑	Ⅱ	Ⅰ - a1		
18	丹後		扇谷遺跡	丘	56～66	30～40	前期末～中期初頭	×	－	2	U・V	200	180		Ⅰ (ⅱ)	Ⅱ ? - b3		
19			途中ヶ丘遺跡	台	51	5～6	前期～後期	○	×	2	逆台	100	－		Ⅰ	Ⅰ ? - a3		
20			温江遺跡	台	16	10	前期末	－	－	1	逆台	100	－	柱穴・土坑	Ⅰ	-		
21	但馬		東家の上遺跡	丘	90～100	35	前期末～中期初頭	－	－	1	V	60	30	－	Ⅰ	Ⅱ ? - a3		
22	伯耆		清水谷遺跡	丘	55	32.2	前期末～中期前葉	×	×	1	V・逆台	45	30	土坑	Ⅰ (ⅱ)c - 1	Ⅱ - a3	Ⅱb	
23			天王原遺跡	台	30	16	前期末	×	×	1	V	40	20	－	Ⅰ	-	Ⅱb	
24			諸木遺跡	台	20	6	前期末	－	－	1	V	－	－	－	-	-	-	
25			宮尾遺跡	台	20	6	中期前葉	－	－	1	V	40	39	－	Ⅰ	a2	-	
26			大塚岩田遺跡	台	27	17	前期後半	－	×	3→2	V・逆台	－	－	－	Ⅰ (ⅰ)a - 3	-	Ⅰc	
27			今津岸の上遺跡	台	10	6	前期末	×	－	1	V	130	80	－	Ⅰ	a3	-	
28	出雲		田和山遺跡	台	45	38	前期末～中期後葉	○	○	1→3	V・U	73/107	45/80	掘立柱 2	Ⅰ (ⅱ)c - 1	Ⅱ - a2	Ⅱb	
29			神後田遺跡	台	22	16	前期末～中期初頭	×	○	1	逆台・V・U	67	47	土坑 1、柱穴 1	Ⅰ (ⅰ)c - 1	-	Ⅱb	
30			要害遺跡	丘	95～100	57～62	前期末～中期前葉	×	○	1	V	45	25	－	Ⅰ (ⅱ)c - 1	Ⅱ - a3	Ⅱb	
31			経塚鼻遺跡	丘	41	26	前期末～中期前半	×	×	1	V	30	－	柱穴・土坑群	Ⅰ (ⅱ)c	Ⅱ - a3	-	
32	吉備		百間川沢田遺跡	平	3		前期後半	×	×	1	逆台・U・V	90	80	竪穴 5、土坑	Ⅱ	Ⅰ - a1	Ⅰb	
33			清水谷遺跡	平	19		前期中葉～中期前葉	×	×	1	逆台・U	70	60	竪穴 6、掘立柱、柵列	Ⅱa - 1	Ⅰ - a2	Ⅰb	
34	備後		大宮遺跡	平	13		前期後葉～中期前葉	×	×	2～3	逆台	80	70	－	Ⅱ	Ⅱ - a1		
35			亀山遺跡	丘	37	24	前期前半～中期前葉	○	－	1→2→3	V～U	70/150	50/60	－	Ⅰ (ⅰ)	Ⅱ ? - a2		
36			御領遺跡	平	15～18		前期後半～中期中葉	×	○	1	U	120	－	－	Ⅱ	-		
37	讃岐		龍川五条遺跡	平	22		前期中葉～後葉	○	×	1→2	U	85	65	竪穴 4・掘立柱 1	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1		
38			五条遺跡	平	20		前期後半～中期初頭	－	×	2	逆台	70	－	竪穴 1 以上・掘立柱 1	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1		
39			中の池遺跡	平	10		前期中葉～中期前葉	○	○	2→3	V	85	70	竪穴多数・掘立柱 1	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1		
40			鴨部・川田遺跡	平	7		前期中葉～中期前葉	×	○	1	逆台	85	65	?	Ⅱb - 1	Ⅰ - a1		
41			鬼無藤井遺跡	平	4		前期中葉	×	×	2	逆台→U	95	75	竪穴 4・掘立柱 1	Ⅱa - 1	Ⅰ - a1		
42			天満・宮西遺跡	平	68～69		前期前半～後半	×	×	1	U・逆台	80	65	－	Ⅱb - 1	-		
43			汲仏遺跡	平	18.5		前期中葉	×	×	2	V・U	95	75	土坑	Ⅱ	-		
44	阿波		庄・蔵本遺跡	平	3		前期中葉～後葉	×	－	2	V	120 ?	－	土坑	Ⅱ	Ⅰ ? - a1		
45	土佐		田村遺跡	平	6～8		前期前葉～中葉	×	×	2～3	U・V	220	130	－	Ⅱb - 1	Ⅰ - a1		
46	伊予		姫坂遺跡	台	30	15	前期後葉～中期初頭	－	－	1	U	80～100	60～70	?	Ⅰ	-		
47			来住Ｖ遺跡・来住廃寺 20 次	台	40	20	前期末～中期初頭	－	－	2	U	20	－		Ⅰ	Ⅱ ? - a2		
48			岩崎遺跡	平	37		前期後葉～中期前葉	×	○	2	逆台	100	－	土坑 179	Ⅱ	Ⅱ - a1		
49			斎院烏山遺跡	丘	10.8	3.4	前期末～中期初頭	×	×	1	U	60	35	貯蔵穴	Ⅰ (ⅱ)b - 1	-		
50			久米高畑遺跡 23・25・29・70 次	台	37	17	前期末～中期初頭	－	－	3	逆台・U	100 ?	－		Ⅰ	Ⅱ - a2		
51	周防		下東遺跡	平	17		前期末～中期初頭	×	×	1～2	U・V・逆台	132	48	－		Ⅱ - a1		
52			宮原遺跡（第 1 環濠）	台	46	35	前期後半	×	×	1	V・逆台	107	87	土坑 47	Ⅰ (ⅱ)a	Ⅱ ? - a2	Ⅱa	
53	長門		綾羅木郷遺跡	台	10～15	10	前期～中期	○	－	1→2	V	180	167	－	Ⅰ (ⅰ)a - 1	Ⅱ - c2	Ⅰa	
54			吉永遺跡	台	4～15	5	前期後半～末	×	×	4	U・V・逆台	100	－	土坑	Ⅰa - 1	Ⅱ ? - a2	Ⅰa	
55	筑前		江辻遺跡	平	11		早期	○	○	1→2	V・逆台	65	－	竪穴、掘立柱、貯蔵穴	Ⅱa - 1	非環濠集落		
56			那珂遺跡	平	5～11		早期	×	×	2	V・逆台	65	－	不明	Ⅰa - 1	a2		
57			那珂遺跡群	平	6		前期後葉～中期初頭	×	×	1	V・逆台	40	－	貯蔵穴 14、土坑		Ⅱ - a2		
58			板付遺跡	平	11		前期初頭	×	×	2	V	110	81	貯蔵穴	Ⅰa - 1	Ⅱ - a2		
59			有田遺跡	平	13		前期初頭～後半	○	○	1	V	300	200	住居址		-		
60			光岡長尾遺跡	丘	32		前期後半	×	－	1	V	46	42	貯蔵穴 52		Ⅱ - a2		
61			今川遺跡	平	14		前期前半	×	×	1	V・逆台	80	60	－		a2		
62			大井三倉遺跡	丘	22	14	前期中葉	×	○	1	V	70	－	－	Ⅰa - 2	Ⅱ - a2		
63	筑後		三沢北中尾遺跡	丘	32	17	前期後葉～中期初頭	×	○	1	V	70～	70	貯蔵穴 140、竪穴 2		Ⅱ - a2		
64			上岩田遺跡	台	18	9	前期前半	×	○	1	逆台	60	－	住居？		Ⅱ ? - a2		
65			横隈北田遺跡	丘	33～35	13～15	前期後半	×	○	1	U	64	45	貯蔵穴、土坑	Ⅰb - 2	Ⅱ - a2		
66			横隈山遺跡	丘	28～45	7～24	前期～中期	×	－	1	V	87	55	貯蔵穴		Ⅱ - a2		
67			津古内畑遺跡	丘	30～40	6～16	前期中頃～中期初頭	×	－	1	V	60	－	貯蔵穴		Ⅱ - a2		
68			三沢南崎遺跡	台	20	5	前期前半	×	○	1	V	50	－	貯蔵穴 9、住居？		Ⅱ - a2		
69			大保横枕遺跡	平	14.9		前期前葉～末	×	○	2→1	V～逆台	79.6	78.8	竪穴 2、貯蔵穴、土坑、ピット	Ⅱb - 2	Ⅱ - a2		
70			立野・大坪遺跡	平	23		前期後半～中期後半	×	－	2	V・逆台	50	－	掘立柱 4		a1		
71	肥前		町南遺跡	台	20	10	前期後葉～中期前葉、後期	×	○	1	V・U	200	－	Ⅰ期：貯蔵穴のみ、住居なし		-		
72			吉野ケ里遺跡	台	20	10	前期前半～終末期	○	○	1→多重	V・逆台	160	140	竪穴、貯蔵穴		Ⅰ - c2		規模は前期段階
73			小楠遺跡	台	8～17	3～12	前期前半	×	×	1	逆台	170	140	－		Ⅱ ? - a2		
74			八ツ並金丸遺跡	丘	56	36	前期後半	×	×	1	V	28	26	竪穴 1、貯蔵穴 3		Ⅱ - a2		
75	豊前		葛川遺跡	台	20	12	前期後葉～中期前半	－	－	1	V	57	43	貯蔵穴	Ⅰb - 1	Ⅱ - a2		
76			神手遺跡	台	32	3	前期後葉～中期前半	－	－	1	V	40	40	貯蔵穴 20		Ⅱ - a2		

※地形の記載は、台：台地、丘：山塊・丘陵、平：沖積地、微高地、自然堤防といった低地部を示す。
※環濠の規模は変遷がある場合「／」の前後で表記し、複数環濠の場合は外濠の規模を記載している。
※集成表は各遺跡の報告書のほか、埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988、大阪府立弥生文化博物館 2001、川部 2009、藤原 2011 を参考に作成した。そのため内容の一部は川部 2009、藤原 2011 から引用している。

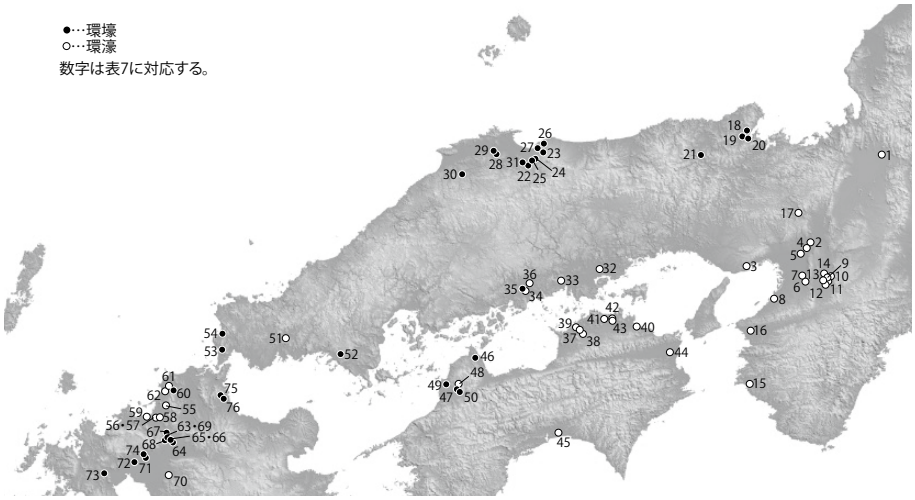


図 79　弥生時代前期環濠（壕）の分布 (北部九州～近畿)

野の環濠集落は、那珂遺跡、板付遺跡、有田遺跡が代表される。これらの遺跡は規模が長軸 100 ～ 300m を測るような大規模なものであり、貯蔵穴や住居跡を囲繞している。吉留氏は当地域の環濠集落の変遷を示しており（吉留 1994a、1994b）板付遺跡、有田遺跡の環濠が機能した段階に、「少なくとも平野を単位とする新たな社会組織が成立し、拠点集落の主導により集約的労働を可能とする集団組織が存在した。」としている。また、福岡平野に限られていた環濠集落が豊前、肥前、周辺の筑前へ分布を拡大させる頃、瀬戸内、近畿、東海へ分布を拡大させたことを指摘している。

三国丘陵（福岡県小郡市）に立地する環濠集落は、標高 18 ～ 52m 程の丘陵上に存在する。禰宜田氏は環濠の規模の検討から、前期前半に成立する板付遺跡や有田遺跡のような大規模環濠と、前期後半以降にみられる三国丘陵の遺跡群や葛川遺跡のような中・小規模環濠を区別しており（禰宜田 1990）、また中間研志氏は後者を「貯蔵穴専用環濠」と分類している（中間 1990）。

三国丘陵に分布する環濠集落については山崎頼人氏による論考がある。山崎氏によれば集落を囲繞するものと、貯蔵穴を囲繞する小規模環濠の双方がみられるとする。環濠は地形の制約から、全周せずに地形を取り込んで区画するものが多いとし、この特徴は北部九州の平野部に立地する環濠集落とは異なる特徴であることを説いている (註 5)（山崎 2010）。

瀬戸内地域

太平洋沿岸（高知平野）、瀬戸内海響灘沿岸域（松山平野）、瀬戸内海南岸域（高松平野）に多く分布する。出原恵三氏は高知平野所在の田村遺跡が前期前葉と当地域で最も早く出現する遺跡とし、前期末には前段階まで規模拡大の傾向がみられた環濠が解体、居住域が分散、小規模な居住域が微高地上に散在する形態へ変化することを指摘している（出原 2004）。また、瀬戸内海南岸域（松山平野・高松平野）では「小規模で比較的等質的な居住域が点在する景観を想定することができ」、「瀬戸内側は、前期末に環濠集落が盛行する地域」としながらもその存続期間は前期後葉～中期初頭と短期間であり、「環濠集落が核となって集落が拡大発展するような現象は全く認められない」とする。

松山平野における事例は柴田昌児氏により詳しく整理されている（柴田 2008、2009）。柴田氏は松山平野の弥生時代の遺跡の分布から 8 つの遺跡群を捉え、各段階における集落の展開について考察している (註 6)。柴田氏は同平野における弥生前期後葉～中期初頭の環濠集落は集落内に複数の環濠

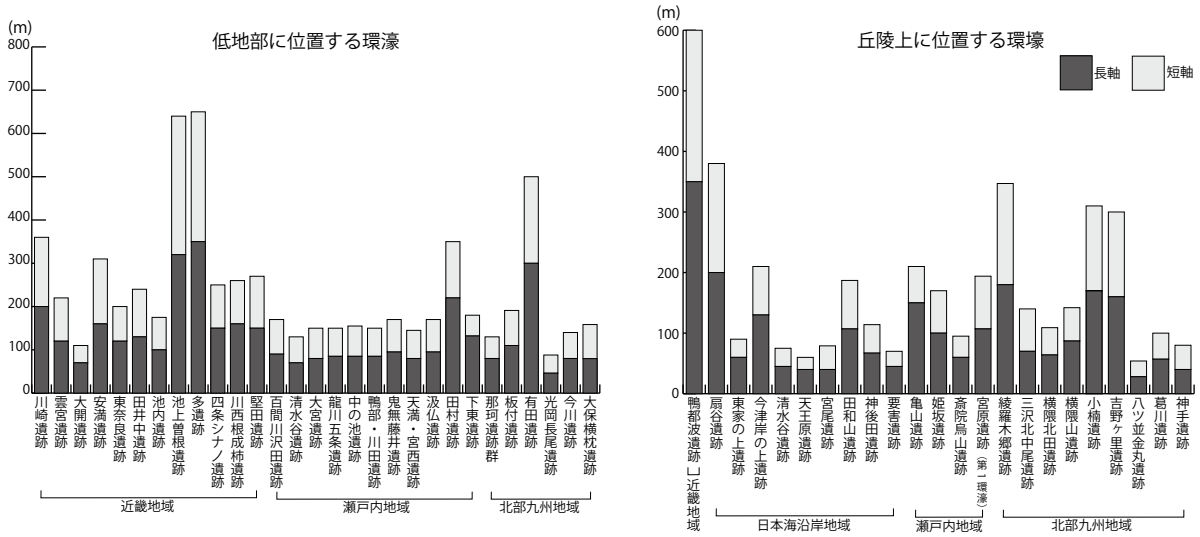


図 80　環濠（壕）の規模

が存在し貯蔵穴群の一部を区画する傾向があるとし、環濠は集落内部の構造物である可能性が高いとする。いずれも前期末～遅くとも中期中葉までを存続期間とする。また、備後・吉備・讃岐・阿波・土佐では低地に立地する遺跡が多いのに対し、松山平野では台地や段丘上に立地する事例が多い点が特徴である。

瀬戸内地域の事例を概観すると、弥生前期に成立した環濠集落はいずれも短時期的なものであり集落の規模は小さく近隣に分散する傾向がある点が特徴としてあげられる。また、囲繞する空間には貯蔵穴や建物跡を配置するものが一般的である。例外として田村遺跡のような内部空間に居住域がみられない例が存在する。

近畿地域

当地域における環濠集落の研究史は数多い（森井 2001、秋山 2007、川部 2009、森岡 2011、桑原 2018 など）。大開遺跡（前期中頃）が最古段階の環濠と位置づけられ、前期末葉に遺跡数が増加する傾向にある。概して平野部に立地し、環濠内部に居住域が展開するものが一般的である。禰冝田氏、中間氏は当地域の環濠断面形が U 字のものが一般的にみられるとし、V 字形が通用されている北部九州との違いを指摘している。また、森井貞雄氏は当地域の環濠の規模の検討から（註 7）、唐古・鍵遺跡や池上・曽根遺跡が前期から中期へ継続し大規模化する点において、前期段階から相対的に規模が大きかった可能性を指摘している（森井 2001）。

森岡秀人氏は近畿の弥生時代環濠集落について「第 1 段階：無環濠着床期」「第 2 段階：単純環濠点在期」「第 3 段階：肥大化環濠成立期」「第 4 段階：同・環濠隆盛期」「第 5 段階：環濠解体・消滅期」と変遷を辿ることを指摘している (森岡 2011)。このうち弥生前期は「第 2 段階：単純環濠点在期」に該当し、雲宮遺跡、大開遺跡、東奈良遺跡、安満遺跡、田井中遺跡、四条シナノ遺跡、川西根成柿遺跡、堅田遺跡などが事例としてあげられる。これらの遺跡は楕円形の平面を呈し、規模が小さく存続期間が短期間である点が特徴である。これに対し、唐古・鍵遺跡や池上曽根遺跡といった前期に集落が出現して以降環濠の規模を拡大させ中期以降も存続する遺跡は前述のグループとは異なる類型に属する遺跡と考えられ、「第 3 段階：肥大化環濠成立期」に該当する遺跡とする。

近畿地域の事例を概観すると、環濠の出現は前期中頃であり、環濠内部空間には居住域が展開するものが一般的である。他地域と比較すると環濠の規模は大きいと言える。

5. 神後田遺跡と田和山遺跡の環壕の評価

上述のように概観した各地域の様相については藤原哲氏、川部浩司氏により類型化がされており、内部空間の違いや立地、環濠の規模の違い等からそれぞれの地域性が見出されている（川部 2009、2018、藤原 2011）。川部氏は各地域の環濠の事例から環濠集落の分類とその伝播におけるモデルを構築しており、それによれば日本海沿岸地域の環濠内部は「環壕空閑地」や「条壕居住空間」に分類される（図 81）。川部氏は「環壕空閑地」の直接的な系譜を朝鮮半島南部には求めにくいとし、瀬戸内や北部九州で発生した環濠の受容を契機とし、地理的条件や社会情勢のなかで醸成されたものと説く（川部 2018）。いずれにせよ、日本列島における当該期の環壕を概観すると、「環壕空閑地」は日本海沿岸地域独自の在り方と考えられる。

では、日本海沿岸地域の環壕についてさらに着目してみたい。当地域に展開する弥生時代前期の環壕は独立丘陵上に展開するものと、丘陵の尾根上に展開するものが存在する（川部分類Ⅰ（ⅰ）c 類またはⅠ（ⅱ）c 類）。いずれも前期末葉に出現しており、北部九州地域や近畿地域、瀬戸内地域より遅れて出現するようである。

丹後地域に所在する扇谷遺跡と途中ヶ丘遺跡は鱒留川（竹野川支流）により形成された沖積地を挟み、直線距離で約 2.3㎞の位置にある（図 82）。ほぼ同時期に環壕が築かれており、規模は長軸 200m、短軸 180m（扇谷遺跡）、長軸 100m（途中ヶ丘遺跡）と大規模である。内部構造は判然としない。周辺は尾根と尾根に挟まれた狭小な低地部が展開する。両遺跡は尾根を隔てた位置で近接しており、頻繁な人の往来を想定するには十分な位置関係にある。扇谷遺跡が前期後半～中期初頭と比較的短期であるのに対し、途中ヶ丘遺跡は前期～後期まで存続する。並立する環壕のうち一方が短時期で廃絶し、一方が長く存続する様

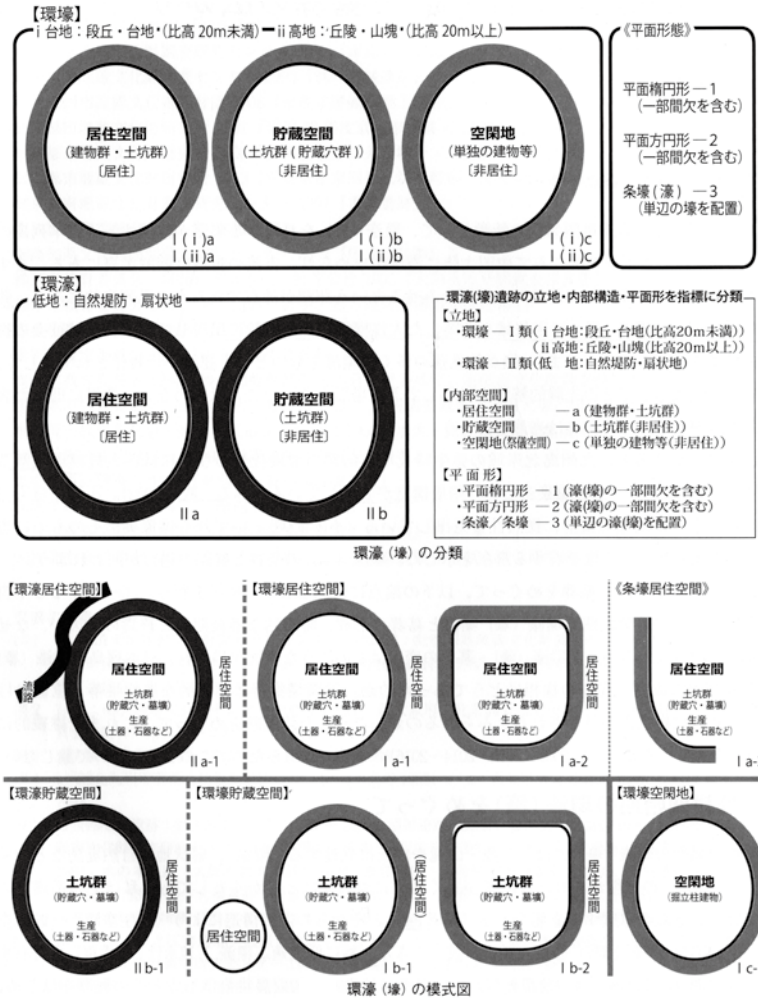


図 81　環濠（壕）分類模式図（川部 2018）

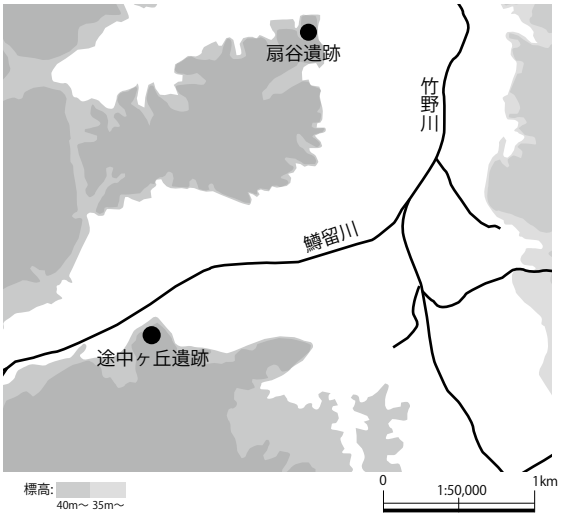


図 82　丹後地域における環壕の分布

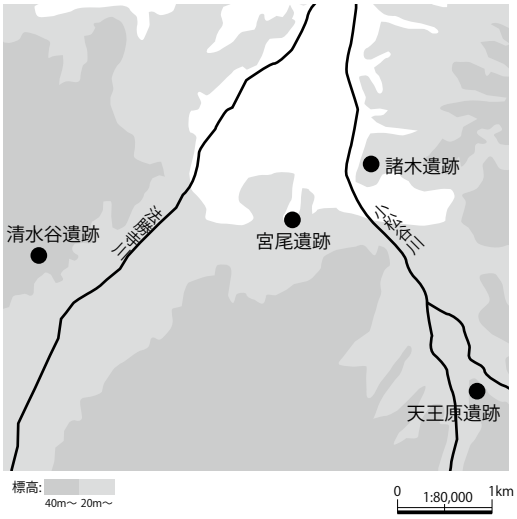


図 83　西伯耆地域における環壕の分布

相は神後田遺跡、田和山遺跡の在り方と一致する(註 8)。並立する環壕２者が、一方に機能を集約させ、規模を拡大させた可能性もあるのではないだろうか。今後こうした視点で検討を深めたい。

西伯耆地域における環壕のうち、清水谷遺跡、天王原遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡はいずれも峰山（標高 192.7m）の支丘陵の尾根上にあり、直径 4㎞圏内に密集している（図 83）。濱田氏によればそれぞれの環壕の時期はⅠ－３～４様式段階であり、出雲地域で環壕が出現する時期と同時期である。相互の距離は 0.9㎞～ 4.3㎞にある。諸木遺跡、宮尾遺跡、清水谷遺跡はそれぞれ法勝寺川で形成される沖積地と小松谷川が流れる盆地が間にあり、相互の丘陵を見渡せ、これらの低地を眼下に望む位置関係にある。内部構造はいずれも判然とせず、清水谷遺跡で土坑が１基検出されるぐらいである。

ここで改めて神後田遺跡、田和山遺跡の環壕について着目したい。両遺跡の距離は約 500m で上述に示した事例の中で最も近距離に位置する。丹後、伯耆地域の遺跡が、山地の尾根上に展開するのに対し、神後田遺跡、田和山遺跡は独立丘陵上に立地する。内部空間に居住域が認められない点は丹後、伯耆地域と共通しており、沖積地を挟みお互いを見渡すことのできる位置関係にある点は伯耆地域の清水谷遺跡、諸木遺跡、宮尾遺跡と共通する。

これら日本海沿岸地域の環壕の立地や規模については、当地域が元来低地が少ない地形を呈しているという地理的制約によるものと想定され、当地域の環濠の様相を示す一つの特徴といえる。これらは北部九州、近畿、瀬戸内地域で多くみられる低地部にあり、居住域もしくは貯蔵穴を囲む環濠集落の様相とは全く異なるものであり、河川沿いの見晴らしの良い丘陵上に位置し、眼下に狭小ながらも水田稲作を可能とする低地部を有するといった地理条件をある程度意識し築かれたものと考えられる。その性格は、対人・対獣の防御的性格も可能性として指摘できるが、眺望に優れた場所に築くといった特徴に着目してみれば、何らかの象徴的役割を担っていたのかもしれない。神後田遺跡や田和山遺跡における環壕の成立も日本列島での環濠の拡散の中で、日本海沿岸を通じたルートによって成立したものといえよう。

（三宅）

註釈

(1) 濱田氏は環濠内部の居住空間の有無、環濠の規模を基準に中国地方における弥生時代前期環濠を分類している。居住空間を伴うものをⅠ類、伴わないものをⅡ類とする。
(2) 環濠の整理にあたっては、坂本豊治氏(出雲弥生の森博物館)にご教示いただいた。環壕の集成にあたっては、弥生時代前期に環壕の存在が認められるもので、且つ長軸・短軸といった規模がある程度特定できるものに限定して集成した。よって環濠の可能性が指摘されながらも、規模が推定できないもの、必ずしも空間を囲繞しているものとは断定できないもの、区画溝と位置付けられているものは対象としていない。地域は北部九州～近畿地域を対象としている。また、「環壕」「環濠」の使い分けについては、山地・丘陵にある遺跡を「環壕」、低地にある遺跡を「環濠」とし、両者をあわせて称する場合は「環濠」の語句を使用している。
(3) 囲繞面積は建設 CAD を使用し、環壕を含まない内部面積を計測した。
(4) 長門地域は北部九州地域と近距離に位置し同文化圏と考え、北部九州地域の資料と一括して扱うこととする。
(5) 吉留氏は環濠が集落を囲むものを A 型、貯蔵穴を囲むものを B 型と分類し、A 型の環濠が瀬戸内地域方面に広がると指摘する（吉留 1994a)。
(6) 柴田氏は松山平野における弥生遺跡をその分布状況や河川・扇状地形といった地理的条件を含みながら、「道後城北遺跡群」「和気・堀江遺跡群」「三津・宮前川遺跡群」「久米遺跡群」「石井・浮穴遺跡群」「砥部・御坂川遺跡群」「伊予遺跡群」「川内遺跡群」の 8 つの群に分類し、そのうち久米遺跡群を「樽味・天山遺跡群」「来住遺跡群」に細分している。これらの中で弥生環濠集落が含まれる遺跡群は「道後城北遺跡群」「三津・宮前川遺跡群」「来住遺跡群」である。
(7) 森井氏は近畿地方の環濠集落 116 か所のうち、環濠が全掘、ないし範囲が十分に推定でき、面積が計測できる 57 例を抽出し環濠部分を除いた内部の居住空間をデジタルプラニメータで計測、面積値から第 1 ～ 5 ランクに分類している。
(8) 扇谷遺跡と途中ヶ丘遺跡の有機的関係については、既に原口正三氏による指摘がある（原口 1990)。原口氏は地理的に近接した両者は密接な関係にあるとし、日本海沿岸を東進するコースにとって、高地にあって見張り且つ眼下の通行者から利を得た位置であり、拠点集落である途中ヶ丘遺跡集落の「関所」として扇谷遺跡が成立したとする。

参考文献

秋山浩三 2007『弥生大形農耕集落の研究』青木書店
伊藤実 1991「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
大阪府立弥生文化博物館 2001「第 4 部　環濠集落基礎資料集」『大阪府立弥生文化博物館図録 22　平成 13 年春季特別展　弥生都市は語る』
川部浩司 2009『大和弥生文化の特質』学生社
川部浩司 2018「農耕開始期の環濠 (壕) と墓葬の広がり」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣
久住猛雄 2008「⑧福岡平野　比恵・那珂遺跡群―列島における最古の「都市」―」『弥生時代の考古学 8　集落からよむ弥生社会』同成社
桑原久男 2018「近畿地方における初期農耕集落の規模と立地」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』雄山閣
柴田昌児 2008「⑦松山平野」『弥生時代の考古学 8　集落からよむ弥生社会』同成社
柴田昌児 2009「松山平野における弥生社会の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第 149 集 〔共同研究〕縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』国立歴史民俗博物館
武末純一 1998「日本の環溝（濠）集落―北部九州の弥生早・前期を中心に―」『環濠集落と農耕社会の形成』九州考古学会・嶺南考古学会
出原恵三 2004「弥生時代前期末・中期初の集落―南四国と瀬戸内沿岸地域の事例から –」『古代文化』第 56 巻 4 号
寺沢薫 1999「環壕集落の系譜」『古代学研究』146
中間研志 1990「環濠集落の構造」『季刊考古学』31 号
禰冝田佳男 1990「環濠集落と環濠の規模」『季刊考古学』31 雄山閣
禰冝田佳男 2020「「弥生時代機内地域の鉄器化、防御集落、武器所有」を考える」『古代武器研究』vol.16 古代武器研究会・山口大学考古学研究室
濱田竜彦 2015「中国地方の前期環濠集落」『≪論集≫環濠集落をめぐる諸問題 2015』≪環濠（壕）論集≫刊行会
原口正三 1990「弥生時代と環濠集落」『季刊考古学』31 雄山閣
藤原哲 2011「弥生社会における環濠集落の成立と展開」『総研大文化科学研究』7 総合研究大学院大学文化科学研究科
埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 1988『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題Ⅰ～Ⅲ』
宮内慎一 2004「岩崎遺跡における弥生前期末～中期初頭の様相」『古代文化』56 巻 4 号
森井貞雄 2001「3　近畿地方の環濠集落」『弥生時代の集落』学生社
森岡秀人 2011「弥生文化の地域的様相と発展　近畿地域」『講座日本の考古学 5　弥生時代（上)』青木書店
山崎頼人 2010「環濠と集団―筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生前期環濠の諸問題―」『古文化談叢』第 65 集九州古文化研究会
芳賀章内編 1990『季刊　考古学』31 号　雄山閣
吉留秀敏 1994a「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』第 33 集九州古文化研究会
吉留秀敏 1994b「弥生時代環濠集落の変遷」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会

環濠の集成で参考とした報告書

（近江）
長浜市教育委員会 1997『川崎遺跡 2　発掘調査報告書』
長浜市教育委員会 2002『川崎遺跡第 32 次調査』
長浜市教育委員会 2009『川崎遺跡第 56 次調査報告書』
（山城）
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『雲宮遺跡』
（摂津）
茨木市教育委員会 2003『東奈良』
大阪府教育委員会 1967『高槻市、安満弥生遺跡発掘調査概報』
大阪府教育委員会 1970『高槻市安満弥生遺跡発掘調査概報』
大阪府教育委員会 1990『東奈良遺跡発掘調査概報Ⅱ』
神戸市教育委員会 1993『大開遺跡発掘調査報告書』
財団法人大阪府文化財調査研究センター 1998『東奈良遺跡』
東奈良遺跡調査会 1981『東奈良発掘調査概報Ⅱ』
（河内）
大阪府教育委員会 1996『田井中遺跡発掘調査概報・Ⅴ』
大阪府文化財センター 2010『都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　池内遺跡（第 1 ～ 3 分冊)』
大阪府文化財センター 2012a『都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 2　池内遺跡』
大阪府文化財センター 2012b『都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 3　池内遺跡』
松原市教育委員会 2017『松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡（C – 2 – 4 – 2）埋蔵文化財発掘調査報告書　池内遺跡
松原市教育委員会 2019『松原市天美東土地区画整理事業地区内における店舗建設に伴う池内遺跡（C – 2 – 4 – 6）発掘調査報告書　池内遺跡』
松原市教育委員会 2020『松原市天美東 4 丁目における店舗建設工事に伴う池内遺跡 C – 2 – 4 – 7 発掘調査報告書　池内遺跡 2』
（和泉）
第二阪奈国道遺跡調査会 1970『池上・四ツ池』
（大和）
御所市教育委員会 1992a『鴨都波 11 次発掘調査報告』
御所市教育委員会 1992b『鴨都波 12 次概報』
田原本町教育委員会 1999『唐古・鍵遺跡　vol.1 概説編』
田原本町教育委員会 2007『唐古・鍵遺跡Ⅰ』
寺沢薫 1989「田原本町多遺跡第 10 次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報（1986 年度）（第 2 分冊)』奈良県立橿原考古学研究所
天理市教育委員会 1996「2. 平等坊・岩室遺跡（第 8 次東調査区、第 11 次、第 12 次)」『天理市埋蔵文化財調査概報平成 4・5 年度（1992・1993 年)』
奈良県立橿原考古学研究所 2007『四条シナノ遺跡』
奈良県立橿原考古学研究所 2011『川西根成柿遺跡―弥生時代前期環濠集落の調査―』
（紀伊）
御坊市教育委員会・御坊市文化財調査会 2002『堅田遺跡―弥生時代前期集落の調査―』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1995『太田・黒田遺跡第 26 次発掘調査概報』
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001『太田・黒田遺跡第 45 次発掘調査概報』
（丹波）
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1986『太田遺跡』
（丹後）
京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010「1. 温江遺跡第 6 次発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 139 冊
峰山町教育委員会 1975『扇谷遺跡発掘調査報告書』
峰山町教育委員会 1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』
（但馬）
八鹿町教育委員会 1990『小山古墳群・東家の上遺跡』

（伯耆）
会見町教育委員会 1982『諸木遺跡』
会見町教育委員会 1997『天王原遺跡発掘調査報告書』
西伯町教育委員会 1992『清水谷遺跡』
財団法人鳥取県教育文化財団・国土交通省倉吉工事事務所 2001『大塚岩田遺跡　大塚塚根遺跡』
淀江町教育委員会 1991『今津岸の上遺跡発掘調査報告書』
（出雲）
島根県教育委員会 2001『熊谷遺跡・要害遺跡』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告書１・２』
安来市教育委員会 2006『主要地方道安来伯太日南線新世紀道路（改良）工事に伴う発掘調査報告書　経塚鼻遺跡』
（吉備）
岡山県教育委員会 1993『百間川沢田遺跡３』
建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会 1985『百間川沢田遺跡２　百間川長谷遺跡２　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅵ』
矢掛町教育委員会 2001『清水谷遺跡』
（備後）
神辺町教育委員会 1996『御領遺跡発掘調査概要・亀山遺跡発掘調査概要・大宮遺跡発掘調査概要』
神辺町教育委員会 1997『大宮遺跡発掘調査概要・御領遺跡発掘調査概要　1996 年度』
神辺町教育委員会 1998『御領遺跡発掘調査概要　大宮遺跡発掘調査概要』
（讃岐）
香川県教育委員会 1994「五条遺跡」『香川県埋蔵文化財発掘調査報告』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1996『龍川五条遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1997『鴨部・川田遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998『龍川五条遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1999『汲仏遺跡』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2000『鴨部・川田遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 2001『汲仏遺跡Ⅱ』
高松市教育委員会 2001『鬼無藤井遺跡』
高松市教育委員会 2002『天満・宮西遺跡』
丸亀市教育委員会 1982『中の池遺跡発掘調査概要』
丸亀市・松本考古学研究所 1999『中ノ池遺跡Ⅰ』
丸亀市・松本考古学研究所 2000『中ノ池遺跡Ⅱ』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2002『中の池遺跡―第８次調査―』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2004『中の池遺跡―第 9.10 次調査―』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2005『中の池遺跡―第 11 次調査―』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2006『中の池遺跡―第 12 次調査―』
丸亀市教育委員会・財団法人元興寺文化財研究所 2008『中の池遺跡・平池東遺跡―中の池遺跡第 13 次調査・平池東遺跡第３次調査―』
（阿波）
徳島大学埋蔵文化財調査室 1988『庄・蔵本遺跡』
（土佐）
高知県教育委員会・財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006『田村遺跡群』
（伊予）
小笠原善治 1997「久米高畑遺跡 28 次・29 次調査地（久米官衙遺跡群）」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅸ　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
高尾和長 1996「久米高畑遺跡 25 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅷ　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
橋本雄一 1995「久米高畑遺跡 23 次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅶ　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1999『岩崎遺跡』
松山市教育委員会 1994『斉院烏山遺跡』
松山市教育委員会 2019『斉院烏山遺跡』
宮内慎一・相原秀仁 1998「岩崎遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅹ　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
山之内志郎 2008「久米高畑遺跡 70 次調査」『松山市埋蔵文化財調査年報』20　松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
吉本拡 1981「來住Ⅴ遺跡」『一般国道 11 号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告Ⅱ』愛媛県教育委員会・㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター
（周防）
建設省山口工事事務所・山口県教育委員会 1975『国道９号・山口バイパス　下東遺跡・萩峠遺跡』
下松市教育委員会 1994『宮原遺跡』
山口県埋蔵文化財センター編 1994『宮原遺跡』下松市教育委員会
（長門）
財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター 2002『吉永遺跡（Ⅳ地区）』
財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター 2003『吉永遺跡（Ⅴ地区）』
財団法人山口県教育財団　山口県埋蔵文化財センター 2004『吉永遺跡（Ⅵ地区）』
下関市教育委員会 1984『綾羅木郷遺跡』
（筑前）
糟屋町教育委員会 1998『江辻遺跡―第４地点―』
糟屋町教育委員会 2002『江辻遺跡第５地点―弥生時代早・前期墓地群の調査―』
津屋崎町教育委員会 1981『今川遺跡』
福岡市教育委員会 1986『有田・小田部第７集』
福岡市教育委員会 1989『有田・小田部第 10 集』
福岡市教育委員会 1995『環境整備遺構確認調査　板付遺跡』
福岡市教育委員会 2001『那珂 27―那珂遺跡群第 67 次調査の概要―』
宗像市教育委員会 1987『大井三倉遺跡』
宗像市教育委員会 2004『光岡長尾Ⅰ』
（筑後）
小郡市教育委員会 1970『津古内畑遺跡』
小郡市教育委員会 1971『津古内畑遺跡第２次』
小郡市教育委員会 1988『横隈北田遺跡』
小郡市教育委員会 1974『横隈山遺跡』
小郡市教育委員会 2002『上岩田周辺遺跡』
小郡市教育委員会 2003『三沢北中尾遺跡１地点　環濠編』
小郡市教育委員会 2007『三沢南崎遺跡』
小郡市教育委員会 2009『三沢南崎遺跡３』
小郡市教育委員会 2012『大保横枕遺跡２―A 区―本文編』
福岡県教育委員会 1973『津古内畑遺跡　福岡県小郡市津古所在遺跡の調査概要　第４次』
山崎頼人 2014「1．弥生時代の上岩田遺跡」『上岩田遺跡Ⅴ』小郡市教育委員会
八女市教育委員会 1997『埋蔵文化財調査概報Ⅳ　福岡県八女市大字立野所在遺跡の調査報告』
（肥前）
佐賀県教育委員会 1983『町南遺跡』
佐賀県教育委員会 2003『柚比遺跡群３　第１分冊　八ッ並金丸遺跡（集落）』
佐賀県教育委員会 2015『吉野ヶ里遺跡―弥生時代の集落跡―』
武雄市教育委員会 1991『小楠遺跡 武雄市土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書　小楠遺跡　梶原遺跡』
鳥栖市教育委員会 2005『八ッ並金丸遺跡』
みやき町教育委員会 2012『町南遺跡７ – 11 区』
（豊前）
苅田町教育委員会 1984『葛川遺跡』
福岡県教育委員会 1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告―6―　福岡県京都郡豊津町所在遺跡群の調査　神手遺跡』

第 4 節　神後田遺跡周辺の古地形復元

1．地名等からみる神後田遺跡周辺低地の様相

はじめに

現在、神後田遺跡周辺は、区画整理事業実施後の市街化が進み、松江市橋南地区を代表する商業地域となっている。今後も忌部川上流に向かって区画整理が進む予定で、四半世紀前に広がっていた田園風景を想像することは難しくなってきている。また神後田遺跡の南側は松江市浜乃木町、乃木福富町だったのが、松江市田和山町 (註 1) に町名変更され、旧村名さえ残っていない。本項では、主に『乃木郷土誌』で提示された旧字名分布図（乃木郷土誌編集委員会 1991）をもとに、地名・字名・忌部川流路等の状況から、前近代の古景観を推測してみたい。

『乃木郷土誌』に掲載されている「地域地図」

『乃木郷土誌』の巻末には、「明治初期の乃木地域地図」という名称で、乃木村、福富村、乃白村の３枚の折込図が附されている。これらの図はトレースされ、字名が活字でうたれていることから、元の切図をもとに再編集したものと考えらえる。しかも三村の「地図」は忌部川下流の水田付近で、おおむね接合することができるため、編集時以前に字が残る現地と地形図を突合して新たに作成されたものと推察される。図 84 は３図の縮尺を変えながら一つの図に接合したものである。元図は団子図と呼ばれるような地形を反映しない図であったことは、本来接合する乃木村と乃白村が丘陵部では離れていることからも想定される。しかしながら、地元の古老や郷土史家により、地名や字名、土地境界などが明らかな平野部について、丁寧に地図に落としていかれたことが拝察される図であり、信頼のおける字名分布図と考えられる。

さらに 1995 年に編集された『ふるさと史談乃木』においては、昭和 36 年の圃場整備後の字名を付した図が掲載されており、字が地形改変後にどのように配置されたかを、おおむね知ることができる。図３は、地形図に字名分布を重ねて新たに作成したものである。いずれも先学の努力により、現在のわれわれが古地名との突合をする貴重な成果といえる。

忌部川旧流路と古地形の推定

三村を接合した図面を見ると、まず目に留まるのが乃木村と福富村の村堺である。圃場整備後の図と参照すると、旧乃木福富町と旧浜乃木町（現在は田和山町）の境界は直線だが、明治には湾曲した村堺があったことを想起させる。忌部川は現在も明治初期とされる図も南北にまっすぐ伸びているが、湾曲した村堺の西側 (内側) に「分ケ田」、「穴田」、「久保田」といったぬかるんだ水田を想起させる字名がみられる。広い範囲に後背湿地が広がっていたことを示すかもしれない。また写真６を見ると、圃場整備前の水田には田和山遺跡と神後田遺跡方向に湾曲した水田面の連なりが確認できる。ここから、乃木村と福富村の村堺は古くは東に湾曲していた河道であった可能性が想起される。

また神後田遺跡の丘陵と田和山遺跡の丘陵の間あたりにみられる「二ツ縄手」は、水田地下に沈んでいる砂層 (第 2 項岸田氏ほか報告を参照されたい。) と対応し、両丘陵を結ぶ基底岩の痕跡を表し

ている可能性も浮かぶ。つまり旧来は二ツ縄手を境に、わずかな高低差で忌部川流域と山居川流域に分かれていた可能性がある (第 3 項別所氏ほか報告を参照)。二ツ縄手の東西に「友田」があることも注目される。『乃木郷土誌』によると「友田」は、もとは「舳田」と記していたとされ、舟が遡上していた根拠とされている。さらに『乃木郷土誌』に付されている「明治 10 年ごろの乃木村全図」は、絵図をもとに作成された図と推察されるが、神後田遺跡に相当すると思われる場所に「舟山」と記されている。福富村の「舟附」もあわせて、川を上る舟の存在を思わせ、興味深い。

遺跡との対応

以上のような地名等の分布と弥生時代の遺跡との関係性を検討してみたい。忌部川下流域にはいくつかの遺跡がみられるが、最下流にあるのが欠田遺跡である。神後田遺跡の環壕と同じ前期末～中期初の土器が出土している遺跡で、「欠田」地名の右側と上には「浜田」地名があることから、内海の浜に立地していたことを想起させる。その海側には「半原」「灘」などの地名があることもそれを傍証する。中期前半から出現する門田遺跡は「門田」に対応すると思われるが、「神立」を挟んで「舟附」が隣接することが注目される。現在は川に面しているが、発掘調査で安定した基盤が認められている。

神後田遺跡と田和山遺跡は、前述したように「二ツ縄手」で接続している可能性がある。忌部川と二ツ縄手の間には湿田を表示する字が多く、弥生時代には安定した水田の存在は考えにくい (3 項別所論考)。

水田の在り方を考えるうえで興味深いのが雲垣遺跡である (松江市教委 2001)。乃白町の丘陵と水田の境界付近に当たり、字名も残る。沼状の湿地堆積の中から弥生時代中期後葉の土器とともに田下駄等の農具が出土している。包含層堆積時は、前面の平地は沼状を呈していたと考えられており、不安定な扇状地堆積の様相をうかがい知ることができる。

まとめ

以上のように、神後田遺跡と田和山遺跡周辺は、もとは水田が広がる農村地帯であったが、古くは下流域が不安定な低地であったことを示す地名が多い。しかし欠田遺跡の存在は弥生時代前期において既に、汀線が西に進んでいたことを示している。また忌部川は扇状地を形成しながらその下流で蛇行し、その背後に湿地を形成していた可能性を示唆している。併せて舟の遡上を想起させる地名があることも、遺跡の環境を考えるうえで重要な観点であろう。

ところで今回分析した字名は、どこまで時期がさかのぼるかは全く不明である。その中で乃木福富町、乃白町の丘陵には屋形、土居、勝負廻といった中世にまでさかのぼりうる地名の存在することは興味深い。実際に乃木福富遺跡では、中世の規則的で大規模な建物や舶載の陶磁器などが検出されており、実際に居館が存在した可能性も指摘されている (島根県教委 1997)。また水田の状態を示す地名は、その土地の本来的地勢を表しているものが多いと推測される。これらのことから分析の意義を一定程度担保しているものと考えたい。

最後になるが筆者は歴史地理を学んだことのない門外漢である。残存字名の批判的分析も行ってお

らず、乃木地区地元の熱心な調査研究に依拠した推測であることをお断りして、結びとしたい。

（丹羽野）

註釈

(1) 神後田遺跡と関連の深い、田和山遺跡に由来する。田和山遺跡も本来の字名に依拠しておらず、近隣の田和の地名に山を付したものと聞いている。

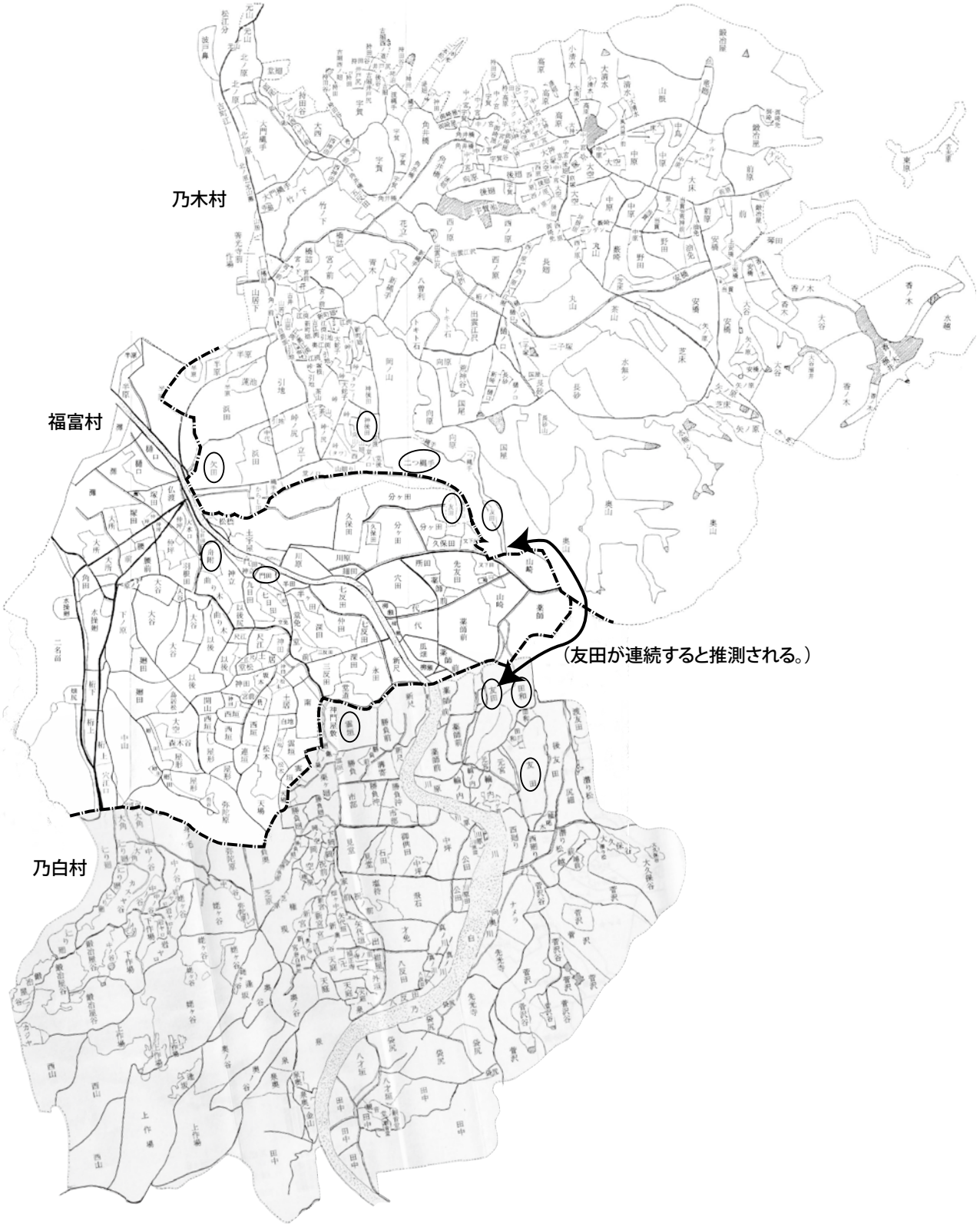


図 84　乃木地域の字名（『乃木郷土誌』から引用・改変）

2. 物理探査法による田和山遺跡及び神後田遺跡周辺の地質調査

はじめに

田和山遺跡及び神後田遺跡近傍において、比較的浅部の地質構造を探るべく電気比抵抗探査と地中レーダ探査を実施した。探査の目的は、神後田遺跡の評価を行うにあたり、遺跡周辺の景観復元に資する情報を得るためである。

探査は 2020 年 10 月 1 日～3 日、同年 11 月 21～23 日、同年 12 月 20 日～21 日の計 8 日間で実施した。電気比抵抗探査機器は主とし ZZ Universal‐96（ZZ Resistivity Imaging Pty. Ltd. 製）を使用した。また調査地の一部においては Handy‐ARM（応用地質㈱製）と地中レーダ探査装置 SIR‐3000 を併用している。調査地点は、①松江農林高校野球場、②浜乃木一丁目民有地、③松江農林高校水田、④田和山東広場公園の 4 か所である。調査地点を図 85 に示す。

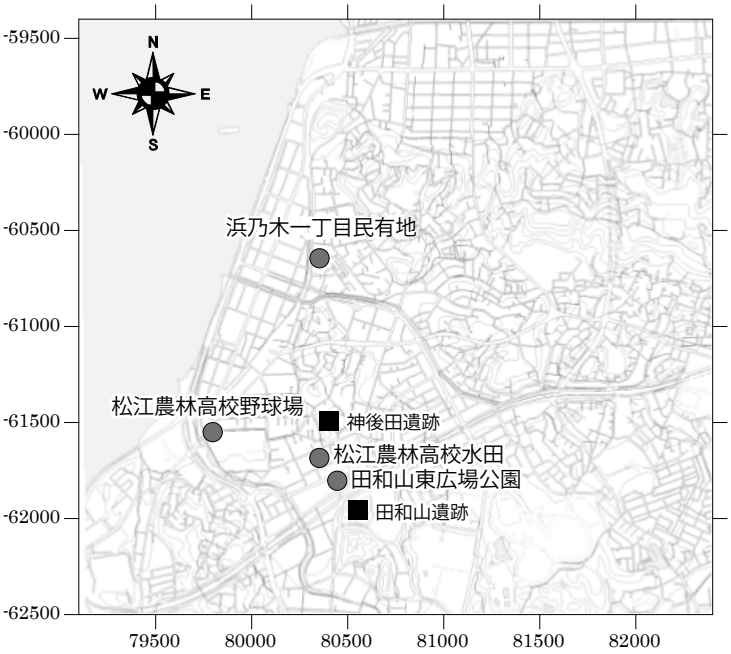


図 85　探査実施地点

探査結果

以下に各調査地の探査結果を示す。

＜松江農林高校野球場＞

探査測線の位置を図 86 に示す。農林高校野球場の北西隅に西－東測線を設定した。

図 87 に電気比抵抗探査の比抵抗断面図および地中レーダ探査のプロファイル図（反射の強弱による疑似断面図）を示す。

図 86　松江農林高校野球場における探査測線位置

電気比抵抗探査 Elec001 では地表面より約 1m 深度まで比抵抗の高い土壌が分布している。これは野球場および高校建設の際の整地土や盛土に相当すると考えられる。その下部には低比抵抗領域が分布し、含水率の高い粘質土が存在していることを示唆している。測線距離 14～26m では深度 2m 以深に再び比抵抗の高い部分が表れる。同部分は砂や礫が多く存在すると推測される。本調査地点のすぐ西側は忌部川が流れており、過去の自然堤防を捉えた可能性も考えられる。

GPR001 は地中レーダプロファイルである。GPR002 は GPR001 測線より南に 0.5m 離れた位置を走査したものである。図中赤や黄色等の暖色が反射の強い領域を表し、黒や青が反射の弱い（少ない）

領域を示している。地表直下には暗渠や配管とみられる局所的に強い反射がいくつか認められる。おおむね地表から 1m 深度まで反射の強い領域は、整地土や盛土と考えられる。その下層は黒く反射の少ない領域として示されている。地中レーダ探査では、含水率の高い領域では電磁波が減衰し、反射の弱い領域としてとらえられることから粘質土と推定される。この結果は電気比抵抗探査の結果とも整合する。地中レーダ探査では約 3m 以深はノイズが多く有効なデータが得られていない。おそらく電磁波が急激に減衰し深部まで到達できなかったためと考えられる。

＜浜乃木一丁目民有地＞

本調査地点は民有地であるが、地権者の了解を得て探査を実施した。家屋の間に測線を設定したため、その影響か全体的に高比抵抗を示している。比抵抗断面図を図 88 に示す。探査開始地点（0m 地点）より約 10m までは比抵抗の高い領域が地表～ 2m 深度まで続いている。測線距離 10m より東側は低比抵抗領域が広がっていく。同時に実施した検土杖による土壌サンプリングの結果から、同測線の西側で砂層が、東側では泥炭層が確認されており、これは浜提とラグーンの境界を捉えたものと推察される。

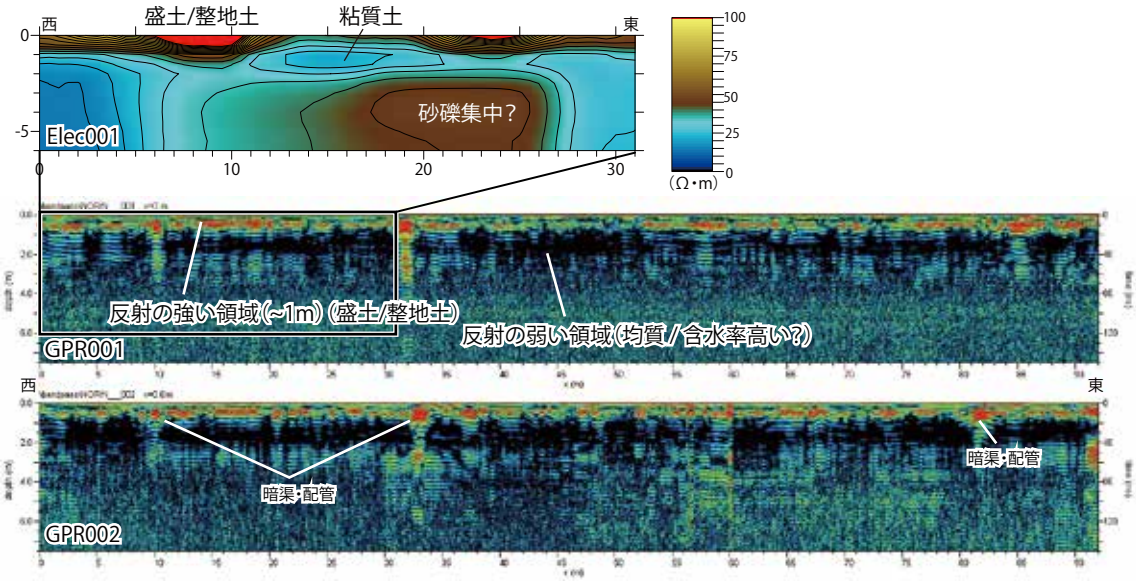


図 87　　松江農林高校における電気比抵抗および地中レーダ探査結果

＜松江農林高校水田＞

松江農林高校水田においては南－北方向に 2 本、西－東方向に 1 本の計 3 測線を設定した（図 89）。

探査結果を図 90 に示す。南－北方向に設定した測線のうち東側の Elec003 においては、地表より深度 5m 付近まで 40 ～ 100 Ω・m のやや高比抵抗の領域が分布している。西－東方向に設定した測線（Elec004）でも、やや高比抵抗の領域が、測線距離約 105m から東側に分布する。これは砂を主とす

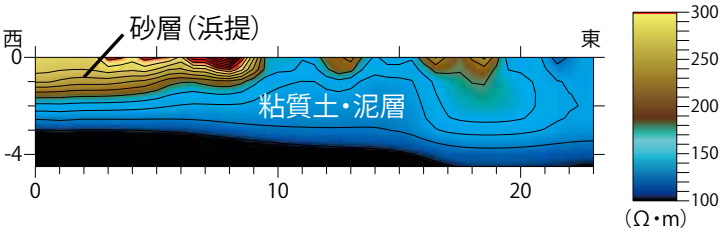


図 88　　浜乃木一丁目民有地における電気比抵抗探査結果

る土質であると推定される。一方、測線距離 105m 以西には含水率のより高い粘土質・泥質の土壌が広がると予想される。Elec003 測線の 50m 西側に設定した Elec005 測線では、測線距離 30m 以南がやや高比抵抗を示している。同測線では、距離 30m 付近に砂質・粘土質の境が存在すると考えられる。

Elec003 の 95 ～ 115m 及び Elec005 の 4 ～ 35m において地表直下に極めて高比抵抗の領域が存在する（図中赤色で示す）。これらは客土と考えられるが近代の南北方向の水路、もしくは旧道を捉えたものかもしれない。

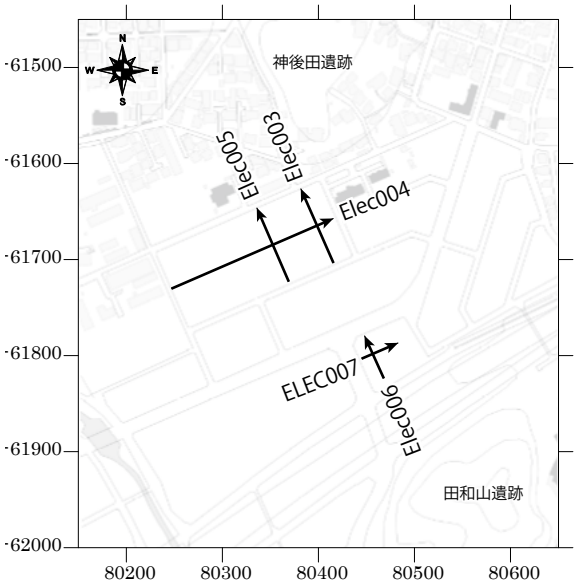


図 89　松江農林高校水田および田和山東広場公園における探査測線位置

＜田和山東広場公園＞

田和山東広場公園においては、南－北方向、および西－東方向にそれぞれ直交する計 2 本の測線を設定し探査を行った。各測線の位置は図 89 に示している。

図 91 に各測線で得られた比抵抗断面図を示す。南－北方向に設定した測線 Elec006 では地表直下に 100 Ω・m を超える高比抵領域（赤色部分）が存在する。これは主に公園整備時の造成土・客土と考えられる。その直下は含水率の高い土壌（粘質土）が存在すると推測される。西－東方向に設定した Elec007 では測線距離 20m から東側に、やや高比抵抗領域が存在する。本調査区は田和山遺跡が立地する丘陵の麓にあたり、この高比抵抗領域は基盤層（布志名層）を捉えた可能性が考えられる。

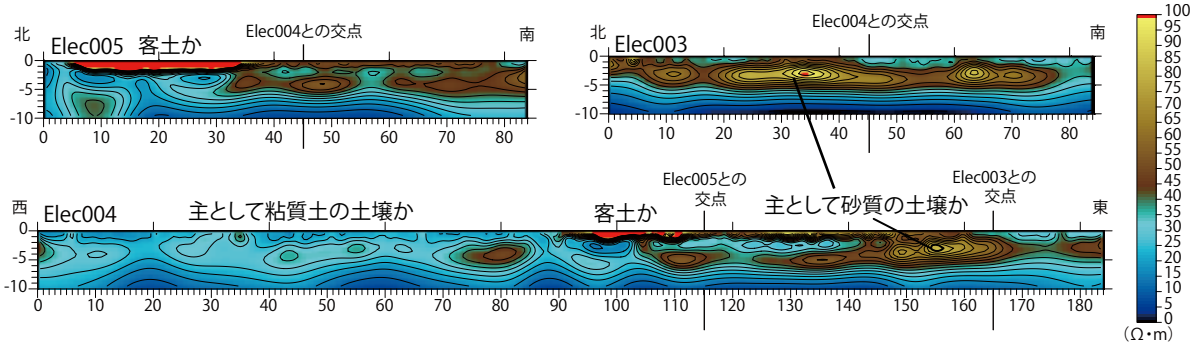


図 90　松江農林高校水田における電気比抵抗探査結果

まとめ

田和山遺跡及び神後田遺跡近傍において、物理探査を実施した結果、以下のような成果が得られた。①松江農林高校野球場では厚さ 1m 程度の整地土の下に粘質土が存在すると推定される。さらに下層には砂礫混土壌の存在が推測され、これは自然堤防の可能性も考えられる。②浜乃木 1 丁目民有地においては、東側が高比抵抗、西側が低比抵抗という境界が認められ、サンプリングの成果も考慮するとラグーン東縁を捉えたものと推定された。③松江農林高校水田では、地表下 5m までは、東側に

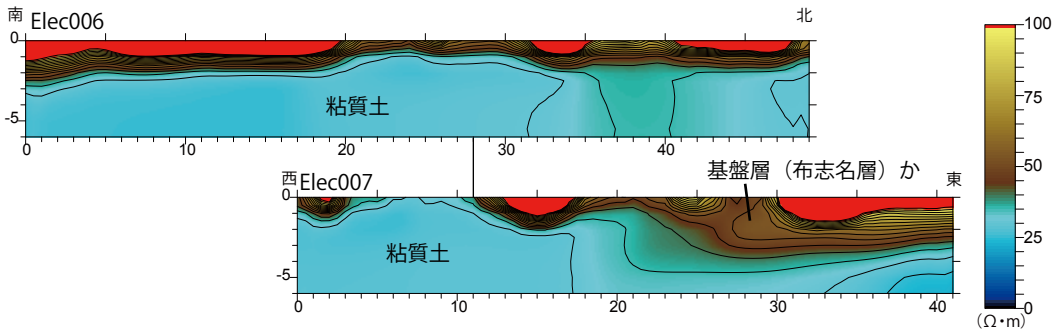


図 91　　田和山東広場公園における電気比抵抗探査結果

砂質土、西側に粘質土が主として分布すると予想された。田和山丘陵と神後田遺跡が立地する丘陵の間は粘質土ではなく砂質土が主として分布すると考えられる。④田和山東広場公園においては浅部で基盤層にあたり、松江農林高校水田で見られたような厚い砂質土の存在は認められなかった。

以上が物理探査結果から推定された田和山遺跡、神後田遺跡周辺の土質であるが、物理探査の結果は、比誘電率や比抵抗など、特定の物性の変化や状態を捉えたものであり、土壌の粒径や探査時の含水率により計測される値は様々でありその解釈は難しい。可能であればボーリング調査やトレンチ調査を併用して両者を対比・検討することが望まれる。

（岸田徹・別所秀高・関あかり・津村宏臣　同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター）

謝辞

本探査は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室並びに天理大学考古学民俗学研究室の調査機器を借用し実施した。また所有地での調査にご協力いただいた松江農林高校の関係者の皆様に感謝と御礼を申し上げます。

3. 神後田遺跡周辺の古地形復元に向けた予察

はじめに

筆者は「島根県松江市と同志社大学文化遺産情報科学調査研究センターとの研究機構及び協力に関する協定」の一環として、とくに神後田遺跡周辺の古地形復元に向けた予備的な考察を行うために同志社大学文化遺産情報科学研究センターから現地へ派遣された。現地ではボーリングステッキによる地質調査やドローンによる航空写真撮影を実施したほか、松江市歴史まちづくり部からは「松江市浜乃木・乃木福富土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財分布調査概要」（H10 浜乃木・乃木福富地区調査地点）、「松江市乃白土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財分布調査概要」（H21 乃白北地区調査地点）や周辺の調査報告書等の資料提供、ボーリングステッキによる調査地点の選地についての助言・便宜を受けた。

神後田遺跡は山居川低地と忌部川低地に挟まれた乃木段丘の標高 20m 付近に位置する（図 92）。林（1991）および鹿野ほか（1994）によると乃木段丘は浅海性の堆積岩からなる布志名層（1200 万年前，新第三紀中新世）と、その上位に載る高位段丘 III 堆積層（乃木層）から構成されている。田和山遺跡は神後田遺跡が位置する乃木段丘から鞍部を介して南へ連なる田和山丘陵に位置する。田和山丘陵は布志名層からなる。

山居川低地は神後田遺跡の東側に広がる。山居川支谷のうち乃木小学校から湖南中学校にかけて伸びる小支谷は、田和山丘陵とそこから神後田遺跡が載る乃木段丘へ続く尾根を東西に分断する。忌部川低地は神後田遺跡の西側に広がり、本川の忌部川の流域面積は山居川流域を含めて 24.39km^2 に及ぶ。そのうち山居川流域はおよそ 4km^2 を占める。

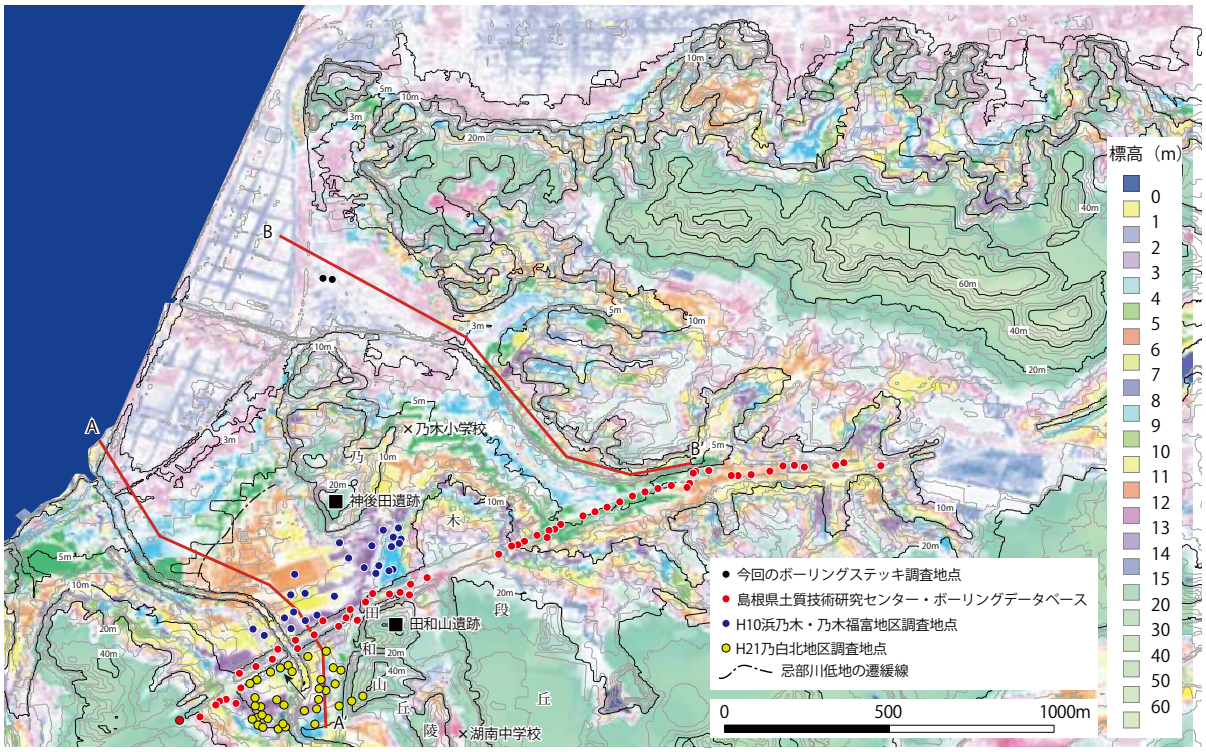


図 92　神後田遺跡周辺の標高段彩図

赤線は傾斜を測った測線を表す。段彩図は国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル 5㎡メッシュから QGIS を使用し作成。

忌部川低地および山居川低地の沖積層

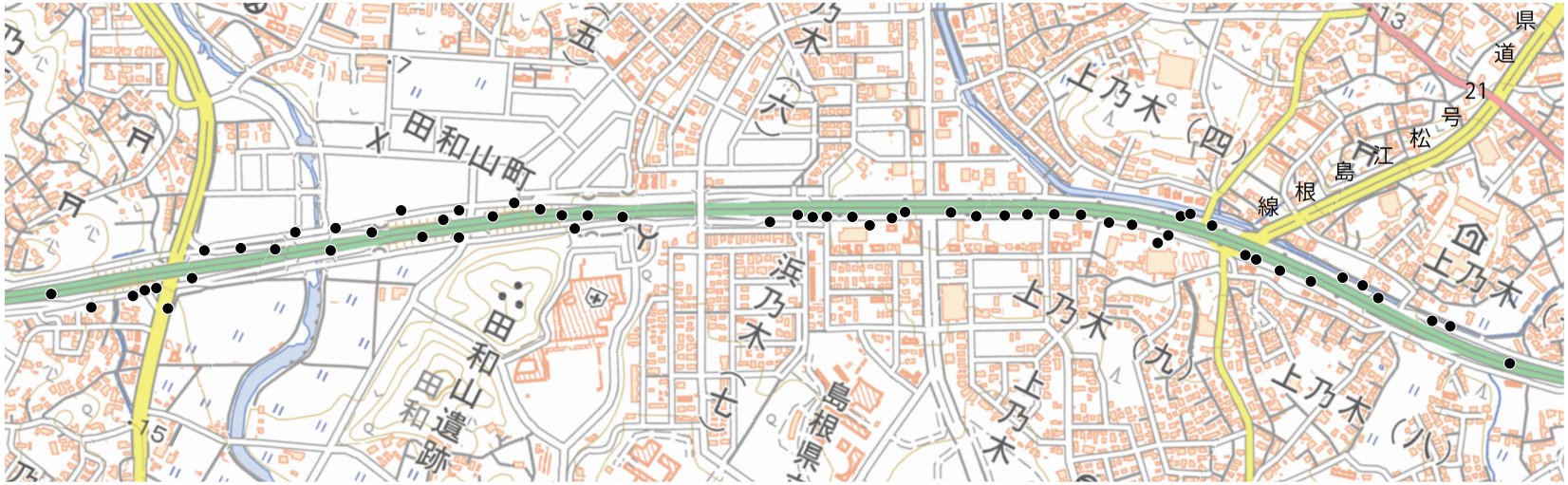
島根県土質技術センターが提供するボーリングデータベース（協同組合島根県土質技術研究センター 2020）から抽出した山陰自動車道松江 IC・松江西 IC 間の柱状図を並べ地質断面に見立てた図を図 93 に示す。ここでは先行研究を参考にしつつ、ボーリング柱状図の泥層に記載された N 値や H10 浜乃木・乃木福富地区調査地点および H21 乃白北地区調査地点の調査データから沖積層、高位段丘 III 堆積層、布志名層を区分した。既知のとおり、山陰自動車道沿いでは布志名層を高位段丘 III 堆積層が覆い、さらにその上位に沖積層が載っている。高位段丘 III 堆積層と沖積層の境界は、最終氷期最寒冷期直前の海水準低下速度がもっとも大きい 2 万 1 千年前に形成された不整合面である。

忌部川低地の沖積層上限は標高 7m で、下限は低地の西側で 3 m、東側で 0m である。沖積層は概して下部砂層（礫層）と上部泥層からなり、縄文海進高海水準期が 5700 年前（5000BP）でその上限が標高 1m（中村 2006）であることを考慮すると、山陰自動車道付近は陸側からの埋積が進み、海岸線が到達していなかったと判断できる。H21 乃白北地区調査地点の 43 トレンチでは標高 5m 付近の沖積層下部礫層から弥生土器が産出している（図 92 の矢印）。同地点ではほぼ全調査地点の地下－ 0.6 ～－ 2m 以下で沖積層下部礫層あるいは沖積層下部砂層が確認されている。H10 浜乃木・乃木福富地区調査地点では、忌部川左岸側の 2 地点のみで地下－ 1.4m 以下に沖積層下部礫層が確認されている。しかし、同地点の忌部川右岸側では砂礫層はみられず、概して泥層に挟まる薄い砂層が分布する程度である。忌部川は最終氷期最寒冷期直後から河谷東側の凹地を埋積し始め、そこを埋め立てた後に遅くとも弥生時代までには、西側の現在の位置付近への流路変更があったと考えられる。

山居川低地の沖積層上限は標高 8m で、下限は低地の中央付近で－ 5 mである。沖積層は下位より最下部砂礫層、下部泥層、中部泥炭層、上部泥層からなり概して泥がちである。また、山居川沿岸では地盤を標高 5m まで嵩上げするための層厚数mの盛土がある。下部泥層は縄文海進高海水準期ごろの海成層とみられ、当時の海岸線は県道 21 号松江島根線よりさらに東側にまで達していたと考えられる。また、中部泥炭層は好気的な閉塞された静水域で形成されることから、山居川低地にラグーン（潟湖）が広がっていたと考えられる。このことを確認するために善光寺東側の畑地（浜乃木一丁目）でボーリングステッキによる地質調査を試みた（図 94）。

調査地点は松江浜乃木郵便局（浜乃木二丁目）から栄町にかけて JR 山陰本線に沿って伸びる浜堤陸側の傾斜地で、西地点と東地点ではおよそ 20m 離れている。西地点は標高 1.55m 以下で細粒砂から中粒砂からなる砂層があり、その上位に砂混じり粘土質シルト層が載る。東地点は 1.0m 以下で細粒砂から中粒砂からなる砂層があり、その上位の 1.0 ～ 1.2m を泥炭層が覆い、さらにその上位に砂混じり粘土質シルト層が載る。このうち最下部の砂層は浜堤を構成する砂層で、東地点にみられた泥炭層は山陰自動車道付近でみられた泥炭層と同じものと判断される。このことも山居川低地にラグーンが広がっていたことを支持している。

このような沖積層の特徴からは忌部川低地は河川作用が卓越する河成低地であり、山居川低地は河川作用が脆弱で、河谷に沿って内陸側にラグーンが発達する海成低地であったと判断される。



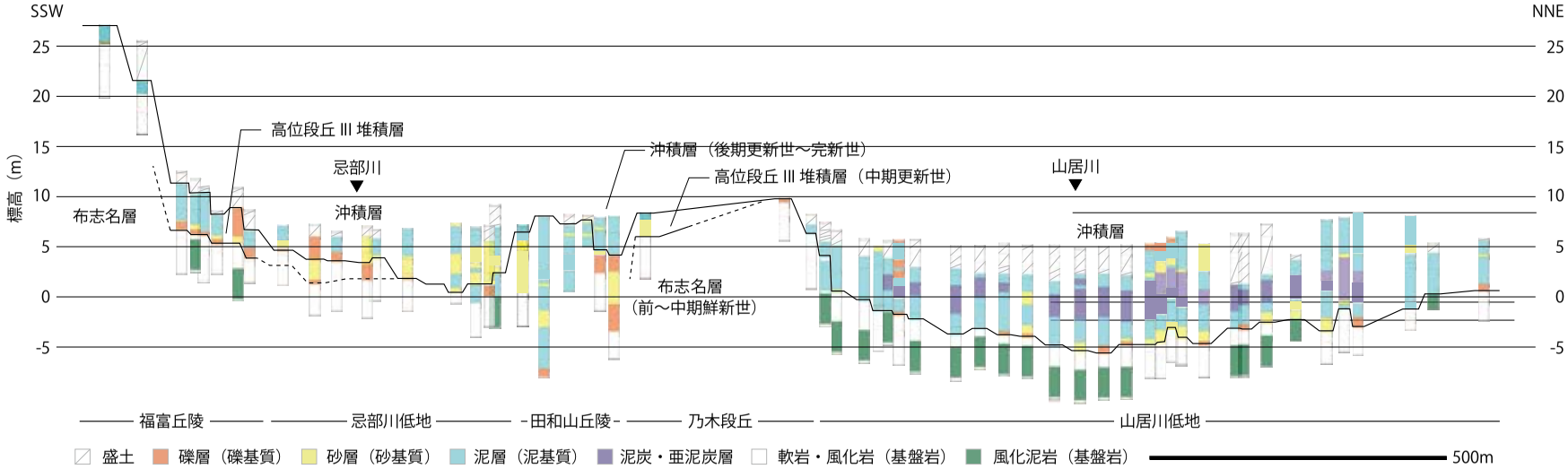


図 93　ボーリングデータベースにもとづく山陰自動車道松江 IC・松江西 IC 間の地質柱状断面図

上段の地図は「地理院タイル」の標準地図を加工して作成。

忌部川低地および山居川低地の古地形復元

忌部川および山居川後背低地の地表縦断形を図 95 に示す。

忌部川後背低地の地表縦断形からは JR 山陰本線から松江農林高校の区間と同校から終端までの区間では明らかに傾斜が異なることがわかる。前者は 0.1/1000 程度の緩やかな傾斜で、松江農林高校付近の遷緩点を介して後者は 4/100 以上の急な傾斜となっている。この傾斜の違いは河成低地における地形種の違いを反映していると考えられる。すなわち、前者は蛇行原、後者は扇状地と見なすことができる。現在ではすでに流路が固定されているものの、かつての忌部川は増水時に扇状地斜面で網状流路として、蛇行原で蛇行流路として発達していたことが想像される。

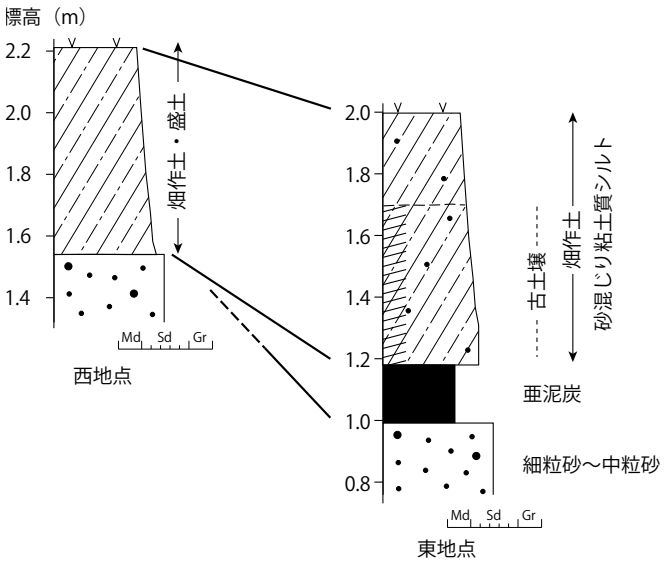


図 94　善光寺東側畑地の地質柱状図
標高値は「地理院地図」から取得した。

いっぽう、山居川後背低地の地表縦断形は、忌部川沿岸の地盤嵩上げを無視すると陸側に向かってきわめて緩やかに高度を増じる指数関数曲線になっている。これは先に指摘したように山居川低地では河川作用が脆弱で、ラグーンに沈積する浮遊物質が優占したためである。このような丘陵を挟んだ両低地に見られる地形種の違いは、忌部川と山居川の流域面積の違いを反映していると考えられる。

以上のような地質学および地形学的な観点から神後田遺跡に隣接する忌部川低地および山居川低地の古地形復元図を描いた（図 96）。早ければ縄文時代前期の最高海水準が降下に転じた直後には砂嘴が発達し、山居川低地を閉塞し始めたと考えられる。いっぽうでは、弥生時代前期には忌部川低地の宍道湖湖岸で欠田遺跡での活動が始まることから（島根大学考古学研究会 1971）、ここに提示したような古地形が形成されていたと考えられる。

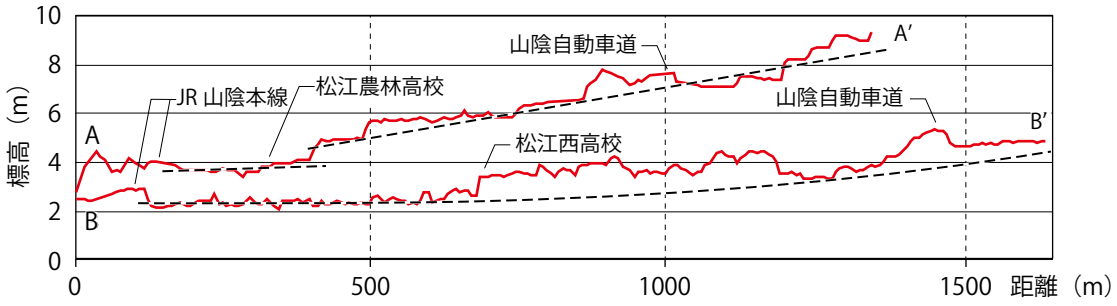


図 95　忌部川および山居川後背低地の地表縦断形

国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル 5m メッシュから QGIS を使用し作成。測線は図 92 参照。

おわりに

ここに提示した古地形復元図は調査を隈なく重ねて描いたものではなく、断片的な地層データと地質学および地形学的な知識にもとづいたもので、ましてや筆者は当該地域の沖積層の露頭を観察したことすらない。また、地層観察から推測される過去の堆積環境とその年代を確実に担保する考古資料や放射性炭素年代資料は皆無で、地史を復元することはできなかった。将来的にはとくに考古遺跡の新成果により本図が更新されることを強く望む次第である。

図 96　弥生時代神後田遺跡周辺の古地形想像復元図

（別所秀高　同志社大学文化遺産情報科学調査研究センター）

参考文献

協同組合島根県土質技術研究センター 2020 しまね地盤情報配信サービス（http://www.shimane.geonavi.net/shimane/top.jsp(2020 年 12 月 31 日閲覧）
鹿野和彦・山内靖喜・高安克巳・松浦浩久・豊　遙秋 1994「松江地域の地質」『地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）』地質調査所　126 p.
島根県教育委員会 1997『一般国道 9 号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2：福富 1 遺跡・屋形 1 号墳 2』島根県埋蔵文化財調査センター
島根大学考古学研究会 1971「欠田遺跡試掘調査概要」『菅田考古』12　pp.1 – 11.
乃木郷土誌編纂委員会 1991『乃木郷土誌』
乃木地区ふるさとづくり推進協議会 1995『ふるさと史談乃木』
林　正久 1991「松江周辺の沖積平野の地形発達」『地理科学』46(2)　pp .55 – 74.
松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2001『松江市文化財調査報告書 87　雲垣遺跡発掘調査報告書』

第 5 節　弥生時代における大橋川南部地域の評価

1. はじめに

第 1 節にて神後田遺跡と周辺遺跡出土土器の様相と併行関係について述べたが、時期によって各遺跡の消長が認められる。このことから本節では土器型式の年代観を基礎とし各遺跡の変遷過程について整理を試みたい。

写真 11 田和山遺跡、神後田遺跡の位置関係
（手前の丘陵が田和山遺跡。矢印が神後田遺跡）

神後田遺跡や田和山遺跡が存在する忌部川下流地域の低地部は扇状地と三角州を中心に形成された土地であり、水田稲作が当該地で行われていたものと推測されるがその規模は大きいものではない。また、山居川下流地域は前節で別所氏が述べたように弥生時代にはかなりの範囲が水域となっていた可能性が高い（以下、忌部川下流地域、山居川下流地域を「乃木地域」という。）。また近代には水田化されていた平野も、地質調査や試掘調査の結果から古代以前には安定した農地が存在していたとは考えにくい状況である(註 1)。神後田遺跡と田和山遺跡は宍道湖東岸や北岸から目立つ丘陵に存在している。弥生時代前期末に両遺跡で環壕が構築され、中期以降田和山遺跡で大規模な三重環壕を構築するようなシンボリックな遺跡群であるが、これらを乃木地域という狭小な範囲で理解することは難しいと考える。

乃木地域から東へ目を向けると中規模な谷底平野と段丘が広がる大庭町を越え、その先に意宇川で形成された意宇平野が存在する（意宇川下流域・馬橋川流域を「意宇地域」という。）。古代においては田和山遺跡の南を古代山陰道が通り、標高 40m 前後の低い峠を越え意宇平野の出雲国府につながると考えられている（中村 1996 など）。田和山遺跡から大庭町の谷底平野の端まで 1.5㎞、意宇川の扇状地の端まで約 4 ㎞である。意宇平野の東に位置する布田遺跡は拠点集落と位置づけられており、

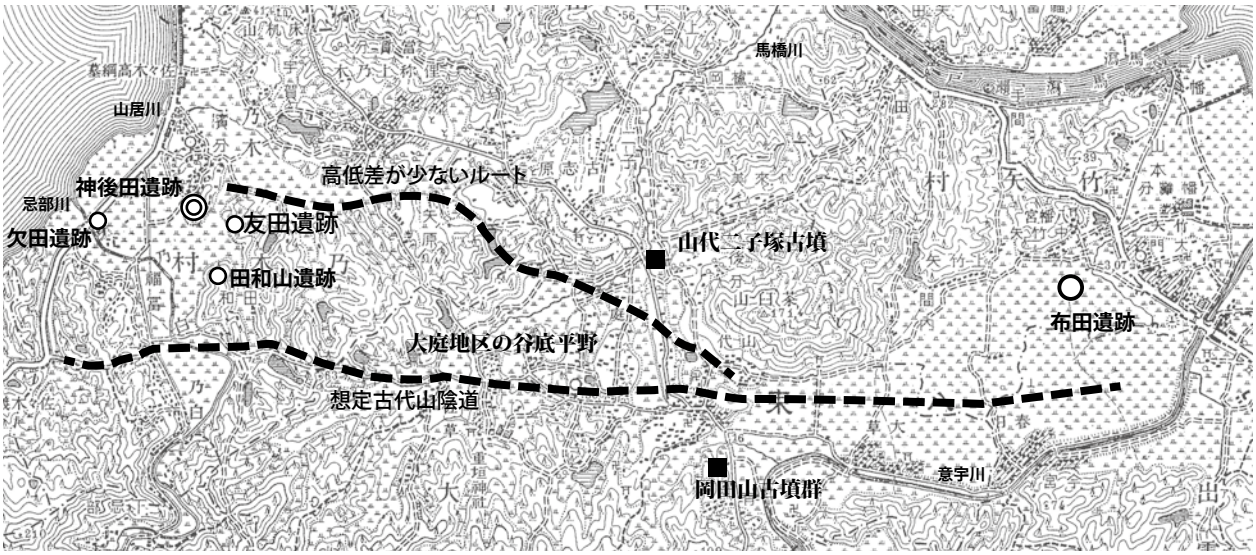


図 97　乃木地域と意宇地域の主要な遺跡と古代の道路想定図（明治 34 年松江十六號（国土地理院）を改変）

神後田遺跡、田和山遺跡から約６㎞と徒歩１時間圏内の位置にある。神後田遺跡、田和山遺跡の成立と発展を評価するうえで至近の乃木地域と意宇地域をあわせて考えていくことはあながち無理な方法ではないだろう。さらに、大橋川南部地域（乃木地域と意宇地域をあわせて大橋川南部地域という(註２)）を考えていくうえでは、出雲地域平野部の動向を無視できない。よって本節では乃木地域、大橋川南部地域、出雲地域平野部と視点を広げていきながら神後田遺跡、田和山遺跡の成立背景について試論を述べたい(註３)。

２．乃木地域における集落遺跡の変遷

まず乃木地域の弥生時代の遺跡変遷について、第１節で述べた土器様相を根拠とし、各遺跡の消長を整理する。消長の過程を乃木１期～６期と分類し概要を述べる（図 98）。

乃木１期（縄文晩期～弥生前期後葉）

神後田遺跡、田和山遺跡出現前夜の様相を示すため設定した。当地域で縄文時代晩期～弥生時代前期後葉（松本編年Ⅰ－３様式まで）の土器は福富Ⅰ遺跡、二ッ縄手遺跡で見られる。二ッ縄手遺跡は包含層出土のもので突帯文土器が報告されている。また、福富Ⅰ遺跡は外面に沈線１条を巡らす、弥生前期前半の土器が出土している。いずれも破片数は僅かでこの段階のまとまった遺物の出土はみられない。少数ながら土器が散見されることから当段階で僅かながら生産活動があったものと想定される。神後田遺跡、田和山遺跡の出現が松本編年Ⅰ－４様式段階であることから本段階の下限をⅠ－３様式とする。

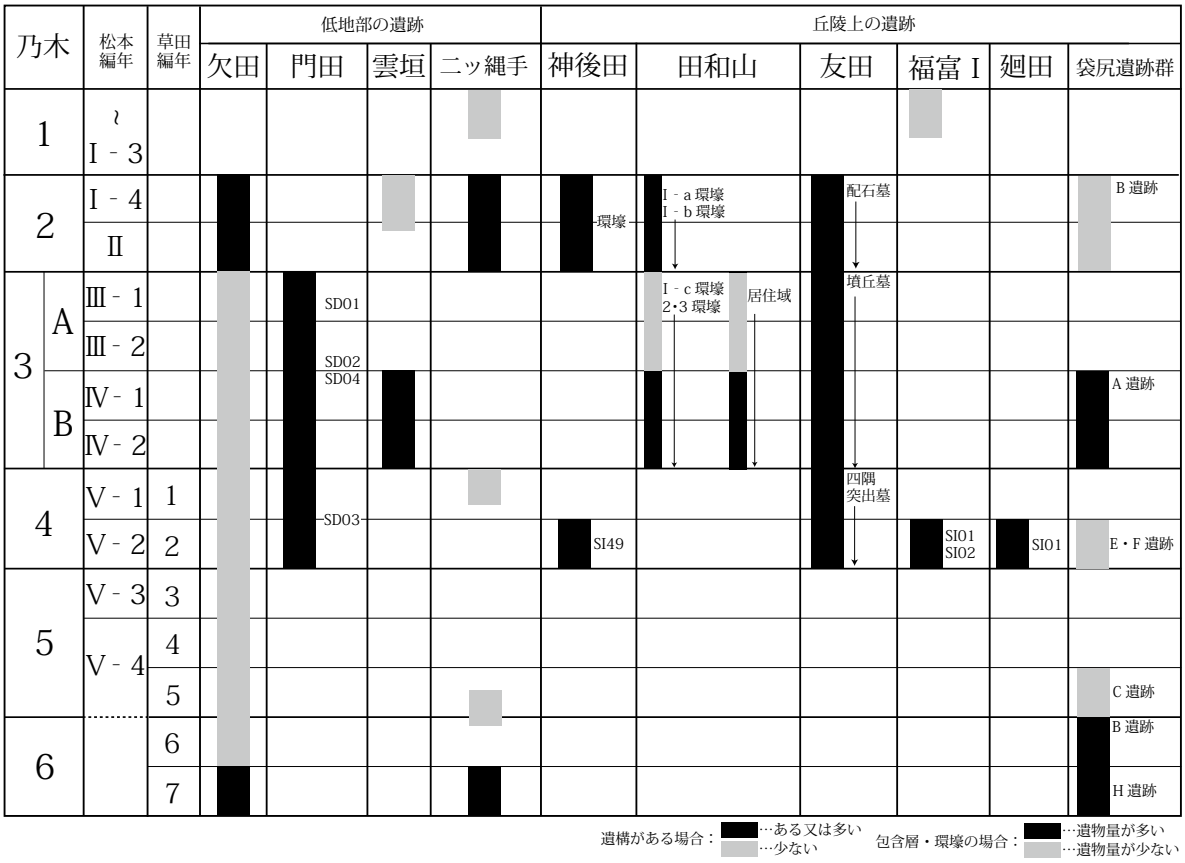


図 98　乃木地域における弥生時代の遺跡の消長

乃木 2 期（弥生前期末～中期初頭 : 神後田遺跡・田和山遺跡の環壕出現）

神後田遺跡環壕、田和山遺跡Ⅰ－ａ・ｂ環壕の出現をもって設定する。神後田遺跡は北側が途切れる一重環壕であり、田和山遺跡は間を断絶する一重環壕が出現する（図 99）。土器編年は松本編年Ⅰ－４～Ⅱ様式に相当する。乃木地域に存在する弥生時代の遺跡の多くが本段階に出現する。当段階の遺跡としては、丘陵上に立地する神後田遺跡、田和山遺跡、友田遺跡配石墓 24 基があり、低地部の遺跡として欠田遺跡、二ツ縄手遺跡があげられる。欠田遺跡からは比較的まとまって土器が出土しているが遺跡は忌部川の河口付近の、入海に面した微高地上に立地しており、水田稲作とは直結しない可能性がある。当段階の住居跡は確認されていない。第 3 節で述べた環壕の評価からも、環壕を備えながらも内部に居住空間をもたない神後田遺跡、田和山遺跡が不安定な忌部川低地を挟み、出現したと評価したい。

乃木 3 期（弥生中期中葉～後葉：神後田遺跡の環壕廃絶・田和山遺跡三重環壕の成立）

神後田遺跡の環壕の廃絶と田和山遺跡三重環壕の成立をもって設定する。この段階では乃木 1 期に成立した神後田遺跡の環壕は完全に廃絶する。これと対照的に、田和山遺跡では環壕の新たな掘削がみられ三重環壕が成立し、前段階に比べより荘厳化する（図 99）。また、環壕外の北・西斜面に居住域が展開され、遺跡の最盛期を迎える (註 4)。

同時期の他の遺跡として欠田遺跡、友田遺跡方形墳丘墓 6 基、雲垣遺跡、門田遺跡があげられる。土器型式は松本編年Ⅲ－１～Ⅳ－２様式に相当する段階であり、田和山遺跡Ⅰ－ｃ、第 2、3 環壕よりⅢ－１～Ⅳ－２様式の土器の出土がみられる。また、この頃欠田遺跡では遺物の出土自体はみられるものの乃木 2 期とくらべ数は減少する。これと対応するように対岸に所在する門田遺跡でまとまった遺物の出土がみられるようになる。欠田遺跡の機能がより安定した対岸に移動したものと理

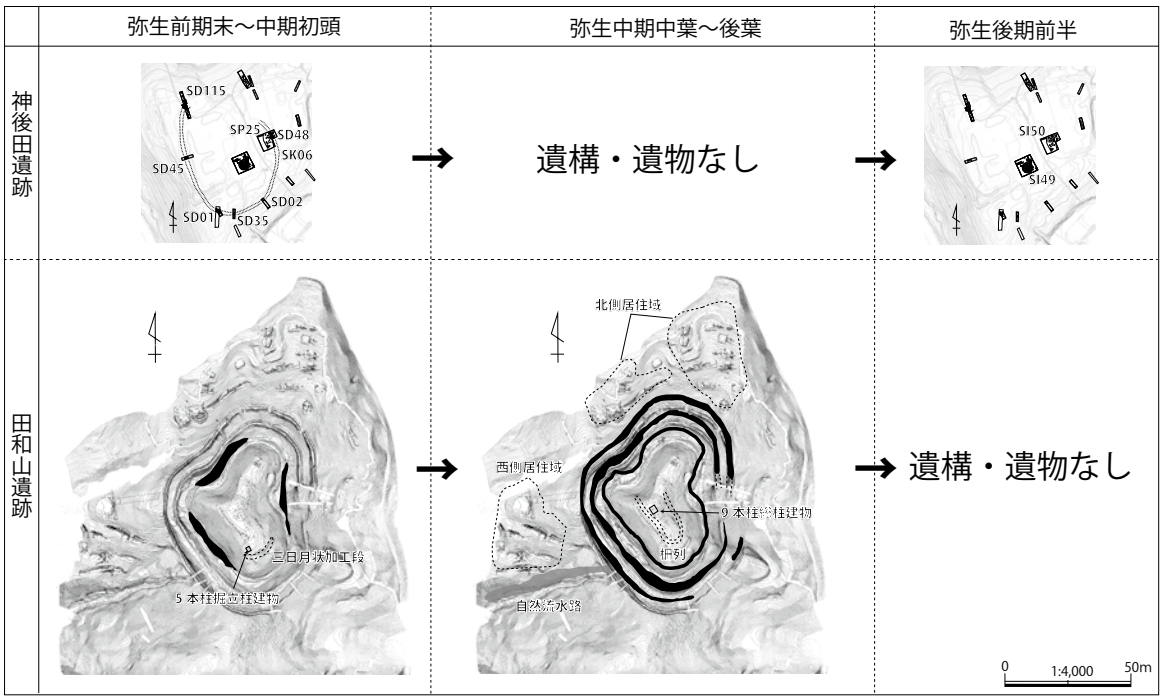


図 99　神後田遺跡と田和山遺跡の変遷

解できる。松本編年Ⅳ‐１様式の段階になると田和山遺跡南西側の低部に雲垣遺跡が新たに出現する。包含層出土の遺物群であるが、土器の時期幅は狭く、Ⅳ‐１様式を主体とするまとまった様相を示す。田和山遺跡ではⅢ様式の土器が一定量出土するのに対し、雲垣遺跡はⅣ様式の土器が主体である点から、田和山遺跡で三重環壕が成立する時期よりやや後続すると考える。よって本段階をＡ・Ｂ期に細分し、田和山遺跡三重環壕、門田遺跡の出現段階を３‐Ａ期、雲垣遺跡の出現段階を３‐Ｂ期としたい。

乃木４期（弥生後期前半：田和山遺跡の環壕及び集落の廃絶、友田遺跡四隅突出墓の築造）

乃木３期で成立した田和山遺跡の三重環壕は中期後半に廃絶し、当遺跡で後期の遺構、遺物は認められない。神後田遺跡 SI49・SI50、欠田遺跡、友田遺跡四隅突出墓（註５）が当段階に相当する。田和山遺跡の三重環壕が廃絶することで、当地域での環壕は完全にみられなくなり、田和山遺跡の北・西側斜面に展開した居住域も廃絶する。当段階の住居跡が検出されている遺跡は、神後田遺跡、福富Ⅰ遺跡、廻田遺跡である。福富Ⅰ遺跡、廻田遺跡は田和山遺跡西側の低地部を越えた丘陵上に位置する。福富Ⅰ遺跡は丘陵南東斜面の調査で後期前半の竪穴建物（SI01・SI02）が検出されている。廻田遺跡は福富Ⅰ遺跡と同丘陵に位置し、竪穴建物１棟（SI01）が検出されている。

これらの例を見ると丘陵上若しくは丘陵斜面に建物数棟の小規模な集落がこの頃展開するようである。また、低地部では欠田遺跡、二ツ縄手遺跡で引き続き少量の土器が認められ、門田遺跡でも当段階の土器を含む溝が検出されている。いずれも住居跡はみつかっていない。また、友田遺跡では四隅突出墓が築造される。残存する一辺が約 15m で、松江市域では最古の四隅突出墓である。田和山遺跡三重環壕消滅後にそれに代わるシンボルとして登場するものと推察される。

乃木５期（弥生後期後半～終末期：空白期）

松本編年Ⅴ‐３・Ⅴ‐４様式に相当する。前段階までみられた当地域の遺跡はこの段階に激減し、ほとんど資料がみられない。欠田遺跡で土器が若干出土するのみである。乃木地域における遺跡の空白期といえる。先述のように田和山遺跡では弥生後期の土器・遺構は全く検出されていない。神後田遺跡においても弥生後期前半の建物跡が廃絶された後、後期後半に相当する遺構･遺物は皆無である。

乃木６期（古墳時代前期）

当段階の土器の出土がみられるのは欠田遺跡、二ツ縄手遺跡である。いずれも低地部の遺跡である点が特徴であり、このうち欠田遺跡は全出土遺物の中で当段階の土器が最も出土量が多い。

特に前期後半になると田和山２号墳、茶山古墳群が築造され、田和山Ａ遺跡では当段階に始まる祭祀遺構が検出されている。先述の乃木５期（弥生後期後半）に一旦遺跡の数や土器の出土量が希薄になった後、再び活動の痕跡が濃厚にみられる時期である。

以上、神後田遺跡と田和山遺跡の消長を中心として乃木地域における弥生時代～古墳前期の遺跡変遷に６つの画期があることがわかった。乃木２期～乃木４期までは遺跡が集中して点在し、それ

らは神後田遺跡と田和山遺跡、友田遺跡のような丘陵上に位置するものと、欠田遺跡、雲垣遺跡、門田遺跡、二ツ縄手遺跡といった丘陵周辺の低地部に存在するものがある。弥生前期末を開始年代とする点は乃木 2 期段階の各遺跡に共通して言えることであり、当該地で生産活動が始まるのはこの頃と考えられ､以降弥生後期前半まで各遺跡の消長を辿りながら連綿と人の生活があったことが窺える。その後田和山遺跡の三重環壕廃絶後、友田遺跡で四隅突出墓が築造される。これは当地における象徴的役割の担い手が三重環壕という巨大構造物から墳墓へ変わったことを意味する。これ以降弥生後期後半は急激に遺跡数が減り、再び集落が営まれるようになるのは古墳時代前期後半である。

3. 乃木地域、意宇地域の集落遺跡との対比

ここで意宇地域の集落遺跡について触れたい。意宇平野は大橋川より南の地域（橋南地域と呼称される）に位置する茶臼山の東から南に広がる平野で、乃木地域から東へ約 4㎞の位置にある。弥生時代の遺跡としては布田遺跡、夫敷遺跡、向小紋遺跡、上小紋遺跡、中竹矢遺跡、間内遺跡、春日遺跡、大坪遺跡等が存在する。意宇平野の集落遺跡に関しては既に詳細にまとめられており、その中で平野の東端に位置する布田遺跡は弥生時代の拠点集落と位置付けられている（島根県 2017）。遺跡の変遷については、「①拠点集落の成立＝弥生時代前期後半、②拠点集落の盛行＝弥生時代中期中葉、③拠点集落の衰退＝弥生中期後葉、④拠点集落の解体＝弥生後期初頭」とまとめられており（岩橋 2017）、当遺跡が立地する場所は、三角州上の地形で縄文海進終了後、海面が低下して以降陸地化していたとされる（池淵 2017）。また、夫敷遺跡、向小紋遺跡、上小紋遺跡では弥生後期の水田跡が検出されている。

大橋川南部地域における遺跡の変遷を整理したものを図 100、101 に示す。先述の乃木地域における遺跡変遷と照らし合わせ概観すると、乃木 2 期（弥生前期末～中期初頭）で乃木地域に遺跡が集中して出現する頃、意宇地域においても砂州後背湿地の前面に布田遺跡が出現する。土器型式からは乃木地域の集落遺跡とほぼ同時かやや先行する可能性がある。続く乃木 3 期(弥生中期中葉～後葉)には田和山遺跡三重環壕成立とほぼ同段階に布田遺跡は出土土器量のピークを迎える。更に布田遺跡では木製品製作や玉作関連の資料が検出されており当遺跡から他所への製品の供給があったことが示唆され、拠点集落としての盛行段階といえる。

田和山遺跡の三重環壕の成立とほぼ同段階としておきながら、両遺跡の出土土器の様相には若干の違いが認められる。布田遺跡出土遺物の重量（図 102）をみると､遺跡のピークは弥生中期中葉 (松本編年Ⅲ様式) の段階である。これに対し、田和山遺跡はⅢ様式の土器も一定数認められながらも、三重環壕や環壕外の住居は松本編年Ⅳ様式の土器が主体的に認められる。このことから、土器の出土量の増加＝遺跡が栄えた段階とするのであれば、弥生中期において布田遺跡がまず先行し最盛期を迎え（松本編年Ⅲ様式段階)、田和山遺跡が後続（松本編年Ⅳ様式段階）すると考えられる。乃木 3 期の遺跡分布をみると、この頃大庭町の低丘陵に大庭小原遺跡や外屋敷遺跡といった弥生中期の土器が出土する遺跡が散見され、これらの土器は報告書から松本編年Ⅳ様式に位置付けられるものである。布田遺跡がⅢ様式段階にピークを迎えた後、Ⅳ様式期になると、意宇平野以西に集落が分散化し、乃

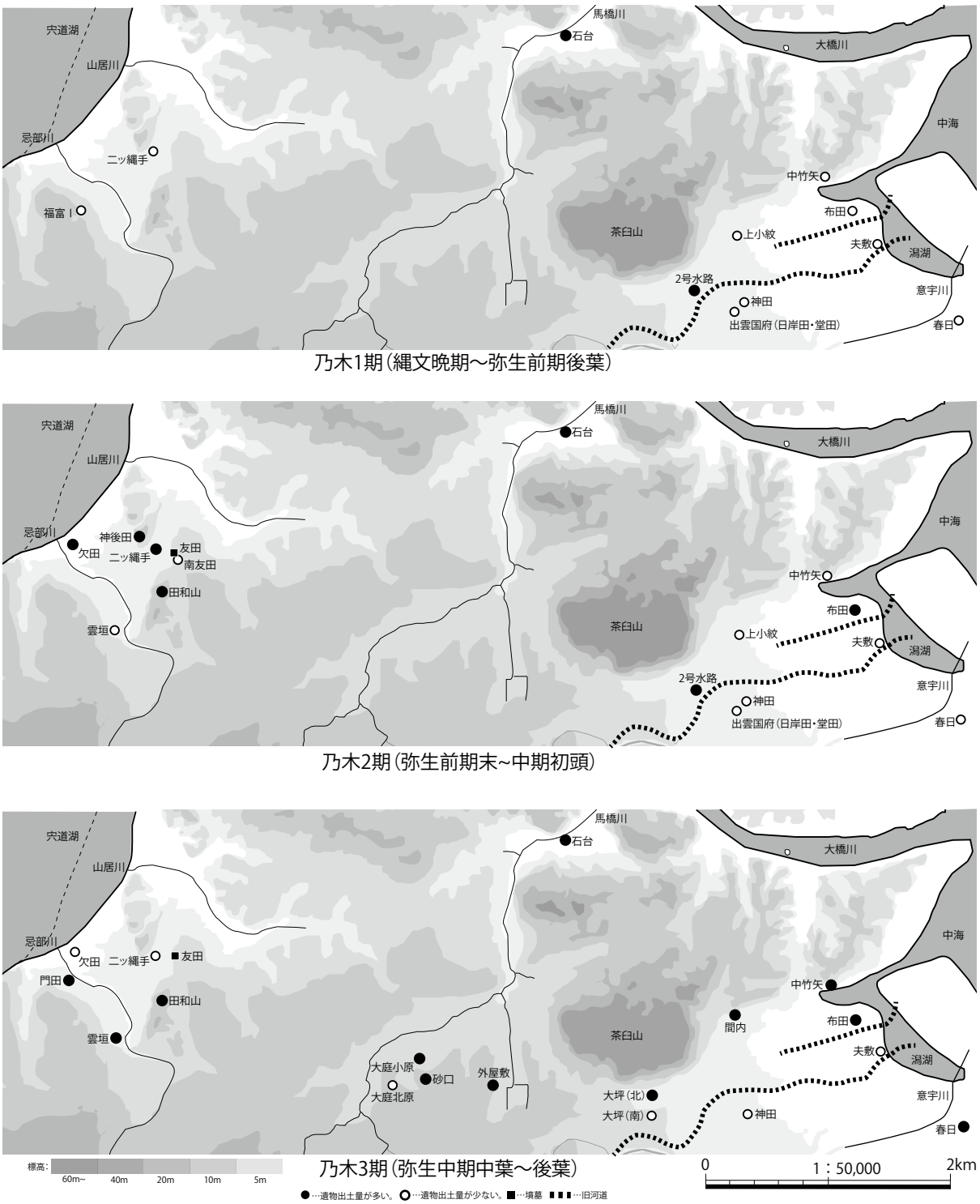


図 100　大橋川南部地域における弥生時代の遺跡変遷 (乃木 1 ～ 3 期)

・標高は国土地理院の地形図データに基づいて作成した。

・現地形のラインを点線、旧地形の推定ラインを実線で表現している。旧地形推定ラインは第 2 章第 2 節地理的環境の図 8、島根県 2017 を参考に作成した。

木地域にも及んでいたと推察する。これは図 98 の変遷でいうと、乃木３‐A 期と３‐B 期にあたり、３‐A 期に布田遺跡が栄え、３‐B 期に田和山遺跡がより荘厳化、集落を拡大させたと考えられる。

乃木 4 期（弥生後期前半）になると乃木地域では田和山遺跡が廃絶し、当地域のモニュメント的役割が友田遺跡四隅突出墓へと転換する。これと連動するように布田遺跡も終焉を迎え、その後夫敷

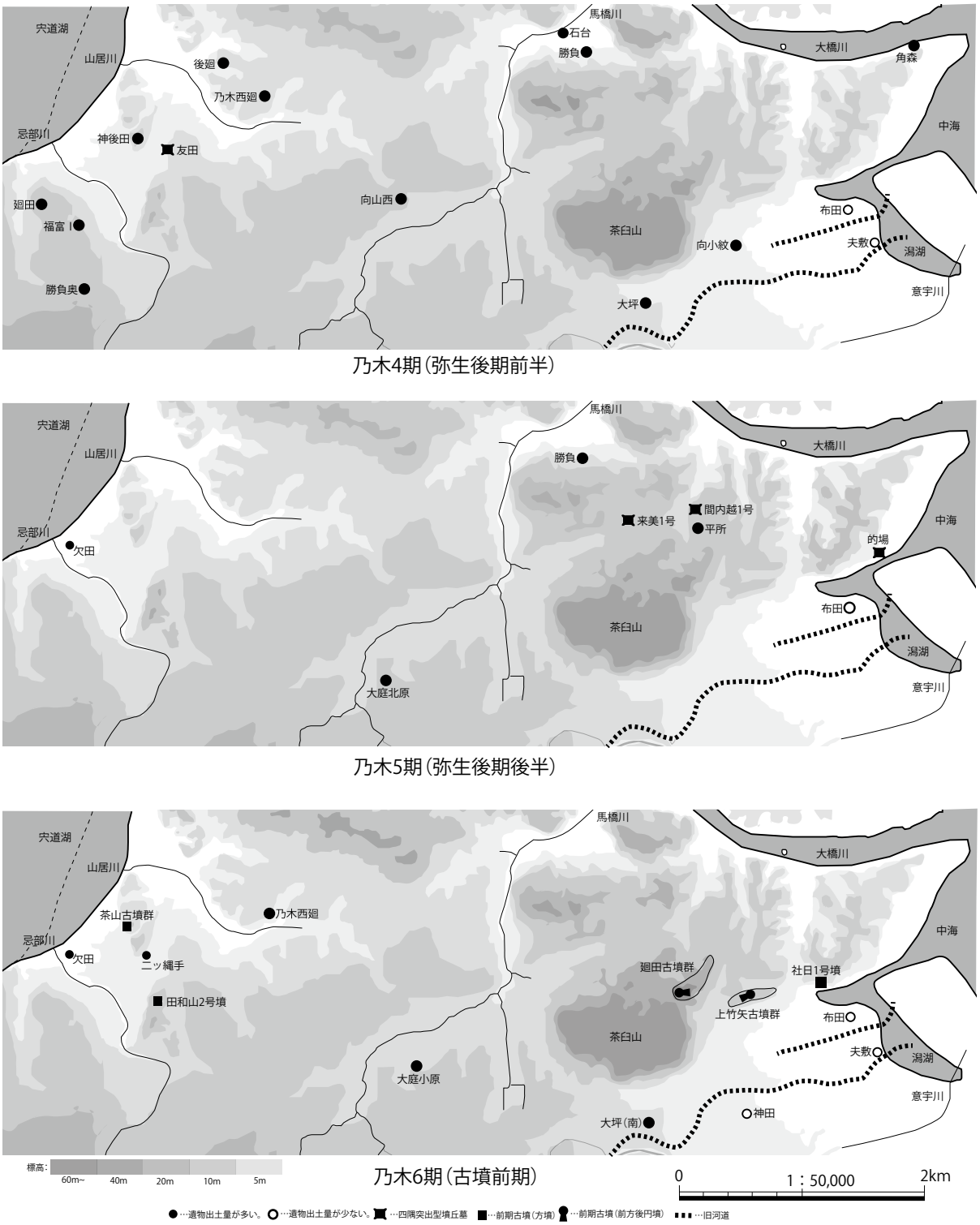


図 101　大橋川南部地域における弥生時代の遺跡変遷 (乃木 4 ～ 6 期)

遺跡、上小紋遺跡、向小紋遺跡で水田が展開するようである。この段階の大橋川南部地域には、共通して低丘陵上や丘陵斜面に小規模集落が展開され、鍛冶関連遺構、玉作工房跡の検出事例もみられる。神後田遺跡竪穴建物や福富Ⅰ遺跡、廻田遺跡、石台遺跡、勝負遺跡がこれに該当する。乃木 5 期（弥生後期後半）段階になると、乃木地域で遺跡数が激減し、新たに大橋川南岸沿いの丘陵上に小規模集落が点在するようである。更に意宇地域では的場遺跡、間内越 1 号墓、東城の前墳墓群、来美 1 号

墓といった四隅突出墓が集中して築造される。当地域にまとまった墳墓が見られ始めるのはこの頃である。乃木６期（古墳前期）に入ると、前期後半、乃木地域に田和山２号墳、茶山古墳群といった小規模古墳がつくられ、周辺の低地部に集落が再展開する。意宇地域では前期前半に社日１号墳が築造され、後半に大型前方後円墳廻田１号墳が出現する。このように乃木地域と意宇地域の弥生時代の集落遺跡はそれぞれ相関する消長を辿り、墳墓の動向に関しては乃木地域が先行し、意宇地域が後続する。

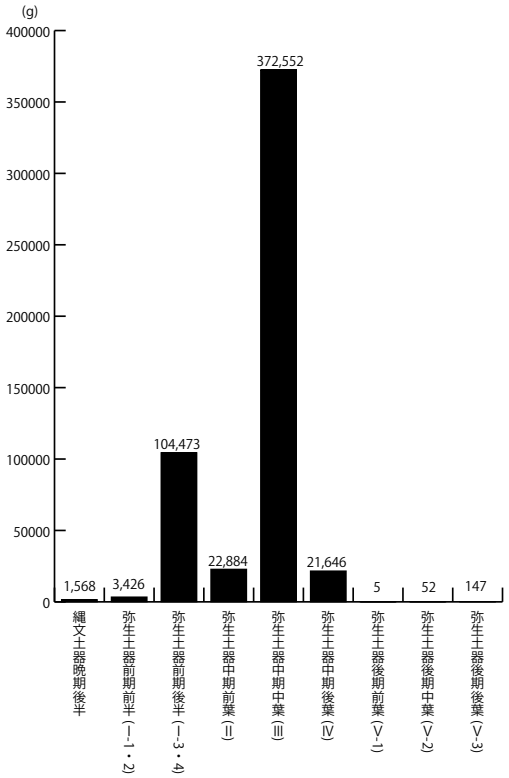


図 102　布田遺跡出土遺物重量表
（島根県 2017 を改変）

ここで神後田遺跡や田和山遺跡の立地環境について触れると、両者宍道湖を西に臨み眼下に湿地帯が広がる丘陵上に位置していたと考えられる（第２章第２節、第４章第４節詳述）。低地部が湿地帯であったという指摘は定住環境としてはやや脆弱で不安定な土地であったと捉えられ、過去の試掘調査結果からも水田が存在したとしても広範囲には及ばなかった可能性が高い。よって当該地を安定的な生活拠点とするには不向きな環境であった可能性が考えられる。

意宇平野について、池淵氏によれば弥生時代の旧河道は意宇平野の中央を流れていたとし、水田開発はその北部が中心であったとされる（池淵 2017）。旧河道北部には弥生前期～中期にかけて布田遺跡、上小紋遺跡、中竹矢遺跡が存在しておりこの範囲に集落が展開されていたことが読み取れ、夫敷遺跡における水田稲作の開始以降徐々に中心を河道の南に移す傾向がある。大橋川南部地域の地質図をみると、意宇平野が礫がち堆積であり、対して、乃木地域の低地部は泥状堆積と分類される（註６）。両者それぞれの河川由来の堆積でありながらも、自然堤防によって中海と隔てられ土砂がせき止められることによって、比較的早い段階から陸地化した土地が獲得できていたであろう意宇地域と、宍道湖にむかって土砂をせき止めるような堤防が発達しないまま、忌部川由来の土砂が流れ込んでいた乃木地域では、人の生活環境としては前者がより適していたと考えられる。乃木地域では拠点集落といえる遺跡が見つかっていない。集落が展開されながらもその規模は小さく、周辺の地理的環境の制約から、拠点集落を支えることができるほどの生産体制を構築し得なかったと考えられる。このことから乃木地域の集落を支えた拠点は布田遺跡を抱える意宇地域にあったと推察する。両地域の間は約４㎞でモノや人の日常的往来が可能な距離関係にある。西日本地域を代表する拠点集落である朝酌川遺跡群も含めるとこれらは日常的な生活圏に隣接する集団であるとの指摘もある（岩橋 2017）。

また、神後田遺跡や田和山遺跡の成立背景を考えるうえで、渡辺貞幸氏が興味深いデータを提示している（渡辺 2020）。渡辺氏によると田和山遺跡から見渡すことができる範囲は松江市宍道湖東岸・北岸・西岸の一部（旧平田市宍道湖岸沿い）に及ぶ。このデータは、田和山遺跡の造営集団がどの地

域の動向に関心を寄せていたかを示しており、神後田遺跡から見える景観もおよそ同様のものと考えられ、西の景観を意識して造営されていたことが窺える。両遺跡は東の布田遺跡を生活母体としながら、宍道湖を経由する西からの水上交通を意識した遺跡であったと考えられる。加えて、友田遺跡において弥生前期末から連綿と続いた乃木地域の墳墓が突如後期前半を境に途絶えるのに対し、意宇地域で後期後半に四隅突出墓が相次いで築造されることは西方を強く意識していた弥生前期末～後期前半の社会構造から、弥生後期後半に大橋川南部地域より東へ社会の重心が移るといった社会的情勢の変化が背景として存在するのではなかろうか。

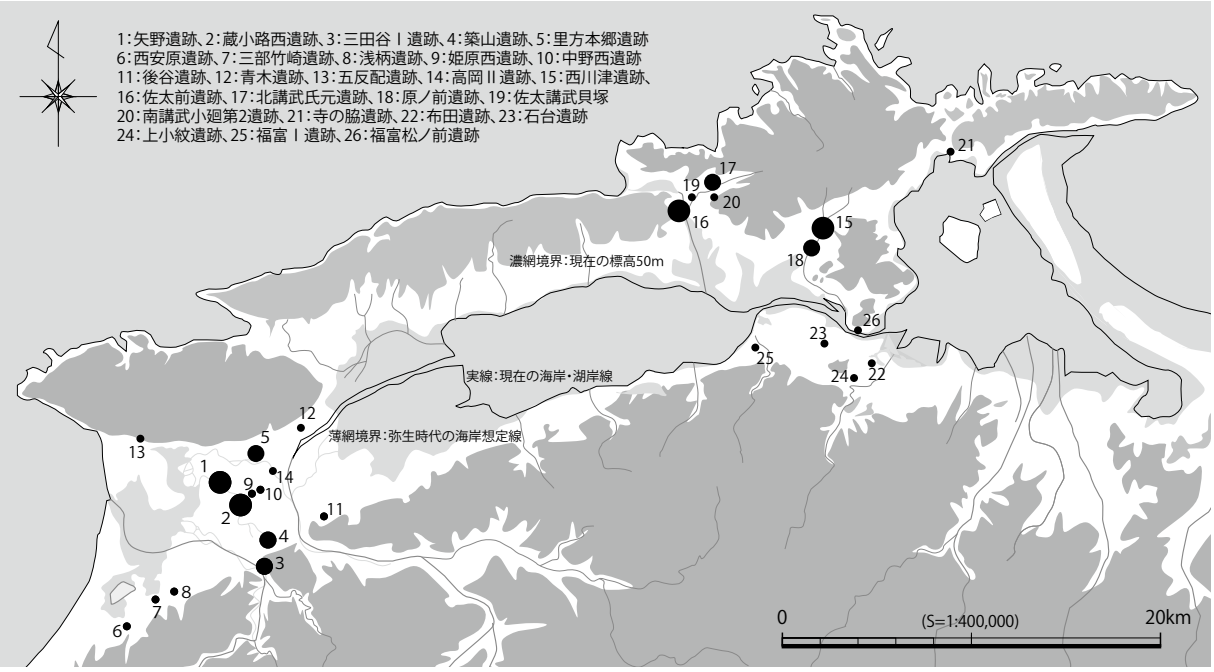
（三宅）

4．大橋川南部地域の弥生時代遺跡の動向と出雲地域平野部

大橋川南部地域における弥生文化発展の意義

前項でまとめたように、大橋川南部地域では弥生時代前期後半～中期初頭に拠点集落が出現し、ほぼ同時あるいはやや遅れて、田和山遺跡・神後田遺跡のような丘陵上のシンボリックな遺跡 (註 7) が登場する。乃木２期のこのような状況を地理的に大きな観点で検討するため、弥生前期の出雲地域平野部の遺跡の在り方を見てみたい (註 8)。

図 103 は、景山このみ氏の遺跡の分類（景山 2016）に従って、前期前葉～中葉の出雲地域平野部の遺跡分布を表したものである。西部の平野部（出雲平野）と宍道湖～大橋川北岸地域（鹿島町低地部と朝酌川遺跡群の周辺）に一定規模以上の遺跡が展開し、断片的・散在的な大橋川南部地域と対照的である。弥生文化の定着には地域によって差異があり、大橋川南部地域の本格的な水田開発開始は坂本豊治氏のいう「稲作の内容・質が充実し定着した段階」（坂本 2010）である。



● 遺構・遺物ともに集中　● 遺構・遺物がやや集中　または遺物のみ集中（遺構なし）　● 遺物が少なく遺構が不明瞭　または遺物のみ少量出土
出雲平野の遺跡は（景山2016）を参考に作成、　地形図は岩本2021の図を基に、岩橋2014、　境港市史1986　を参考に作成

図 103　弥生前期前葉～中葉の土器群出土遺跡

このような弥生文化受け入れ時期の差が生じた要因はどこにあるのだろう。直接それを語る証左はないが、①縄文時代後晩期以降の人口の差、②地勢的な差、が大きな要因として推測できる。①は大橋川南部地域では縄文時代の遺跡が少ないことは認められ、新たな文化を受け入れる段階における遺跡が見えにくい状況証拠となる。しかし数百年にわたって開発が遅れたことを説明することは難しい。②の地勢の違いは、端的に言えば日本海に直接面しているかどうか、の差である。出雲平野は言うまでもなく西に日本海を望み、さらに『出雲国風土記』に「神門水海」と記される広い潟湖が広がって、平野の広い範囲が直接舟運で海とつながっていた。鹿島町低地部は古浦が西に向いて開いた湾となり、砂州・砂丘が形成され、『出雲国風土記』にいう「恵曇坡」が良港となっていたことが推測される。弥生時代前期前葉～中葉に遺跡がみられる佐太地区や講武地区はその内水面に接し、西川津遺跡群周辺の低地は講武や佐太から陸路で丘一つ越えた、ほど近い位置にある。一方大橋川南部地域は「内海」(註7) に面するものの日本海とは水面を隔てた立地である。いわゆる遠賀川系の文化が最初に形成されるのが、大きく見ると日本海の沿岸地域であることから考えれば、わずかではあるが内水域のクッションを挟む大橋川南部地域への本格的な弥生文化（水田稲作）の浸透は遅れたと考えられよう。

弥生時代前期末～中期初頭の大橋川南部地域

それでは乃木 2 期（前期末～中期初頭）に拠点集落とモニュメント性の高い構造物が現れる背景はどこにあるのだろうか。一つは坂本豊治氏が説く（坂本 2010）稲作の安定的な定着がもたらす、人口増加や新たな開田志向があった可能性が高い。それを担った人々が前代から居住する集団だったのか、出雲の北部ないし西部から新天地を求めてきた集団なのか、決める根拠はない。ただ考慮するべきは、従来から指摘されているように（東森 1966 など）、土器の甕口縁部の特徴や沈線の多条化、壷胴部形態（岩本 2021）などに、山陽地方の影響がみられるようになることである。中国山間部の斐伊川と三刀屋川が結節する位置にモニュメント性の高い要害遺跡 (島根県教委 2001) や、伯太川と東西の陸路の結節点に経塚鼻遺跡 (安来市教委 2006) が登場することも同調している。直接的人の移動の有無はさておき、意宇川、忌部川ともに中国山間地への重要交通路であることも併せて、大橋川南部開発の気運が高まったことは想定できる。中期以降には分銅形土製品が多く出土することを、瀬戸内地域の影響が強い地域として評価する考え（岩橋 2017）も注目される。

さて前で述べたように、意宇川下流域周辺と忌部川下流域周辺は弥生時代において集団の関係性が強い地域と考え、大橋川南部をまとめて中規模な地域設定をした。両地区は個集団としてはそれぞれの小地域内で生産活動を行いながら、意宇平野側は拠点集落として、乃木平野側は出雲西部・北部からの文化受け入れ基地として大まかな役割を担って中規模な集団を維持していたと仮説を立ててみた。大橋川南部地域には、吉備地方など瀬戸内の文化受け入れのハブとしての役割があったとすれば、より整合的に理解できる。意宇平野に比べて生産基盤の弱い忌部川周辺 (註 10) は、西や北側からの舟の玄関口として、川と湿地を挟むように一重の環壕を設け、ランドマークとなったのだろう。文明の先進地として西側からの文化受容基地と、その対価（経済的なものに限らず）としての瀬戸内系文化

の発信地として、忌部川流域の乃木地域があったと考えたい。

弥生時代中期の大橋川南部

中期を迎えると、忌部川流域では神後田遺跡は消滅する代わりに、田和山遺跡が三重環濠と土塁に取り囲まれ、荘厳化が増す。より遠方からの見えが強化され、内海からよく目立ったモニュメント機能を発揮したと推測される。前期末～中期初頭に二か所に設けられたモニュメントとその機能が集約・発展したものと理解したい。田和山で行われていたと考えられる祭祀も、あるいは重要な船団の入港時に行われていた可能性も考慮してみる必要があろう。意宇川流域の布田遺跡が発展することとも整合する。気候的にも安定し（中塚 2020、藤尾 2020）、出雲地域平野部においても中規模な地域的結合が強化され、交流や流通も活発化したと考えられる。

友田遺跡で方形墳丘墓が築造されることも、安定した地域内での首長層の出現と評価でき、それが忌部川流域に存続し続けることも重要である。墳丘墓は隣接する田和山とセットとなり、ランドマークとして機能していた可能性もある。また土器の出土量や遺構数を時期別にみてみると、Ⅳ様式期に布田遺跡の土器量が減少し、田和山遺跡の環壕外側に遺構が出現することを相対応した現象と考えることもできる。拠点集落の集団の一部が居住域を一時的に田和山周辺に移している可能性もあるのではないか。シンボリックな丘陵の遺跡には、後述する塩津丘陵遺跡群のように墳墓や居住地もセッティングされることもある。

ただ出雲地方の内海に可視的交流拠点が強化され、存続し続けることは、出雲の広域で安定的なネットワークは確立しておらず、中規模な地域結合強化とそれを超えた範囲での緩やかな地域間関係が予想される。一方で田和山における石硯などの存在は、想像をたくましくすれば、出雲地方西部や北部地域を経由しながらも、外部集団が直接内海を通行して大橋川南部地域に来航していたことも想定される。弥生時代中期末は鉄器の流入が顕在化する時期 (池淵 1998,2012、会下 2020) でもあり、奥出雲町国竹遺跡で大型の鉄斧が出土している (田中・石田 2000) ことなども勘案すると、大橋川南部地域が瀬戸内地方と西方（北部九州など）を結ぶ結節点となっていた可能性も考えたい (註 11)。

弥生時代後期前半の大橋川南部

田和山での活動痕跡が消えるとともに、内海沿いの門田遺跡が消滅する一方、神後田遺跡には鍛冶を行った竪穴建物が建つ。列状墓や墳丘墓が築かれた友田丘陵には四隅突出墓（以下状況に応じて「四隅」と呼ぶ。）が築かれる。弥生的構築物である環壕が、四隅突出という広域で共通化した墳墓と交代する画期である。内海から見える神後田丘陵に鍛冶工房（SI49）が建つことは、鉄の交易の活発化と関連するものかもしれない。また SI49 から水晶が出土していることにも、鉄交易の対価の象徴として意味を見いだせるかもしれない。意宇川流域では布田遺跡での活動は見られなくなり、後背湿地だった夫敷遺跡に水田が広がる時期である。大橋川南部地域でも耕作地が広がり、拠点集落の移動もしくは解体があった画期と評価される。

ところで意宇川流域には弥生時代前期末から一貫して有力墓地は発見されていない。ないことを

証明することは考古学上難しいが、ここでは発見されていないことを積極的に評価したうえで、友田丘陵に築かれてきた表徴的墓は、大橋川南部地域全体の中規模集団を代表する者（家族）、あるいは首長と考えてみたい。つまりは大橋川南部地域全体を表象するシンボルが忌部川流域の墓域に築かれ、より内海に近い神後田遺跡に生産にかかわる建物が建てられた時期と考えるのである。社会が大きく変化しながらも、西方からの文化や物資の流通がまだ優位だった時期と考えたい。

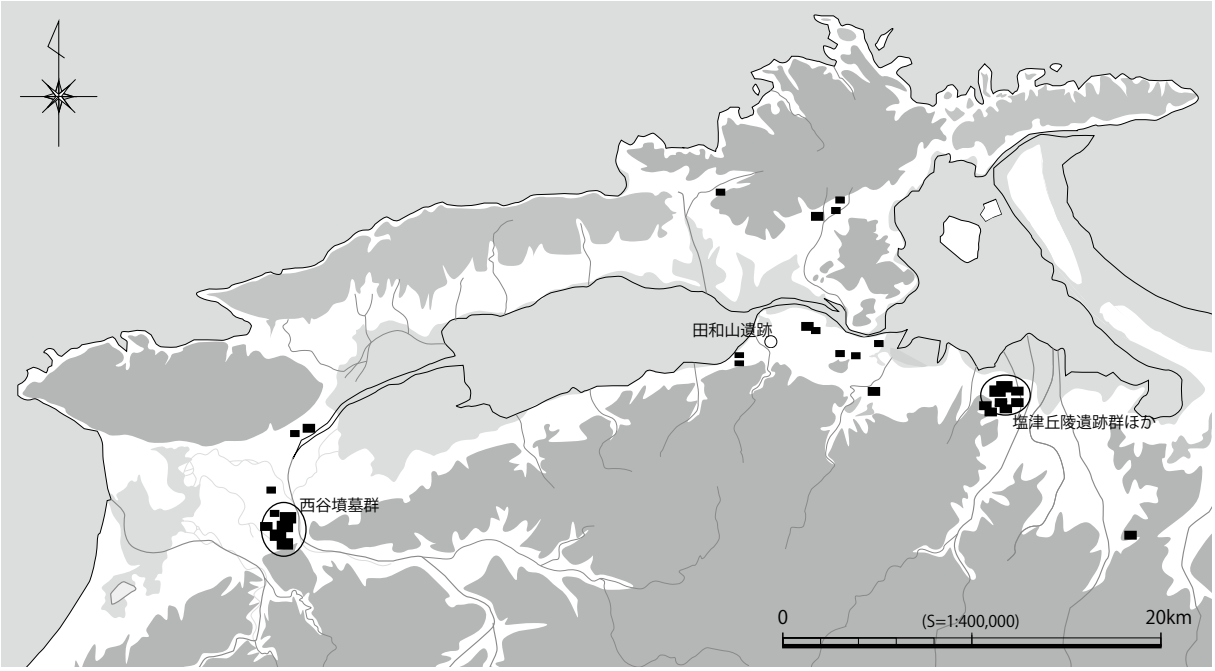
一方、青銅器の様相や神庭荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡、志谷奥遺跡などの大量一括埋納の時期から、出雲地方における青銅器祭祀と田和山遺跡存続の時期が一致することを重視する意見が多い（松江市教委他 2005、松本 2015 など）。現状でそれは首肯されると考えられるが、いまだ深く掘り下げることは難しい状況である。しかし、環壕を弥生時代的築造物とするならば、青銅器もまた同様である。双方ともに、水田農耕が安定して行われるようになって出現し、四隅突出墓が出現するのと同時に廃絶するのであれば、まさに弥生文化を表徴するシンボルとして、同調して見えるのは偶然の産物ではないのだろう (註 12)。田和山遺跡での銅剣形石剣の存在は、両者をつなぐ唯一の資料である。

弥生時代後期後半の大橋川南部

忌部川流域から遺跡が見えなくなる。もちろん、居住者がいなくなったとは考え難いが、少なくとも活発な活動は衰微した時期といえる。一方意宇平野流域では、中小規模とはいえ５か所（東百塚山 20 号墓、間内越墳墓群、来美墳墓群、的場墳墓、東城ノ前墳墓群）で６基以上の四隅突出墓が発見されている。小地域集団ごとに墳墓を築造している様子が見え、後期前半と様相が一変している（松本 2012、飯塚 2012）。意宇川下流域周辺でいくつもの中小集団が活動し、首長同士の広域連合体の表象である墳墓を築造しているとみられる。今後忌部川下流域で１～２か所程度の四隅突出墓が発見される可能性はあるが (註 13)、いずれにせよ大橋川南部地域での両地域の活動規模が反映されているものと推測される。つまり出雲地方西部や島根半島側を意識した忌部川流域にはモニュメンタルな構築物は継続して築かれることなく、集団の政治的、経済的地位に沿って意宇川流域を中心に四隅が築かれたと考えたい。

このような中小地域の中の変化は、出雲地域平野部全域を見渡してみると、大きな流れが理解しやすい（図 104）。弥生時代の当初より開発が始まり、拠点的な集落を複数展開させた出雲地方西部の出雲平野では、巨大四隅突出墓を集中的に築いた西谷墳墓群が平野西側の斐伊川沿いの丘陵上に登場し、末期まで続く。西谷墳墓群の立地は、渡辺貞幸氏がカシミール３Ｄによって表したように（渡辺 2020）、平野の西だけでなく東側から広く望むことができる立地となっている。集落の集中地点からあえて東に寄った丘陵上に配置した意味がどこにあるのか興味深い。

一方ここで取り上げることのなかった出雲地方東部の安来平野荒島地域に、西谷の巨大墓には及ばないまでも、長辺が 30m を超える四隅突出墓と同時期の集落が一体となった塩津丘陵遺跡群が出現する（丹羽野編 1998）。この遺跡群は内海に面して頂上に倉庫群と四隅を配置して集約的集落を構成しており、弥生時代後期後半の交易拠点と考えている（丹羽野 2002）。荒島周辺には、そのほかに多くの中小四隅が丘陵上に築かれている。これらはすべて、東と北を向いて築かれており、現中海



凡例　■ 大型(長辺30m以上)四隅突出型墳丘墓　■中型（長辺15～25m）四隅突出型墳丘墓　■ 小型（長辺～15m）四隅突出型墳丘墓

出雲平野の遺跡は（景山2016）を参考に作成、　地形図は岩本2021の図を基に、岩橋2014、境港市1986を参考に作成

図 104　弥生後期後半の四隅突出型墳丘墓の分布

東側の弓ヶ浜の切れ目から入航してくる船を意識したものと推測される。

翻って西部の西谷墳墓群があえて東方を意識した丘陵に立地した背景には、重要な交流や交易が多極化し、特に東の近畿地方や南の吉備地方との関係の比重が相対的に高くなったことを反映していると考えたい。弥生時代当初より拠点集落を展開していた大橋川・宍道湖北部地域で目立った四隅突出墓が見られないのも、交流交易の多様化、言い換えれば日本海を通じた文化流入が西方からがメインだった時期が終わったことのあらわれではないだろうか。

さて大橋川南部地域に論点を戻したい。繰り返しになるが、弥生時代後期後半に忌部川流域からモニュメント性の高い構築物が消え、人間の活動の痕跡が少なくなるのは、交流や交易の多極化に伴う西側に重点を置いた日本海交流・交易からの脱却と同調した現象と理解できる。後期後半は日本海沿岸地域や吉備地方で傑出した墳墓が現れ、広域で集団の特定個人（首長）間のネットワークができる時期（岩永 2010）で、続く後期末には東海から九州に至るまでの地域間交渉の活発化が認められる（久住 2007）。そうした状況で、東や南を強く意識した交流拠点が現れることで、大橋川南部地域における文化交流拠点を西側の忌部川流域に固定する必然性がなくなったと考える。場合によっては東側に傾斜して、的場遺跡周辺に小さなモニュメント的遺跡が形成された可能性もあるが、開発が進んだ今となっては想像でしかない。いずれにしても、大橋川南部地域は親和性が高い (註 14) 安来平野の塩津丘陵遺跡群を基点とすることで、田和山周辺の特別な役割を大きく縮小したのだと考えられる。また観点を変えれば、四隅突出墓という紐帯で結ばれた後期後半～末頃には、出雲地域平野部は強い首長間ネットワークが形成され、東西二つの可視化拠点が存在すればよい時代になったともいえる。両地域の中間に位置する大橋川南部地域は、目立ちはしないものの複数集団が四隅突出墓を築造しながら、力を蓄えていく時代になったと評価したい。

古墳出現以降の大橋川南部地域

日本列島中央部の近畿地方に巨大な前方後円墳が出現して以降、出雲地方では安来平野荒島地域に竪穴式石室を主体とし、鏡などを副葬する大型方墳が累代的に築かれる。西谷墳墓群の後裔首長古墳は見えにくくなるのと対照的で、近畿地方との政治的関係を強めて出雲トップのステイタスを荒島地域が持つこととなる。大橋川南部地域では小型中国鏡を伴う小方墳が築かれ続け、弥生時代後期後半からの立場を維持していくようである。忌部川流域では変わらず活動の見えにくい状況が続く。

ところが古墳時代前期後半に大きく古墳の築造状況に変化が訪れる。意宇平野の北側丘陵上に出雲地方最古で当該時期最大の前方後円墳、廻田 1 号墳が築造される（島根県古代文化センター 2012）。忌部川流域でも小型方墳ながら古墳の築造が開始される。その後、出雲地方（場合によっては安来市から松江市までの東部）最大級の古墳が意宇平野の周辺で築かれ続けるのである。それに呼応するように、忌部川・山居川流域でも活動の活発化をうかがうことができる。意宇中核の縁辺に生産遺跡が配されることも重要な要素である (丹羽野 2020)。

弥生時代前期の水稲農耕の拡大、弥生時代後期後半～古墳前期前半の大型墳墓の展開、ともに一歩遅れることは、出雲の中央部に位置し直接外海との接触が少ない大橋川南部地域の特性ともいえる。しかし出雲地方全体の安定した人モノ情報のネットワークが確立する時期には、内海の東西両地域間の交通・流通をコントロールできるその位置こそ、やがて大橋川南部が出雲の中心地となっていく地域的特性でもあった。

（丹羽野）

註釈

(1) 田和山遺跡西方から神後田遺跡南麓にかけての水田域は平成 10 年、平成 21 年に土地区画整理事業に伴い松江市により試掘調査を実施している。合計 65 か所のトレンチを調査した結果、二ツ縄手遺跡、雲垣遺跡を除いた範囲で礫層が検出され、忌部川の氾濫による堆積層と捉えられる。その上には、多くのトレンチで泥層と砂層が交互堆積し、雲垣遺跡では沼状の古地形も推測されている。雲垣遺跡では田下駄が、欠田遺跡では石包丁が出土していることから、当地で弥生時代に水田稲作が行われていたことは想定されるが、上記のような試掘結果から一帯は忌部川の氾濫が頻繁に発生していた可能性があり、安定的な水田利用は困難な環境であったのではないかと推測する。

(2) 平成の合併前の松江市域南部（乃木地区、古志原地区、大庭地区、竹矢地区、津田地区）を大橋川南部地域と呼ぶ。乃木地区は宍道湖に面し、竹矢地区は中海に面するが、概ね大橋川の南に位置することを名称の根拠とする。

(3) 本稿の執筆にあたり、池淵俊一氏、岩本真実氏、江川幸子氏、坂本豊治氏よりご助言を得た。

(4) 改めて報告書を確認し、床面等の遺物から建物の多くはⅣ様式期であり、Ⅲ様式期は僅かであった。

(5) 研究史上多くの呼称があるが、松本 2015 にならって「四隅突出墓」と称する。

(6)「表層地質図　松江」を参考とした。（URL：https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/tochimizu/F3/data/G/3204G.jpg）

(7) 田和山遺跡の三重環壕と頂上施設については、おおまかに防御機能説 (今岡 1999、松江市教委 2005、寺澤 2014)、祭祀拠点説 (松江市教委 2005、落合 2012)、折衷説 (松本 2015) がある。本稿ではそれらの説を全面的に否定はしないが、対外的なモニュメント性が強い施設と考えている。軍事的な防備施設とするにはその護るものが何なのか説明しがたい。また成立時には環壕は頂上を囲繞していない。石鏃や礫石は実際の防御活動というよりは、田和山で行われた何らかの行為に儀礼的に織り込まれたものではないか。また祭祀拠点説も一部は受容するものの、弥生時代の集団祭祀の場として考えるには田和山は規模が突出していて特殊であり、その存続時期がきわめて長いことと併せて一般化が難しいと思われる。その存在の主因は内海からの見え（ランドマーク）と考えることでその消長が理解しやすい。

(8) 本項では出雲地方沿岸部の東側、安来平野の様相を弥生時代後期後半まで取り上げることができない。それは安来平野での弥生時代前期～中期の遺跡の動向がよくわからないからである。安来平野は主に飯梨川と伯太川によって形成された平野で、近世以降の鉄穴流しによって下流部は莫大な土砂が堆積している。弥生時代の汀線はかなり南にあったと推測され、沖積地の遺跡は表に出てきていない可能性が高い。また、縄文時代晩期～弥生時代前期には、東に接する東伯耆に目久見遺跡が成立しており、安来平野にも前期には水田稲作が到来し、一定の活動が行われていたと推測される。ここでは安来平野における弥生文化の流入は、あったとしても東からのアクションが大きかったものと想定することで、論を進めたい。

(9) ここで言う「内海」とは一般的な地形名称（「陸地と陸地の間で挟まれ、海峡で大洋に連なる海」『広辞苑　第七版』）の意味で用いる。この後は論述する脈略の中で、おおむね『出雲国風土記』でいう「入海」の該当部分を示す (図 103 参照)。現在の位置を説明する場合は、地点に応じて「中海」、「大橋川」、「宍道湖」と記す。

(10) 忌部川流域の水田稲作の拡大を考える上で興味深いのは、田和山 A 遺跡に見られる水源地祭祀の様相である (丹羽野・丹羽野 2020)。集団の個別的で本質的な祭祀の場と推測される田和山 A 遺跡の流水路 1 は、カンナビ状の山容を見せる田和山の南嶺から流れ出し、東側の上乃木町との間の谷に流れ出す。そこで古墳時代前期後半～中期に繰り返し祭祀が行われ、6 世紀末頃、9 世紀頃にも祭祀が行われていた可能性が高い。また流水路 2 からは弥生時代前期末～中期初頭の土器がまとまって出土しており、当初から東の谷を意識した祭祀が行われた可能性がある。北側の広い平野ではなく、中規模の谷が重要な水田だったことを示唆している。

(11) 中国山間部への鉄器の流入経路を、斐伊川等を利用した河川交通を想定される場合も多いと思うが、舟で上流にさかのぼることと陸路とでは、物理的・社会的安全性の高さを考えると、必ずしも河川の遡上が最上ではなかったのかもしれない。また一次交通と二次交通の手段の差も考慮する必要がある。

(12) 山陰地方で青銅祭器が早い段階に消えることについては、四隅突出墓との交代を考えるのが通説 (岩永 1997、島根県教委ほか 1997、寺澤 2000、松木 2007 など）で、異論はないものの、鉄器の一定量の流通が青銅材料そのもの希少価値の低下をもたらしたことが要因の一つとも考えられる。
(13) 忌部川流域から丘陵を一つ越えた松江市玉湯町布志名地域には布志名大谷墳墓群で 3 基の小型四隅突出墓が築かれており、田和山遺跡等を支えた集団の墳墓と解釈することも可能である。ただ布志名地域は小地域としてまとまっており、あえて忌部川流域の首長墓ととらえる必要はないと考える。地域間の関係を考えた場合も、西に隣接する玉湯川流域との関連性が強い地域と理解したい。
(14) 前注で述べたように、安来平野の弥生時代後期より前の様相はよくわからない。ただ古墳時代の動向を見ると安来平野の西部は大橋側南部地域とほぼ同調した動きを取っている。弥生時代後期までに、二つの中地域は親和性を高めたものと考えている。

参考文献

飯塚康行 2012「東城ノ前遺跡」『松江市史　資料編 2　考古資料』松江市
池淵俊一 1998「山陰における弥生時代鉄器の様相」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県経宇育委員会
池淵俊一 2007「第 1 節　山陰における方形区画墓の埋葬理論と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
池淵俊一 2012「島根県の弥生時代鉄器集成」『松江市歴史叢書』5　松江市教育委員会
池淵俊一 2015「意宇平野の開発史」『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
池淵俊一 2017「第 6 章総括　第 1 節意宇平野における集落の変遷」『意宇平野の集落遺跡』島根県教育委員会
今岡稔 1999「弥生時代の城の発見」『島根考古学会』第 16 集　島根考古学会
岩永省三 1997『金属器登場』講談社
岩永省三 2010「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合博物館研究報告』NO.8
岩橋孝典 2017「第 4 章　布田遺跡の再整理」「布田遺跡をめぐる諸問題」『意宇平野の集落遺跡』島根県古代文化センター調査研究報告書 53　島根県古代文化センター
岩本真実 2021「出雲地域平野部における弥生時代前半期の土器様相」『山陰弥生文化の形成過程』島根県古代文化センター
会下和宏 2020「弥生時代の山陰地域における鉄器普及の様相」『山陰研究』12　島根大学法文学部山陰研究センター
落合昭久 2012「田和山遺跡」『松江市史　史料編 2 考古資料』松江市
景山このみ 2016「第 2 節　出雲地域における弥生集落遺跡と杉沢集落」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群～出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』出雲市教育委員会
久住猛雄 2007「「博多湾貿易」の成立と解体－古墳時代初頭前後の対外交易機構－」『考古学研究』第 53 巻第 4 号
久住猛雄 2020「松江市田和山遺跡出土「文字」板石硯の発見と提起する諸問題」『古代文化』第 72 号第 1 号
境港市 1986『境港市史』
坂本豊治 2010「出雲における稲作文化の伝播過程－矢野遺跡の弥生前期土器・石器・木器から－」『矢野遺跡（第 4 分冊)』出雲市教育委員会
島根県教育委員会・朝日新聞 1997『図録　古代出雲文化展』
島根県教育委員会 2001『熊谷遺跡・要害遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 13』
島根大学考古学研究会 1971『菅田考古』12 号
田中義昭・石田為成 2000「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』第 17 集
寺澤薫 2000『日本の歴史 02　王権誕生』講談社
寺澤薫 2014「高地性集落論」『弥生時代の年代と交流』吉川弘文館
中塚武 2020「先史・古代における気候変動の概観」『先史・古代の気候と社会変動』臨川書店
中村太一 1996『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館
西伯耆弥生集落検討会 2001『山陰地方における弥生時代前期の地域相　資料集』
丹羽野裕編『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会
丹羽野裕 2002「山陰の高地性集落－塩津丘陵遺跡群を中心に－」『月刊文化財』470 文化庁編
丹羽野裕・丹羽野照子 2020「松江市田和山 A 遺跡における古墳時代中期の祭祀遺構・遺物について」『遺跡学の地平―吉留秀敏氏追悼論文集』　吉留秀敏氏追悼論文集刊行会
乃木郷土誌編纂委員会 1991『乃木郷土誌』
東森市良 1966「島根の前期弥生式土器」『菅田考古』第 8 号
東森市良 1973「三　農耕の開始と政治的社会の成立」『古代の国々－ 4　出雲の国』学生社
東森市良 1983「山陰」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社
藤尾慎一郎 2020「水田稲作の伝播－人々の移動と気候変動－弥生早期～中期末」『先史・古代の気候と社会変動』臨川書店
松江市教育委員会 1983『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
松江市教育委員会・財団法人松江市文化振興事業団 1994『角森遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 2000『門田遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会 2001『二ツ縄手遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2001『雲垣遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・財団法人教育文化振興事業団 2002『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』
松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告 1・2』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2006『向山西遺跡』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2008『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2011『（仮称）上乃木高齢者専用賃貸住宅新築工事予定地内発掘調査報告書　後廻遺跡』
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2014『小原団地造成工事に伴う発掘調査報告書　大庭小原遺跡』
松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2016『大庭センターハイツ宅地造成工事に伴う発掘調査報告書　外屋敷遺跡』
松江市・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2020『市道福富 10 号線外 2 線道路改良工事に伴う発掘調査報告書　福富松ノ前遺跡』
松江市史編集委員会編 2014『松江市史　資料編 11　絵図・地図』松江市
松木武彦 2007『列島創世記（全集日本の歴史　第 1 巻)』小学館
松本岩雄 1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年―山陽・山陰編―』木耳社
松本岩雄 2012「集成　四隅突出型墓」『松江市史　資料編 2　考古資料』松江市
松本岩雄 2015「弥生時代の松江―農耕社会の成立と展開－」『松江市史　通史編 1　自然環境・原始・古代』松江市
松本岩雄 2021『松江市ふるさと文庫 27　田和山遺跡が語る出雲の弥生社会』松江市歴史まちづくり部史料調査課
安来市教育委員会 2006『経塚鼻遺跡発掘調査報告書』
渡辺貞幸 2020「見せる墳墓・見られる墳墓―「カシミール 3D」を使った景観考古学の試み―」『松江考古』10 号

第 6 節　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠の様相と神後田遺跡

はじめに

1990 年代以降の大韓民国における全国的な国土開発に伴う発掘調査の急増は、単に調査件数の増加だけでなく、それらが産業・工業団地の開発に先立つ広大な面積の発掘調査であったため、先史・原始集落全体の様相を明らかにするきっかけのひとつとなった。その結果、この 20 年間多くの調査研究成果を見せた韓国考古学の分野の一つとして先史・原始集落研究が挙げられる (環濠集落に関するものとして、安 2006、裵 2000・2012、宋 2012、李 2018、李 1998・2007、李 2015、庄田 2012、武末 2005、日韓集落研究会 2012 など)。朝鮮半島における定住集落の形成は新石器時代に始まるが、環濠を持つ集落形態の出現は青銅器時代前期のこととされている (李 2015)。本稿では、神後田遺跡造営時期と併行する朝鮮半島中西部以南における初期鉄器時代 (註 1) の環濠集落について、その概要を整理して特徴を示し、神後田遺跡の環濠を理解する際の比較資料を提示することを目的とする。朝鮮半島中西部以南の青銅器時代から原三国時代にかけての環濠集落については、李秀鴻による総合的な考察があり、本稿で扱う資料については李論考でも取り上げられていることから、李の研究成果を基に 2015 年以降の資料を追加し、各遺跡での環濠の様相について概略的に整理してみる。

1．朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡の様相 - 中西部以南地域を中心に -

ここでは朝鮮半島特に、中西部以南の地域での初期鉄器時代 (粘土帯土器使用時期) の環濠集落について概観してみる。

(1) 江陵　芳洞里遺跡 (図 107)（江原文化財研究所 2007）

江原道江陵市芳洞里山 90 に位置する。この地区に形成された複数の丘陵上に遺跡が造営され、それら丘陵の中でも環濠が検出された C 地区の丘陵が最も高く海抜 99.6 mを測り、丘陵目前の谷間部との比高差は約 50 mになる。

丘陵の頂上部付近から 2 条の環濠が検出された。環濠 1(C ‐ 環濠 1) は海抜 89 ～ 90 mの等高線に沿う形で弧状をなして掘削され、長さ 49 m、最大幅 2.2 m、最大深さ 0.95 mを測る。環濠の断面は U 字形・V 字形を呈し、西端部側に行くほど深くなる。環濠の底面全面から多量の花崗岩製割石が検出され、投石に使用されたとされている。環濠内遺物としては底部を中心とする無文土器片と有溝石斧、半月形石包丁片、土製紡錘車が出土した。

環濠 2(C‐環濠 2) は海抜 85 ～ 86 mの等高線に沿う形で環濠 1 から南に約 7 m離れて確認された。環濠の中央部は後代の墳墓によって破壊されており、東側環濠は長さ 13.5 m、最大幅 1.1 m、深さ 0.4 m、西側環濠は長さ 4 m、最大幅 0.42 m、深さ 0.4 mを測る。環濠の断面は U 字形を呈し、両端に行くほど幅が狭まり深さも浅くなる。環濠内遺物としては粘土帯土器と外反口縁壺など多数の無文土器が出土した。

出土遺物から環濠の築造時期の違いについて環濠 2 が古く、環濠 1 を新しいものとしている。また、環濠 1 と同時期の遺構として、C ‐ 2・4・8・11・17・26 号住居址 (芳洞里 1 期：紀元前 4 世紀末～ 3 世紀初)、環濠 2 と同時期の遺構として、C ‐ 7・10・13・20・22・16・24 号住居址、1・

2 号窯、1 号廃棄場、1 ～ 7 号竪穴がある (芳洞里 2 期：紀元前 3 世紀初～ 3 世紀中半)(江原文化財研究所 2007)。

(2) 富川　古康洞遺跡 (図 108)（漢陽大学校博物館 2005）

京畿道富川市梧亭区古康本洞と鵲洞のジャンゲッ村の裏山一帯に位置する。ここでは海抜 91.6m の丘陵頂上部の平坦面で円形の環濠と積石施設を持つ「積石環溝遺構」が調査された。

まず、環濠は平面円形を呈し、長さは約 63 m (北側小型溝を除く)、幅 3 ～ 4 m、深さ 0.8 ～ 1m を測り、環濠によって囲まれた内部空間の直径は 20 ～ 22 mほどになる。環濠の断面は U 字形を呈する。西側の一部が途切れており出入口とされる。環濠北東部の床面では「北東部遺構」とされる、約 5 mの範囲で火を受けた箇所と黒色を呈する有機質腐植土の分布が見られる。ここからの出土遺物として磨製石剣片、磨製石鏃、粘土帯土器、祭器形土器等が大量に見られる。

環濠内部空間の中央からやや北側に寄った地点に長軸 7 m、短軸 6 mの範囲に積石を施した施設を構築している。積石端部と中心部のレベル差は約 40 ～ 50㎝で中心部が高く、3 度の盛土後、積石を施している。この積石遺構について報告者は祭壇と報告している。

(3) 水原　栗田洞遺跡 (図 108)（畿甸文化財研究院 2004）

京畿道水原市長安区栗田洞山 38 ‐ 2 番地一帯に位置し、海抜 112 m前後の頂上部を中心に広がる丘陵地帯に立地する。

環濠は丘陵頂上部の西側斜面、海抜 101 ～ 104 mの等高線に沿って掘削されている。残存している長さは 101.6 m、最大幅 2 m、最大深さ 1.07 mを測る。環濠の断面は U 字形を呈する。表土下の岩盤層を意図的に残していると考えらえる環濠 B と C の間を出入口施設に想定しており、その幅が約 22 mになる。環濠埋土・底面から粘土帯土器片が出土した。

(4) 華城　東鶴山遺跡 (図 108)（畿甸文化財研究院 2004）

京畿道華城市東灘面石隅里山 154 ‐ 2 番地に所在する。この一帯は海抜 100 m前後の丘陵が北西‐南東方向に長くつながり谷間部が形成されている。遺跡が立地する東鶴山は海抜 122.2 mを測り、周辺には低丘陵と河川が位置し、眺望の利く場所にある。環濠は海抜 115 mほどの丘陵頂上部を囲むように 3 条検出された (註 2)。これらの場所は麓からの比高差が 70 mほどになる。

1・2・3 号環濠は各々等高線にほぼ沿う形で掘削されているが、丘陵頂上部付近を一周せず、南側では 2 号環濠の一部を除いて掘削されていない。

1 号環濠の長さは約 62 m、最大幅約 4 m、最大深さ約 1 mを測り、断面形態は頂上部では緩慢な U 字形、斜面では底面が不規則な形をなす。出入口施設として報告者は溝内から遺物が集中的に出土することを考慮して 1 ‐ B と 1 ‐ C 間の空間を想定しており、その幅は約 1 mである (畿甸文化財研究院 2007)。環濠内側からは遺構は検出されず、環濠外側で環濠と同時期の竪穴と炉址が確認されている。遺物は溝内から多量の円形粘土帯土器口縁部片、小型土器、豆形土器、紡錘車、石鏃、石斧

が出土した。

２号環濠の長さは約 165 m、最大幅４m、最大深さ約１mを測り、断面形態は緩慢なＵ字形を呈するが、一部でＶ字形に近い形も見られる。出入口施設として報告者は２‐Ｂと２‐Ｃ間、２‐Ｅと２‐Ｆ間、２‐Ｆと２‐Ｇ間、２‐Ｊと２‐Ａ間の４カ所を想定している (畿甸文化財研究院 2007)。特に、幅２～ 2.5 mを測る２‐Ｂ～２‐Ｃ間と２‐Ｇ～２‐Ｆ間は丘陵頂上部中央を基準にした場合、ほぼ対角線上にある点を指摘できる。遺物は溝内から円形粘土帯土器口縁部片、小型土器、豆形土器、長頸壺、砥石、石鎌、石鏃紡錘車が多量に出土した。

３号環濠の長さは約 64 m、最大幅 2.5 m、最大深さ約 0.8 mを測り、断面形態は緩慢なＵ字形を呈する。溝底面からは円形竪穴 (21 号竪穴) が確認され、その内部と竪穴周辺から木炭が確認されている。遺物は溝内から円形粘土帯土器口縁部片、小型土器、豆形土器、長頸壺、組合式牛角形把手片、石斧、石包丁が出土した。

環濠の切り合い関係から、西側斜面において２‐Ａ→１‐Ａ・３‐Ａ‐１の順に掘削されたと考えられている。また、環濠の特徴として、一周せずその深さと幅において定型性がない点や環濠内側で生活遺構が確認されていない点を挙げ、溝内からは竪穴遺構と木炭が確認されたことから儀礼行為が執り行われたことを想定している。また、溝内からは非実用的なミニチュア土器や破砕されたと思われる土器片が多量に出土する点、環濠の位置する地点の地表面で銅鑿鋳型が収拾された点、眺望が良い地点に環濠が掘削されていることなどから特殊な目的によって設置された遺構と結論づけている (呉 2007)。

(5) 烏山　佳長洞遺跡 (図 109)（畿甸文化財研究院 2008）

京畿道烏山市佳長洞山 23 番地一円に位置する。遺跡は海抜 80 m前後の丘陵頂上部と付近の斜面に形成されており、環濠と考えられる溝状遺構は丘陵頂部の平坦面から東側斜面にかけて等高線と交わる方向に掘削されている。丘陵南西側の谷部との標高差は 45 mほどになる。環濠と考えられる遺構は「溝状遺構」という名称で報告されている。１～６号まで溝状遺構が検出されており、そのうち１・２号から遺物が出土している。その配置状況から１～２号が一連の環濠を構成すると報告されているが、４号溝状遺構も２号の延長線上にあり、環濠を構成する溝である可能性もある。１・２・４号溝状遺構の長さを合計すると 48.6 mになる。１号と２号、２号と４号溝状遺構の間にはそれぞれ４m、２mほどの溝未掘削区間が見られ、出入口施設の可能性がある。丘陵頂上部の地形から平面形態は楕円形であったと推定されている。そして、環濠の内側から住居は確認されず、竪穴 (1・2・3・7 号) が検出された。

１号溝状遺構は海抜 76.7m 地点に位置する。長さ 25.5 m、幅 0.98 m、最大深さは 0.44 mを測る。溝内から豆形土器脚片２点・杯部片１点、牛角形把手１点、紡錘車２点が出土しているが、完形品は無い。

２号溝状遺構は海抜 71.3m 地点に位置し、等高線と斜めに交差する。長さ 22 m、幅 1.64 m、最大深さは 0.5 m程度を測る。溝内から豆形土器、無文土器底部・口縁部片、牛角形把手、粘土帯土器

が多く出土しているが、完形品は見られない。

4 号溝状遺構は 2 号と同様の立地を見せ、長さ 4.1 m、幅 1.3 m、最大深さ約 0.3 m程度を測るが、遺物の出土は見られない。

溝状遺構の周辺からは竪穴 29 基が調査されている。これらのうち環濠と同様の時期の遺物が出土したのは 1・2・3・13・14・17・18・23・24・27 号の 10 基である。また、環濠内側にあるもの (1・２・３号竪穴)、外側 (13・14・17・18・23・24・27 号) とに区分されるが、いずれの出土品も完形のものはない。

丘陵頂上部に露出している自然岩群では､岩と岩の間から石斧 1 点が採集されており､報告書は「環濠とともに自然岩群も儀礼行為に関連する可能性が高い」としている (京畿文化財研究院 2008)。

(6) 烏山　青鶴洞遺跡 (図 109)（ギョレ文化遺産研究院 2013）

京畿道烏山市青鶴洞山 18・21 ‐ 7・31 番地、佳水洞 5 号、樓邑洞山 4 番地、楚坪洞 416 ‐ 1 番地一円に位置する。環濠は北から南へ伸びる稜線端部にあり、海抜 35m 前後の緩やかな丘陵東斜面と南斜面で検出され、丘陵頂上部を取り囲むような形で弧状に掘削されていた。緩やかな尾根線上で等高線に直交する形で溝 A、斜面部で等高線に沿って溝 B、そこから 30 mほど離れて溝 C ‐ 1・C ‐ 2 が検出された。切り合い関係から C ‐ 1 が先行、C ‐ 2 が後行する。また、溝 A と溝 C ‐ 2 の距離は 48 mほど離れているが、両者に挟まれた空間内からは遺構が確認されなかった。

環濠の全容が明らかにはなっていないが現状で、溝 A の長さ約 17m、溝 B の長さ約 11m、溝 C ‐ 2 の長さ約 20m､溝 C ‐ 1 の長さ約 14m､これらの幅は約 2 ～ 4.8 m､深さは約 0.4 m～ 1.6 mを測る。環濠の断面は大部分が V 字形を呈し、内部堆積土内に泥質粘土層が確認されていることから流水による堆積があったものとされている。環濠内部の規模は長さ約 260m、内部の面積は約 4,000㎡内外と判断される。

出入口施設は溝 C ‐ 1 で 4m 幅、溝 A と溝 B 間の 16m 幅、溝 C ‐ 2 の南東端部分の 3 カ所が想定されている。

遺物は環濠内部土や底面から黒色磨研土器口縁部片、円形粘土帯土器片、豆形土器片、組合式牛角形把手片が出土した。

(7) 安城　盤諸里遺跡 (図 109)（中原文化財研究院 2007）

京畿道安城市孔道邑盤諸里に位置する。山の頂上部の平坦面に自然岩盤 (最大長 414㎝、最大幅 320㎝、高さ 86㎝) が露出しており、この岩の周囲の海抜 94 ‐ 95 m地点に 1 条の環濠が巡る。環濠は平面形態が直径約 38 mの円形を呈し、長さは約 71m、最大幅約 3m を測り、断面形状は U 字形をなす。

調査された範囲では出入口施設は確認されなかった。環濠の外側にはさらに部分的に小形の溝 (長さ約 24m、幅約 0.6m) が巡っている。環濠と同時期の住居址も確認されたが、それらは環濠の外側に位置する。

環濠の内側では、環濠に近い西側で半円形状に配置された木柵列が 1 条検出されたのみで他の遺構は確認されなかった。

遺物は環濠内部の堆積土から粘土帯土器片と石斧が出土している。

(8) 牙山 上星里遺跡 (図 109)（忠清文化財研究院 2008）

忠清南道牙山市霊仁面上星里に位置する。霊仁山から北東に伸びる稜線の先端部、海抜 33 mほどの低い丘陵北東斜面から環濠の一部が確認され、調査範囲外に伸びている。周辺との比高差は 10 m ほどである。

環濠は長さ約 13 m、幅約 1.7m、深さ 0.9~1.5 mを測る。断面はＶ字形を呈するが、底面では 20~60cm 幅で一定の平坦面をなす。調査された範囲内では出入口施設は確認されなかった。

遺物は環濠内部の堆積土上層から無文土器片が出土した。

(9) 舒川　月岐里遺跡 (図 109)（高麗大学校考古環境研究所 2005）

忠清南道舒川郡麒山面月岐里に位置する。環濠は丘陵の北東側と南西側傾斜面下段部に各 1 条掘削されており、丘陵頂上部を東西から挟むような形になる。

海抜 50.5 ～ 53 mにかけて掘削された北東側環濠は長さ約 54 m、幅約 3 m、深さ約 1.3 mを測る。出入口施設が 1 カ所想定され、その幅は約 1 mになる。また、谷部には環濠が掘削されていない。

海抜 50.5 ～ 52 mにかけて等高線に沿って掘削された南西側環濠は長さ約 74 m、幅約 4 m、深さ約 1.5 mを測る。出入口施設は 2 か所想定されている。環濠の断面は両環濠ともＶ字形をなす。

遺物は溝内から黒色磨研土器、粘土帯土器、豆形土器、牛角形把手、石鏃が出土している。

また、2 条の環濠に挟まれた丘陵頂部の平坦面には、時期的に先行する青銅器時代住居址が構築されている。

(10) 星州　上彦里遺跡 (図 110)（慶尚北道文化財研究院 2008）

慶尚北道星州郡龍岩面上彦里 696 ‐ 3・676 ‐ 35 に位置する。調査範囲は北側にのびる稜線の末端東側基底部に該当し、海抜 36 ～ 39 m地点の稜線方向に沿って掘削された 2 号溝が環濠の機能を有していたと考えられている。環濠はＳ字に屈曲しており北側に行くほど浅くなる。

環濠は長さ約 13 m、幅 1 ～ 5 m、深さ 0.4 ～ 1 mを測り、断面はＵ字形を呈する。調査区域内では出入口施設は確認されていない。遺物は包含層から三角形粘土帯土器片等が出土しているが、これらは傾斜面上方に構築された生活遺構から流入したものとされている。溝の底面には南端から長さ約 4 mほどの範囲に 10 ～ 30㎝大の割石が敷かれていた。

(11) 慶山　林堂遺跡 (図 110)（嶺南文化財研究院 2010）

慶尚北道慶山市林堂洞 208 － 2 番地一円に位置する。海抜 50 mほどの低丘陵北西頂上部付近の斜面に弧状をなして二重の環濠 (北側：内環濠、南側：外環濠) が掘削されている。周辺との比高差

は 10 mほどである。内環濠と外環濠は 4m 前後の間隔を置いて平行に掘削されており環濠同士の重複は見られない。両者の出土遺物においても大きな時間差はみられないことから、造営期間は同時期である可能性が報告されている (嶺南文化財研究院 2010)。

環濠の長さは内環濠が約 63m、外環濠が約 52m、内・外環濠とも幅約 1.5 ～ 3m、深さ約 1 mを測る。断面は U 字形・逆梯形を呈し、底面は概ね平坦な形をなす。内・外環濠底面からは人頭大の割石が多数確認されている。

出入口施設と推定される部分は内環濠で 2 カ所、外環濠で 1 カ所確認され、その幅は約 1.5m を測る。この地点の環濠からは他部分に比べ遺物の量が多く、また豆形土器と小型土器などの器種が中心をなす。内環濠の出入口施設と推定される箇所には、平面円形で直径 30 ～ 50㎝前後の柱穴が 3 ～ 5 基確認されている。

遺物は、溝内から円形粘土帯土器片、豆形土器片、小型土器、黒陶長頸壷片が出土している。

(12)蔚山　校洞里 192–37 遺跡 (図 110)（蔚山文化財研究院 2009）

蔚山広域市蔚山州郡三南面校洞里 192 – 37 番地に位置する。2km 四方の扁平な独立丘陵の北西側端部の最も高い地点を取り巻くように環濠が掘削されている。環濠は海抜約 100 mの丘陵頂上部を取り囲むように掘削され、その平面形態は隅丸方形状をなす。周辺との比高差は約 30 mである。

Ｌ字形の環濠は長さ 72 m、最大幅約 3 m、深さ約 0.7 mを測り、断面はＹ字形を呈するが、一部ではＶ字形になる。環濠の外側には平行する形で幅 0.3 ～ 0.9 mの溝が幾重に巡っている。環濠の内・外側に環濠と同時期の竪穴が検出された。調査対象地域外の保存地域に対するトレンチ調査の結果、環濠と思われる溝が検出されたため三重環濠を持つ可能性があり、環濠全体の長さは約 190 m、内部空間の面積を 2,780㎡程度と想定している (李 2015)。

出入口施設は調査区域内では確認されていないが、環濠の外郭を巡る g 号溝と h 号溝の間は約 1 m離れており、この部分に i 号溝が直交するように掘削されていることから、ここが環濠内部への出入口施設と推定されている (蔚山文化財研究院 2009)。

遺物は溝内の底面から約 30㎝浮いた状態で甕形土器、三角形粘土帯土器、豆形土器、底部片、瓦質製碗片、棒状把手、漁網錘、紡錘車が出土している。

(13) 蔚山　達川遺跡 (図 110)（蔚山文化財研究院 2010）

蔚山広域市北区泉谷洞 513 – 4 番地に位置する。遺跡は海抜 67 m前後の丘陵末端部に位置し、環濠は丘陵頂上部付近の斜面部、海抜 61 ～ 66m の範囲で等高線に沿って掘削された。環濠から西側に 5m 離れた環濠内側と考えられる地点から 1 条の溝と 2 列の木柵列が等高線に沿って検出され、環濠と同時期に設置された内環濠である可能性が提起されている (蔚山文化財研究院 2010)。鉄鉱石採鉱と関連すると考えられる住居址と竪穴が環濠内側で確認されている。

環濠は長さ約 80 m、最大幅 2.2 m、深さ約 1 mを測り、断面はＹ字形を呈する。

出入口施設は確認されなかったが、南側環濠と北側環濠の間の自然谷部側に存在した可能性が想定

されている。

遺物は溝内から無文土器底部、壺口縁部片、粘土帯土器甕口縁部片、杓子形土器、把手部、蓋、高坏脚部、小型甕が出土している。これらは南側環濠の北端部分で集中的に出土しており、また鉄鉱石が一カ所で多量に出土した。

(14) 陜川　盈倉里遺跡（図 111）（慶南考古学研究所 2002）

慶尚南道陜川郡陜川邑盈倉里山 29 ‐ 1 に位置する。遺跡は黄江沿いの海抜 65m 前後の独立丘陵上に立地し、付近との標高差は 40 mほどになる。環濠と考えられる溝が５条 (A・B・C・D・E 溝) 確認されている。このうち丘陵頂上部南側のA・B・C・D 溝の４本は２～３mほどの間隔をあけて同一方向に掘削されており、各々長さは異なるものの同様の幅を有している。一方、丘陵南東側の急斜面のE 溝は幅が他の溝に比べかなり広く掘削されている。以上のように多重環濠をなすが丘陵頂上部の取り囲むように一周しない。

A溝は長さ 11.55 m、最大幅 1.4 m、深さ 0.72 mを測り、断面はU字形を呈する。

B溝は長さ 19.8 m、最大幅 1.65 m、深さ 0.8 mを測り、断面はU字形を呈する。

C溝は長さ 29.7 m、最大幅 1.65 m、深さ 0.93 mを測り、断面はU字形を呈する。

D溝は長さ約 23 m、最大幅 1.85 m、深さ 0.55 mを測り、断面はU字形を呈する。

E溝は長さ 34.8 m、最大幅３m、深さ 1.25 mを測り、断面は傾斜面を利用したL字形を呈するが、一部ではV字形を見せる。

丘陵頂上部の南側に掘削されたA・B・C・D 溝に出入口施設は確認されない。一方、E溝については幅約２mの溝未掘削地点を「陸橋」と見ている (慶南考古学研究所 2002)。

これらの溝は出土遺物や土層断面の観察から全て同時に設置され機能した後、ほぼ同時期に廃棄されたものと見ている。

環濠内側の丘陵頂上部の平坦面では遺構は確認されなかったが、それより下方では住居址と竪穴が確認され、7 棟程度の住居が同時期に共存したと考えられている（崔 2002a)。中でも 22 号・28 号竪穴からは墳墓副葬品として見られることが多い細形銅剣が出土している。22 号竪穴では半損し剣身下半部のみ残った細形銅剣が切先方向を竪穴の底面に向けて突き刺さった状態で出土するという特殊な状況を見せる。28 号竪穴ではほぼ完形の細形銅剣と銅鏃、長頸壷片が竪穴の隅部分から床面に置かれた状態で出土している。

(15) 泗川　芳芝里遺跡 (図 111)（慶南発展研究院歴史文化センター 2007）

慶尚南道泗川市泗南面芳芝里 556 番地一帯に位置する。遺跡は泗川湾に隣接する海抜 20 ～ 30 m ほどの低丘陵の末端部に立地しており、ここは四方を見渡せる眺望の良い場所にある。環濠は丘陵の東南端から北東端の標高 7~11m 地点で２条確認された。丘陵の西・南・北側は急斜面をなしており、ここには環濠は掘削されていない。各環濠間は間隔を 6~7m ほど、高さを 2m ほどあけて一定間隔を維持しつつ配置されている。全体の長さは約 350 m、最大幅約４m、残存深さ約 1.5 mを測り、

断面は緩慢なU字形を呈する。割石と環濠掘削時の排土を盛土して築造した土塁の存在が報告されている（慶南発展研究院歴史文化センター 2007）。

遺物は環濠内部埋土から円形粘土帯土器、豆形土器、組合牛角形把手、石器 (石槍、小型石器、有溝石斧片、砥石、未完成石器)、漁網錘、動物骨 (シカ、ブタ) が出土した。

(16) 釜山　温泉洞遺跡 (図 111)（釜山博物館 2013）

釜山広域市東莱区温泉 1 洞山 38 ‐ 2 番地に位置する。丘陵斜面部の海抜 98 ～ 91 m地点に 2 条の環濠が等高線に直交して掘削されている。弧状をなす内環濠と外環濠が平行して配置されている。環濠外側から環濠と同時期の住居址 2 棟が確認されているが、環濠内側については調査範囲内では遺構が検出されていない。

環濠は内環濠が長さ 27.9m、幅 4.7 ～ 6.5m、深さ 1.1 ～ 1.6m、外環濠は長さ 36.8m、幅 3.3 ～ 3.7m、深さ 0.8 mを測り、断面は底部がやや鋭角をなすU字形を呈する。内環濠と外環濠との間隔は 2 ～ 4.6m で一定していない。調査区域内では出入口施設は確認されなかった。

遺物は溝内から円形・三角形粘土帯土器口縁部片、豆形土器の脚部片が出土しており、これらから両環濠はほぼ同時期に廃棄されたと考えられている。内環濠内からは城之越式～須玖 I 式に属する口縁部片と須玖式土器底部片が出土している (釜山博物館 2013)。

2．朝鮮半島中西部以南地域の環濠遺跡からみた神後田遺跡

前章で神後田遺跡と併行する時期の朝鮮半島中西部以南地域の環濠遺跡について概略を述べた。いずれの遺跡も 2000 年代に入って調査された新たな資料であり、環濠遺跡の研究自体も新たな課題である。それらの遺跡について、李秀鴻が 2015 年に朝鮮半島における青銅器時代から三韓時代の環濠遺跡について論じた論考を基に、李論文発表後の資料を追加したのが表 8 であり、本稿で扱う初期鉄器時代の環濠遺跡は 16 カ所 (註 3) になる。それらの分布状況については図 105 に示した。分布状況についてみてみると、京畿道地域に 7 遺跡 (註 4)、江原道の東海岸沿岸地域で 1 遺跡、忠清道西海岸地域 1 遺跡、嶺南地域で 7 遺跡が確認される。また、京畿道地域は水原・華城・烏山地域に密集する地域が、嶺南地域は慶尚北道の内陸地域、蔚山・釜山地域、泗川の南海岸地域に細分ができよう。

次に、これら環濠遺跡の立地について見てみよう (註 5)。山頂付近に環濠が巡るものとしては、富川古康洞、安城盤諸里、陜川盈倉里遺跡の 3 遺跡があり、特定地域にのみ見られるという状況ではない。この 3 遺跡以外は丘陵頂上付近の斜面、丘陵末端部の斜面に環濠が巡る。遺跡の標高については標高自体も重要であるが、周辺との比高差も環濠遺跡の特徴かつ核心的な要素となる「眺望の良さ」を示すうえで考慮する必要がある。今回は現地を訪問する機会を得ることができず、また発掘調査後に開発によって原地形が失われてしまった事例や、報告書に周辺地形との詳細な情報が記載されていない場合もあり、全ての遺跡について標高差に関するデータが得られたわけではないが、地形図などから環濠と周辺地域との比高差が分かるものに関して言えば、表 8 のように標高と比高差はある程度相関性を持っていることが言えよう。

環濠形態 (平面形態、環濠幅、環濠本数) については、李秀鴻の研究によって具体的に検討されており、そこでは環濠の平面形態と環濠の本数によって分類しているが、芳洞里遺跡、古康洞遺跡、東鶴山遺跡のように環濠や遺跡全体が発掘調査されない限り、正確な平面形態や環濠本数は確定できないという制約が常に伴う。現状では立地と確認された環濠の本数から、青銅器時代には見られず、初期鉄器時代に入ってから見られるようになる環濠の形態として以下の 2 つを挙げている (李 2015)。

①環濠の本数が 1 条で円形・隅丸方形に近い平面形態を呈し、陸橋部がなく完全に閉曲線を呈するものとし (李秀鴻分類 A2 型、例：古康洞、盤諸里、芳洞里、上星里、校洞里)、この形態を初期鉄器時代環濠の典型的なものとする。

②環濠の本数が 3 条以上で弧状に平行するもの (李秀鴻分類 C 型、例：東鶴山、盈倉里、芳芝里)。環濠の幅が狭く、その機能は多分に観念的であるとする。

青銅器時代後期の松菊里、大坪里東集落では木柵の存在が確認されているが (裵 2020)、初期鉄器時代の環濠遺跡でも芳洞里遺跡、盤諸里遺跡、達川遺跡で環濠に伴うと考えられる木柵遺構が存在する。これら木柵は環濠内側に設置されていることが特徴といえる (李 2015)。

このほかの環濠付帯施設としては逆茂木が想定され、青銅器時代後期の松菊里遺跡で確認例があるが (裵 2020)、初期鉄器時代の事例は未確認である。外部からの侵入を防ぐことが主機能と推定される逆茂木が見られない点は、環濠が持つ機能が青銅器時代と初期鉄器時代では異なることと関連するものと考えられる。

環濠掘削時に生じる排土と関連して土塁の存在も想定されよう。土塁については環濠内堆積土の状況から推測するのみであるが、泗川芳芝里遺跡のように割石と環濠掘削時の排土を環濠内側に盛土した土塁の存在が指摘されている遺跡 (慶南発展研究院歴史文化センター 2007) もあるが、現時点ではこの 1 例のみである。

表 8　　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡一覧（李 2015 に加筆）（番号は図 105 と一致）

番号	遺跡名	立地	標高 (m)	比高差 (m)	環濠本数	環濠平面形態	環濠関連遺構	文献
1	江陵 芳洞里	丘陵	89 ～ 90 85 ～ 86	50	2	弧状	住居址、木柵	江原文化財研究所 2007
2	富川 古康洞	山頂	91	―	1	円形	頂上部積石遺構	漢陽大学校博物館 2005
3	水原 栗田洞	丘陵	101 ～ 104	―	1	長楕円形？	竪穴 4 基	畿甸文化財研究院 2004
4	華城 東鶴山	丘陵	115	70	3	不定形	竪穴、炉址	畿甸文化財研究院 2007
5	烏山 佳長洞	丘陵	71 ～ 77	―	1	長楕円形？	竪穴	畿甸文化財研究院 2008
6	烏山 青鶴洞	丘陵	35	―	1	楕円形？		ギョレ文化遺産研究院 2013
7	安城 盤諸里	山頂	94 ～ 95	―	2	円形	頂上部自然石、木柵	中原文化財研究院 2007
8	牙山 上星里	丘陵	33	10	1	円形？	?	忠清文化財研究院 2008
9	舒川 月岐里	丘陵	50 ～ 53	―	1	長楕円形？	住居址？	高麗大学校考古環境研究所 2005
10	星州 上彦里	丘陵	36 ～ 39	―	1	不定形	柱穴	慶尚北道文化財研究院 2008
11	慶山 林堂	平地	50	10	2	弧状	?	嶺南文化財研究院 2010
12	蔚山 校洞里	丘陵	100	30	2	楕円形？	?	蔚山文化財研究院 2009
13	蔚山 達川	丘陵	61 ～ 66	―	1	弧状	鉄鉱石採鉱場、木柵	蔚山文化財研究院 2010
14	陜川 盈倉里	山頂	65	40	3	弧状	住居址、竪穴	慶南考古学研究所 2002
15	泗川 芳芝里	丘陵	7 ～ 11	―	2	楕円形？	住居址、竪穴	慶南発展研究院歴史文化センター 2007
16	釜山 温泉洞	丘陵	91 ～ 98	―	2	弧状		釜山博物館 2013

これら初期鉄器時代の環濠遺跡の性格・機能については、既存の研究においても論じられてきた点である。東鶴山遺跡の報告者は①環濠が丘陵頂上に沿って一周せず、深さと幅において定型性がない点、②環濠内部に住居址といった生活遺跡が全く確認されない点、③環濠が 2 ～ 3 重で確認され、短期間に作られ長期間にわたって管理されていない点、④環濠内部から非実用的な小型模造品が多数確認され、意図的な破砕を物語る廃棄遺物のみが確認される点、⑤相対的に眺望に有利な位置にある点などから、特殊な目的、特に祭儀的な性格が強い遺構であると指摘した (呉 2007)。

また、金宥正は朝鮮半島南東部嶺南地域 (慶尚道) の初期鉄器時代の環濠遺跡について、多重の環壕で内部空間の閉鎖性を強調しつつ、環壕内部の中心から周辺に視野が開けており、外部からも環壕内部がよく見える点を指摘し、儀礼行為が執り行われた空間との分離の機能を想定している (金 2018)。

上記のような環濠の機能に対する議論において、頂上部に露出した自然岩石を取り囲むように環濠が掘削された盤諸里遺跡、佳長洞遺跡の事例や、やはり頂上部に構築された積石施設の周囲を環濠が巡る古康洞遺跡の事例が根拠資料となった。また、東鶴山遺跡で採集された銅鑿鋳型や、環濠の外側に造営されたものであるが盈倉里遺跡の 22・28 号竪穴出土の細形銅剣 (片) は一般の居住区域では出土しない遺物であり、これら環濠の機能を儀礼行為と関連付ける資料とされてきた (金 2012)。

一方、江陵市芳洞里遺跡の環濠 1 では環濠底面に多量の花崗岩製割石が混入して敷かれており、それらを投石に使用されたものと考え、環濠に防御的機能を想定する事例もある (江原文化財研究所 2007)。

上記のように、朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡は地域的な偏在を見せつつ分布しているが、その機能については前時代の青銅器時代の環濠とは異なり、環濠の立地や祭祀関連遺物の出土などから儀礼行為と関連付けて考えられ、環濠内での儀礼・祭祀行為を行う空間を区画するための機能を有していたとされている。

また、京畿道華城・烏山地域では環濠を持つ集落が密集しており (図 106)、烏山佳長洞遺跡と華城東鶴山遺跡は同一水系圏にあり直線距離で約 6㎞離れている。両遺跡が同時期に造成されたものでありながら立地と規模などの違いが見られる点が指摘されている (京畿文化財研究院 2008)。また、佳長洞遺跡と烏山青鶴洞遺跡間は直線距離で約 2㎞とさらに近く、この両遺跡間の関係について宋満栄は同一の「祭儀圏範囲」を想定している (宋 2012)。この距離を同一集落による生活圏・祭儀圏とするのかは更なる検討が必要とされるであろうが、いずれにせよ、同一水系圏などの自然地理的環境を共有し、時期的にも同時期あるいは連続する前後の時期に築造されている環濠遺跡が近隣する場所に存在する点は、神後田遺跡の性格を考えるうえでは重要な比較資料となり示唆するところが多いであろう。

神後田遺跡の環濠については報告文で詳細に記載されているためここでは省略するが、直線距離で 500 m という相互に可視できる範囲に、時期的にも連続する形で多重の環濠が掘削された田和山遺跡のように複数の環濠遺跡が有機的に関連する状況は、同時期の朝鮮半島には見られない特徴である。

おわりに

以上で弥生時代前期～中期に併行する朝鮮半島初期鉄器時代の環濠集落についてその概観を述べてみた。それらの資料を整理した理由は、神後田遺跡で調査された環濠ならびに田和山遺跡との有機的関係や両者の性格を理解する際の比較資料として、併行する時期の朝鮮半島における環濠遺跡の様相にも目を配る必要があると考えたためである。当該期の環濠は丘陵上の眺望の良好な場所に掘削され、日常生活空間を区画する機能を有し、その内側で何らかの儀礼行為が行われたと見る傾向にあることが分かった。

現時点で神後田遺跡については一部のみ知りうる状況であるが、田和山遺跡や周辺環境も含めた当時の景観の中で有機的な関係性を有する遺跡群として、弥生時代前期から中期の山陰地域における弥生時代社会の姿を復元するうえで重要な遺跡であると考える。韓国考古学の立場から見ても、環濠を有する神後田遺跡・田和山遺跡という近接する両遺跡がいかなる景観的な特徴を有し、当時の社会においてどのような役割を担ったのかという点は、同時期の朝鮮半島の環濠遺跡さらには集落研究においても非常に興味深く示唆するところが大きいと言えよう。

（平郡達哉　島根大学法文学部）

謝辞

本稿をなす上で関連資料の提供などで多くの方々からご協力、ご教示を頂いた。記して感謝いたします。

金武重、趙晟元、金眞姫、金東潤、姜眞周、李恵遠（敬称略）

註釈

(1) 本稿で扱う先史・原始朝鮮半島の時代・時期区分については、庄田慎矢による時期区分・編年観に沿って述べていく (庄田 2009)。

(2) この他に 1・2・3 号環濠とは距離と形態、掘削方向を違えて掘削された 4 号環濠もある。長さ約 20 m、幅約 7 m、深さ約 1.5 mを測り、遺物は遺構の中央部分から粘土帯土器片が集中出土している。報告者はこの環濠は試掘調査で確認された調査区域外の溝と連結するとし、1・2・3 号環濠との関連性を別途に考えている。

(3) 金海大成洞遺跡でも環濠が確認されたとあるが、報告書が未刊行であり詳細が不明であることから本稿では対象から除外した。李秀鴻の研究では慶星大学校博物館による調査で一の字形の環濠が確認されたとある (李 2015)。慶星大学校博物館による大成洞遺跡の環濠については、大成洞古墳群が築造された丘陵の南東側末端部でも環濠と推定される溝が確認 (慶星大学校博物館 2001) されている事を趙晟元氏からご教示いただいた。記して感謝いたします。

(4) 上星里遺跡のある忠清南道牙山市は京畿道と接しており、盤諸里遺跡を含む安城川流域、佳長洞・青鶴洞遺跡を含む振威川流域の河口にあたる牙山湾南岸に位置することから、京畿道地域に含めた。なお、安城盤諸里遺跡とは直線距離で 26㎞離れている。

(5) ソウル・京畿地域における初期鉄器時代集落の約 90％が丘陵上、残り 10％は河川辺の沖積地に立地する (宋 2012)。

参考文献

(論文・日本語)

李秀鴻 2015「韓半島南部地域青銅器～三韓時代の環濠遺跡の変化と性格について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 195 集

李盛周 1998「韓国の環濠聚落」『環濠聚落と農耕社会の形成』嶺南考古学会・九州考古学会第 3 回合同考古学大会

金宥正 (訳：古澤義久)2018「嶺南地域三韓時代環濠の性格検討」『環濠集落　その源流をたどって － 環濠集落にみる東アジア交流 －』長崎県埋蔵文化財センター

庄田慎矢 2009「朝鮮半島南部青銅器時代の編年」『考古学雑誌』第 93 巻第 1 号

庄田慎矢 2012「中部地域円形粘土帯土器期の集落構造論」」『日韓集落の研究 － 弥生古墳時代および無文土器～三国時代 －(最終報告書)』日韓集落研究会

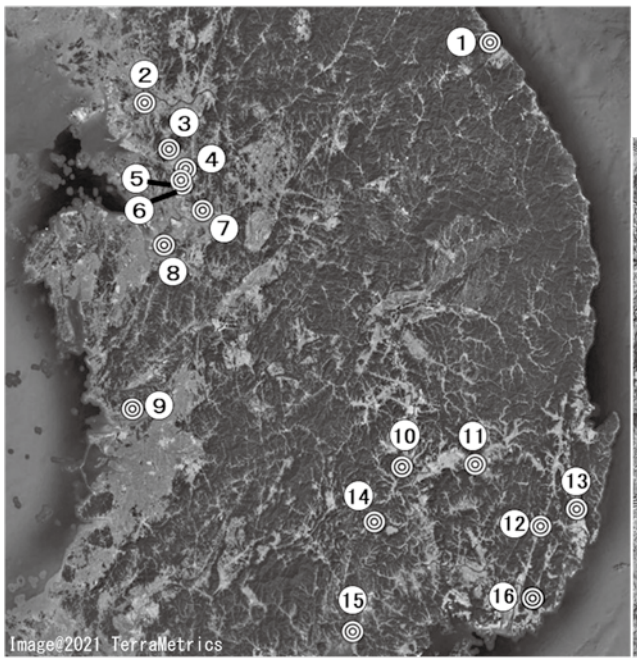
宋満栄 (訳：武末純一)2012「中部地方粘土帯土器段階集落と社会性格」『日韓集落の研究 － 弥生古墳時代および無文土器～三国時代 －(最終報告書)』日韓集落研究会

武末純一 2005『韓国無文土器・原三国時代の集落構造研究』平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書

長崎県埋蔵文化財センター 2018『環濠集落　その源流をたどって － 環濠集落にみる東アジア交流 －』平成 30 年度東アジア国際シンポジウム資料

裵徳煥 2012「青銅器時代～原三国時代環濠集落の展開様相」『日韓集落の研究 － 弥生古墳時代および無文土器～三国時代 －(最終報告書)』日韓集落研究会

(報告書・韓国語)
江原文化財研究所 2007『芳洞里遺跡』
慶南考古学研究所 2002『陜川盈倉里無文時代集落』
慶南発展研究院歴史文化センター 2007『泗川芳芝里遺跡Ⅱ』
ギョレ文化遺産研究院 2013『烏山青鶴洞遺跡 － 烏山セギョ 2 地区宅地開発地区内 6 ～ 9 地点遺跡』
慶尚北道文化財研究院 2008『星州上彦里遺跡』
慶星大学校博物館 2001『金海大成洞古墳群Ⅰ － 概報 －』
高麗大学校考古環境研究所 2005『梨寺里・月岐里遺跡』
畿甸文化財研究院 2004『水原栗田洞遺跡』
畿甸文化財研究院 2007『華城東鶴山遺跡』
畿甸文化財研究院 2008『烏山佳長洞遺跡』
釜山博物館 2013『東萊温泉洞遺跡Ⅱ』
嶺南文化財研究院 2010『慶山林堂洞環濠遺跡』
蔚山文化財研究院 2009『蔚山校洞里 192–37 遺跡』
蔚山文化財研究院 2010『蔚山達川遺跡 3 次発掘調査』
中原文化財研究院 2007『安城盤諸里遺跡』
忠清文化財研究院 2008『牙山上星里遺跡』
漢陽大学校博物館 2005『富川古康洞先史遺跡第 4 次発掘調査報告書』
(論文・韓国語)
金宥正 2012『青銅器・三韓時代環濠の変化と性格』釜山大学校大学院碩士学位論文
金宥正 2015「東萊温泉洞遺跡環濠の意義 － 環濠の儀礼的要素と三韓社会の蘇塗 －」『博物館研究論集』21、釜山博物館
李亨源 2018「三韓蘇塗の空間構成に対する考古学的アプローチ － 中部地域の環溝遺跡を中心に －」『百済学報』第 24 号、百済学会
崔鍾圭 1996「韓国原始の防御集落の出現と展望」『韓国古代史論叢』8
金権九 2012「青銅器時代－初期鉄器時代高地性環溝に関する考察」『韓国上古史学報』76、韓国上古史学会
裵徳煥 2000「嶺南地方青銅器時代環濠聚落研究」東亜大学校大学院碩士学位論文
裵徳煥 2020「青銅器時代防御集落からみた首長の出現」『福岡大学考古学論集』3
安在晧 2006『青銅器時代聚落研究』釜山大学校大学院博士学位論文
呉昇烈 2007「環濠 － 中部地方を中心に －」『華城東鶴山遺跡』畿甸文化財研究院
李尚燁 2006「中部地域環濠遺跡に対する一検討 － 安城盤諸里遺跡を中心に －」『考古学』5 － 1 号
李盛周 2007「3 章　世界史的見地からみた蔚山の環濠」『青銅器・鉄器時代社会変動論』学研文化社
李亨源 2017「漢江流域の青銅器時代環濠集落と環溝集落」『漢江と集落の痕跡』漢城百済博物館漢江流域新規発掘遺物特別展示会図録
鄭漢徳 1995「東アジアの環濠集落」『蔚山検丹里マウル遺跡』釜山大学校博物館
崔鍾圭 2002「Ⅳ．考察」『陜川盈倉里無文時代集落』慶南考古学研究所



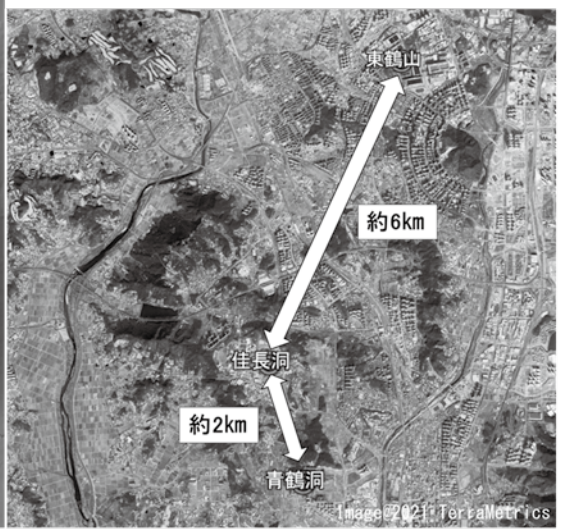
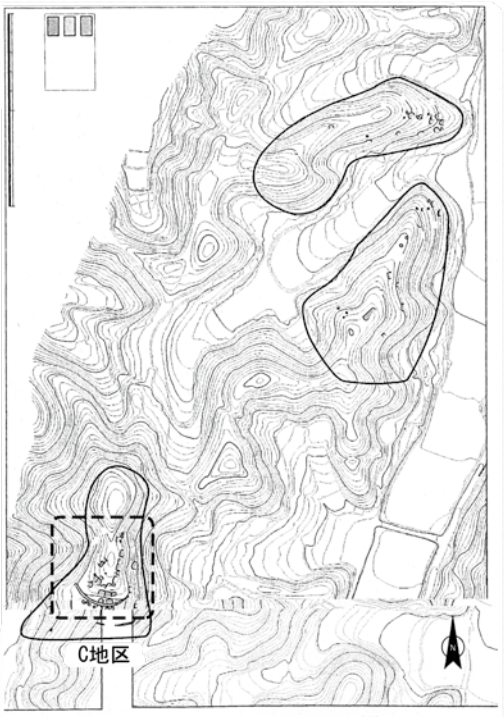
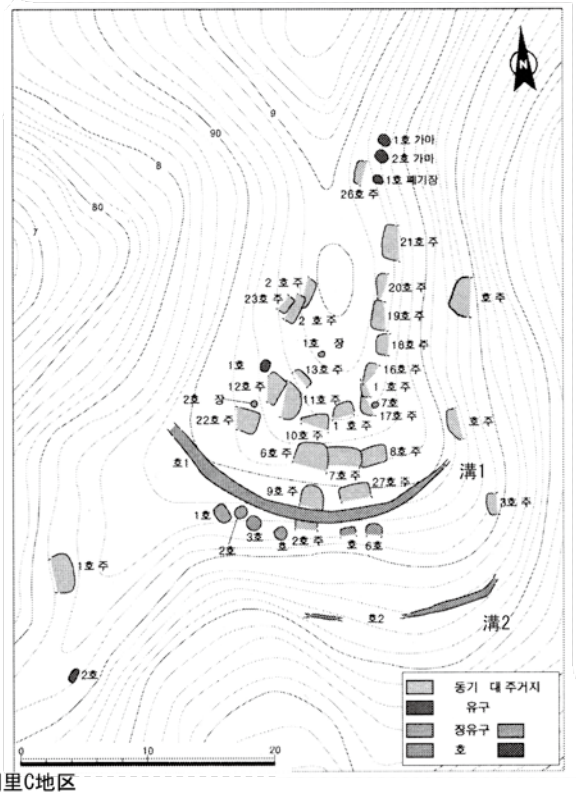


図 105　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡分布図　　図 106　華城・鳥山地域の環濠の分布と遺跡間距離

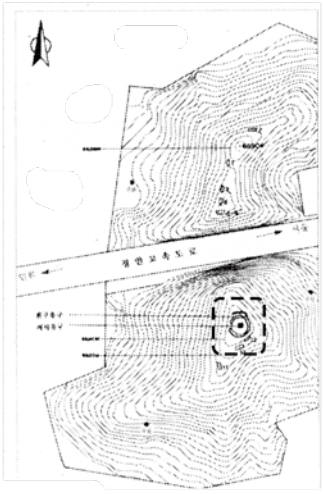
①江陵 芳洞里，②富川 古康洞，③水原 栗田洞，④華城 東鶴山，
⑤烏山 佳長洞，⑥烏山 青鶴洞，⑦安城 盤諸里，⑧牙山 上星里，
⑨舒川 月岐里，⑩星州 上彦里，⑪慶山 林堂，⑫蔚山 校洞里，
⑬蔚山 達川，⑭陜川 盈倉里，⑮泗川 芳芝里，⑯釜山 温泉洞



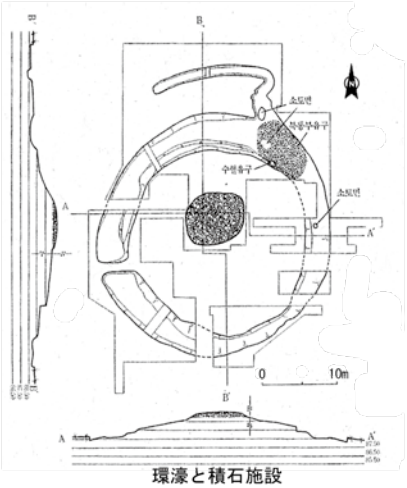


江陵 芳洞里C地区

図 107　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡①（各遺跡の報告書から加工・転載）



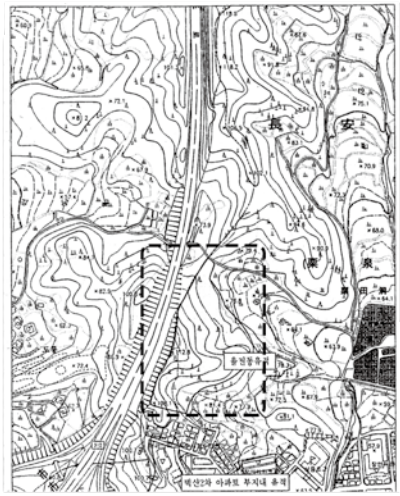
環濠確認地点



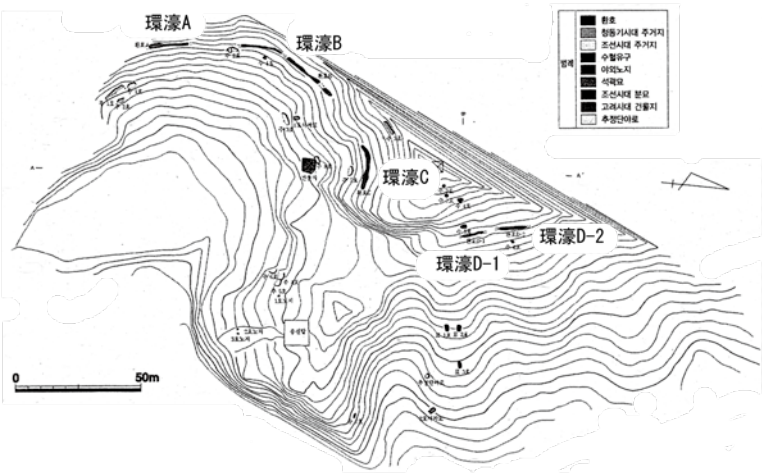
環濠と積石施設

富川 古康洞

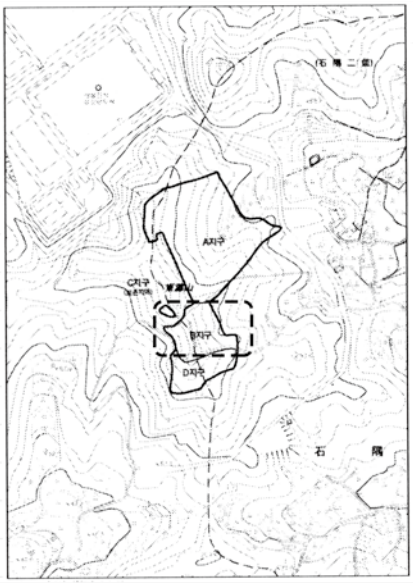
積石施設

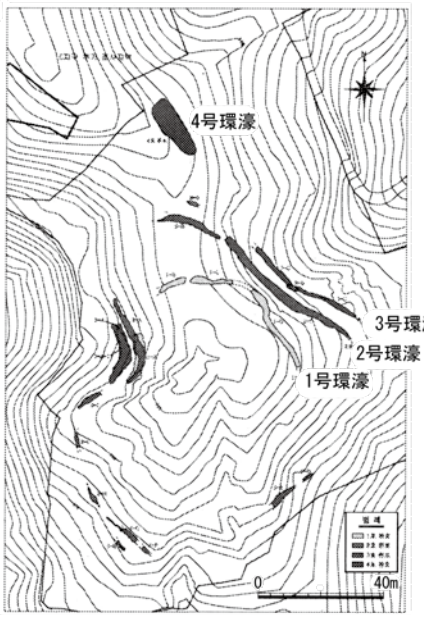


環濠確認地点



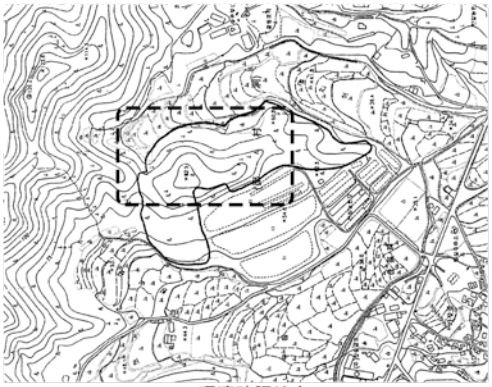
水原 栗田洞



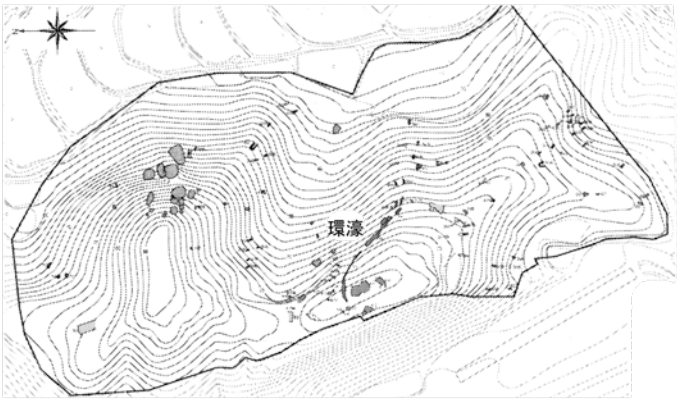


華城 東鶴山

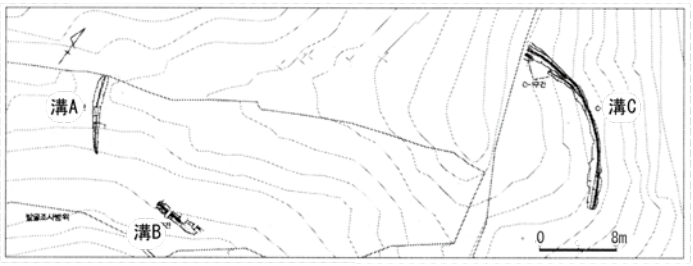
図 108　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡②（各遺跡の報告書から加工・転載）



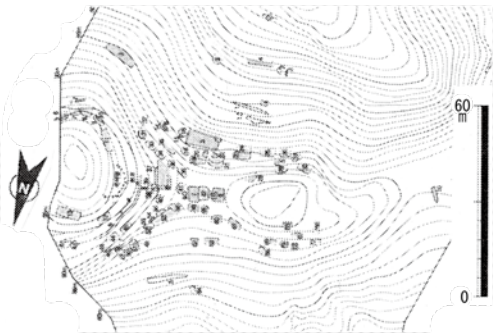
環濠確認地点

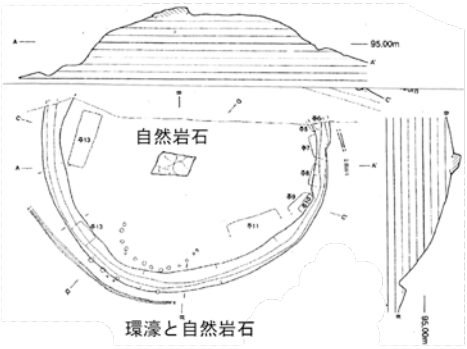


烏山 佳長洞

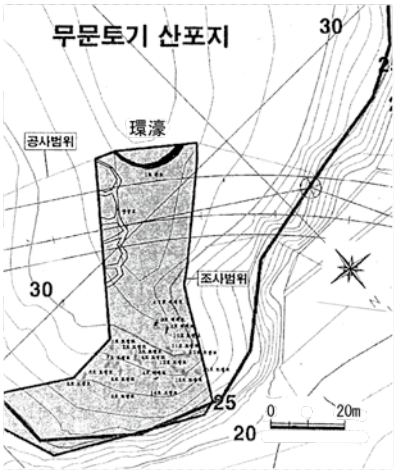


烏山 青鶴洞

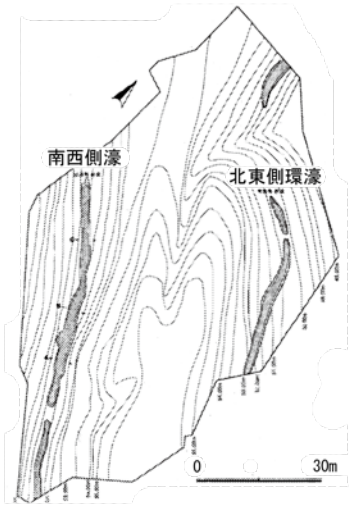




安城 盤諸里



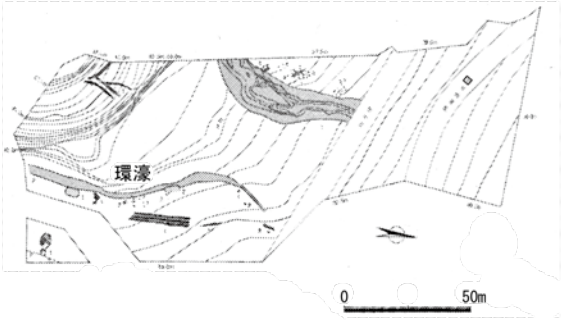
牙山 上星里



舒川 月岐里

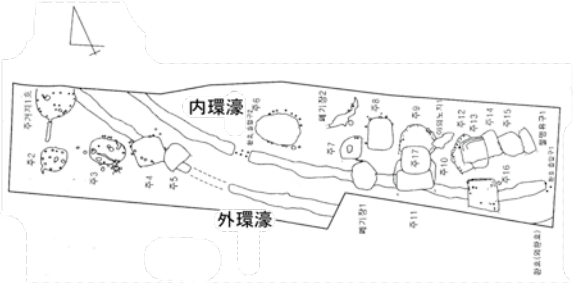
図 109　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡③（各遺跡の報告書から加工・転載）

環濠確認地点

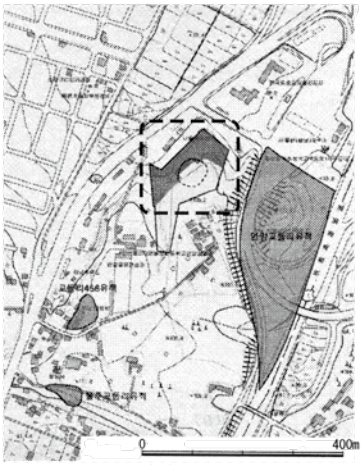


星州 上彦里

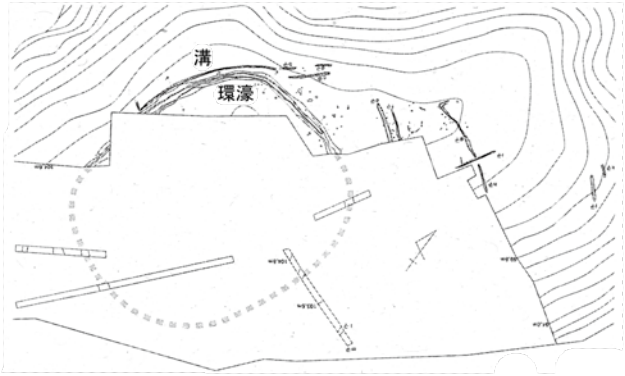
環濠確認地点



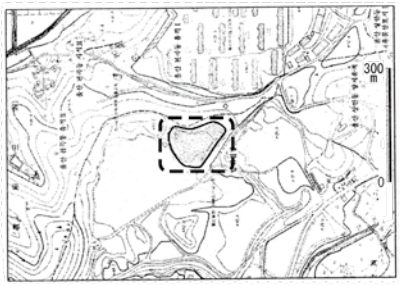
慶山 林堂



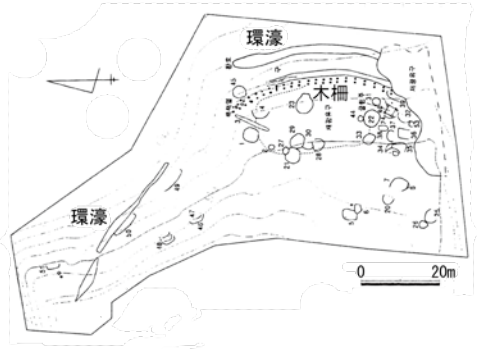
環濠確認地点



蔚山 校洞里



環濠確認地点



蔚山 達川

図 110　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡④（各遺跡の報告書から加工・転載）

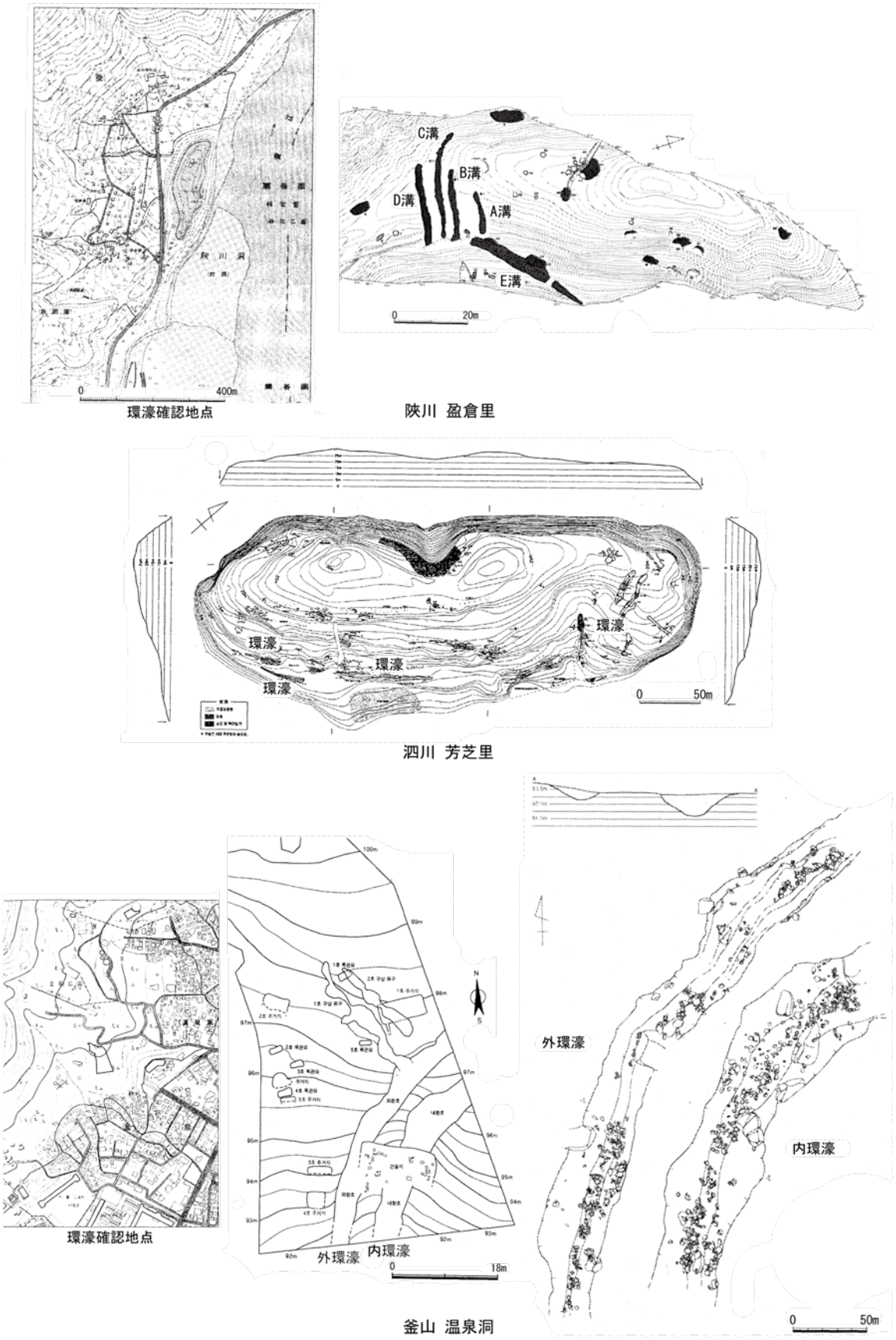


図 111　朝鮮半島初期鉄器時代の環濠遺跡⑤

第 5 章　自然科学分析

第 1 節　神後田遺跡発掘調査にかかる年代測定等自然科学分析

1．はじめに

神後田遺跡は島根県東部松江市の中央部、浜乃木地区に位置し、中国山地末端の丘陵上に立地する。近辺には弥生時代の環濠遺跡である田和山遺跡があり、関連性が注目されている。

本報は、発掘調査に伴い確認された環濠など、遺構の年代を明らかにする目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が、松江市からの委託を受け実施・報告した調査報告書を再編したものである。

2．分析試料について

分析試料の多くは松江市との協議の上、文化財調査コンサルタント (株) が採取した。ただし、SK06、SD48（T17）に関する 2 試料は、松江市によって採取・保管されていた試料から御提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、松江市より御提供を受けた原図をもとに、作成した。

図 112 に試料を採取したトレンチ（T16、T17、T20）の位置を示す。さらに、図 113 ～ 118 に各トレンチ内での試料採取位置、層準を示す。

T16 では焼失竪穴住居（SI49) の部材を対象として年代測定を実施した。また、年代測定を実施した部材の樹種同定も実施しているが、詳細は別報にて報告する。

T17 では SK06、SD48 を対象に年代測定を実施した。

T20 では SD115 を対象に年代測定を実施したほか、花粉層序学的年代観を知るために、花粉分析を実施した。

3．分析方法

(1）AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009）を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

(2）微化石概査結果

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を 5 段階で示した。

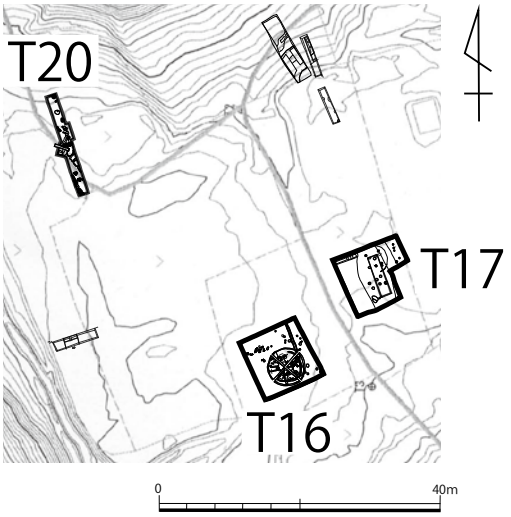


図 112　トレンチの配置

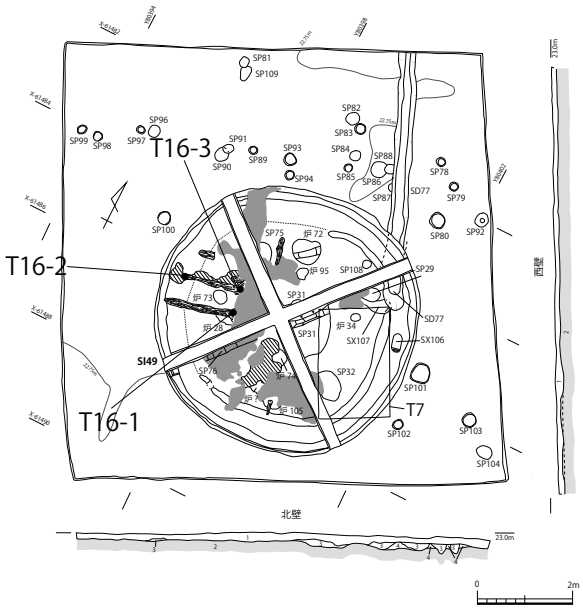


図 113　T16(SI49) 平面図 (試料採取地点)

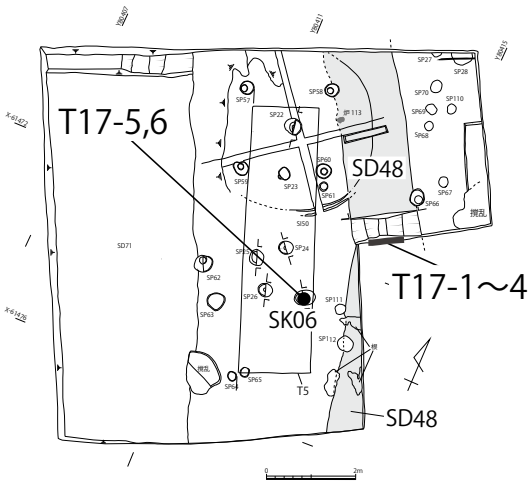


図 114　T17 平面図 (試料採取地点)

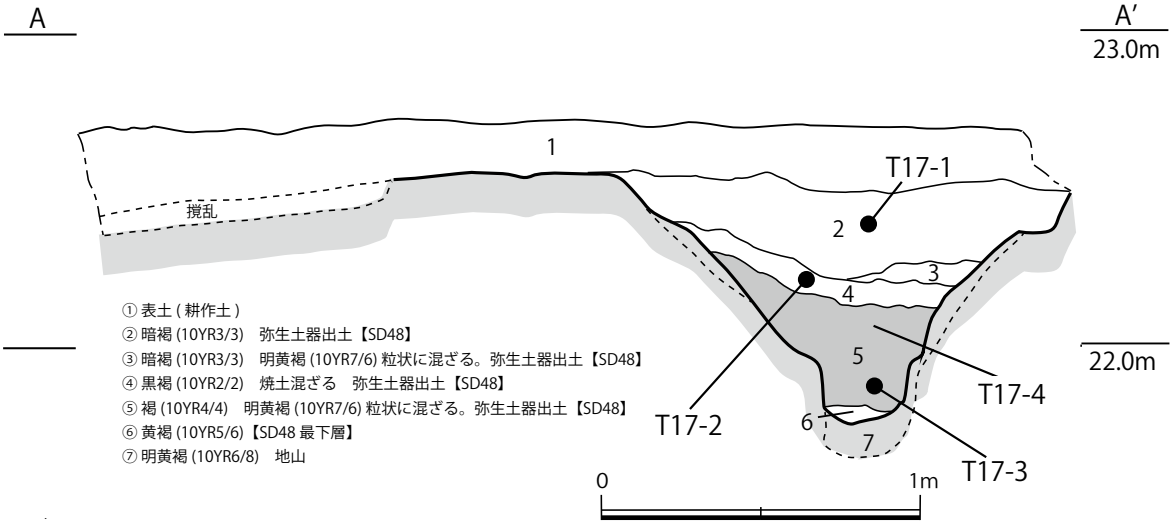


図 115　試料採取地点断面図 (T17　SD48)

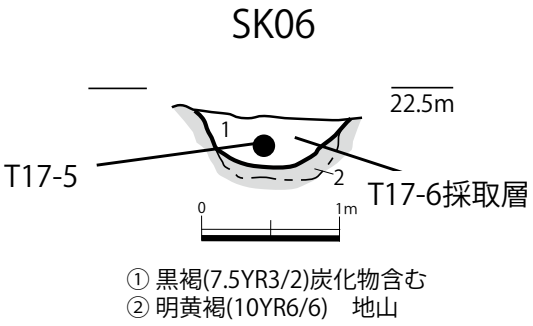


図 116　試料採取地点断面図 (T17　SK06)

(3) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ﾐｸﾛﾝ以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40 ﾐｸﾛﾝ未満) に細分した。

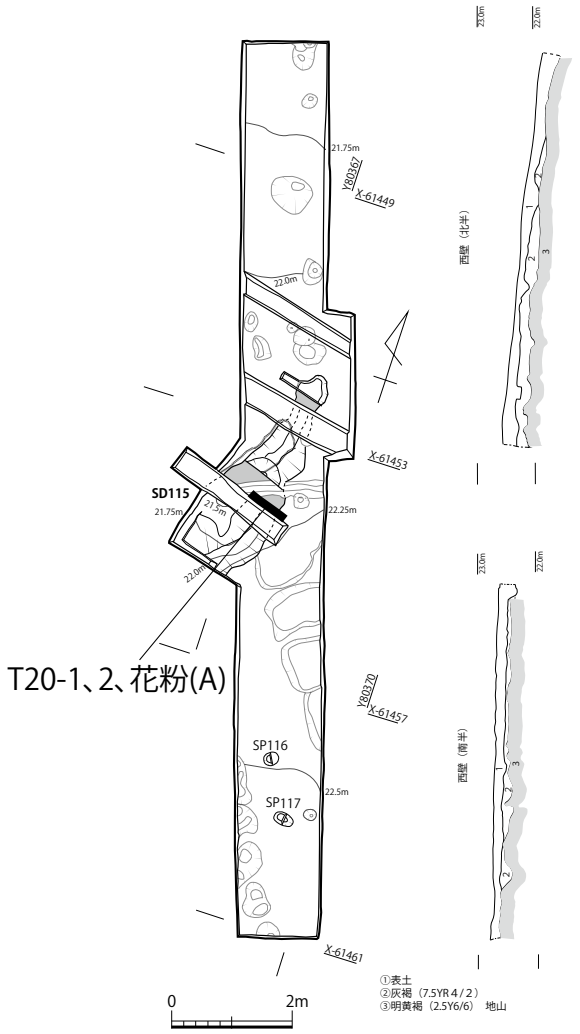
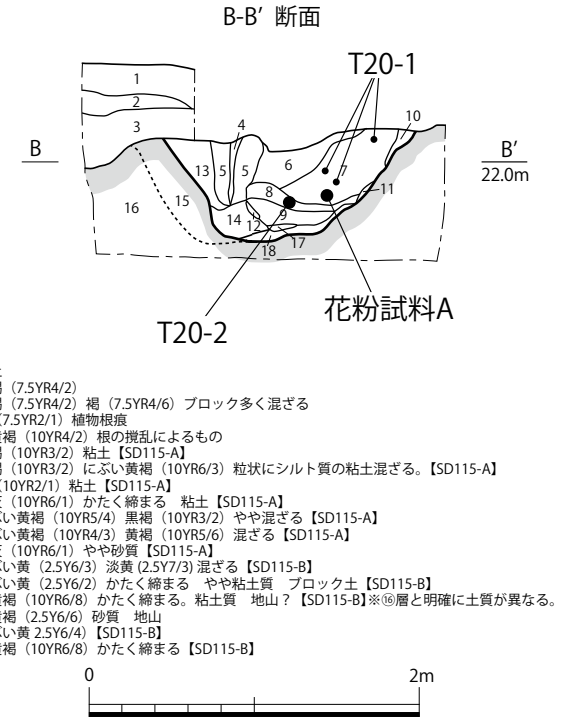


図 117　T20 平面図 (試料採取地点)



① 表土
② 灰褐（7.5YR4/2）
③ 灰褐（7.5YR4/2）褐（7.5YR4/6）ブロック多く混ざる
④ 黒（7.5YR2/1）植物根痕
⑤ 灰黄褐（10YR4/2）根の攪乱によるもの
⑥ 黒褐（10YR3/2）粘土【SD115-A】
⑦ 黒褐（10YR3/2）にぶい黄褐（10YR6/3）粒状にシルト質の粘土混ざる。【SD115-A】
⑧ 黒（10YR2/1）粘土【SD115-A】
⑨ 褐灰（10YR6/1）かたく締まる　粘土【SD115-A】
⑩ にぶい黄褐（10YR5/4）黒褐（10YR3/2）やや混ざる【SD115-A】
⑪ にぶい黄褐（10YR4/3）黄褐（10YR5/6）混ざる【SD115-A】
⑫ 褐灰（10YR6/1）やや砂質【SD115-A】
⑬ にぶい黄（2.5Y6/3）淡黄 (2.5Y7/3) 混ざる【SD115-B】
⑭ にぶい黄（2.5Y6/2）かたく締まる　やや粘土質　ブロック土【SD115-B】
⑮ 明黄褐（10YR6/8）かたく締まる。粘土質　地山？【SD115-B】※⑯層と明確に土質が異なる。
⑯ 明黄褐（2.5Y6/6）砂質　地山
⑰ にぶい黄 2.5Y6/4【SD115-B】
⑱ 明黄褐（10YR6/8）かたく締まる【SD115-B】

図 118　試料採取地点断面図 (T20_SD115)

表 9　　年代測定結果一覧

試料の概要							前処理	δ 13C (‰)	δ 13C補正無年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	14C 年代 (yrBP±1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲		測定番号
試料名	トレンチ	出土地点（遺構ほか）		状況	重量(g)	推定時期						1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	
T16-1	T16	SI49		炭化材（散孔材）	0.0619	弥生時代後期前半	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-29.50±0.11	1978±22	1904±21	1905±20	85- 95 cal AD (8.0%) 117- 170 cal AD (45.3%) 184- 203 cal AD (15.0%)	76- 211 cal AD (95.4%)	PLD-41116
T16-2				炭化材（広葉樹）	0.1086		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-26.84±0.14	1969±23	1938±23	1940±25	33- 38 cal AD (3.4%) 61- 124 cal AD (64.9%)	17- 166 cal AD (93.2%) 187- 203 cal AD (2.3%)	PLD-41117
T16-3				炭化材（クスノキ属）	0.1484		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-27.60±0.11	1985±21	1942±21	1940±20	62- 122 cal AD (68.3%)	14- 130 cal AD (93.4%) 142- 157 cal AD (1.5%) 193- 199 cal AD (0.5%)	PLD-41118
T17-1	T17	SD48	(2層)	炭片	0.03	弥生時代前期末	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-23.55	2483±21	2507±21	2505±20	768- 749 cal BC (11.9%) 686- 666 cal BC (13.1%) 640- 569 cal BC (43.3%)	776- 727 cal BC (20.1%) 701- 662 cal BC (18.4%) 651- 544 cal BC (56.9%)	Beta-551285
T17-2			(4層)	炭片	4.7404		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-26.98	2225±20	2192±20	2190±20	353- 337 cal BC (12.9%) 329- 285 cal BC (33.9%) 229- 198 cal BC (21.4%)	360- 274 cal BC (57.0%) 263- 243 cal BC (5.6%) 235- 173 cal BC (32.8%)	Beta-552592
T17-3			(5層)	炭片	0.2245		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-26.86	2395±20	2364±20	2365±20	453- 445 cal BC (6.3%) 416- 394 cal BC (62.0%)	513- 502 cal BC (2.1%) 485- 391 cal BC (93.3%)	Beta-551286
T17-4				炭化米	0.0082		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-24.84±0.22	2223±21	2214±21	2215±20	359- 346 cal BC (8.5%) 316- 277 cal BC (28.3%) 260- 245 cal BC (9.5%) 234- 204 cal BC (22.0%)	374- 337 cal BC (16.1%) 327- 198 cal BC (79.4%)	PLD-41669
T17-5		SK06		炭片	0.1361		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-28.21	2175±21	2122±21	2120±20	173- 102 cal BC (63.8%) 67- 60 cal BC (4.4%)	339- 327 cal BC (3.0%) 199- 88 cal BC (78.9%) 82- 53 cal BC (13.5%)	Beta-552593
T17-6				炭化種実（コナラ属）	0.1274		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-28.67±0.24	2300±21	2227±21	2225±20	362- 351 cal BC (8.6%) 291- 209 cal BC (59.7%)	380- 345 cal BC (18.5%) 318- 203 cal BC (76.9%)	PLD-41671
T20-1	T20	SD115	(7層)	炭片	0.038		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-25.37±0.23	4453±23	4435±23	4435±25	3283-3277 cal BC (1.7%) 3266-3243 cal BC (9.7%) 3103-3017 cal BC (56.8%)	3326-3231 cal BC (25.0%) 3182-3157 cal BC (3.7%) 3110-3007 cal BC (59.7%) 2988-2931 cal BC (7.0%)	PLD-41668
T20-2			(8層)	微粒炭	1.649		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)	-27.15±0.24	5305±24	5258±24	5260±25	4219-4204 cal BC (8.9%) 4162-4134 cal BC (22.5%) 4056-4039 cal BC (13.9%) 4021-3992 cal BC (23.0%)	4228-4197 cal BC (13.7%) 4168-4096 cal BC (32.9%) 4075-3985 cal BC (48.9%)	PLD-41670

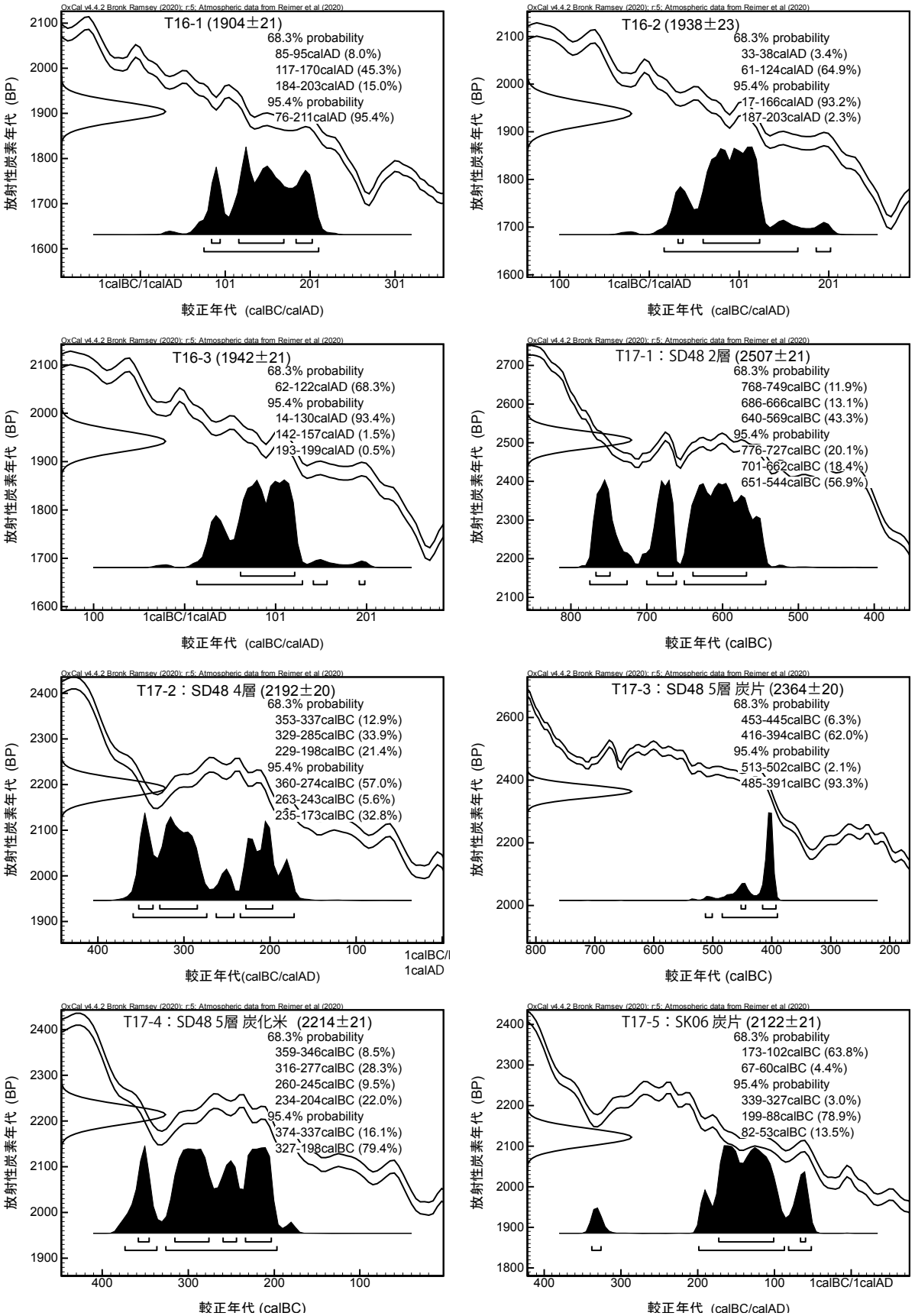


図 119　暦年較正結果一覧 (1)

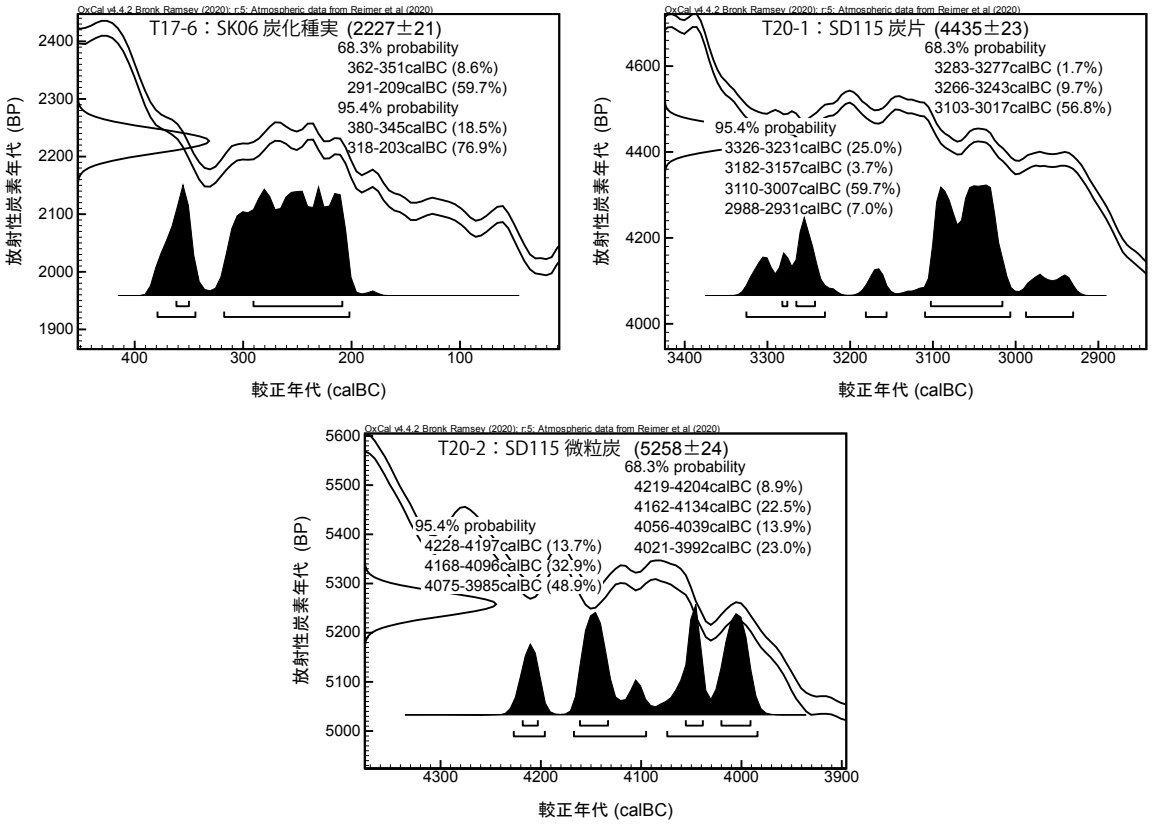


図 120　暦年較正結果一覧 (2)

4．分析結果

(1）AMS 年代測定結果

測定結果を表 9、図 119、120 に示す。表 9 には、試料の詳細、前処理方法、δ^{13}C 値と 4 種類の測定年代を示している。図 119、120 には INTCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布とσ、2σの構成範囲を示している。

(2）微化石概査結果

微化石概査結果を表 10 に示す。

花粉の検出量は極めて少なく、珪藻は検出できなかった。微粒炭、植物珪酸体、火山ガラスが多く含まれ、植物片は少ないものの検出できた。

(3）花粉分析結果

分析結果を図 121 の花粉ダイアグラム及び表 11 の花粉化石組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、通常分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を算出し、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表すが、木本花粉の検出量が少なかったため、検出した種類を「＊」で示すに止めた。また左端に、分類群ごとの割合を示すグラフを、右端に分類群ごとに含有量（湿潤試料 1g 中の粒数）を示すグラフを配置している。

表 10　微化石概査結果表

試料No.	調査地点			花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
A	T20	SD115	8層	△×	◎	○	×	◎	◎

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる ○ ：少ないが検出できる △ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる × ：検出できない

T20SD115

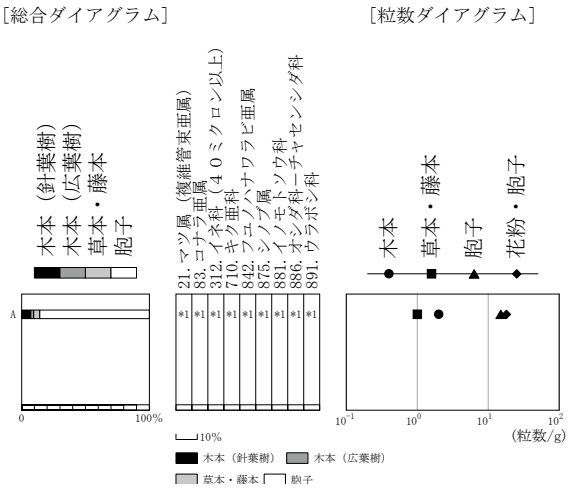


図 121　花粉ダイアグラム

表 11　花粉組成表

調査区			T20	
調査地点			SD115	
試料No.			A	
21	*Pinus (Diploxylon)*	マツ属(複維管束亜属)	3	75.0%
83	*Quercus*	コナラ亜属	1	25.0%
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	1	25.0%
710	Carduoideae	キク亜科	1	25.0%
842	Subgenus *Sceptridium*	フユノハナワラビ亜属	1	25.0%
875	*Davallia*	シノブ属	9	225.0%
881	Pteridaceae	イノモトソウ科	2	50.0%
886	Aspid.-Asple.	オシダ科ーチャセンシダ科	1	25.0%
891	Polypodiaceae	ウラボシ科	1	25.0%
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	8	200.0%
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	14	350.0%
木本(針葉樹)			3	7.1%
木本(広葉樹)			1	2.4%
草本・藤本			2	4.8%
胞子			36	85.7%
総数			42	
含有量(粒数/g)			18	

左よりカウント粒数、百分率

5．年代測定値について

(1) T16 SI49

図 122 に、T16 SI49 での年代測定値（暦年較正値）の分布を示した。
いずれも 1 世紀～ 2 世紀前半（2 σ）の年代（弥生時代中期後半～後期中葉、藤尾ほか（2005）の示したいわゆる「歴博の年代観」では弥生時代中期後半～後期前半の年代）を示している（ただし、弥生時代の年代にはその定義を含め、年代測定法の進化から、今後議論が必要な余地がある。）。

分析対象とした SI49 は、出土遺物から弥生時代後期前半の住居跡と考えられており、得られた年代値と一致する。

(2) T17 SD48

図 123 に、T17 SD48 での年代測定値（暦年較正値）の分布を示した。
一部で測定値の逆転が認められたが、測定対象が埋土中の炭片であり、得られた年代より古い時期に埋まったことは確かである。したがって、SD48 は紀元前 4 世紀から紀元前 2 世紀初頭に埋まった（埋められた）遺構であると考えられた。

(3) T17 SK06

図 124 に、T17 SK06 での年代測定値（暦年較正値）の分布を示した。
得られた年代値はほぼ重なり、紀元前 4 世紀から紀元前 1 世紀中頃に埋まった遺構であると考えられる。

(4) T20 SD115

図 125 に T20 SD115 での年代測定値（暦年較正値）の分布を示した。下位 (8 層）で 4,228 – 3985 cal BC(2 σ)：縄文時代前期（小林，2008)、上位 (7 層) で 3,326 – 2931 cal BC(2 σ)：縄文時代中期（小林，2008）の年代を示した。SD115 は神後田遺跡の弥生時代集落跡に関連する遺構と考えられていたが、今回の年代測定結果からは縄文時代前期～中期の遺構と考えられる。一方試料を採取した 7 層の平面観は、「風倒木」の痕跡に類似した半円状を示していた。このことから、遺構下位の「風倒木」痕跡を遺構と誤認した可能性も指摘できる。

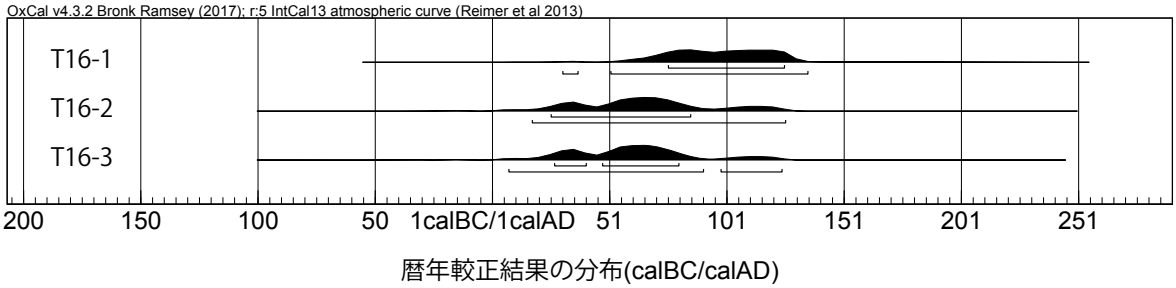


図 122　暦年較正結果の分布 (T16 SI49)

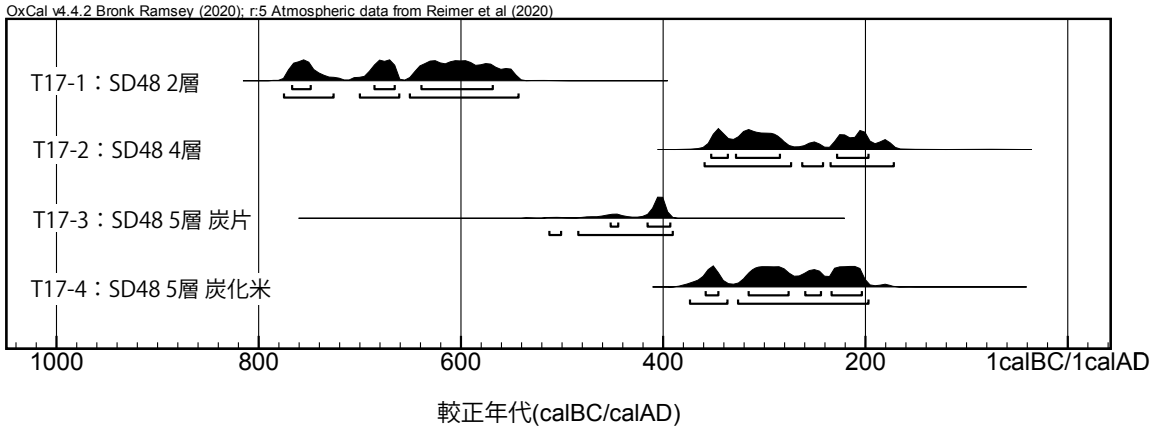


図 123　暦年較正結果の分布 (T17 SD48)

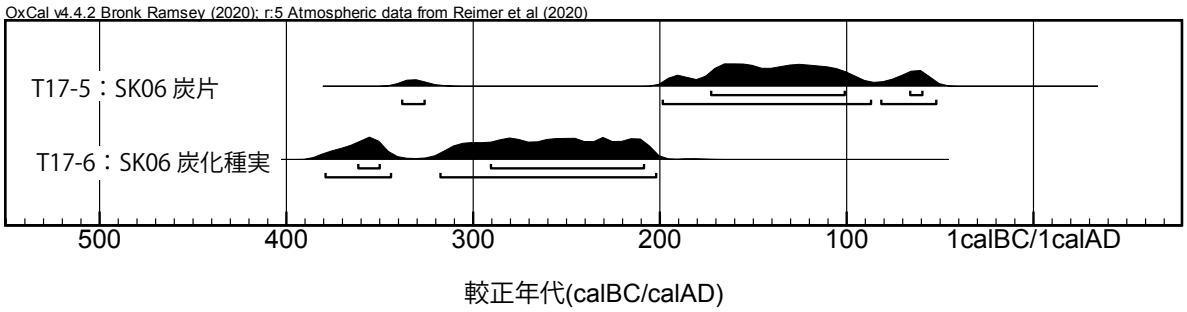


図 124　暦年較正結果の分布 (T17 SK06)

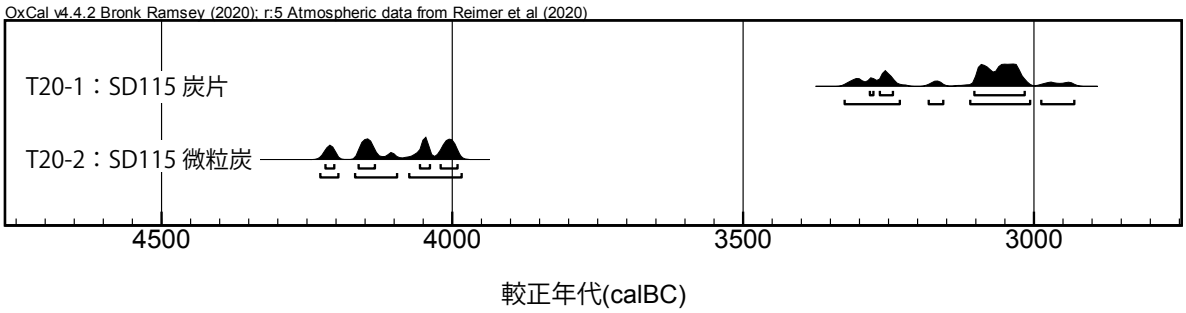


図 125　暦年較正結果の分布 (T20 SD115)

6．花粉・胞子化石の含有量が少なかった原因について

花粉分析の結果、花粉・胞子化石含有量が 18 粒 /g と少ないことが明らかになった。花粉化石処理の残渣を観察する微化石概査（表 10）によると、花粉以外の微化石では植物片、珪藻につい同様の傾向が認められるが、微粒炭、植物珪酸体は豊富に含まれていた。

花粉化石の含有量が少ない原因について、一般には以下のようなことが考えられており、今回の微化石検出傾向と比べると、以下のようになる。

1．堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。今回の分析層準（試料）は腐植質粘土で、通常であれば花粉化石が豊富に含まれる粒径である。

2．堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石の含有量が少ない。

花粉の生産量が毎年ほぼ一定であると仮定すると、堆積速度が速いほど花粉化石の含有量は少なく、遅いほど含有量は多くなる。また、花粉化石に限らず、堆積中に付加される微化石の量は、堆積速度が遅いほど多くなる。今回の試料では微粒炭や植物珪酸体の含有量は多く、堆積速度が速かったとは考えにくい。

3.「土壌生成作用」の及ぶ期間が短く、花粉の付加量が少なかった。

「土壌生成作用」に伴って花粉粒が、炭片、植物片などの有機物とともに、堆積面から地中に取り込まれる場合もある。年間「付加量」が一定と仮定すると、「土壌生成作用」を受けた期間の長短によって、含有量の多少が決まる。今回は花粉化石、植物片の含有量は少なかったものの、微粒炭、植物珪酸体の含有量が多かったことから、土壌化を受けた期間が短かったとは考えにくい。

4．堆積の過程で、花粉粒が紫外線により消滅した。

一般に、花粉化石は紫外線によって劣化・消滅する。花粉粒は地表面に落下した直後から、紫外線の影響下に置かれる（例えば畑作環境）が、水中で堆積した場合（例えば水田環境）、紫外線が遮断され、影響は軽減される。花粉分析結果ではコウヤマキ属、アブラナ科やキク科の諸分類群の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、後述の「堆積後の化学変化による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の花粉分析を実施した試料では胞子の割合が高く、キク亜科が僅かながら検出されるなど、紫外線（あるいは堆積後の化学変化）による影響を示唆する結果が得られている。さらに、紫外線の影響を受けにくい炭片や植物珪酸体の含有量も多く、紫外線の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が

指摘できる。

5．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

花粉粒や植物片などの有機物、珪藻や植物珪酸体など鉱物質のものも、グライ化などの化学変化に伴い（程度に差があるものの）分解してしまう（堆積後の化学変化は酸化鉄や酸化マンガンの沈着として現れ、多くは水田耕作における灌漑によるグライ化（鉄、マンガンの還元作用）と落水による鉄、マンガンの酸化作用の結果と考えられる。）。一方微粒炭は化学的に安定しており、堆積後に消滅することがない。花粉分析結果ではコウヤマキ属、アブラナ科やキク科の諸分類群の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、前述のように「紫外線による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の分析層準（試料）は全体に褐色を帯びているが、酸化鉄や酸化マンガンの顕著な生成は認められなかった。一方、花粉分析結果では胞子の割合が高く、キク亜科が僅かながら検出されるなど、堆積後の化学変化（あるいは紫外線）による影響を示唆する結果も得られている。さらに、化学変化に安定な炭片や植物珪酸体の含有量も多く、堆積後の化学変化の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性も僅かながらある。

6．有機物に極めて富む堆積物で、花粉以外の有機物（炭片、植物片など）が多く、希釈効果により花粉化石が回収できなかった。

炭片、植物珪酸体などの含有量が多かった。一方、花粉・胞子化石の含有量は 18 粒 /g と少なかった。炭片や植物片が多量に含まれていたことによって花粉粒の濃縮が進まない希釈効果が推定される場合、含有量はさほど少なくならないことから、希釈効果が現れた可能性がある。

7. 近辺に森林がなく（疎林？））、堆積物中に付加される花粉粒の絶対量が少なかった。

木本花粉のみならず、草本花粉、胞子の含有量も少なかったことから、このことは該当しない。

以上のように今回の試料では、堆積時の紫外線、堆積後の化学変化により花粉・胞子が劣化消滅した可能性が高い。また、微粒炭にる希釈効果が現れている可能性も指摘できる。花粉化石がほとんど検出できなかったことから、花粉層序による堆積年代推定ができなかった。

７．まとめ

神後田遺跡で実施した花粉分析、年代測定の結果から、以下の事柄が明らかになった。

1) T16 SI49 は、弥生時代後期前半の住居跡と考えて矛盾がない。

2) T17 SD48 は紀元前 4 世紀から紀元前 2 世紀初頭に埋まった遺構と考えられる

3) T17 SK06 は紀元前～紀元前 1 世紀中頃に埋まった遺構と考えられる。

4) T20 SD115 は縄文時代前期～中期頃の遺構であったと考えられる。

5) 花粉分析の結果花粉化石の検出量が少なく、花粉層序による堆積年代推定ができなかった。

（渡辺正巳　文化財調査コンサルタント株式会社）

参考文献

藤尾 慎一郎・今村 峯雄・西本 豊弘 (2005) 弥生時代の開始年代 – AMS – 炭素 14 年代測定による高精度年代体系の構築 –．総研大文化科学研究，1，73 – 96.
Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337 – 360.
Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann – Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62.

第２節　神後田遺跡 焼失竪穴建物 SI49 の樹種同定

１．はじめに

神後田遺跡は島根県東部松江市の中央部、浜乃木地区に位置し、中国山地末端の丘陵上に立地する。近辺には弥生時代の環濠遺跡である田和山遺跡があり、関連性が注目されている。

本報は、発掘調査に伴い検出された焼失竪穴住戸 SI49 内に残存した部材（炭化材）の樹種同定を目的として、文化財調査コンサルタント株式会社が、松江市からの委託を受け実施・報告した調査報告書を再編したものである。

２．試料について

樹種同定試料は、松江市教育委員会と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。また、採取試料の一部を年代測定用試料としている（第１項参照）。また、以下に示す平面図及び断面図は、松江市教育委員会より御提供を受けた原図をもとに、作成した。

図 126 に試料を採取したトレンチ（T16）の位置を示す。さらに、図 127 にトレンチ内での試料採取位置を示す。

３．樹種同定方法

下記の手順で調整した試料について、木材の３断面（横断面、放射断面、接線断面）を電子顕微鏡下で観察する。

1) カッターなどを用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）を採取。
2) 採取した試料を、試料台に固定。
3) 炭素を蒸着。
4) 3) の調整試料を、走査型電子顕微鏡下で観察、同定する。
5) 同定試料ごとに記載し、３断面の顕微鏡写真を付ける。

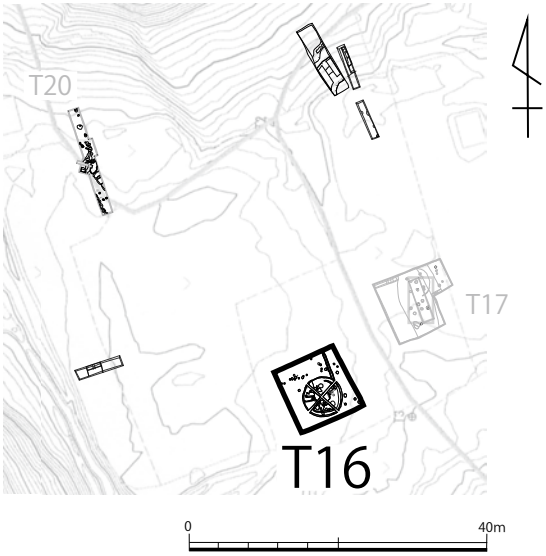


図 126　トレンチの配置

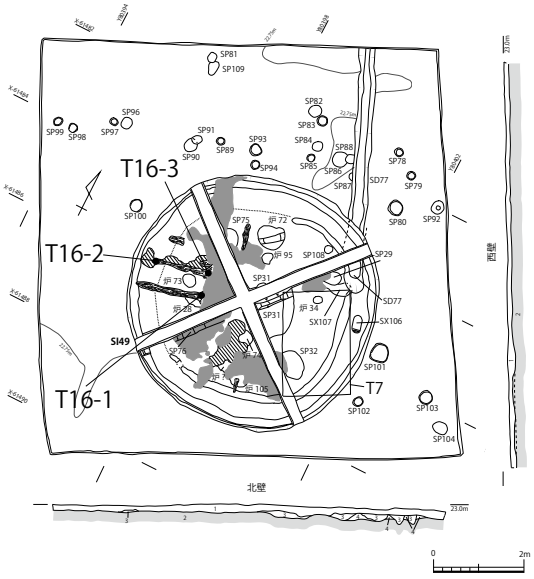


図 127　T16(SI49) 平面図 (試料採取地点)

4．樹種同定方法

何れの試料も劣化が進んでおり、樹種同定のための特徴を十分に観察することができなかった。以下に各試料の記載を行い、顕微鏡写真を図 128 に示す。

(1) 散孔材　diffuse - porous wood

試料名：1

記載：小さな道管が、単独ないし数個複合して散在状に分布する散孔材である。道管の形状は炭化の影響による可能性もあるが、角張っているものが多い。道管せん孔は単せん孔。放射組織は異性型で主に 2 細胞幅で両端に方形（あるいは直立細胞）が存在する。以上の組織上の特徴が認められるが樹種の特定ができず、「散孔材」に止めた。

(2) 広葉樹　broadleaved tree

試料名：2

記載：破損が激しく 1 年輪幅全体が観察できなかった。観察できる範囲では円形の道管が単独あるいは 2 ～ 3 個、あるいは房状に複合し、斜状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、小道管にはらせん肥厚が認められる。軸方向柔細胞は道管の周囲を包む周囲状で、連続する傾向にある。放射組織は異性型で 1 ～ 3 細胞幅で、高さは低い。以上の組織上の特徴が認められるが、環孔材の可能性も残ることから樹種の特定ができなかった。このため、「広葉樹」に止めた。

(3) ニッケイ（クスノキ）属　*Cinnamomum* sp.

試料名：3

記載：大きさは中庸で、円形ないし楕円形の道管が単独あるいは 2 ～ 3 個放射方向に複合する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管内壁に緩やかな傾斜のらせん肥厚が存在する。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚い鞘状に包む周囲状である。放射組織は異性型で 1 ～ 2 細胞幅で、2 細胞幅のものが多く、高さは低い。不明瞭であるが、軸方向柔細胞に異型細胞である油細胞が認められる。以上の組織上の特徴から、ニッケイ (クスノキ) 属と同定した。

5．用材について

SI49 内部からの出土遺物、遺跡内の遺構との関係、樹種同定を実施した部材そのものの放射性炭素年代測定結果から、SI49 は弥生時代後期前半の住居跡と考えられる。

弥生時代住居跡から検出された建築部材の用材が調べられた例は島根県内では少なく、出雲市矢野遺跡、益田市堂ノ上遺跡で数点が調査されている程度である（渡辺・中川，2013）。これらでは、イヌマキ、スギ、シイノキ属が記載されている。一方、隣接する鳥取県では調査例が 833 例と多く、分類群（樹種）も多様である。用例の多い樹種はシイノキ属 (216 例)、クリ (171 例)、スギ (62 例)、クワ属 (52 例)、ケヤキ (31 例)、アカガシ亜属 (28 例) と続く。また、ニッケイ (クスノキ) 属は 7 例報告されている。

（渡辺正巳　文化財調査コンサルタント株式会社）

参考文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 1985 木材の構造．276p.，文永堂，東京.
渡辺正巳・中川　寧 2013 山陰の木製品の樹種と植生について．木製品から見た古代のくらし，37 － 48，島根県古代文化センター.
小林 謙一 2008 縄文土器の年代（東日本）．小林達雄先生古希記念企画 総覧　縄文土器，896 － 903．(株) アム・プロモーション，東京.
中村　純 1974 イネ科花粉について、特にイネを中心として . 第四紀研究 , 13,187 － 197.

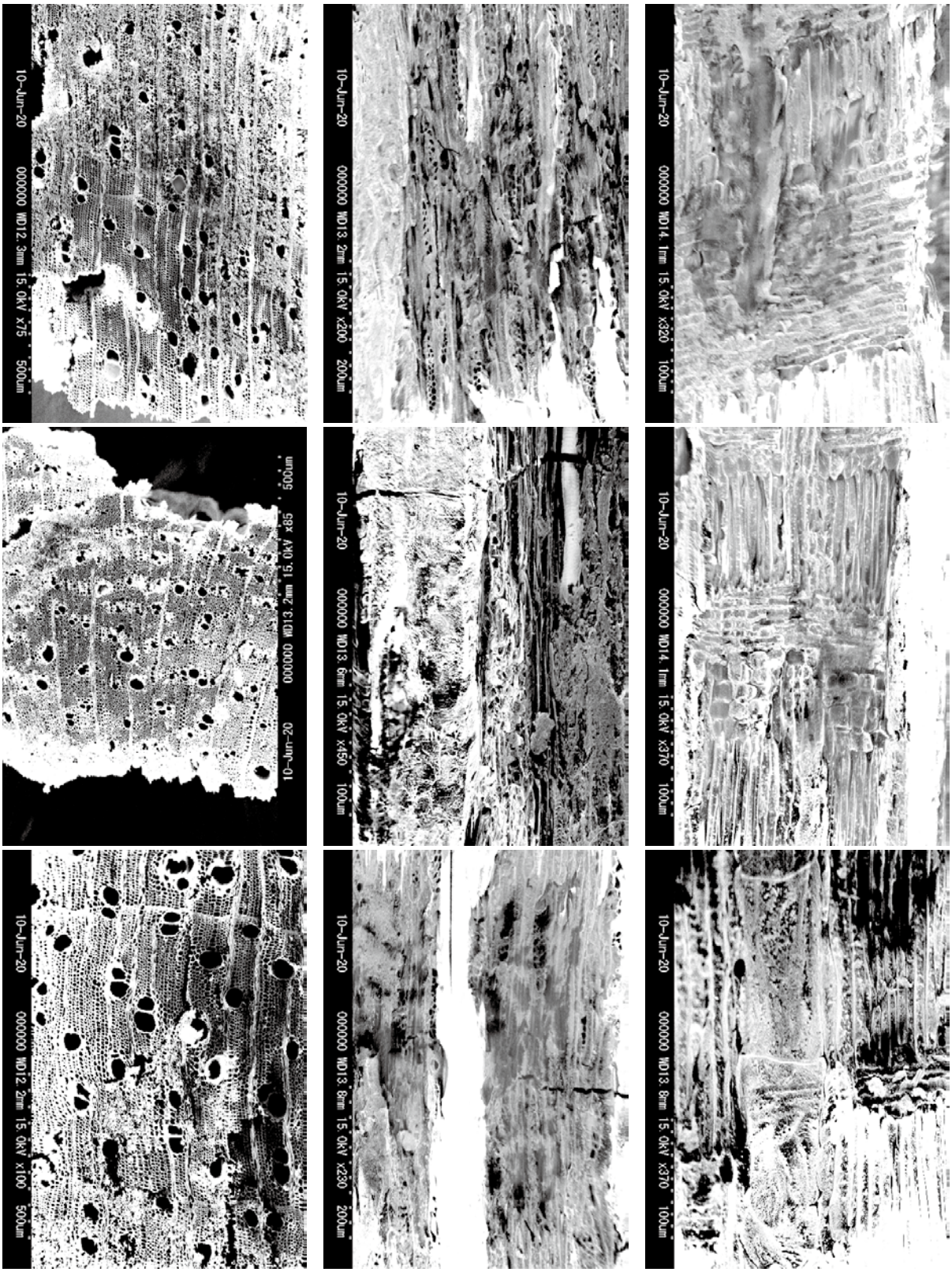


図 128　走査型電子顕微鏡写真

上段：試料№１散孔材　中段：試料№２広葉樹　下段：試料№３ニッケイ (クスノキ属) 何れも左より横断面、放射断面、接線断面

第３節　「つぶて石」の石材と採取地の推定

田和山遺跡では環壕中から多数の「つぶて石」とみられる礫が多数出土しており、神後田遺跡でも同様の礫が出土している。岩石種は、田和山遺跡では玄武岩、安山岩および花崗岩の礫が主体で、神後田遺跡では安山岩が主体で花崗岩を伴っている。田和山遺跡では、丘陵を構成する砂岩を貫く玄武岩岩脈が複数発達しており、玄武岩は遺跡地内で採取された可能性が高いことを松江市教育委員会（2005）において山内が報告している。安山岩および花崗岩は田和山遺跡と神後田遺跡に共通する。忌部川流域では、中流～下流域に安山岩、上流域に花崗岩が広く分布しており、その分布域が起源とみられる。

神後田遺跡の礫は、基本的に忌部川の河床礫を採取したものと推定される（写真 12）。礫は角が取れてある程度丸みを帯びる亜円礫が中心で、現在の河床に分布する礫の形状と同様である。岩種は、上記のように流域の地質と一致している。この２点から、河床礫を採取したと考えることが妥当と思われる。風化の程度は、遺跡から出土する礫が河床礫に比べて少し風化が進んでいる印象を受けるが、これは約 2000 年間、地表直下で風化を受けた礫と河床を動いている礫の違いと判断できる。

河床以外で採取の可能性として、遺跡周辺の丘陵に分布する段丘礫層も考えられるが、直近でみられる「乃木段丘礫層」の礫の多くは中心部まで風化が進んでもろくなった、「くさり礫」と呼ばれる状態になっている (写真 13)。ここから硬質な礫を選択して採取することは現実的ではない。

また、ボーリングデータによると忌部川低地の地下にも礫層が存在し、陸上でも神後田遺跡が立地する丘陵の裾部に硬質な礫を含む堆積物（崖錐的なものか、造成に伴うものか不明）があり、それらから礫を採取することも不可能ではないものの、これらを掘削して礫を採取することは明らかに非効率的である。したがって、河床以外から礫を採取した可能性は低いと言える。

（中村唯史　島根県立三瓶自然館）

写真 12 忌部川の河床礫

田和山遺跡に近い水道端付近で撮影。忌部川流域には、硬質な岩石として古第三紀の花崗岩類と新第三紀の安山岩が広く分布しており、河床礫はこれらが中心である。神後田遺跡から出土する礫には安山岩が多く見られ、花崗岩類を伴っており、河床礫の岩石主と共通する。

写真 13 乃木段丘礫層

（ルーペの長さ：10cm）

神後田遺跡の丘陵（段丘）に分布する礫層の礫は大半が風化して軟質になっている。遺跡内から出土する硬質な礫とは岩質が異なっている。

参考文献

松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興財団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告 1・2』

第６章　総　括

1. 調査成果のまとめ

神後田遺跡は島根県東部山間地域から宍道湖へ注ぐ忌部川の下流域に位置する。遺跡は標高 22 m の独立丘陵上にあり、西に宍道湖、南に田和山遺跡を望むことができる。本報告の発掘調査によって弥生時代前期末～中期初頭の環壕と、後期前半の竪穴建物、中近世の大溝が存在することがわかり、なかでも弥生時代の遺構については、出雲地域の弥生時代の集落を考えるうえで重要な成果を得ることができた。

神後田遺跡で検出された弥生前期末～中期初頭の環壕は、幅 1.2 m、深さ 0.9 mで断面形がＶ、Ｕ、逆台形を呈しており、規模は長軸 67 m、短軸 47 mを測る楕円形である。壕は北側で途切れ、完全には囲繞しない。内部空間は判然としないが弥生前期と思われる土器が出土した柱穴（SP25）や炭化物年代測定から環壕と同時期の遺構と考えられる土坑（SK06）が検出されている。特に SK06 からは 1020 点の黒曜石チップ類が出土しており、同時期の田和山遺跡で検出された三日月状加工段での黒曜石の石器製作と共通する。環壕の存続期間はごく短期間で、規模は同時期の他地域の環壕と比較すると小規模である。内部空間は居住域をもたない「環壕空閑地」の可能性が高い。他地域の同時期の環濠集落と比較すると類例を西伯耆や丹後地域に認めることができ、日本海沿岸地域に特徴的な様相であるといえる。

環壕埋没後、弥生中期中葉～後葉を空白期とし、弥生後期前半の竪穴建物が 2 棟検出されている。この頃再度神後田遺跡で人の活動があったと判断される。竪穴建物 SI49 は直径 5.6 mの円形の建物であり、調査結果から焼失した建物と考えられる。建物跡からは弥生土器、黒曜石・水晶残核、ヤリガンナが出土する。この建物では炉跡を複数箇所で検出しており、その中には形状が不整形で、硬質な焼土を含むものも確認された。また、鉄片が 1 点土壌水洗で検出されており、鍛冶炉としての可能性が想定できる。しかしながら県内の弥生時代の鍛冶遺構と比較すると、本遺構は関連遺物に乏しく現段階では積極的に鍛冶遺構と位置付けることは難しい。今後の調査や資料の増加に期待されるが、本遺構を鍛冶遺構とするならば県内でも最古段階に相当するものであり注目される。

中近世には当地に幅 3 mを超える大規模な溝が築かれる。溝は方形に屈曲し空間を囲繞しており、中世の居館跡を想起させる形態である。出土遺物は近世の陶器が出土しており、遺物から中世の時期を求めることはできないが、当地は戦国尼子氏と毛利氏との合戦場であったとの言い伝えがあり、関連する遺構であるかもしれない。

神後田遺跡は宍道湖東岸の丘陵上にあり、周辺の古地形復元から当地一帯は地盤の軟弱な湿地帯であったと考えられる。地質図や低地部の電気比抵抗探査結果を鑑みると神後田遺跡眼下は蛇行する河川と、山間部から運び込まれた土砂で形成される扇状地及び三角州上の低地が展開していたと思われる。河川が遺跡の眼下を流れ宍道湖を一望できる位置にあって、後述する田和山遺跡とともに水上交通を意識し形成された遺跡であると想定される。

2. 田和山遺跡との関係について

神後田遺跡と田和山遺跡は南北約 500 mの位置関係にあり、およそ同時期に環壕を形成していることから、相互は有機的な関係性にあると考える。

田和山遺跡は弥生前期末～中期初頭に標高 46 mの丘陵山頂部周辺に一重の環壕を形成する。再掘削があり、最初期の壕がⅠ－ａ環壕、再掘削後の壕がⅠ－ｂ環壕と報告される。環壕は完全に囲繞せず、３箇所で途切れる。壕の上幅は削平されているため詳細は不明だがⅠ－ａ環壕が推定 5m、Ⅰ－ｂ環壕が推定３～ 5m あったとされ、深さはⅠ－ａ環壕が 1.6m、Ⅰ－ｂ環壕が 0.3 ～ 1.2m である。断面形はⅠ－ａ環壕がＵ字形で、Ⅰ－ｂ環壕はＵ・Ｖ・逆台形と地点によって様々である。内部空間に居住域はなく､山頂東裾に５本柱建物がたつ。また山頂東側の三日月状加工段で黒曜石剥片･チップが集中して出土していることは神後田遺跡で検出された黒曜石集石土坑（SK06）との関連をうかがわせる。

その後弥生中期中葉～後葉に環壕の規模を拡大させ三重環壕を形成する（山頂側からⅠ－ｃ環壕、第２環壕、第３環壕)。環壕は上幅がⅠ－ｃ環壕が 0.4 ～２m、第２環壕が１～６m、第３環壕が 1.6 ～ 4.3 mを測り、深さはⅠ－ｃ環壕が 1.5m、第２環濠が 1.5 m以上、第３環壕が約２mである。断面はＵ・Ｖ字形である。比較的大規模な壕で、壕の外側には土塁を配する。環壕内部の山頂部には９本柱の総柱建物を有し、山頂縁辺を柵列で囲繞する。総柱建物は、その位置から宍道湖側の景観を意識し建てられたものと想定される。居住域は環壕外部の北・西側丘陵斜面に展開する。

弥生時代の環濠集落は、一般的に軍事的・防御的性格を有し環濠内部に居住域を形成するものがあげられるが、田和山遺跡は石鏃、石剣、礫石、環状石斧といった武器は出土するものの、三重環壕の外側に集落を展開させており、これまで日本列島で発見された環壕集落とは異なる性格を有するものと位置付けられる。さらに出土遺物には弥生土器のほか分銅形土製品、土玉といった祭祀を連想させるものや、渡来品と考えられる硯片といった対外的な交易を連想させるものがある。これらの特徴から他に例をみない環壕集落であり、その学術的価値は極めて高く、国史跡に指定を受けている。

今回、神後田遺跡を発見し調査を実施したことによって、田和山遺跡のこれまでの評価に更なる可能性を付与させることが可能となった。環壕の形態としては両者「環壕空閑地」に位置付けられる。両者が成立した弥生時代前期末～中期初頭に限ってみると環壕の内部空間の規模は大差なく、環壕が途切れることも同様である。性格のよく似た両者が高低差をもって並立したことの意味は大きい。田和山遺跡は弥生中期中葉に規模を拡大させ三重環壕を形成し、環壕外部に集落を展開するのに対し、神後田遺跡は先述のとおり弥生前期末～中期初頭とごく短期間で環壕を廃絶する。これまで、田和山遺跡が単独で乃木地域に存在し、環濠集落としての特異な特徴から他の環濠集落とは異なる性格をもった遺跡と評価されてきたが、神後田遺跡と一体と考えることによって、２者の環壕が並立し出現するなかで、あるタイミングで一方を短時期で機能を終え、もう一方にその機能を集約化させる変遷を描くことが可能である。つまり、弥生時代前期末～中期初頭に同時期に出現した環壕２者が、その後一方（田和山遺跡）に機能を集約させ、規模を拡大、発展したと理解される。

環壕空閑地は日本列島の環濠集落のなかでも日本海沿岸域に特徴的にみられる様相である。さら

に朝鮮半島の類例と比較すると、田和山遺跡と神後田遺跡のように近距離に位置する環濠は佳長洞遺跡、烏山青鶴洞遺跡の位置関係に類似点を認めることができる。環壕２者が有機的な関係性である点について、朝鮮半島に起源を求めるかは今後の調査研究に期待される。田和山遺跡と神後田遺跡の関係性は、日本列島、中でも日本海沿岸域特有の形態といえる。

日本列島における環濠集落は、弥生時代早期に北部九州に出現し、やがて各地に変容をとげながら広がっていく。田和山遺跡と神後田遺跡は日本列島特有の環濠集落の変遷のなかで、相互有機的な関係性にあるという特徴を明らかにするものであり、弥生時代の集落研究と集団関係を考える中で極めて重要な価値を有するものと考えられる。

3. 遺跡の評価について

これまで、神後田遺跡の調査成果、田和山遺跡との関連について述べてきた。両遺跡、環壕の出現は弥生前期末でほぼ同時期と考えられ、それは乃木地域における人の活動が活発化した段階と連動する。本地域において弥生前期の住居跡が未検出であることが課題であるが、小規模な範囲を生活圏域とする集団の存在を乃木地域に求めることができるだろう。

両遺跡の東側の丘陵には友田遺跡があり、弥生前期末～後期前半通じで墓域として機能した遺跡である。弥生前期末に位置付けられる配石墓（24 基）は、その形態から堀部第 1 遺跡（同市鹿島町）に後続する配石墓であり、多彩な副葬品から有力者の墓と目される。続く方形墳丘墓（6 基）は周溝、盛土出土土器の型式（松本編年Ⅲ ‐ 2 ～Ⅳ ‐ 1 様式）から中期中葉の所産と考えられ、田和山遺跡の三重環壕段階と重なる時期である。そして最終的に後期前半に築造された四隅突出墓（1 基）を最後に突如墓域としての機能を終える。このことから、友田遺跡は田和山遺跡、神後田遺跡が異なる消長を示し存続する中で、埋葬地として機能を続けたと考えられよう。　その後、弥生時代後期後半には周辺の遺跡数は激減し、乃木地域において人の生活痕跡が突如希薄になる。再度人の生活の場として機能するのは古墳時代前期後半以降である。この時期には田和山Ａ遺跡で祭祀遺構や玉作関連遺構が検出されており、当地域が再開発されたことが指摘されている。

乃木地域と意宇地域の集落遺跡は密接な関係にある。意宇平野には弥生時代の拠点集落である布田遺跡が存在し、その消長は西の田和山遺跡と連動する様相を示す。両地域の古地形の復元からいずれも三角州上の地盤が軟弱な土地が周囲に広がっていたと考えられる。しかし拠点集落と位置付けられる布田遺跡は背後に安定した扇状地と三角州が広がる一方で、乃木地域では拠点集落といえる遺跡は見つかっていない。当地域の地理環境の制約から一帯の生産拠点的要素を見出すことは困難であり、乃木地域における社会背景には布田遺跡がもつ拠点性があったのではないだろうか。そして神後田遺跡、田和山遺跡の成立には、宍道湖を西に望み東に拠点集落布田遺跡をひかえた東西交易ルートの結節点としての成立が背景にあると考える。

出雲地域平野部全体に目を広げると、大橋川南部地域の特性が見えてくる。弥生時代前期、水田稲作の導入にあたっては、出雲平野や松江市北部（宍道湖～大橋川北部地域）が早い段階に拠点的集

落を形成して、弥生文化を先端的に取り入れた一方、大橋川南部地域では前期後葉まで本格的な集落形成は遅れる。ところが布田遺跡に拠点集落が形成されるとほぼ同時期に田和山遺跡と神後田遺跡が形成され、新たな開発が進んでいった。その背景には弥生時代中期に向けた温暖化などのほか、中国山地を通じた瀬戸内地域との関係があったものと考えた。

弥生時代中期以降、大橋川南部地域は比較的安定して活動を行っていたと考えられ、布田遺跡では中期中葉に大規模な拠点化を果たし、田和山では三重環壕と土塁がめぐらされた。忌部川地域が西からの物質や文化の受容基地、アンテナとしての役割を果たし、意宇川流域周辺が生産小中核となる最盛期といえよう。出雲平野や松江市北部も順調に発展し、それぞれの中規模な地域単位での結合は強まっていった。中期末頃に布田遺跡は縮小する一方、田和山遺跡の三重環壕外部に集落が現れる。集落を含み込んだシンボルの強化は、西方からの鉄器の流入がきっかけだったと考えられる。出雲地域平野部では後期になって丘陵に集落を構える場合が多いが、その動きの先駆けと考えたい。

弥生時代後期前半には田和山遺跡はその役割を終え、代わりに隣の丘陵の友田遺跡に四隅突出墓が築かれる。田和山遺跡の三重環壕の消長は出雲地方における青銅祭祀と同調しており、四隅突出墓の出現は集団のシンボルの交代と考えられる。神後田遺跡では頂上に鉄器生産に関わる建物が出現することから、鉄の交易の安定化がうかがえるかもしれない。後期後半になると人、モノ、情報の動きが流動化する一方で、四隅突出墓が出雲地域平野部で首長墓として確立し、中小首長までが四隅突出墓を築く。出雲広域での首長間関係の緊密化で、忌部川流域の西へのアンテナは不要になったのだろう。その中で西部の西谷墳墓群と東部安来の荒島墳墓群が、全国でも最大級の四隅突出墓が築かれる。二つの広域首長墓の成立で、大橋川南部地域はその間にあって、首長のもとに地域結合を強化する準備段階にあったと考えられる。

古墳時代になると東部荒島に大型方墳が築かれ、大橋川南部地域でも中小規模ながらも漢鏡や鉄製品などを副葬する方墳が築かれる。近畿地方を中心とした首長連合が成立し、出雲地域平野部東側の安来平野西部勢力がヤマト政権と強く結びつき、大橋川南部地域もそれに次ぐ地域としての立場を保ったものと思われる。前期後半になると、意宇平野北の丘陵上に出雲初めての前方後円墳廻田１号墳が築かれるのをきっかけに、大橋川南部地域は古墳時代を通じて出雲の中心的な地域であり続けた。田和山遺跡や神後田遺跡の丘にも前期後半に小型の方墳が築かれるのを端緒に、忌部川・山居川流域には古式群集墳が続いて築かれ、やがて中型・小型の前方後方墳・前方後円墳、新式・終末期群集墳（横穴墓）が造られ続ける。意宇平野の広域首長に隣接する地域として、手工業生産も担いながら、玉作中心地との境界地域として、独自の地域性を発揮していくのである。

神後田遺跡の評価を行うなかで、弥生時代前期～古墳時代前期の出雲地域平野部まで時空を拡大して、大橋川南部地域について考えてきた。几長に記してきたが、この地域の特色は地勢的特徴に大きく依拠していたと考えられる。それは、外海に直接面することはなく、宍道湖・中海とそれをつなぐ大橋川に面し、中小の沖積平野を擁していることである。

弥生文化の到来にあたっては、西を向いて日本海に開いた出雲平野部や宍道湖～大橋川北岸地域に

比べて、本格的な開発は数百年遅れた。その一方、開発が進んだ前期後葉以降は、内海を通じた東西交流と中国山地部との南北交流の結節として、拠点集落と西向きのモニュメントを形成した。弥生時代後期後半の四隅突出墓の築造と古墳時代前期前半の大型方墳築造にあたっては、出雲地域の東や西の広域首長の後塵を拝した。それは、単に地理的要因だけとはいえず、斐伊川・神戸川、飯梨川という中国山地の分水嶺を水源とする大河によって形成された出雲平野、安来平野に比べて、意宇川・忌部川という松江市内が水源となる中小河川による意宇平野・乃木平野しか擁しないがための、生産力の違いも影響していたことは想像に難くない。

しかし古墳時代前期後半以降、生産力を超える地理的優位を確保したのが大橋川南部地域であった。その要因は出雲地域平野部を東西に貫通した内海の水道を抑えることによる、広域交通の掌握だったと考えられる。それは、先史時代を通じて次第に形成されてきた中小地域の結合強化と、それらを結ぶ地域間結合が達成されたあかつきの出来事と理解される。

神後田遺跡と田和山遺跡は、〈4 世紀後半に大橋川南部地域が出雲東部においてトップステイタスを得る歴史〉の始まりを表徴するモニュメント、と評価できる。約 700 年かけての出来事であり、その後出雲国の国府は意宇平野中央に置かれ、その中枢的機能は出雲府中として中世まで受け継がれる。二つの遺跡が立地する忌部川流域は、その間、権力の近隣にあって、常に歴史の表舞台であった。

4. 今後の展望

平成 29 年度から令和 2 年度にかけて実施した発掘調査は、神後田遺跡の環壕の規模・形態・内部空間・機能時期などの基礎情報を得ることを目的とした。調査の結果、環壕は弥生時代前期末～中期初頭の比較的小規模な環壕であり、内部に居住域をもたない「環壕空閑地」の可能性が高い。さらに、環壕が廃絶した後、弥生時代後期前半に竪穴建物がつくられ、当地で再び人の活動が始まったことが分かった点も大きな成果といえる。

一方で、調査で解明しきれなかった課題も残る。本報告の調査は全てトレンチ調査であり、環壕はその一部を検出しているに過ぎない。今回北側の環壕途切れ部を検出しているが、出入り口としての評価といえるか否か、判断材料が不足しているのが現状である。環壕内部空間についても調査範囲は十分ではなく、今後の調査で遺跡の全容を解明していく必要性があると考える。

今後、神後田遺跡が適切に保護、継承されていくにあたっては、有機的な関係性にある田和山遺跡と一体とした保護・活用が不可欠である。現在田和山遺跡は保存から 20 余年が経過しており、史跡公園の再整備事業を立ち上げ地域に根差した新たな史跡の活用策を試案し進めている。また、近年各地で活用事例のある、三次元デジタル技術を用いた活用方法も検討している。本報告にある、地質研究者による田和山遺跡と神後田遺跡周辺の古地形復元に関する取り組みはその基礎情報を得ることも目的としており、今後デジタル技術を用いた弥生時代の乃木地域の景観復元についても取り組む必要のある事項と考える。以上のように、今後は神後田遺跡と田和山遺跡と一体とした保護・活用策を講じ、地域の誇りとして将来に継承していくことが求められている。

（丹羽野・三宅）

土器

遺物番号	調査区	遺構名 出土土層	種類	器種	法量（cm）			文様の特徴	調整	色調	備考
					口径	底径	器高				
図 14 - 1	T15	SD01	弥生土器	壺	(20.00)	―	―			内外面：赤褐色	松本 I - 4
図 14 - 2	T15	SD01	弥生土器	壺	(26.10)	―	―	1 条の沈線と刻目	外面：ヨコナデ	外面：橙色 内面：明黄褐色	口縁部に穿孔
図 14 - 3	T15	SD01	弥生土器	壺	(14.00)	―	―			内外面：黄褐色	松本 I - 4
図 14 - 4	T1	SD01	弥生土器	壺	(14.00)	―	―	4 条以上の沈線	外面：ナデ	内外面：赤褐色	松本 I - 4
図 14 - 5	T15	SD01	弥生土器	壺 (口縁部)	―	―	―	内面貼付突帯	内面：ヨコナデ	内外面：淡黄色 断面：黒色	
図 14 - 6	T15	SD01	弥生土器	壺 (頸部)	―	―	―	4 条以上の沈線	内面：ミガキ、指頭圧痕	内外面：橙色	外面にスス付着
図 14 - 7	T15	SD01	弥生土器	壺 (頸部～胴部上半)	―	―	―	5 条以上の沈線	外面：ハケメ、ミガキ 内面：オサエ？	内外面：黄褐色	松本 I - 4
図 14 - 8	T15	SD01	弥生土器	壺 (頸部)	―	―	―	4 条の沈線	内面：ハケメ？	内外面：浅黄色	松本 I - 4
図 14 - 9	T15	SD01	弥生土器	壺 (口縁部～頸部)	―	―	―	3 条の沈線		内外面：明褐色	松本 I - 4
図 14 - 10	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕 (胴部)	―	―	―	6 条の沈線		内外面：黄褐色	松本 I - 4
図 14 - 11	T1	SD01	弥生土器	甕	(19.90)	―	―		外面：ナデ、黒斑？ 内面：指頭圧痕		外面にスス付着 松本 I - 4
図 14 - 12	T15	SD01	弥生土器	甕 (口縁部)	―	―	―		外面：ナデ	内外面：黄橙色	
図 14 - 13	T1	SD01	弥生土器	甕	―	―	―		外面：ハケメ		松本 I - 4
図 14 - 14	T15	SD01	弥生土器	甕 (口縁部)	―	―	―		外面：ハケメ 内面：ヨコナデ	外面：にぶい赤褐色 内面：橙色	
図 14 - 15	T15	SD01	弥生土器	甕 (胴部)	―	―	―		外面：ハケメ	内外面：黄褐色	
図 14 - 16	T15	SD01	弥生土器	甕 (胴部か)	―	―	―	3 条の沈線、刺突文		内外面：黄褐色	松本 I - 4 ～ II - 1
図 14 - 17	T15	SD01	弥生土器	甕か	―	―	―	14 条の櫛描沈線	内面：5 ～ 7 条 1 単位のハケメ	外面：黄褐色 内面：黒色	松本 II - 1
図 14 - 18	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕	―	―	―	1 条の沈線		内外面：黄褐色	
図 14 - 19	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕	―	―	―	3 条以上の沈線、刺突文		外面：灰白色、黒色 内面：褐色	松本 I - 4
図 14 - 20	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕 (胴部)	―	―	―	1 条以上の沈線		内外面：暗褐色 断面：黄褐色	
図 14 - 21	T15	SD01	弥生土器	壺 (胴部)	―	―	―	貼付突帯	外面：ナデ	内外面：黄褐色	
図 15 - 1	T1	SD01	弥生土器	胴部	―	―	―		外面：ハケメ 内面：ヨコ方向のミガキ	外面：黄褐色 内面：暗褐色	
図 15 - 2	T15	SD01	弥生土器	壺 ?(底部)	―	―	―		外面：7 条 1 単位のタテ方向のハケメ、ヨコナデ	内外面：橙色	
図 15 - 3	T1	SD01	弥生土器	(底部)	―	―	―		外面：ヨコ方向のハケメ 内面：ヨコナデ	外面：黄褐色 断面：黒色	松本 I - 4 ？
図 15 - 4	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕　(底部)	―	―	―			内外面：黄褐色	
図 15 - 5	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕　(胴部下半)	―	―	―		内面：ハケメ	内外面：赤橙色	
図 15 - 6	T15	SD01	弥生土器	壺 or 甕 (底部)	―	―	―		外面：タテ方向のミガキ	内外面：黄橙色	
図 15 - 7	T1	SD01	弥生土器	底部	―	―	―			外面：黄褐色 内面：灰褐色	
図 15 - 8	T15	SD01	弥生土器	底部	―	(9.00)	―			外面：にぶい黄色 内面：明黄褐色	
図 15 - 9	T1	SD01	弥生土器	甕 (底部)	―	(8.80)	―		外面：ハケメ 内面：指頭圧痕		
図 21 - 1	T17	SD48	弥生土器	壺　(口縁部)	―	―	―		内外面：ヨコ方向のミガキ 口縁端部：ナデ	内外面：灰白色 断面：黒色	
図 21 - 2	T17	SD48	弥生土器	底部	―	(8.00)	―		内外面：ヨコナデ？	外面：明赤褐色 内面：にぶい橙色	
図 21 - 3	T17	SD48	弥生土器	底部	―	(11.70)	―			外面：にぶい橙色 内面：赤黒色	
図 23 - 1	T8	表土	弥生土器	甕		―	―	擬凹線			
図 25 - 1	T14	SD45	弥生土器	―	―	―	―	3 条以上の沈線、貼付突帯		内外面：黄褐色	
図 25 - 2	T14	SD45	弥生土器	壺 or 甕 (胴部 or 頸部)	―	―	―	3 条以上の沈線、貼付突帯		内外面：黄褐色	
図 25 - 3	T14	SD45	弥生土器	壺　(頸部)	―	―	―	4 条の沈線		内外面：灰白色	松本 I - 4
図 25 - 4	T14	SD45	弥生土器	壺か (胴部)	―	―	―	3 条以上の沈線、貼付突帯		内外面：黄褐色	
図 25 - 5	T14	SD45	弥生土器	壺か　(胴部)	―	―	―	沈線、貼付突帯		内外面：黄褐色	
図 25 - 6	T14	SD45	弥生土器	壺 (胴部か)	―	―	―	4 条の沈線		内外面：黄褐色	
図 25 - 7	T14	SD45	弥生土器	壺 (口縁部)	―	―	―			内外面：黄褐色	
図 25 - 8	T14	SD45	弥生土器	壺 or 甕 (口縁部)	―	―	―	刻目		内外面：淡黄色	
図 25 - 9	T14	SD45	弥生土器	壺 (底部)	―	6.25	―		外面：ミガキ	内外面：黄橙色	内外面に黒斑あり
図 25 - 10	T14	SD45	弥生土器	壺 or 甕 (底部)	―	―	―		内面：オサエ	内外面：赤橙色	
図 25 - 11	T14	SD45	弥生土器	壺 or 甕 (底部)	―	―	―		外面：タテ方向のミガキ	外面：橙色 内面：褐灰色	
図 34 - 1	T16	SI49	弥生土器	壺 (口縁部)	(16.00)	―	―			外面：橙色 内面：黒色	内面に黒斑 松本 V - 1 ？
図 34 - 2	T16	SI49	弥生土器	壺 ? (口縁部)	(18.70)	―	―	4 条以上の凹線文、貝殻条痕	内面：ミガキ、ケズリ	内外面：橙色	松本 V - 2
図 34 - 3	T16	SI49	弥生土器	壺 ? (口縁部)	(21.10)	―	―	5 条の凹線文		内外面：橙色	松本 V - 2
図 34 - 4	T16	SI49	弥生土器	甕　(口縁部)	(22.00)	―	―			内外面：黄橙色	松本 V - 2
図 34 - 5	T16	SI49	弥生土器	甕 (口縁部～頸部)	―	―	―	4 条の擬凹線文、貝殻刺突文、頸部に穿孔 2	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄色	外面にスス付着 松本 V - 2
図 34 - 6	T16	SI49	弥生土器	甕 (口縁部)	―	―	―			外面：橙色 内面：褐色	松本 V - 2
図 34 - 7	T16	SI49	弥生土器	壺 ? (口縁部)	―	―	―	1 条以上の凹線文	外面：ナデ 内面：ヨコ方向ミガキ、ケズリ	内外面：橙色	松本 V - 2
図 34 - 8	T16	SI49	弥生土器	壺 ? (口縁部)	―	―	―			外面：褐色 内面：淡黄褐色	松本 V - 2
図 34 - 9	T16	SI49	弥生土器	甕	15.1	4.6	(22.05)	擬凹線文、三角形刺突文	外面：ハケ目 内面：ヘラケズリ		松本 V - 2
図 34 - 10	T16	SI49	弥生土器	高杯　(口縁部)	(12.00)	―	―			内外面：褐色	

遺物番号	調査区	遺構名出土土層	種類	器種	法量（cm）			文様の特徴	調整	色調	備考
					口径	底径	器高				
図 34 - 11	T16	SI49	弥生土器	器台 or 高坏（脚端部）	―	(15.80)	―		外面：ナデ 内面：ケズリ	内外面：淡黄褐色	
図 34 - 12	T16	SI49	弥生土器	器台（受部）	(19.00)	―	―	擬凹線文		内外面：にぶい褐色	外面にスス付着
図 34 - 13	T16	SI49	弥生土器	甕	―	―	―	7 条以上の沈線		内外面：淡黄色	
図 34 - 14	T16	SI49	弥生土器	壺（頸部）	―	―	―	7 条以上の沈線		外面：褐色 内面：黒色	内面に黒斑
図 34 - 15	T16	SI49	弥生土器	壺	―	―	―	貼付突帯	内面：指頭圧痕	内外面：橙褐色	内面にモミ殻か
図 45 - 1	T9	SD36	弥生土器	壺	―	―	―	1 条の沈線			
図 48 - 1	T12	表土	須恵器	蓋	―	―	―				
図 53 - 1	T6・T18	SP07	須恵器	杯 or 皿	―	―	―				
図 56 - 1	T11	SD44	須恵器	甕	―	―	―		外面：タタキ目 内面：同心円状当て具痕		
図 59 - 1	T19	SD51	陶器	擂鉢	―	―	―		内面：擂目 6 条／単位		須佐焼

鉄器

挿図番号	調査区	遺構名・層位	種類	器種	法量（cm）			備考
					長	幅	厚	
図 36 - 1	T16	SI49	鉄器	ヤリガンナ	4.8	1.0	0.2	

石器 (掲載資料)

挿図番号	調査区	遺構・層位	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
図 16 - 1	T15	SD01	石鏃未成品	黒曜石	2.4	2.1	0.7	1.94	凸基式か　一部自然面残る
図 16 - 2	T1	SD01	剥片	玉髄	5.42	3.2	1.98	37.9	両側折損または切断
図 16 - 3	T15	SD01	剥片	黒曜石	2.2	3.7	1.6	9.98	バルブ発達しない　打面再生目的か
図 16 - 4	T15	SD01	石包丁（破片）	頁岩	5.7	4.84	0.52	27.15	削痕　摩耗あり
図 16 - 5	T15	SD01	磨斧（破片）	塩基性片岩	5.81	2.06	2.88	37.59	埋土　摩耗面湾曲
図 16 - 6	T15	SD01	敲石	流紋岩	10.8	7.4	4.3	474.88	
図 17 - 1	T15	SD01	つぶて石	アプライト	15.1	12.3	9.0	1700	
図 17 - 2	T15	SD01	つぶて石	流紋岩	14.5	13.8	9.3	2020	
図 17 - 3	T15	SD01	つぶて石	安山岩	19.2	14.0	10.4	3440	
図 26 - 1	T14	SD45	残核	メノウ	2.32	3.34	2.26	23.01	剥片素材
図 27 - 1	T14	SD45	つぶて石	安山岩	10.5	6.8	6.6	540	
図 27 - 2	T14	SD45	つぶて石	玄武岩	21.0	11.1	8.3	1875	
図 30 - 1	T20	SD115	剥片	碧玉	4.38	2.6	1.25	10.49	バルブ発達しない
図 30 - 2	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	4.07	5.96	1.56	35.12	バルブ発達
図 30 - 3	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	5.03	4.34	1.34	24.51	バルブ発達
図 30 - 4	T20	SD115　7 層	剥片	メノウ	4.47	4.2	0.89	12.05	バルブ、バルバスカー発達
図 30 - 5	T20	SD115　6 層	残核	玉髄	2.52	4.59	2.25	28.79	厚手の剥片素材
図 30 - 6	T20	SD115	残核	玉髄	4.76	4.9	3.53	72.68	赤色　不定形剥離
図 35 - 1	T16	SI49	スクレイパー	安山岩	3.78	4.94	0.75	17.64	未成品か　刃部に剥離面
図 35 - 2	T16	SI49	板状石製品	砂岩	5.1	2.1	0.66	11.93	表面のみ摩耗痕残る
図 35 - 3	T16	SI49	残核	黒曜石	2.08	4.02	1.71	11.36	剥片素材　パンチ痕多数有
図 35 - 4	T16	SI49	残核	水晶	5.7	3.8	3.14	85.97	亜角礫使用
図 39 - 1	T5	SK06	石鏃未成品	黒曜石	2.1	1.4	0.255	0.63	凹基もしくは平基無茎式
図 40 - 1	-	表採	石錐	黒曜石	2.2	1.3	0.55	0.69	剥片の打点側にドリル

石器 (非掲載資料)

番号	調査区	遺構・層位	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
1	T1	-	残核	玉髄	5.52	4.0	2.45	76.94	赤色
2	T1	-	礫	珪質岩	3.34	2.4	0.8	6.45	
3	T1	SD01	つぶて石	安山岩	17.4	8.9	3.8	692	
4	T1	SD01	つぶて石	花崗岩	8.3	6.4	4.1	190	
5	T1	SD01	つぶて石	花崗岩	14.2	11.3	6.4	1010	
6	T1	SD01	つぶて石	花崗岩	22.2	11.5	6.6	2030	
7	T1	SD01	つぶて石	流紋岩	12.9	10.2	7.4	916	
8	T1	SD01	つぶて石	花崗岩	9.7	7.0	6.1	622	
9	T15	SD01	剥片	玉髄	2.08	0.54	0.79	5.54	
10	T15	SD01	剥片	安山岩	2.95	2.03	0.94	4.25	
11	T15	SD01	残核	黒曜石	3.54	3.1	2.6	17.03	両極
12	T15	SD01	残核	黒曜石	2.72	2.28	1.8	8.44	両極
13	T15	SD01	敲石	流紋岩	10.8	7.4	4.3	474.88	
14	T15	SD01	礫	安山岩	2.8	2.4	2.6	21.48	
15	T15	SD01	礫	安山岩	4.9	2.0	1.1	8.64	
16	T15	SD01	礫	花崗岩	5.8	4.4	1.4	38.06	
17	T15	SD01	礫	花崗岩	3.4	1.7	1.4	7.34	
18	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	8.6	5.1	3.7	162	
19	T15	SD01	つぶて石	安山岩	5.6	3.3	1.6	26	
20	T15	SD01	つぶて石	安山岩	7.72	6.44	3.26	275	
21	T15	SD01	つぶて石	流紋岩	4.76	3.62	2.0	41	
22	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	4.94	4.22	3.0	56	
23	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	7.44	5.11	2.9	88	
24	T15	SD01	つぶて石	凝灰岩	4.0	2.8	1.2	12	
25	T15	SD01	つぶて石	安山岩	9.0	7.4	2.9	210	
26	T15	SD01	つぶて石	細粒花崗岩	9.6	6.5	6.3	388	
27	T15	SD01	つぶて石	安山岩	14.0	10.4	7.6	1180	
28	T15	SD01	つぶて石	珪質岩	21.3	13.5	11.8	2655	
29	T15	SD01	つぶて石	安山岩	12.1	10.0	9.1	1230	
30	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	24.3	15.0	7.6	2645	
31	T15	SD01	つぶて石	安山岩	15.3	12.7	10.5	2200	
32	T15	SD01	つぶて石	流紋岩	20.4	13.2	9.2	2480	
33	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	15.1	10.3	7.5	1435	

番号	調査区	遺構・層位	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
34	T15	SD01	つぶて石	安山岩	14.0	10.4	7.6	1080	
35	T15	SD01	つぶて石	花崗岩	13.4	8.3	5.67	516	
36	T14	SD45	剥片	黒曜石	1.14	1.56	0.37	0.56	折損　両極
37	T14	SD45	残核	珪質岩	8.87	4.43	2.3	67.66	剥片素材か　不定形剥離
38	T14	SD45	つぶて石	凝灰岩	6.4	5.6	3.7	170	
39	T14	SD45	つぶて石	花崗岩	9.3	9.2	6.2	460	赤色（被熱ではない）
40	T14	SD45	つぶて石	花崗岩	13.1	12.5	6.5	937	接合
41	T14	SD45	つぶて石	花崗岩	14.2	11.3	6.4	173	
42	T14	SD45	つぶて石	凝灰岩	6.4	5.6	3.7	166	
43	T16	SI49	楔形石器	黒曜石	2.88	1.0	1.03	3.2	水和激しい　両極
44	T16	SI49	楔形石器	黒曜石	1.38	1.27	0.24	0.47	両極
45	T16	SI49	剥片	黒曜石	2.04	1.66	0.36	0.74	折損
46	T16	SI49	剥片	黒曜石	1.6	0.88	0.37	0.5	両極
47	T16	SI49	剥片	玉髄	1.35	2.2	0.33	0.89	折損（上半分）
48	T16	SI49	剥片	安山岩	2.5	0.97	0.56	1.4	
49	T16	SI49	剥片	黒曜石	1.86	1.49	0.36	0.85	
50	T16	SI49	剥片	黒曜石	2.03	2.03	0.27	1.3	
51	T16	SI49	剥片	黒曜石	1.26	1.5	0.6	1.01	
52	T16	SI49	剥片	玉髄	3.42	1.67	0.69	2.85	
53	T16	SI49	礫	珪質岩	4.54	3.4	1.71	31.0	赤色
54	T5	SK06	剥片	黒曜石	2.83	1.1	0.2	1.03	
55	T5	SK06	剥片	黒曜石	2.69	1.0	0.135	0.38	
56	T5	SK06	剥片	黒曜石	2.11	1.0	0.125	0.26	
57	T5	SK06	残核	黒曜石	1.2	1.62	0.77	1.14	
58	T17	SK06	RF	黒曜石	2.21	1.33	0.63	1.75	
59	T17	SP26	剥片	黒曜石	1.53	1.36	1.04	1.26	
60	T17	SD48　2 層	剥片	頁岩	4.69	1.36	0.45	3.98	
61	T17	SD71	礫	花崗岩	6.6	6.4	4.0	244	
62	T20	表土	剥片	玉髄	3.13	2.39	2.0	16.41	緑色に透き通る
63	T20	表土	剥片	頁岩	1.64	3.23	0.27	2.18	
64	T20	表土	残核	玉髄	5.3	4.6	3.5	69.41	赤色
65	T20	表土	残核	メノウ	2.07	2.6	2.16	14.4	
66	T20	表土	礫	流紋岩	4.25	3.08	1.1	16.27	
67	T20	表土	礫	石英	2.3	1.9	1.39	8.45	
68	T20	表土	礫	安山岩	4.06	2.83	1.13	12.0	摩耗
69	T20	表土	礫	安山岩	1.77	1.38	1.06	1.87	
70	T20	表土	礫	花崗岩	2.76	2.33	1.35	7.25	
71	T20	SD115	礫	凝灰岩	6.25	3.75	3.0	55.01	
72	T20	SD115　6 層	残核	凝灰岩	6.22	4.75	2.96	73.79	
73	T20	SD115　6 層	礫	凝灰岩	4.88	3.42	1.39	21.84	
74	T20	SD115　6 層	礫	安山岩	5.27	3.91	1.68	35.39	
75	T20	SD115　6 層	剥片	黒曜石	3.73	1.12	0.5	1.78	
76	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	3.3	5.28	1.86	24.25	
77	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.68	1.36	0.56	1.85	
78	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.15	2.72	0.56	3.16	
79	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.53	4.76	1.1	8.35	
80	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.95	1.67	0.77	4.24	
81	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.66	1.73	0.67	2.66	
82	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.0	1.54	0.86	2.27	
83	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	2.91	1.81	0.47	2.4	
84	T20	SD115　6 層	剥片	玉髄	1.08	1.54	0.94	1.82	
85	T20	SD115　6 層	剥片	安山岩	2.3	4.42	0.62	7.52	
86	T20	SD115　6 層	剥片	凝灰岩	2.66	1.9	0.93	3.62	
87	T20	SD115　6 層	礫	安山岩	13.5	5.98	2.85	347.01	扁平な棒状　加工なし
88	T20	SD115　6 層	礫	安山岩	6.91	4.35	2.58	102.12	
89	T20	SD115　6 層	礫	流紋岩	5.35	2.34	1.15	18.59	
90	T20	SD115　6 層	礫	流紋岩	2.27	1.45	0.49	1.35	
91	T20	SD115　6 層	礫	流紋岩	1.76	1.63	0.84	1.83	
92	T20	SD115　6 層	礫	流紋岩	1.96	1.36	1.52	1.1	
93	T20	SD115　6 層	礫	流紋岩	1.18	0.95	0.4	0.61	
94	T20	SD115　6 層	礫	花崗岩	8.28	4.6	4.79	157.68	
95	T20	SD115　6 層	礫	長石	2.27	2.07	1.34	7.0	
96	T20	SD115　6 層	礫	安山岩	5.93	4.98	3.92	115.56	
97	T20	SD115　7 層	RF	玉髄	2.84	1.75	0.95	3.68	
98	T20	SD115　7 層	UF	玉髄	1.5	1.1	0.36	0.56	折損　微細な剥離痕有
99	T20	SD115　7 層	剥片	碧玉	2.32	1.97	0.86	4.0	
100	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	2.0	2.3	0.73	3.17	
101	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	3.21	3.18	0.85	6.78	
102	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	3.93	2.17	1.19	8.45	
103	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	1.16	2.98	0.57	2.75	
104	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	2.18	1.25	1.78	1.15	
105	T20	SD115　7 層	剥片	玉髄	1.1	1.55	0.7	1.49	
106	T20	SD115　7 層	剥片	メノウ	2.62	1.86	0.55	2.11	
107	T20	SD115　7 層	剥片	メノウ	2.4	1.66	1.83	2.22	
108	T20	SD115　7 層	剥片	メノウ	2.27	1.24	0.46	1.24	
109	T20	SD115　7 層	礫	凝灰岩	5.44	3.31	2.31	25.32	
110	T20	SD115　7 層	礫	凝灰岩	4.0	2.84	2.4	29.0	
111	T20	SD115　7 層	礫	凝灰岩	2.17	1.74	1.36	3.43	
112	T20	SD115　7 層	礫	凝灰岩	1.16	1.06	0.88	0.73	
113	T20	SD115　7 層	礫	凝灰岩	1.38	1.11	0.35	0.43	
114	T20	SD115	剥片	玉髄	2.82	2.0	1.0	6.26	

※　RF：二次加工痕のある剥片、UF：使用痕（微細剥離痕）のある剥片

※　チップは一覧表に含めていない。測定可能なチップの法量計測データは松江市埋蔵文化財調査室にて保管している。

写真図版

SI49(北から　写真奥の丘陵が田和山遺跡)

図版 2

SI49 調査後（東から）

SI49 炭化木材検出状況（北西から）

SI49 焼土・炭化材検出状況

SI49 焼土塊と炭化物層の堆積状況

炉 72 半截状況

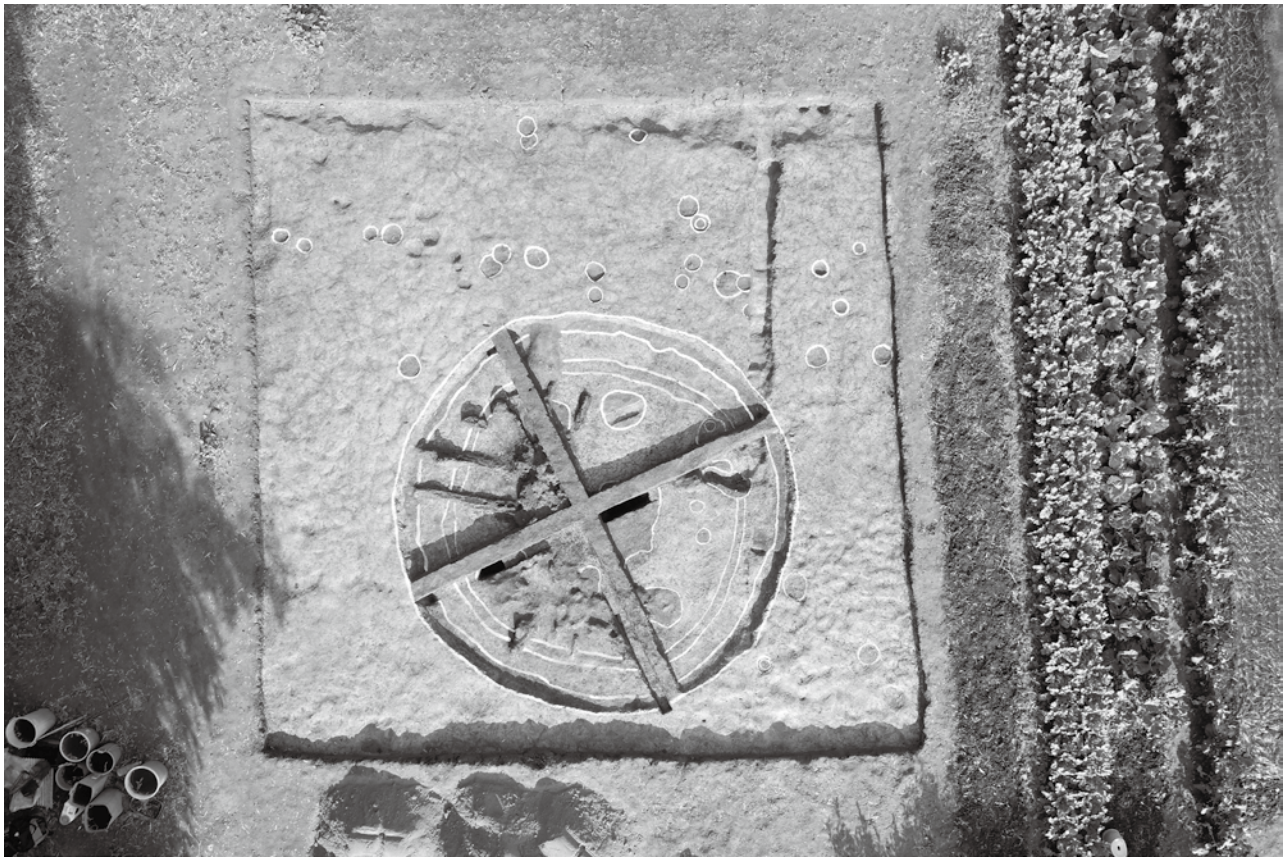
神後田遺跡航空写真（写真下が北）

調査地近景（T17 付近 / 北東から）

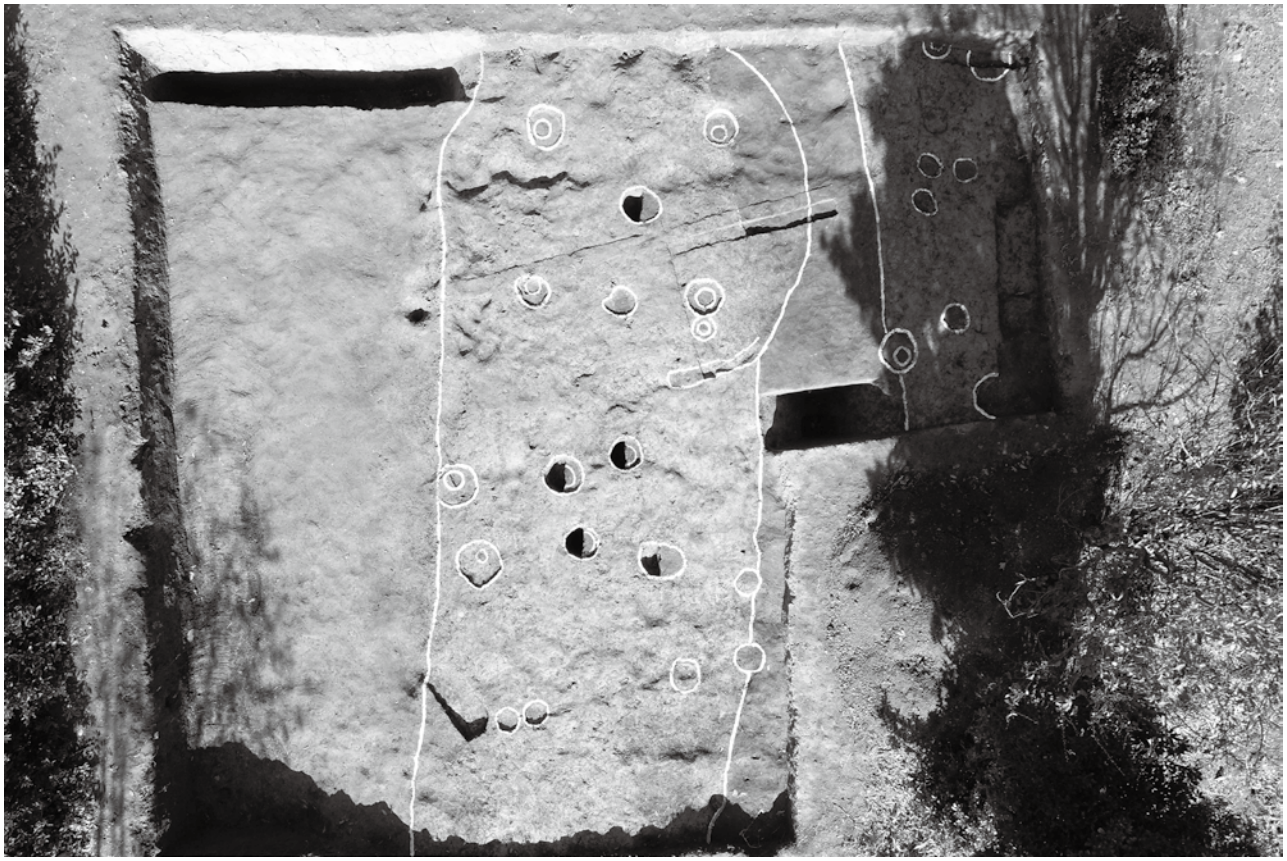
図版 4

T15 全景（北から）

T20　全景（北から）



T16 全景

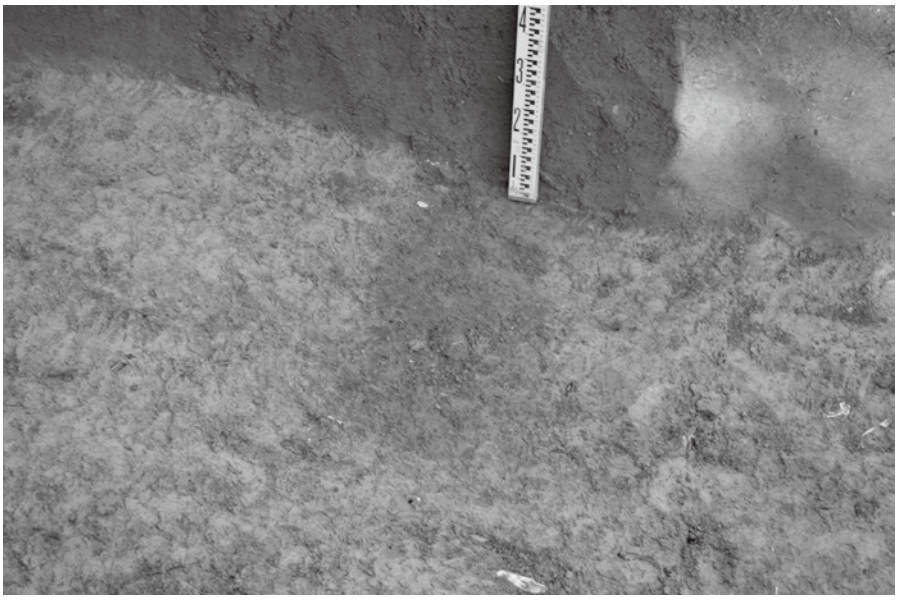


T17 全景

図版 6

T1 SD01 検出状況（南から）

T2 完掘状況（南から）



T2 SD02 検出状況

T3 完掘状況

T3　SP03 半截状況

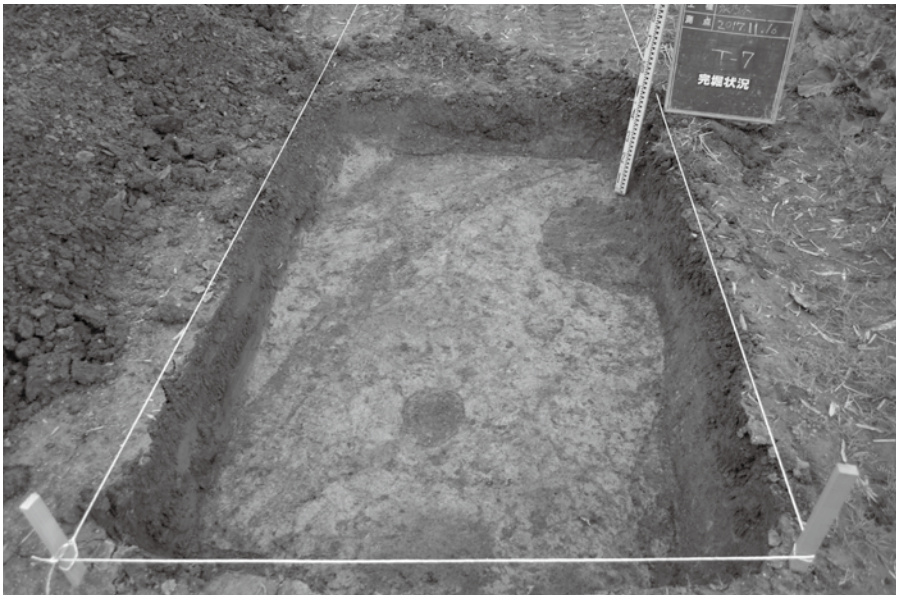
T4 完掘状況（南から）

図版 8

T5　遺構検出状況（南西から）

T5　柱穴群検出状況

T6　遺構検出状況（南から）



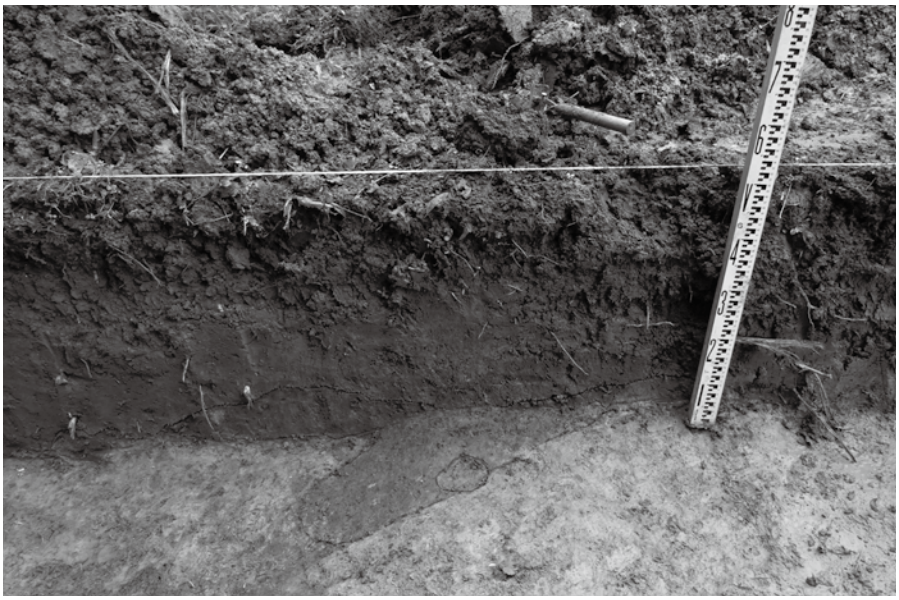
T7 遺構検出状況（北から）

T8　遺構検出状況（北から）

T8　SD35 掘削状況

図版 10

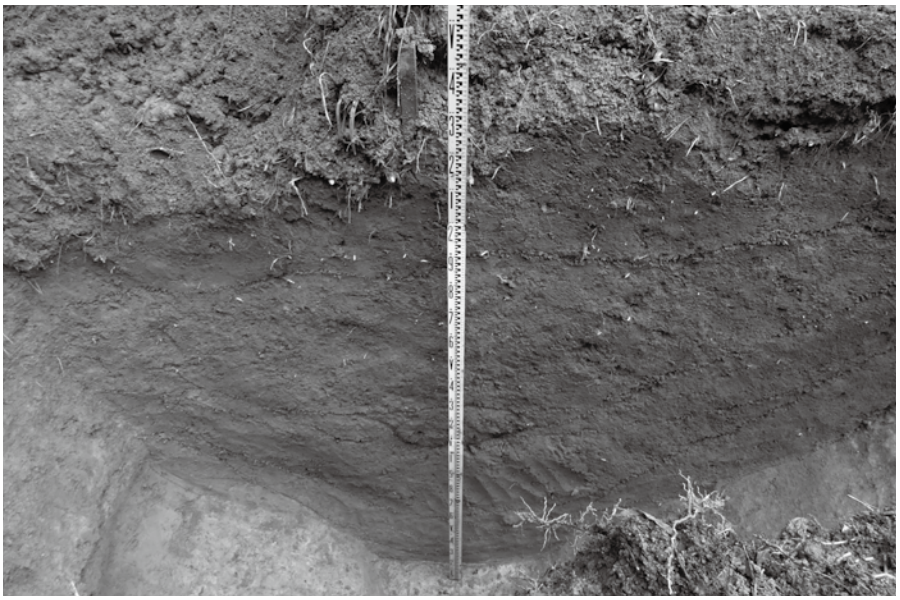
T9　遺構検出状況（北から）



T9　SD36 検出状況

T10　遺構検出状況（南東から）

T11　遺構半截状況（北から）



T11　SD44 土層状況

T12 完掘状況（南から）

図版 12

T13　完掘状況（北から）

T14　遺構検出状況（東から）

T14　SD45　土層状況

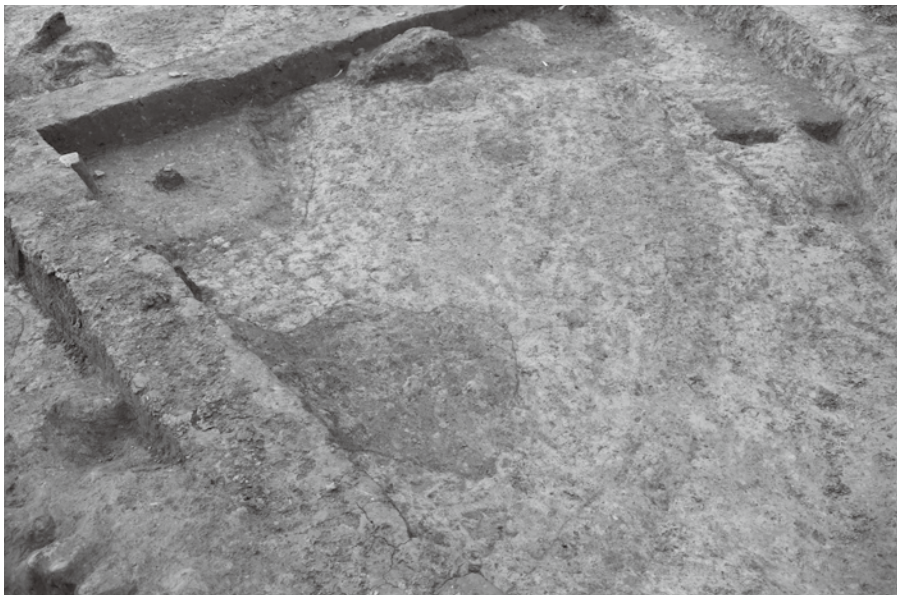
T15 SD01 掘削状況（南東から）

SD01　土層状況

図版 14

SD01 土器・礫出土状況

T16　SI49 検出状況（南から）



SI49　SP31、SP32 検出状況

SP31 土層状況

SI49 焼土堆積状況

SP76 土層状況

図版 16

SI49 甕出土状況（図 34-9）

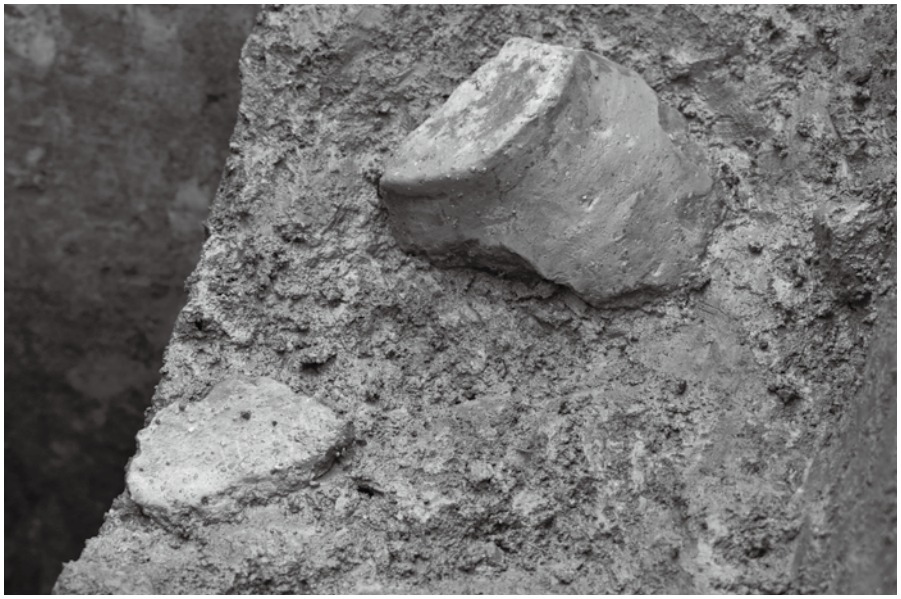
SI49 器台出土状況（図 34-12）

SI49
板状石製品出土状況（図 35-2）

T17　SD48 検出状況（北から）

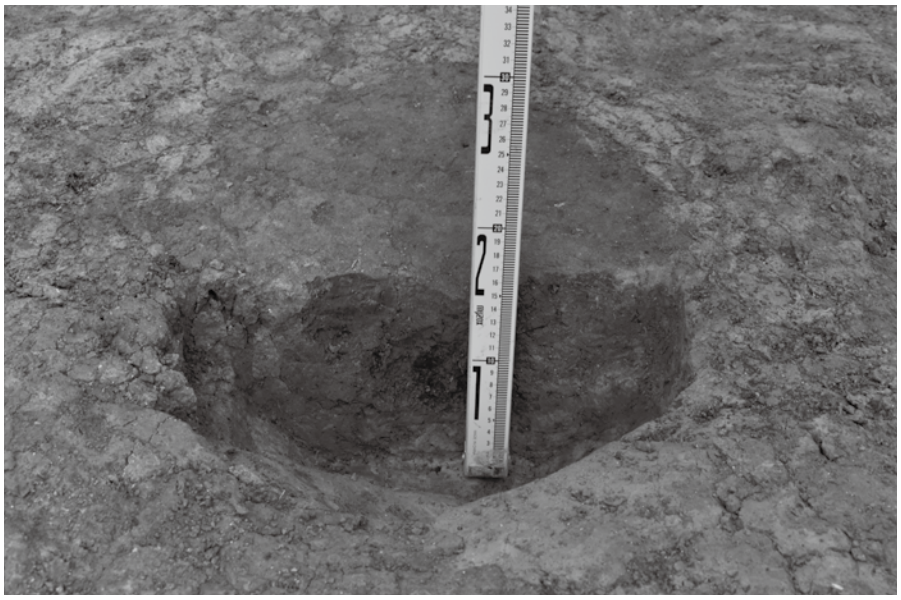
SD48 土層状況（南から）

図版 18

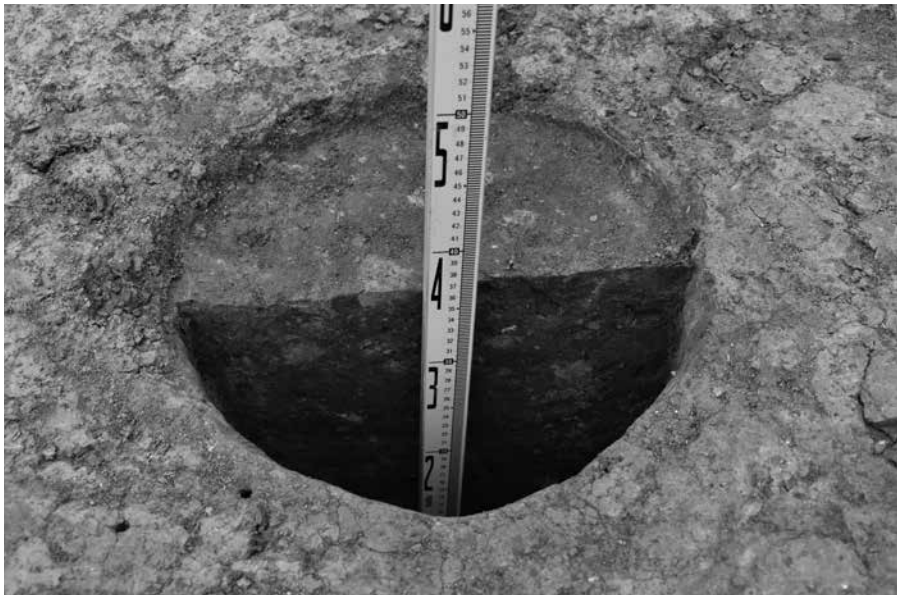


SD48 遺物出土状況
(右側土器：図 21-2)

T17 SK06・SP24・SP25・SP26
半截状況（西から）



SK06 土層状況

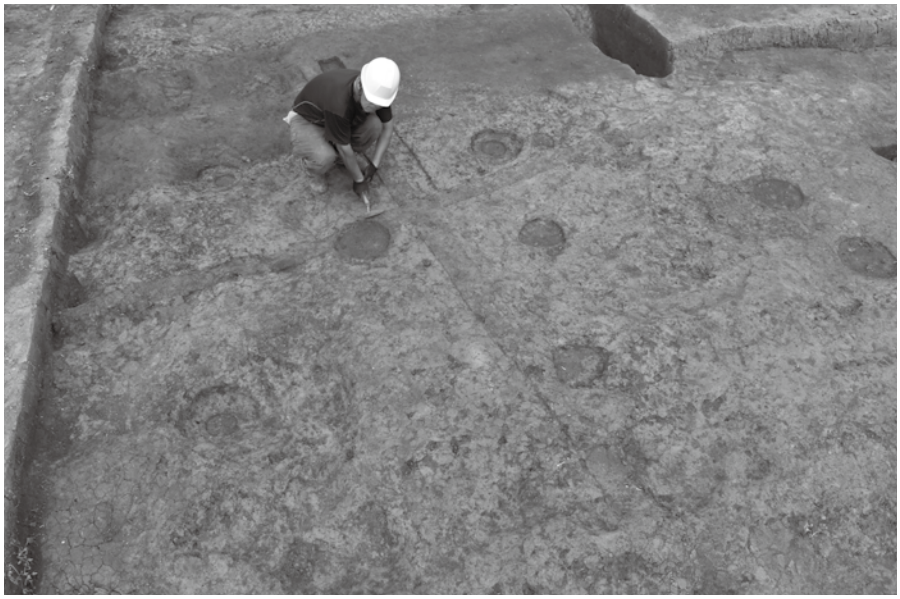


SP24　半截状況

SP25 半截状況

SP26　半截状況

図版 20



SI50 検出状況（西から）

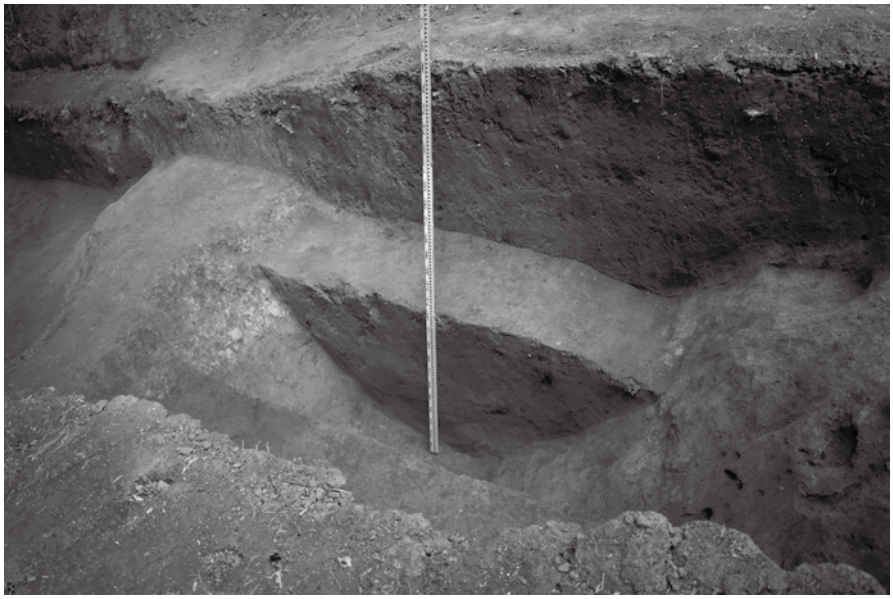
SD71 土層状況

T18 SA114 半截状況（南から）

T19　掘削状況（北から）

T19　SD51 掘削状況（西から）

図版 22



SD51 土層状況

T19 北側段状遺構検出状況

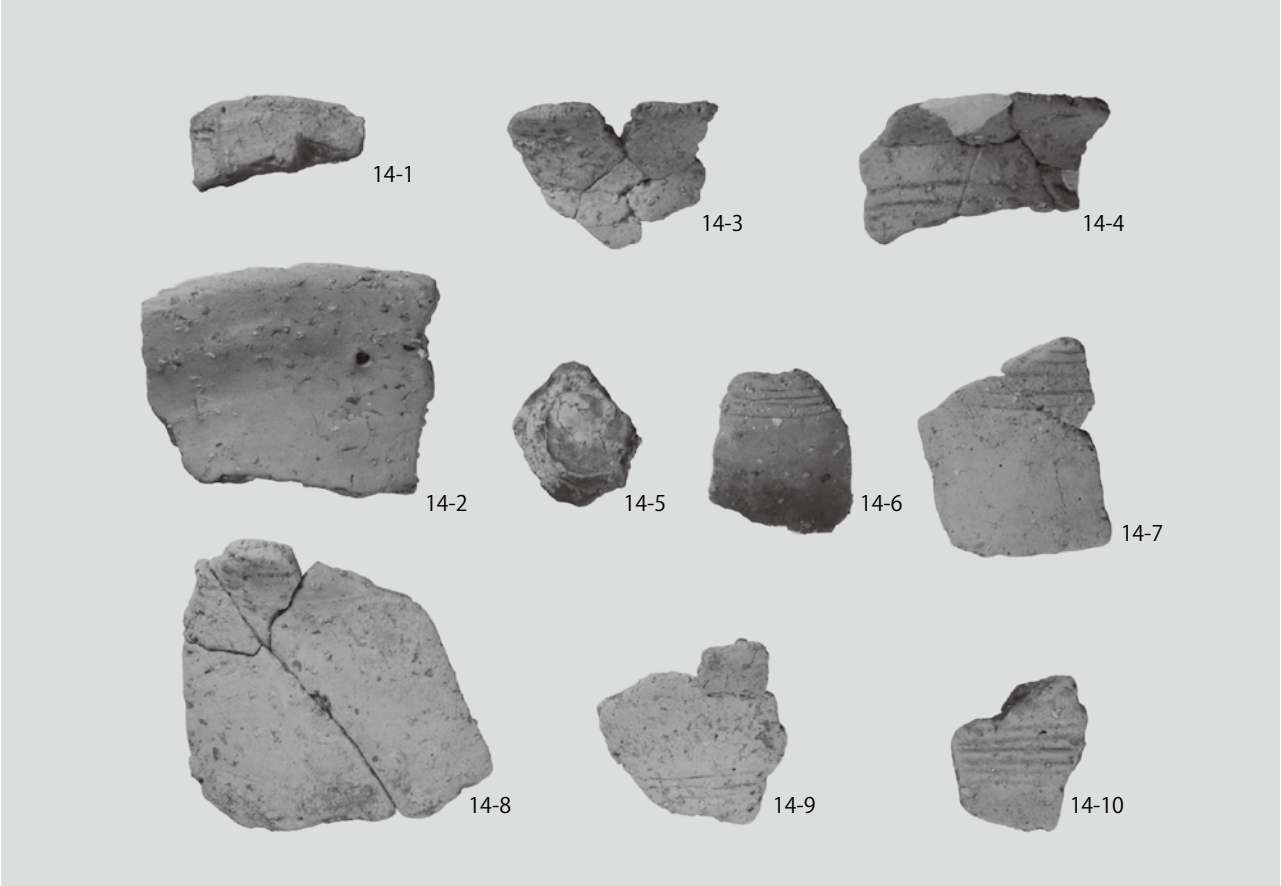
T20 SD115 検出状況（北西から）

T20　SD115 調査後（南から）

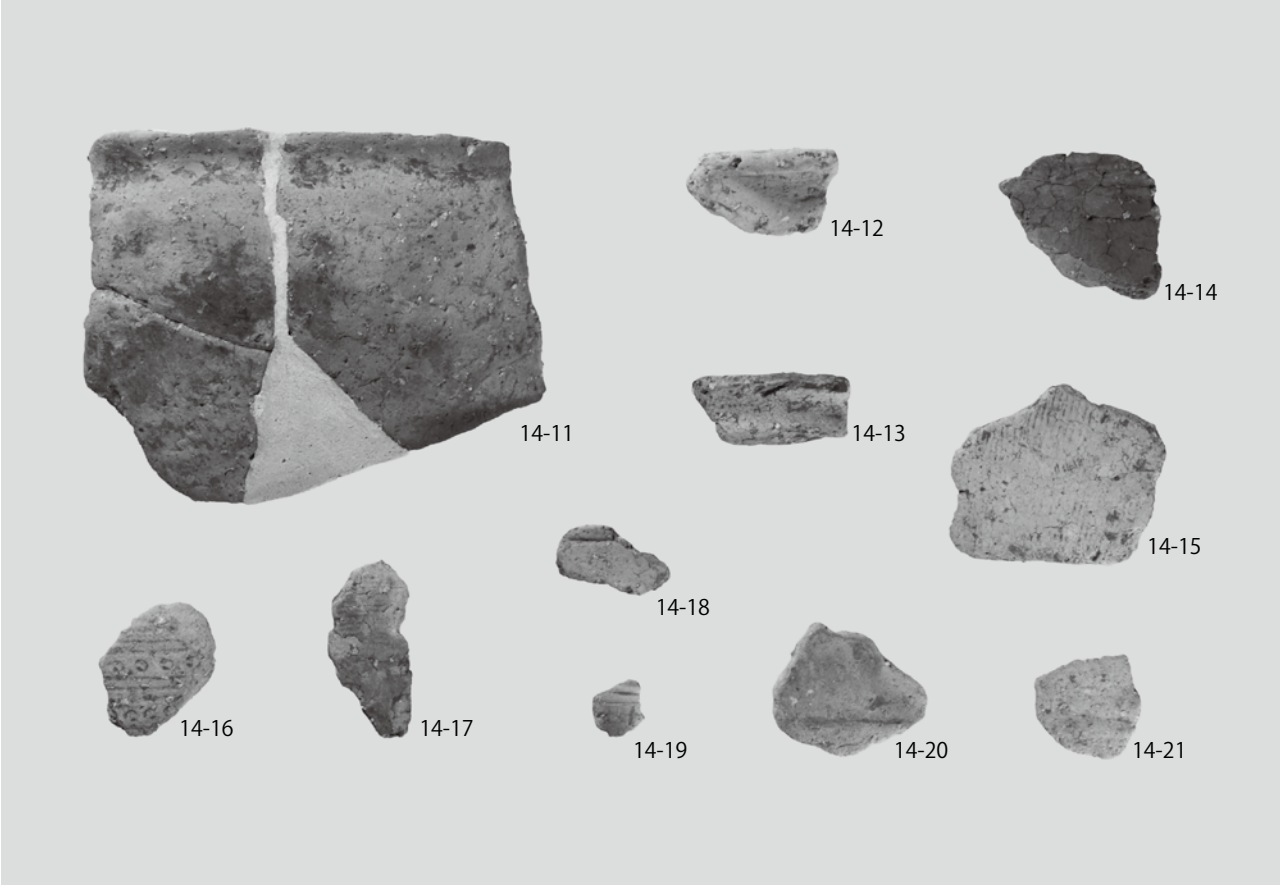
SD115 石器出土状況

SD115 土層状況

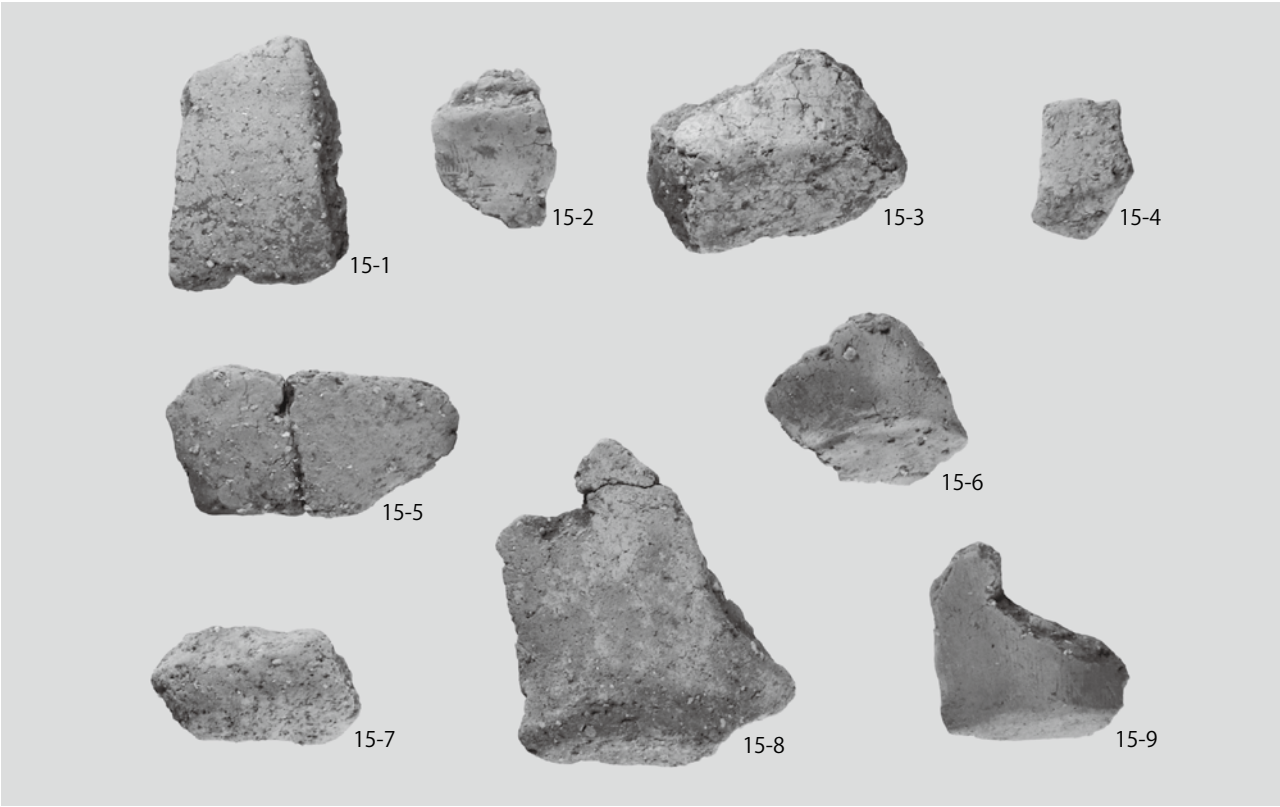
図版 24



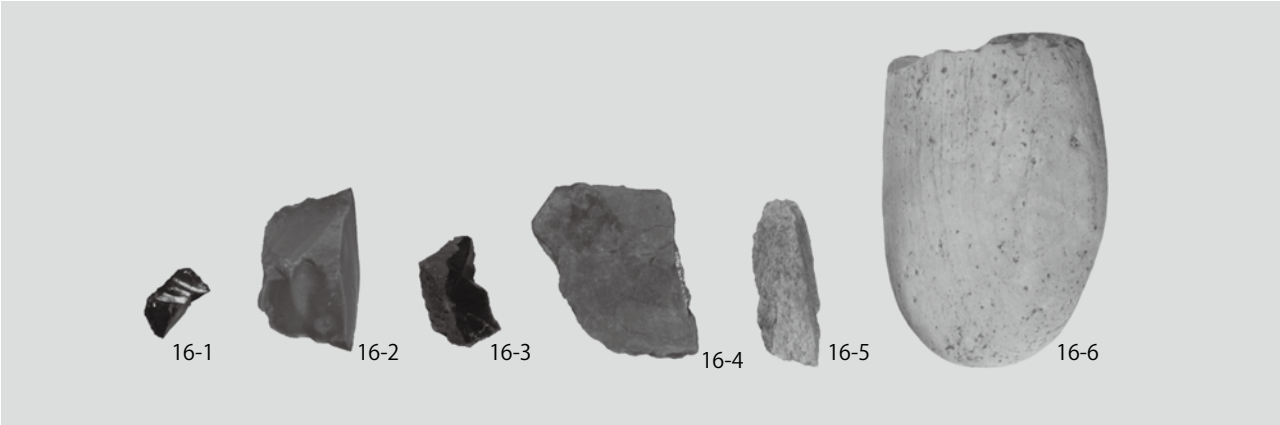
SD01 出土土器（壷）



SD01 出土土器（甕）



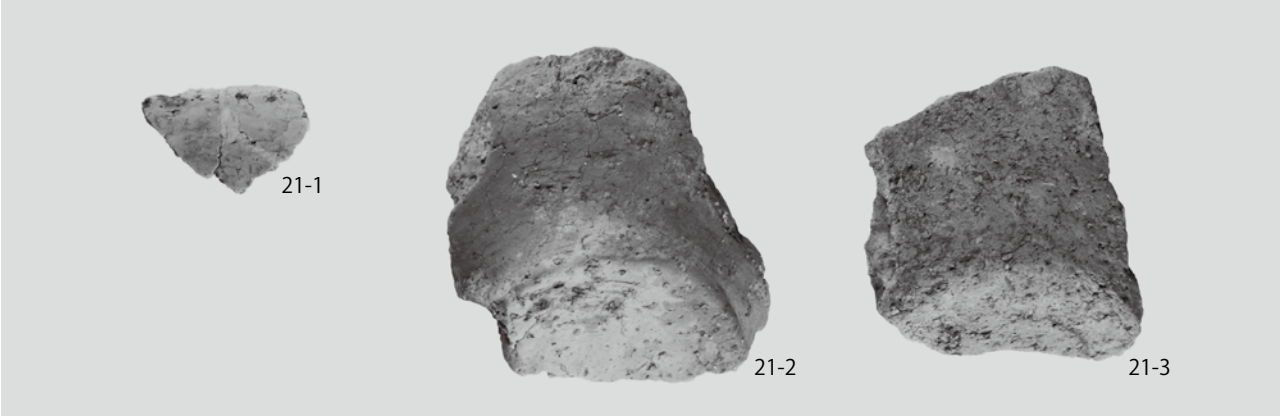
SD01 出土土器（底部）



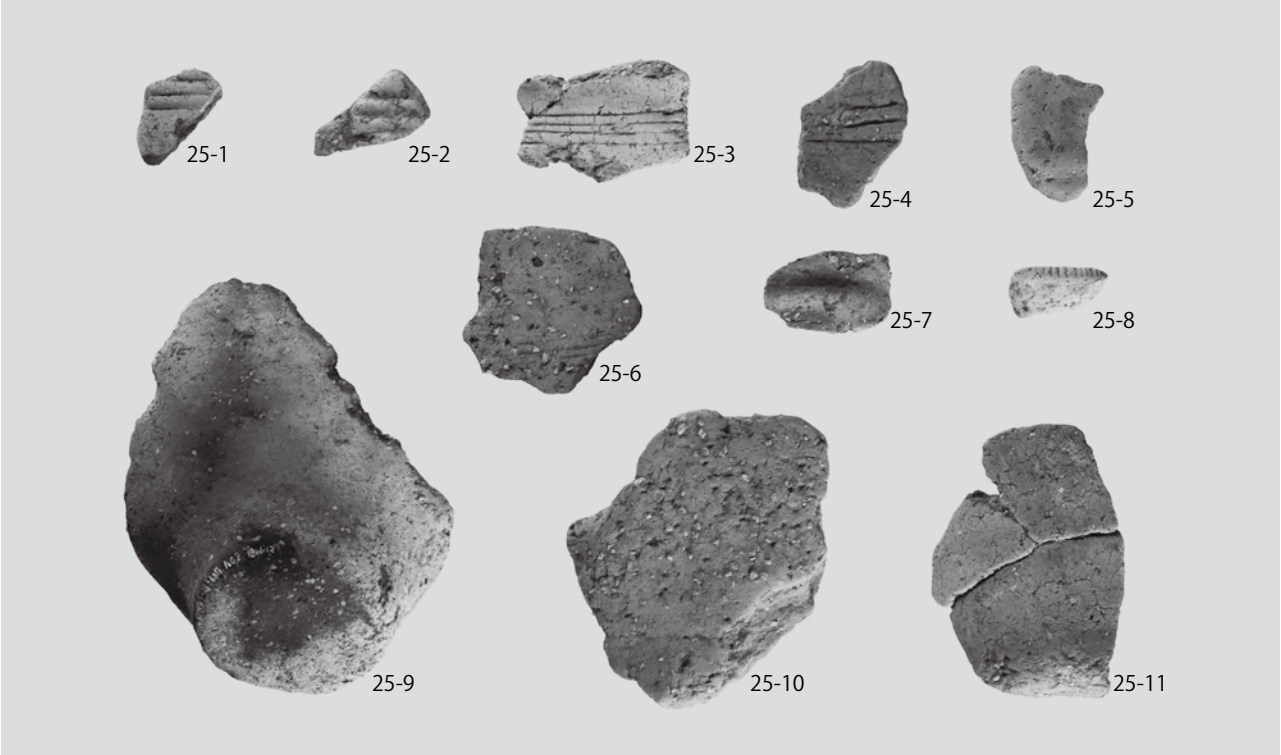
SD01 出土石器

SD01 出土礫石

図版 26



SD48 出土土器

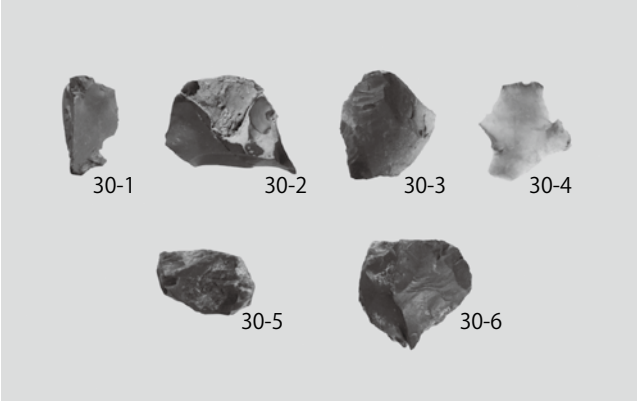


SD45 出土土器

SD45 出土石器

SD35 出土土器

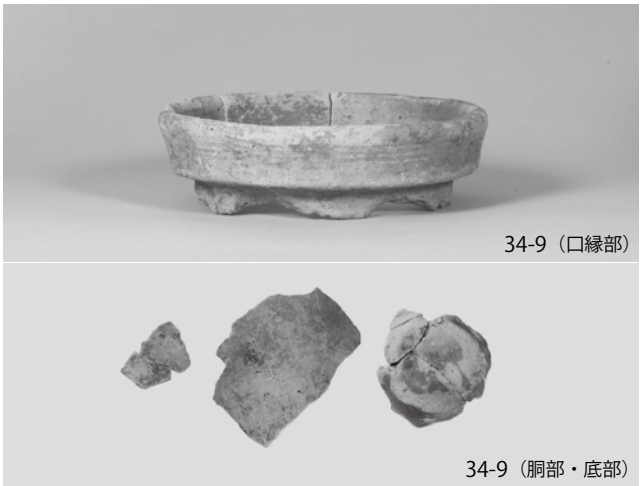
SD45 出土礫石



SD115 出土石器

環壕出土つぶて石

SI49 出土土器

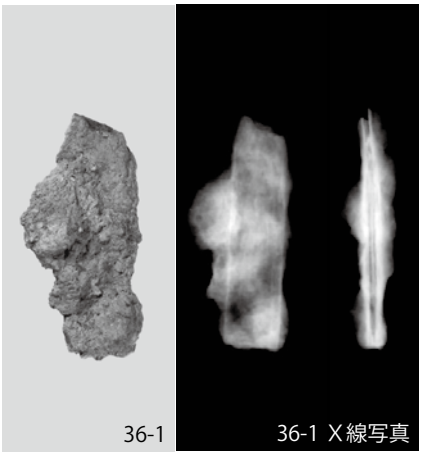


SI49 床面出土甕

SI49 床面出土器台

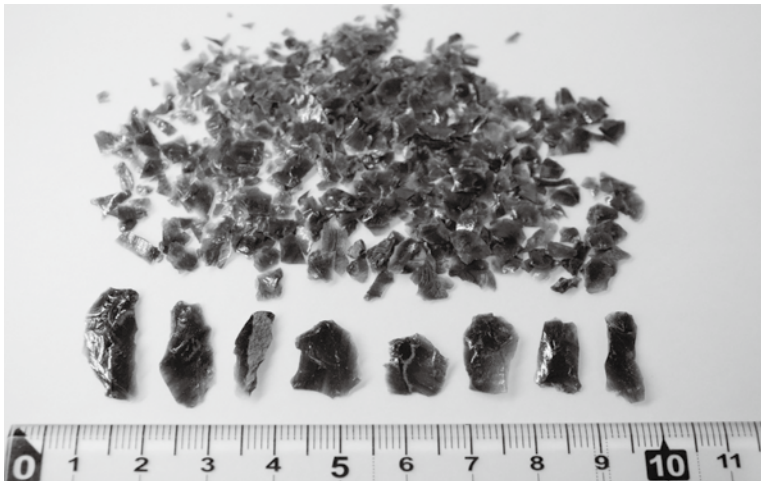
図版 28

SI49 出土石器



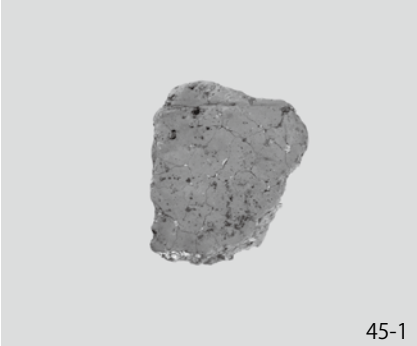
SI49 出土ヤリガンナ

SK06 出土石鏃未成品



SK06 出土黒曜石剥片・チップ

石錐（表採）



SD36 出土土器

T12 出土須恵器

SP07 出土須恵器

SD44 出土須恵器

SD51 出土須佐焼擂鉢

報告書抄録

ふりがな	じごでいせき
書名	神後田遺跡
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 197 集
編著者名	岸田徹、関あかり、津村宏臣、中村唯史、灘　友佳、丹羽野裕、平郡達哉、別所秀高、三宅和子、渡辺正巳
編集機関 所在地	松江市役所　歴史まちづくり部　まちづくり文化財課　埋蔵文化財調査室 〒 690-8540　島根県松江市末次町 86　TEL：0852-55-5284
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
神後田遺跡（じごでいせき）	松江市浜乃木五丁目（まつえしはまのぎごちょうめ）1190-1 外	32201	D1172	35° 56'90" 133° 22'30"	20171115 ～ 20171117 20180316 ～ 20180320 20180604 ～ 20180613 20190826 ～ 20191126 20200602 ～ 20200722	348.01㎡	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神後田遺跡	集落	弥生 中近世	環壕 竪穴建物 大溝	弥生土器 須恵器 陶器 石器 礫石 鉄器	弥生時代前期末～中期初頭の環壕・黒曜石集石土坑、弥生時代後期前半の竪穴建物、中近世の方形大溝を検出。環壕からは弥生土器・石器・礫石が出土、竪穴建物からは弥生土器・黒曜石及び水晶残核・ヤリガンナが出土、大溝からは近世陶器が出土した。

要約

神後田遺跡（じごでいせき）は島根県松江市浜乃木五丁目に所在する。本遺跡は平成 29 年の試掘調査によって発見され、平成 29 年～令和 2 年度にかけて、遺跡の詳細な情報を得ることを目的とし発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代前期末～中期初頭の環壕・黒曜石集石土坑、弥生時代後期前半の竪穴建物 2 棟、中近世の方形大溝を検出した。本遺跡の南約 500 m地点の丘陵には国史跡田和山遺跡が存在する。出雲地域最大規模の三重環壕を有しており、環壕内部に居住空間が認められない点から、日本列島における一般的な弥生時代の環濠集落とは特異な性格であると位置付けられている。本報告の神後田遺跡で検出された環壕は田和山遺跡の初期段階の環壕と同時期であることがわかった。このことから、弥生時代前期に両者 2 つの環壕が並立し存在していたことが判明し、相互の有機的な関係性が浮かび上がることとなった。両遺跡が所在する乃木地域は宍道湖を経由した東西交易ルートの玄関口にあたり、交通の要所に存在する神後田遺跡、田和山遺跡は、出雲地域における弥生時代の集落遺跡を考えるうえで重要な意義を有するものといえる。

松江市文化財調査報告書第 197 集

神後田遺跡

発掘調査報告書

2021（令和 3）年 3 月発行

編集・発行　松江市

印　　刷　有限会社　黒潮社

島根県松江市向島町 182-3